國譯禪學大成

第十九卷

國譯禪學大成第十九卷凡例

一、本大成第十九卷には聖一國師東福寺語錄一卷、一山國師妙慈弘濟大師語錄二卷及び狂雲集二卷の三部五卷を收載せり。

一、就中、聖一國師東福寺語錄は、略して『聖一國師語錄』ともいひ、京都東福寺の開山勅謚聖一國師圓爾和尚の遺錄にして、國師の滅後、五十一年目の元德三年、師の法孫たる虎關師錬の纂輯に係り、本邦入宋禪僧の語錄中、最古のものに屬す。本書は片々たる一小冊子にして、之を國師一代の垂示に比すれば、太倉の稊米に過ぎずと雖も、本朝に禪宗の渡來後、初期の集錄なれば、先づ以て日本臨濟派祖の語錄としては之を以て其の權輿となすべし。而して本書は初め北條氏の末期、元德三年に刊行せられ、德川時代に入りては元和六年、東福寺の集雲守藤が之を再刊し、尋で文政十二年に至り、令材和尚等、元和の刻本を增修して、之を東福寺內の常樂庵に印行せり。今次、國譯するについては、專ら元和版に據ると雖も、文政の刻本を以て之を校し、尚ほ其の闕を補へり。

一、一山國師妙慈弘濟大師語錄は、一に『一山寧和尚語錄』、又は『一山國師語錄』とも

稱し、鎌倉時代に我が國に來朝したる一山一寧禪師一代の遺錄にして、其の來朝前及び來朝後の語要は總て網羅せり。本書は鎌倉時代の末期、文保元年に既に刊行せられて叢林の間に行はれしが、其の舊版は足利時代、明德元年の火に燬け失せたり。依つて應永十四年に至り、彥裁和尚等重ねて京師の大雲精舍に之を印行し、德川時代に至りては、元祿四年また京都に於て刊行せられたり。今次の國譯本は專ら此の元祿の刻本に據るも、猶ほ大日本佛敎全書中の一山國師語錄を以て之を校合し、一々其の異同を訂せり。

一、狂雲集二卷は、京都紫野大德寺第四十七世一休宗純和尙一代の偈頌を蒐錄せるものなり。由來、本書に既刊本數種あり、其の一は寬永十九年、京都の河南四郎兵衞等刊行のもの、其の二は續群書類從文筆部に收むる所のもの、其の三は東京光融館發行の一休和尙全集中のもの、第四は東京民友社發行のもの、是れなり。以上各書は何れも多少の異同あり。今次、國譯に際しては、寬永の刻本を底本となし、之に民友社本を以て校合せり。

一、以上の中、聖一國師語錄は國師一代の全錄に非ずと雖も、我が邦無準派下の語錄中、最古のものにして、其の宗風と機鋒の萬一とを窺ふには唯一のものなり。また一山錄

は我が禪宗二十四流中、一山派の代表的語錄たると共に、當時に於ける日支の外交關係を明かにする史料としても實に缺くべからざるものなり。狂雲集に至りては、誠に禪門偈頌の白眉とも言ふべく、一休の名と共に我が國臨濟派下の一名著として、廣く人口に膾炙せらるるものなり。

昭和五年七月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成　第十九卷

目次

國譯聖一國師語錄

解題

京都東福寺開山聖一國師は在世七十有九年、其の間、東西に說法し南北に垂示して、其の語要積んで汗牛充棟も啻ならざるべからんも、惜しいかな大部分は散佚したると見え、現今世に傳はる所のものは纔かに本書聖一國師語錄と聖一國師法語との二部のみなり。而も本書語錄は片々たる一小册子にして、國師一代の說法に比すれば、太山の一毫芒に過ぎずと雖も、其の質に於ても、將又我が入宋禪僧の語錄中の先驅をなす點に於ても、實に貴重なるものと謂ふべし。錄中收むる所は、住東福寺語錄、法語、偈頌、佛祖賛、自賛及び無準師範、了惠和尙等の書牘にして、何れも皆精金美玉の言句たり。

此の書、元和六年開板の識語に、「右語錄以二國師年譜再刊助緣之餘資一重刻者也、云々」とあれど、未だ其の舊版の世に存するものを見ず。而も現時、世に流布する元和版と文政版とは、其の內容に於ては敢て異ならざれども、前者には自賛の中、「三林長老請」以下の數首の賛なし。故に今次、國譯するに際しては之を補ひて收錄せり。

傳を案ずるに、國師諱は辯圓、字は圓爾、族姓は平氏、駿州安部郡藁科の人なり。土御門天皇の建仁

二年十月望日を以て生る。此の年、榮西建仁寺を建てて禪宗を弘む。五歳にして久能山に登り、堯辯法師に投じ、八歳にして台教を學んで略々大義に通ず。十五歳にして止觀の講席に列る。講師、「故四諦外別立二法性一」と云ふ文に至りて辯析に難む。師乃ち解釋して詞義渙然たり。十八歳の時、近江の園城寺に入りて薙髪し、十月、南都の東大寺の戒壇に登り、翌年、洛陽に入りて孔老の教を聽く。二十二歳、園城寺に歸り、一日自ら以爲らく、「我れ比年大小乘を學び、權實の教を究むるも但だ知解を増すのみ、生死大事に於て何の益かあらん」と。乃ち教外の宗を慕うて、上野の長樂寺に往き、榮朝（圓房）禪師に禮して教外別傳の道を聽き、衣を替へて參究す。翌年久能山に歸り、見西阿闍梨より密宗の祕印を受く。二十五歳、相州の壽福寺に到り、住持行勇禪師に謁す。嘉禎元年、師年三十四、四月、船を平戸津より出し、僅かに十日を以て明州の界に著す。時に南宋の理宗皇帝端平二年なり。直に天童山に入りて癡絶沖に謁し、又、堪笑翁に淨慈に見え、薰石田に靈隱に謁す。寧退耕、北山の賓を典り、師と友として善し。一日、師に語つて曰く、「輦下の諸名宿、子既に遍參す。然れども天下第一の宗師は唯だ徑山の無準師範和尚なり。子何ぞ顧眄を承けざるや」と。是に於て、師、徑山に登つて無準に見ゆ。準一見して器許す。未だ一旬ならざるに、師をして巾瓶に侍せしめ、痛く箴箚を加ふ。師、朝參暮請、遂に開悟す。又、倫斷橋、智別山、一環溪、徹簡翁、源靈叟、圻方庵、寧兀庵、曇希叟等の名衲に接して切瑳琢磨す。一日準、師に告げて曰く、「爾、學海浩渺、我が竹篦下に一時に乾枯す。他日本國に歸らば、必ず

涓滴なき所に於て、横に波瀾を起し、無勝幢を竪て、吾が道を發揮し、須らく從上乃祖の遺芳を踵いで永く未來際を利すべし」と。かくて師は支那に在ること七年、精根を盡して修行す。淳祐元年三月一日夜、準、師を室に召し、香を燒いて語つて曰く、「爾、化導時至れり、早く本土に歸りて祖道を提唱せよ」と。自筆の宗派圖と密庵師祖の法衣と自贊の頂相と竹杖とを與へて法信となす。四月二十日、師、佛鑑（無準の賜號）を辭す。佛鑑、楊岐の法衣と大明錄とを出して以て之に附す。同門の諸友、頌を作りて以て送るもの二十餘人。湘絕岸、欽雪巖の二人、涙を揮つて別を惜む。五月朔日、船を明州定海縣に發して歸途に就く。洋中、大風波に遭ひて高麗國に漂着し、七月漸く博多に達す。是れ本朝の仁治二年師年四十歲の時なり。

太宰府の湛慧（隨乘房）、曾て宋に入り、無準に參じて法を受け、師に謂つて曰く、「我れ横嶽山に於て一伽藍を創せんとす、師若し風帆恙なく歸朝しなば、來り住せよ」と約す。是に於て師の歸還を待つて即日來り請ず。師即ち崇福の額を揭げて開堂演法す。又肥前の水上山の榮尊（覺禪房、神子と號す）、敎寺を革めて禪刹となし、師を請じて開山初祖となし、自ら板首に居す。此の秋、宋人謝國明、博多の東偏に承天寺を創め、師を請じて第一世となす。時に宰府、有智山の僧徒、師の禪化を嫉み、朝に聞して承天寺を毀たんと欲す。朝廷許さず、寛元元年、勅して承天、崇福の二刹を陞せて官寺となす。師、勅賜の二字を揭げ、四來の雲衲を接得して大いに宗乘を振ふ。横嶽の湛慧、事ありて京師に上り、相國

一條良實に訴ふ。良實もと慧の名を聞き、驩んで之を延いて宗門の事を問ふ。慧、酬酢響の如し、良實大いに喜んで父大相國九條道家に啓す。道家問うて曰く、「上人、誰を師として此の智辯を得たるや」と。慧答へて曰く、「我が師圓爾、近ごろ宋に入つて親しく徑山の無準和尚の心印を得たり。今崇福・承天の兩刹に於て佛心宗を唱ふ」と。道家使を發して師を京師に招き、之を月輪の別墅に延いて終日道を問ふ。師、酬對流るゝが如し。乃ち就いて禪門の大戒兼ねて祕密灌頂を受く。因つて三子（敎實・良實・實經）をして弟子の禮を執らしむ。道家、卽ち師をして僧正に任ぜしめんと欲す。師辭して受けず、復た日本國の總講師に補せんと欲す、師又受けず。因つて親ら聖一和尙の四字を書して授く。唐の代宗、法欽に國一と賜ふの例に擬したりといふ。

是れより先、道家、洛の東南に就いて大伽藍を構へ、名づけて東福寺と曰ふ。將に八宗の樂園として國家の安寧を祈らんと欲す。是に於て革めて禪刹となし、師を請じて開山始祖となす。然れども東福寺未だ成らざるを以て、先づ普門寺を建て、師をして假に焉に居らしむ。建長六年冬、相模に下り、壽福寺に館す。執權北條時賴大いに喜び、師を府內に請じて菩薩戒を受け、就いて玄旨を問ふ。同七年六月東福寺落慶す。因つて師、京に歸りて入寺開堂す。正嘉元年、後嵯峨上皇、師を龜山離宮に召して大乘戒を受け、法要を敷宣せしむ。上皇、叡感に勝へず、躬ら黃金の扇を賜ふ。斯の年、平元帥時賴、師を招いて壽福寺を董さしむ、鐘鼓魚版、一時に響を改む。二年五月、京の建仁寺に遷りしも、佛殿、雲堂、

回祿の後とて壞圮蕭然たり。師皆之等を鼎新し、又東福佛殿の北廊三十七間をも造る。文應元年宋僧兀庵來朝す、師其の至るを喜び、待遇甚だ渥し、卽ち東福の方丈に於て普說せしむ。弘長元年、師年六十、相陽に往いて、兀庵の建長寺に住するを賀し、明年、備中に赴いて朝原塔を創す。師嘗て室中、理致、機關、向上の三種を舉して學者を接得す。特に諸禪刹を董すのみならず、又教寺を管するもの甚だ多し。大和の東大寺、尊勝寺、攝津の天王寺、京の法成寺の如き皆勅を奉じて之が幹事をなす。文永九年二月、後嵯峨上皇不豫、師を召して內に入れ、法要を說かしめ、未だ幾ならずして崩ず。明年冬、龜山天皇、師を請じて大戒を受く。

弘安三年二月初、師微疾を示し、飲食美からず、然れども行道怠ることなし。六月一日、東福寺規範十條を製し、尋で常樂庵(東福寺內にあり)に移る。丞相藤原實經、山に入りて疾を問ふ、又文應上皇、官醫を遣はして病を胗せしむ。六日、師自ら三教典籍目錄を造りて普門寺の書庫に置く。秋に至りて病稍々癒ゆ。十月朔日、鼓を鳴らして衆を庵所に集め、祝聖罷んで說法し、衆に謂つて曰く、「卻後十五日當に本寺に還りて、寶華王座に末後の句を唱へて、大涅槃に入るべし」と。十四日の晚、侍僧に命じて舁いて寺に歸らしむ。十五日晨、兩班の諸耆舊、疾を問ふ。師語りて曰く、「今朝、登座說法せん。汝等をして末後奇特の事あることを信ぜしめんと欲す」と。十六日、行者に命じて曰く、「晚間、客あり、房宇を灑掃せよ」と。黃昏に及んで果して無傳(名は聖禪、入宋より歸りて後、越後の花報寺に住す)、越

後より來る。師、安陀會を披して坐し、無傳、香を燒いて作禮す。師曰く、「最後の相見、須らく九拜すべし」と。傳、將に退かんとす、師之を留めて、理致、機關、向上の三種を示す。夜已に三更を過ぐる頃、使を一條實經に馳せて辭を告げ、乃ち椅に登りて端坐す。諸徒、遺偈を乞ふ、便ち書して曰く、「利生方便、七十九年。欲レ知二端的一、佛祖不傳。弘安三年十月十七日、東福老珍重」と。筆を投じて化す。龕を留むること三日、身體生けるが如し。遂に全身を常樂庵に瘞む。緇素哀慟し、聲、山谷を動かし、壙に入るの後、竹林自ら白に變じ、桐樹自ら枯る。師、門弟子を度すること無慮千萬人、其の法を嗣ぐものは東山湛照、無關普門、白雲慧曉、山庵慧雲、其の他三十餘人あり。正和元年、勅して聖一國師と謚す。本朝國師號の始めなり。昭和五年、其の六百五十年の遠忌に際し、特に勅して神光の謚號を加賜せらる。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄序

佛は唯說く而已、結集せず、結集は諸子の事なり。我が慧日祖の說法、海藏に盈つ可し焉。諸子の多きこと、宛も耆崛の如し。然も皆早く化を四方に敷いて、結集に遑あらず。忠首坐と云ふ者有り、予に謂つて曰く、「吾祖の貫花、綴緝する者無し、歲已に半百なり、更に數年を加へば、恐らくは微言の絕えん乎。師、意有らん哉。」予曰く、「兄と予とは共に貽厥なり、我、結集と言ふ者は諸子の事なり、予豈に敢てせん乎。」曰く、「結集する者は誰ぞ。」曰く、「妙德と大龜と及び慶喜なり。」曰く、「慶喜は阿誰にか嗣ぐ。」曰く、「大龜に嗣ぐ。」曰く、「寧ろ孫謀に非ず乎。」曰く、「似たる事は則ち似たり、是なる事は則ち未だ是ならざるなり。」曰く、「若し似たる者有らば、亦庶幾からん。」予、得て拒まず、纂集し竟りて、告げて曰く、「今の得る所の者は、蠹簡殘編なり、豈に能く共に收めて並べ畜へん乎。所謂、仙官、六丁に勅して、雷電して下り取り將る、人間に流落する者は、太山の一毫芒なる耳、方に今天下、惠日の手澤を緹衣十襲する者多し、兄は遍參の人なり、或は江、或は湖、剽聞切問して此の冊に糅へよ。

元德三年二月初五日、三聖孽孫師鍊敬序。

國譯(イ)聖一(ロ)國師住(ハ)東福禪寺(ニ)語錄

(ホ)三聖嗣孫　(ヘ)師錬　(ト)校纂

元旦上堂、禪は意想に非ず、意を立すれば宗に乖く、道は功勳を絕す、功を建つれば旨を失す。新年の消息、鐵壁を動せず、節に應じて祐を納る、慶宜しからずと謂ふことなし。若し佛法の(チ)商量を作さば、鑑を喚んで甕と作す。若し世諦流布と作さば平地に喫交す。大衆還つて委悉するや。孟春猶ほ寒し、堂に歸つて茶を喫せよ。

(リ)無準忌拈香、我れ昔行脚し、海に航し山に梯して拖泥帶水、南方を徧歷す。當時五髻峯頭、覺えず這の老師に撞著して儂の毒手に遭ふ、

○本書は師錬の序、東福寺集雲藤外二師の後跋あり、元和六年(一二八〇)臘月上梓す、但し東福寺藏版なり、上堂、拈香、小參、結夏、示衆、偈頌自贊より成る、一卷の紙數纔か卅一枚の小册子なるも、滅後逸散の鑒あり、本朝禪宗渡來の初期なるを以て、最も古き語錄なり。

(イ)聖一國師。諱は辨圓、字は圓爾と云ふ、駿河の國の人、姓は平氏、幼にして台學に通す、十八歲にして髮を剃り、後榮西の資行勇榮朝等に禪を叩き、又海に航して徑山に無準に見え、嗣法す、壽七十一歲にして遷化す。遺偈あり、「利生方便七十九年、欲レ知ニ端的一佛祖不レ傳。」

(ロ)國師。高麗の國にては國尊と稱せしことあり、君臣共に歸依し、以て此の號を賜ふ、本朝にては夢窓國師生前に賜ひ、滅後には辨圓に賜ふ、卽ち國師の最初なり。

(ハ)東福寺。慧日山と號し、京都伏見にあり、建長七年(一九一五)九條道家公の創立にかかり、舊天台宗なりしを、聖一國師に歸依し改宗せらる、臨濟京五山の中に數へらる、紅

回避する處なし。眼上に眉を安ず、生涯を蕩盡して直に如今に至つて言の說く可きなく、理の伸ぶべきなし。而今衆に對して底を盡して掲翻す、香を擧して云く、「劫石は消する日あるも、此の恨幾時か休せん。」

(ヌ)浴佛上堂、悉達太子、法身示現して、今日淨飯王宮に誕生す、九龍水を吐て金軀を沐浴し、地に金蓮を涌して其の足を捧げ承く、普天匝地自ら矜伐し、端なく口を開いて獨り尊と稱す、大人の相莊嚴を具足して、微妙の大佛事を施作す、且つ作麼生か是れ大佛事、良久して曰く、「下座普く露柱燈籠を請じて、同じく如來の香水海に入れ、這の老子を助けて大法輪を轉せん。」

(ル)結夏小參、靈山の密付、少林の單傳、機機

本の名所通天橋は寺中にあり。

(ニ)語錄。禪宗に傳はる語錄は、生前滅後に拘らず、師の常談を以て宗旨を直說せらるゝを侍者や小師共が書寫したるまゝを筆錄せしものなり、故に華藻を離る、禪門寶訓の序の注に「密に眞機を顯はすを語と云ひ、總て衆事を集むるを錄とよぶ」とあり。

(ホ)三聖。寺號にして、東福寺の北側にあり。

(ヘ)師錬。聖一國師の上足にして、東山湛照禪師の法嗣にして、虎關と稱せしは師錬のことなり。

(ト)校褻。詳校篇に「校は點検なり、褻は廣句に集なり」とあり。

(チ)商量。他と應酬對機すること。

(リ)無準。諱は師範、破庵祖先に法を嗣ぐ、聖一國師の師なり、理宗帝より佛鑑禪師の號を賜ふ。

(ヌ)浴佛。灌佛に同じ、摩訶利頗經に曰く「四月八日は是れ佛生日なり、人民佛を念じ佛の形像を浴す、即ち釋尊降誕會の式にして又灌沐とも云ふ、浴佛に用ふる香湯は、沈香(一兩)、白檀(一兩)、薫陸(半兩)、蓽撥(半兩)、鬱金(一錢三分)、丁字(半兩)、甘松(半兩)、此の七種を淨布袋に盛りて鑵内に投じ、淨水三揆を用て煎じて二揆に減じ、鑵に移し、之を冷し、然る後用ふ云云」とあり。

(ル)結夏。一夏九十日の間、護生禁足して純一無雜に修行する掟あり、一名雨安居と云ふ。

(ヲ)有學。四果の聖者の中、阿羅漢果の人を除くの外、即ち預流果、一來果、不還の人を云

相投じ、言言相契ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心安居、平等性智、九旬禁足、三月護生、蠟人の氷を守り、鵝護の雪を憐む。大精進を起し大勇猛を發し、智慧の劍を秉りて一往に直前し、(ヲ)有學(ワ)無學、一切皆殺す。一切を殺し已つて、山を見ば是れ山、水を見ば是れ水、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去らば、摠に許多路布の葛藤なし。正恁麼の時呼んで衲僧本分の事と作し得んや。萬仭懸崖須らく手を撒すべし、大千沙界に全身を現す。

、復た擧す、(カ)德山、(ヨ)衆に示して曰く、「老漢が見處、佛も也た無く祖も也た無し、達磨大師は是れ(タ)老臊胡、(レ)十地の菩薩は是れ擔屎の漢、(ソ)等(ツ)妙の二覺は是れ破戒の凡夫、菩提涅槃は是れ繫驢橛、(ネ)十二分敎は是れ鬼神の簿、瘡疣

ふ、曰く、聖道を修學するも尙ほ斷すべき煩惱の殘餘を有するの義なり。

(ワ)無學。梵に羅漢と云ふ、見思の惑を斷盡して、修行位第四果に到りし人を云ふ。

(カ)德山。宣鑒と號し、又執金剛と字す、律藏を精究し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の資、龍潭和尙に嗣法す、壽八十六にして遷化せらる、敕して見性大師と諡す。

(ヨ)示衆。大衆に敎誡を示訓することなり、六祖壇經が古き典據なり。

(タ)老臊胡。唐宋時代の俗語にて、「えびすのおやぢ」と云ふ程の義、字彙に、「胡人は血肉を好む、故に身に豚犬の臭を帶ぶ」と見えたり。

(レ)十地の菩薩。歡喜地、離苦地、發光地、燄慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地の十地なり、十地とは菩薩所證の地位なり、一切の佛法之に依つて發生す、然して地位に淺深あるが故に、始め歡喜地より法雲地に終る、分ちて十と爲す、楞嚴經に出づ。

(ソ)等覺。天台所立の修行位、五十二階中第五十一位にして、菩薩の極意とす。

(ツ)妙覺。等覺の上位にありて、極果極聖の位にして、無明を破し盡し、佛果を證得したる無上佛智なり。

(ネ)十二分敎。舊譯には十二部經とあり、佛說法の十二樣なるを云ふ、卽ち長行說、重頌說、授記說、孤起說、無問自說、因緣說、譬喩說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說。

(ナ)四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果。

を拭ふの紙、㋤四果㋶三賢初心十地は是れ古塚を守るの鬼、自救不了。」拈じて云く、「德山逸群の用を得て古今を明辨す、綱宗を提振し、後進を誘掖す。」拄杖を拈じて曰く、「然も是の如くなりと雖も、老僧が拄杖子に鼻孔を穿卻せられて、直に得たり氣を出す處なきことを。衆中氣を出す底あること莫しや。」卓一下して曰く、「具眼の者は辨取せよ。」

結夏上堂、高く十地を超えて㋰僧祇を歷ず、物我一如、身心平等、萬法と侶たらず、千聖と途を同じうせず。佛祖の大機を全提し、人天の正眼を㋒獨露す、直に㋼孤峰頂上に居して禁足し、卻つて十字街頭に向つて手を垂る。殺活自在、擒縱縱橫、且く道へ還つて聖制に應ずる分ありや也た無しや。良久して曰く、「日用回互なく當機卷舒あり。」

㋨解夏㋔小參、大機大用、自在縱橫、千聖の機關を帶びず、諸祖の窠窟に墮せず、淨裸裸滲漏を絕し、赤洒洒覆藏なし、本地の風光、本來の面目、言發聲に非ず、言に和して擊碎す、色前物にあらず、物と俱に融す、布袋口を打開して、鐵門關を擊碎し、吹毛の劍を提げ、南來北往、田地穩密、步步踏實、且く道へ、如何なるか是れ實地を踏む底の一句、㋗蠟人の氷を

㋶三賢。十住、十行、十回向、位の修行人を謂ふ、此の諸位の菩薩を賢と稱するは別教につき論ずるなり。

㋰阿僧祇と云ふ、今無數と譯す、無限の長時間を呼び表す語なり、智度論に阿、秦には無と云ひ、僧祇は秦には數と云ふ、問ふ、「幾時を阿僧祇と名くる、」答ふ、「天人中能く算數を知る者、數を極めて知ること能はざる、是を一阿僧祇と云ふ。」

㋒獨露。豁開の謂。

㋼孤峰頂上。佛祖も窺ふこと能はざる底の所。

㋨解夏。解夏、又は解制と云ふ、夏安居の制を解きて出遊期に入る、之れ七月十五日後なり、敕修清規に曰く、「解夏に曰く、七月十四日の晚念誦、湯を煎じ、來日陞堂、人事巡寮、煎點正に結夏の儀に同じ」と

喜ばす、何ぞ(ヤ)鵝護の雪を憐れまん。

復た擧す、文殊三處に夏を度る、(マ)自恣の日に至りて迦葉(ケ)白槌して擯出せんと欲す、纔に槌を擧ぐるに、便ち百千の文球を見る、世尊迦葉に問ふ、汝那箇の文殊を擯せんと欲す、迦葉茫然たり、拈じて曰く、「三箇の(フ)老凍膿、一人は(コ)圓陀陀地、一人は(エ)曲彎彎地、一人は(テ)黑漆漆地、子細に點撿し將ち來らば、一得一失。」

解夏上堂、擧す、僧(ア)雲門に問ふ、「初秋夏末、前程若し人ありて問はば、未審し佗に對して什麽とか道はん。」門云く、「大衆退後。」僧云く、「過什麽の處にか在る。」門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて曰く、「這の僧、釼刄上の事を用ふ。雲門は殺活の手段を具す、諸人還つて會すや。」良久して曰く、「如かじ無事にし

出づ。

(オ)小參。祖庭事苑に「非時の說法之を小參と云ふ」と出づ、舊說に曰く、小參不時に之を請す、鼓を鳴らすこと一通、其の規、大參より約す、故に小參と云ふ、大參は上堂なり、參は交參の義、勅修清規に曰く「凡そ衆を集め開示する皆之を參と云ふ。」

(ク)蠟人の氷。蠟は年臘をいふ解制受臘の日之を法歲といふ長幼(人)染淨(行)ありこれ共行の氷潔なるを云ふ。

(ヤ)鵝護の雪。法苑珠林に昔日一の比丘あり鵝の命を護して身を惜ます我をして此の非法の事を造さしむと。雪は戒の潔白に喩ふる也。

(マ)自恣の日。梵には鉢利婆刺拏(ハリベヲド)と譯す、隨意の謂なり、結夏了りたる日、衆僧各自が其の罪過を說き、惡を改め善事を勸むるの日なり。

(ケ)白槌。稟白の義なり、白は事を告ぐるなり、謹んで大衆に白すと云ふ、如し、即ち世尊の律義、佛事を辨ぜんとするとき、必ず先づ稟白す、衆を穆むるの法となす。

(フ)老凍膿。膿は腫血なり、雪堂錄鈔に「蓋し老人の面に浮垢あり、而して凍膿の色に似たり。」

(コ)圓陀陀地。自在圓轉の義、今は軌制に拘はらぬことを云ふ。

(エ)曲彎彎地。弓を引いて曲ぐるが如きを云ふ、彎と類似の謂にして灣は水曲なり。

(テ)黑漆漆地。黑うして正邪を辨じ難し。

(ア)雲門初め睦州に參じ、門扉を閉却せられて脚を折り、省悟して後、雪峰に參じて嗣法す、雲門宗を唱ふ。惜哉、日本に傳らず、而れども大師の語錄、今に傳はる、師は特に言句三昧を得て、妙唱奇絶なり。

て好からんには。」便ち下座。

㋚開爐上堂、今朝時節に應じて東福圍爐を開く、三世の諸佛、㋖四聖、㋴六凡、情と無情と盡く火熖裏に向つて、共に大法輪を轉ず、耳ある者は聞き、眼ある者は見る、灰頭土面、衲帔蒙頭、眉毛を照顧して炭裏に歸して坐す、且く道へ、人の爲めにする處ありや也た無しや、若し又會せずんば㋱丹霞和尙に問取せよ。

冬夜㋯小參、朕兆未だ分れず、虛空背面なし、一氣已に動いて萬象自ら崢嶸たり、晷運推移り、㋛日南長至、本分の田地に向つて向上の機を撥轉すれば、一段の家風、古今を輝騰す、釋迦彌勒退身するに路なく、㋽臨濟德山目瞪し口呿す。千里萬里片雲なし、擬議不來ならば㋪三十棒、正恁麼の時、諸人還つて委悉するや、群陰消剝し盡す、來日是れ書雲。

復た擧す、僧、㋲疎山に問ふ「如何なるか是れ冬來の事。」山云く、「京師に大黃を出す。」拈じて曰く、「疎山明かに信旗を立て、密に陣敵を排す、鋒鋩を犯さず收放自在、然も是の如くなりと雖も、東福に若し冬來の事を問ふこと有らば、劈脊に便ち棒せん、何が故ぞ㋝殺人刀活人劍、具眼底は辨

㋚**開爐**。十月一日に爐開きの式を、禪門には行ふときに上堂す、故に名あり。
㋖**四聖**。聲聞、緣覺、菩薩、佛。
㋴**六凡**。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。
㋱**丹霞**。木佛を燒く話にて名あり、芙蓉楷祖に嗣法す、曹洞門下の傑出なり。
㋯**冬夜**。冬至の前夜也、此の夜慈明和尙は引錐せし因緣あり、幻住清規に「冬夜には土地堂念誦を爲す云々」と出づ。
㋛**日南長至**。書言故事十に曰く「秋分より日南陸に行き、冬至に至りて日南に極まる。」
㋽**臨濟**。諱は義玄と云ふ、黃檗の法を嗣ぐ、臨濟宗の祖なり、機鋒嶮俊、智見卓越、恰も將軍の機あり、臨濟錄廣く世に提唱せらる、七代目にして楊岐出で、的々傳來して妙心の關山を出し、後又白隱を出し

取せよ。」

冬至上堂、寒暑變遷して一陽來復す、百昌萌動して劫外花を開く、拄杖を竪起して曰く、「老僧が拄杖爭長きこと多少ぞ。」良久して曰く、「一冬二冬叉手當胸。」

(ス)臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾に明星を覩て眼睛を打失す、古より今に至つて虛を承け響を接し、眼裏に沙を撒す、漏逗少からず、畢竟(イ)作麼生、各々請ふ殿に上りて炷香禮拜せよ、宜しく眼を著けて看るべし、黃面老子面皮厚きこと多少ぞ、下座。

除夜小參、一機未だ露れず、毘盧元是れ凡夫、萬法縱然たり、(ロ)普賢其の境界を得、偏界曾て隱さず、故を改め新を換ふ、東村王老竹を爆して錢を燒く、神を驅り鬼を逐ふ、千聖も手を拱し、天魔も蹤を潛む、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去る、步步實地を踏み、句句根源を透り、箇の安排を通じ、箇の時節に應ず、驀に拄杖を拈じ卓一下して曰く、「還つて委悉すや、一聲雷發動すれば、蟄戸一時に開く。」

復た舉す、僧、(ハ)香林に問ふ、「如何なるか是れ衲衣下の事。」林曰く、「臘

て今日の隆盛を見、同じく楊岐と兄弟なりし黃龍は、的傳して建仁榮西に至り、天台に其の法を傳ふ。

(ヒ)三十棒。古來より道ひ得るも三十棒、道ひ得ざるも三十棒とあり、棒にて亂打されるの義なり、此の棒に罰棒と勵棒とあり。

(モ)疎山。撫州の人、匡仁禪師と云ふ、法を靑原下五世洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。

(セ)殺人刀活人劍。無門關州勘庵主の話の無門和尙頌に曰く、「眼は流星、機は掣電、殺人刀、活人劍」とあり。

(ス)臘八。十二月八日のこと、此の日大聖世尊は一見明星に大悟せられ、有情非情同時成道と一人獅子吼せらる、故に今日に至る、禪門は世尊の菩提樹下の勝躅を慕ひて一七日

月の火山を燒く。」拈じて曰く、「香林關捩を撥轉し、路頭を踏翻す、這の僧古に耀き今に騰る、歸家穩坐、且く道へ、如何か是れ歸家の一句、覷面若し宗正の眼なくんば、頭を回らして只だ見る翠山巖。

上堂、㋥十方佛土の中唯だ一乘の法のみあり、更に喚んで禪道佛法と作し得るや。若し作し得と言はゞ一雙の眼睛を打失す、若し作し得ずと言はば、千古の下人の笑端と作らん、本色行脚の人は須らく行脚の眼を具して始めて得べし、且く道へ如何なるか是れ行脚の眼、行いては到る水の窮る處、坐して看る雲の起る時。

上堂、棒頭に取證するも㋭塹に落ち㋬坑に墮つ。㋣喝下に承當するも虛を承け響を接す、向上向下轉た更に瞞頇、妙と說き玄と說く和泥合水、正恁麼の時、行いて塵を動さず、語りて唇を動さず、直に須らく大休大歇大安樂の場に到るべし、若し也た會せずんば、當來の彌勒慈尊に問取せよ。

上堂、萬機不到、千聖不携、要津を把斷して凡聖を通ぜず、然も是の如くなりと雖も、免れず一線道を放ち、第二義門に向つて無言の處に言を演べ、無相の中に相を現ず、始終一貫前後差なし、恁麼の告報、諸人還つ

の接心を修し、以て法乳の恩に報ゆるものとす。

㋑作麼生。怎麼生、做麼生、似麼生、とも書く、支那の俗語にして眞の音は「つあ(作)、も(麼)、すゑん(生)を發音の訛りにてそもさんと讀む、さーどうじや直に言へとの詰問詞なり。

㋺普賢。圓覺の疏に、圭峰曰く、體性周遍を普と云ひ、緣に隨つて能く成ずるを賢と云ふ。

㋩香林。青原下七世雲門宗の祖雲門の法嗣なり。

㋥十方佛土中唯有一乘法。法華經方便品に出づ、一乘法の下に無二亦無三とあり、要は方便說を採らざるの謂。

㋭塹。塹と同じ、塹は城を遶るの水。

㋬坑。阬なり、又壑なり。

㋣喝。此の字は叱咤の意にも用ひられ、又は言語思量の及ばざる事を示す爲に用ひらるこ

て甘ふや、(チ)三生六十劫。

上堂、本色の衲僧家は須らく(リ)行脚の眼を具すべし。若し未だ行脚の眼を具せずんば、二に落ち三に落ち了れり。且く道へ、作麼生か是れ行脚の眼。良久して曰く、「朝には東南を看、暮には西北を観る。」

上堂、擧す(ヌ)古德の云く、「一丈を説得せんより、如かず一尺を行取せんには、一尺を説得せんより、如かず一寸を行取せんには。然も是の如くなりと雖も東福は然らず、説も又説き得ず、行も又行じ得ず、何が故ぞ、意を得言を忘るも、猶ほ家醜を揚ぐ、寧ろ舌を截る可くとも(ル)國諱を犯さじ。

上堂、靈山獨り(ヲ)飲光に付し、少室可祖に單傳し、(ワ)黄梅半夜に衣を授く、(カ)臨濟行に臨ん

とありて、其の意味時によりて異なる、例せば臨濟には四喝あり、曰く、或る時の一喝は金剛王寶劍の如く、或るときの一喝は踞地金毛師子の如く或るときの一喝は探竿影草の如く、或るときの一喝は一喝の用を作さずと云々と出づ。

(チ)三生六十劫。遠うして遠しの謂を云ふ。

(リ)行脚。佛道を修行の爲めに行雲流水の身となるを云ふ、祖庭事苑に「行脚と謂ふは、鄉里を遠離して天下に脚行し、——求法證悟するなり、所以に學に常師なく云云」とあり。

(ヌ)古德。唐の大慈寰中禪師の語なり。修行の綿密な工夫と説法の不容易とを云ふ妙行と妙用となり。(傳燈九に出づ)

(ル)國諱を犯さす。僧、九峰に問ふ「先師(石霜禪師)、齒を齩む意旨如何。」峰曰く、「我れ寧ろ國諱を犯さすと云々。」

(ヲ)飲光。西天第一祖摩訶迦葉尊者を云ふ、「姓は波羅門、梵には迦葉波、此處に飲光勝尊と云ふ、生るゝとき、金光室に充つ、光り盡く尊者の口に入る、因りて飲光と名く世尊より正法眼藏を傳授せられ、弟子阿難に法を傳へて慈氏の下生を待つと云ひて鷄足山に入る。

(ワ)黄梅半夜。震旦五祖(達磨より五傳の祖)大滿弘忍禪師、黄梅に住せらる、故に名あり。盧行者に夜半衣鉢を傳へたる因緣あり。

(カ)臨濟行に臨んで付囑す。臨濟錄に曰く「師遷化に臨む時、坐に據つて云く、吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。三聖出でて曰く、爭てか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。師云く、已後に人有り、汝に問はんに、他に向

で付屬す、東福門下密傳付屬底の事なし、今日普く諸人の爲めに這箇の事を直示す、且く道へ古人と優劣ありや、各々宜しく眼を着けて著るべし。

上堂、靈鷲峰前白雲靄靄、少室巖畔白雪皚皚、驀に拄杖を拈じ卓一下して云く、「瞿曇說不盡の處、祖師提不起底、山僧衆に對して八字に打開し了れり。諸人還つて見るや、」又卓一下して下座。

上堂、擧す㋵乾峰、衆に示して曰く、「一を擧して二を擧することを得ざれ、一著を放過すれば第二に落在す。」雲門、衆に示して曰く、「昨日人あり天台より來りて、卻つて徑山に往き去る、㋟峰維那を喚んで云く、「來日普請することを得ざれ」と。拈じて曰く、「乾峰無陰陽の地に箇の消息を露はす、雲門袖裏に金鎚を藏す、高く祖印を持して頭正しく尾正し、始末相符す、敢て大衆に問ふ、這般底ありや、若し無くんば歸堂喫茶せよ。」

上堂、擧す、僧、㋹九峰に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」峰云く、「東生の明月、西落の金烏。」僧云く、「師に非ざれば委せず。」峰云く、「理當りて卽ち行ぜん。」僧㋞禮拜す、峰便ち打す。僧云く、「仁義道中禮拜何の咎かあらん、」峰曰く、「來處明かならざれば須らく嚴令を行ずべし、」拈じて曰く、

つて什麼とか道はん。三聖便ち喝す、師云く、誰か知る吾が正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却することを。言ひ訖つて端然として示寂す。」

㋵乾峰。洞山禪師の法嗣。

㋟維那。次第と譯し、悅衆と譯す、次第とは次第秩序あるなり、悅衆とは事を辨じ衆を悅ばしむるなり、寄歸傳に曰く、「梵には羯磨陀那、唐には綱維と云ふ、而も禪規には維那と云ふは悅衆と云ふは義に於て未だ盡きず」とあり。

㋹九峰。瑞州の人、普滿禪師と云ふ、青原下五世、洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。

㋞禮拜。梵語には那膜悉羯羅、此に禮拜、又は和南と譯す、是に三等あり、一に頭至地、二に屈膝頭不至地、三に口禮となり。

「九峰的を以て機を奪ふ、嚴令當に行ずべし、這の僧劍刄上に向つて能く曲直を辨ず、互に肝膽を傾けて各々毫芒を出す、古に騰り今出で、聲に騎り色を蓋ふ、大衆還つて委悉すや、試に請ふ辨別して看よ。」

上堂、第一句下に薦得すれば、佛祖も命を乞ふ、第二句下に薦得すれば人天膽落つ、第三句下に薦得すれば虎口に身を横ふ、毗盧頂を坐斷して釋迦文に稟けず、聲色を帶びず、見聞に落ちず、東福敢て囊藏被蓋せず、八字に打開し了れり、遂に(ツ)拂子を擧して云く、「還つて見るや。」擲下して曰く、「分明に記取せよ。」

上堂、絃を動ずれば曲を別ち、葉落ちて秋を知る、向上の鉗鎚を提げ、(ネ)作家の爐鞴を開く、德山の棒、手を下すに處なく、臨濟の喝口を啓くことを得ず、正恁麼の時、如何か信を通じ去らん。良久して云く、(ナ)「吃嘹の舌頭三千里、壺中の日月自ら分明。」

上堂、月一を生ず、乾坤廓落として大方外なし、月二を生ず、(ラ)師子奮迅、(ム)象王回旋す、月三を生ず、蟭螟眼裏大鵬身を翻す、所以に道ふ、向上の一路千聖不傳、學者形を勞すること猿の影を捉ふるが如し、拄杖を拈

(ツ)拂子。「釋尊在世に諸の比丘、蚊虫の爲めに食はれて身體痒を發す、故に衆寶を柄となし犛牛の尾を拂となす云々」毘奈耶雜事に記す。

(ネ)作家。「さつけ」と讀む、作者の家の意にして、禪門にては斯道に老熟せし人を呼ぶ。臨濟錄に作家戰將とあり。

(ナ)吃嘹。祖庭事苑に曰く「言只嫩嫩として紆戾するなり、其の舌を嫩ふとは猶ほ舌頭を縮卻するが爲めなり」と在り。

(ラ)師子奮迅。大般若經五十二卷に曰く「獅子奮迅三昧とは諸の垢穢に於て縱に佐し、又棄捨すること師子王の自在に奮迅なるが如し。

(ム)象王回旋。華嚴經四十六卷に曰く「爾のとき文殊師利、顯現の菩薩の爲に象王の廻るが如く、諸の比丘を顧視す。」

(ウ)漏逗。撿束なき場合と、物の

じ卓一下して云く、「意氣ある時意氣を添ふ、風流ならざる處也た風流。」

上堂、妙性圓明にして諸の名相を離る、本來世界衆生あることなし、衆生妄に因つて生あり、生に因つて滅あり、生滅を妄と名く、滅妄を眞と名く、喝一喝して曰く、「黃面老漢、當時若し遮の一喝を下し得ば、許多の㋺漏逗を免れ得ん、何が故ぞ、既に是れ圓明にして相を離る、妄何れより起り眞何れよりか生せん、若し恁麼に見得徹し去らば、山河大地、萬象森羅、四聖六凡、情と無情と一揑を消せず、敢て大衆に問ふ、卽今是れ什麼の時節ぞ。」拂子を擧して云く、「盧舍の本身全體現ず、當機直下に纖毫なし。」

上堂、擧す㋭金峰、衆に示して曰く、「老僧二十年前老婆心あり、二十年後老婆心なし。」時に僧あり、出でて問ふ、「如何なるか是れ二十年前老婆心ある。」峰云く、「凡を問へば凡を答へ、聖を問へば聖を答ふ。」僧云く、「如何なるか是れ二十年後老婆心なき。」峰云く、「凡を問ふに凡を答へず、聖を問ふに聖を答へず。」拈じて曰く、「金峰大機を顯し大用を發す、這の僧、玉轉じ珠回つて正眼を流通す、然も是の如くなりと雖も、㋨東福は然らず、當時恁麼に問ふものあれば、劈脊に一棒を與へん、何が故ぞ、達者先づ知り、賢明早く悟る、久立㋔珍重。」

取り亂れたる場合とに用ふ。

㋭金峰。撫州の人金峰に居す、名は玄明、號は從志と云ふ、洞山の嗣、曹山本寂禪師の法嗣なり。

㋨東福。聖一國師自らを呼ぶに東福寺に住せしに因る、例せば希運禪師は黃檗山に住す、故に黃檗と呼ぶが如し、本朝にあつては山號を喚はずして多くは寺號を呼ぶ慣例なり。

㋔珍重。猶ほ能く保重を加へよと云ふが如し、或は請ふ自愛を加へよ、能く消息せよ保惜すべしと同じ謂ひなり。

上堂、是れ目前の法にあらず、亦心外の機に非ず、直下に承當を絕し(ク)當陽向背なし、祖印を提持し宗乘を荷負す。覿面相呈して更に餘事なし、正恁麼の時作麼生、向上の一竅を撥開して、千聖齊しく下風に立つ。

上堂、孤峰頂上雲に眠り、十字街頭に手を垂る、全機大用觸處見成、溢目の淸光今古を貫通す、一塵法界を含み、一念十方に遍し、淨裸裸遺すことなく、赤洒洒全く露はる、出沒自在纖塵を隔てず、然も是の如くなりと雖も、更に須らく(ヤ)金剛王寶劍を揮つて、(マ)直に根源を截つて當陽に顯露すべし、(ケ)不らざれば也た(フ)周由、正恁麼の時、一物に依倚せず、一句如何か道はん、萬象の中獨露身、百草頭邊著著親し。

(ク)當陽。即今を見よの義なり。
(ヤ)金剛王寶劍。臨濟錄に曰く、「或るときの一喝は金剛王寶劍の如く云々」とあり。
(マ)直截根源。證道歌に曰く「直に根源を截るは佛印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能くせず云々」と出づ。
(ケ)不者。「しからざれば」と讀む。
(フ)周由。週遮の義、今は遠くして遠しの義。

㋑法語

空明㋺上人に示す

祖師の直示、殊方便なし、諸縁を放下し萬事を休息して、晝三夜三鼻端を守看し、纔に境界の差別に渉るの時、只だ㋩話頭を擧せよ、佛法の想を作さず、破除の想を作さず、心を存して解の等しきことを用ひず、情疑殆を生ずることを用ひざれ、理路なく滋味なく鐵饅頭の如く、單刀直入、異想に渉らず、悠久歳月、自然に恰も睡夢の惺むるが如く、蓮華の開くが如くならん、正當恁麼の時、從前の話頭、只だ是れ門を扣くの瓦子、那邊に抛下して卻つて祖佛の機關語句を看よ、皆是れ㋥小兒の啼を止むるのみ、向上の一路、更に一線を通せず、凡聖の要津を截斷す、學者形を勞することは猿の月を捉ふるが如し、謂つ可し、自身を忘卻して外に向つて馳求すと、何の日か求め得べけんや、蒲團上に安坐して晝夜成佛を求め、生死を厭卻し菩提を證せんと欲す、皆月を捉ふる猿の如し、若し眞實相爲にする

㋑法語。「前輩有道の士、佛祖不傳の妙を提持し、學者を敬語するなり」と凝絕錄に出づ。

㋺上人。摩訶般若經に、「佛言はく、若し菩薩一心の阿耨菩提を行ひ、心散亂せず、是を上人と名く。」然れば上人とは內に智ありて外に勝行あり、人の上に在るが故に云ふ。

㋩話頭。古則公案いこと、太明錄七に曰く「話頭之れ道に非ず、門を敲くの瓦子のみ。」

㋥小兒止啼。涅槃經第二十嬰兒品に曰く「彼の嬰兒の啼哭するときの如き、父母即ち楊樹の黄葉を以て之に語つて曰く、啼くこと勿れ、啼くこと

處を欲せば、只だ是れ無心是れ道なり、亦木石の如きに非ず、靈靈として常に知り、了了として分明なり、視聽尋常にして更に委曲なし、空明上座晝夜㋭面壁、語を求めて㋬警策とせんとす、家風を惜まず、筆に信せて之を書す。文永四年月日。

智禪上人に示す

祖師門下、直指人心、言說方便、特地に乖張す、見聞に墮せず、聲色に從はず、百草頭上に縱橫、萬象堆裏に坐臥す、㋣出息塵緣を假らず、入息陰界に繫がれず、盡大地解脫門、摠刹海眞實法なり、通方の作者は擧著すれば歸を知る、初心晚學は云何が湊泊せん、若し未だ薦得せざるに、且く第二義門に向つて一線道を放ち、無言の處言を演べ、無相の中に相を現せん、如何なるか是れ無言の處に言を演ぶ、磨盤空裏に走る、如何なるか是れ無相の中に相を現ず、㋠西河に師子を弄ず、日用緣に差別の境界に應ずる時、破除の想を用ひず、玄妙の會を作さざれ、理路なく滋味なく、晝夜寢食を忘じて此の話を看よ、若し亦未だ薦得せずんば、更に第三頭を說かん、心と說き性と說き、玄と說き妙と說く、一塵法界を含み、一念十方

勿れ、我れ汝に金を與へん、嬰兒見了りて眞金の想を生ぜん、便ち止んで啼かず云々。」

㋭面壁。普勸坐禪儀に曰く「少林の心印を傳ふる面壁九年」とあり。魯祖和尚は凡そ僧の來るを見る、即ち面壁すとあり、現今にても曹洞門下曉天の座禪には面壁す。

㋬警策。大潙山は警策一篇を著はして學者を策進せしむ、今日禪門に用ふる木製の警策は、學者の睡魔を打し、或は怠墮を戒むるの法器なり。

㋣出息塵緣を假らず云々。「西天二十七祖般若多羅尊者は、達磨大師の師なり、一日王室の供養に招かれ、讀經致さずして曰く、出息衆緣に涉らず、入息陰界に居せず、常に如是經を轉んず云々」と出づ。

㋠西河の師子。會元十一に「汾陽善照禪師上堂曰く、汾陽門

に遍し、故に古者の道く、「無邊の刹境、自佗毫端を隔てず、十世古今始終當念を離れず、」禪上人紙を袖にして語を求む、筆に信せて老草す、一見の後丙丁に付せよ。

智目禪人に示す

佛祖以來、大凡人を接するに㋷三種の機あり、若し是れ第一機は更に方便なく、義理なく、話會し難し、若し此に於て直下に承當せば、㋦庭前の柏樹子、㋸麻三斤、㋾一口吸盡西江水と更に差別なけん、若し是れ第二機は、只だ是れ問端を發起し、手に隨つて點破す、則ち臨濟の黄蘗に問うて㋻六十の烏藤を喫するが如し、若し是れ第三は、泥に入り水に入り、箇の注脚を下して人の眼目を瞎して胡種族を滅す、只だ是れ眞正の衲子は、直に須らく撥卻して、活句に參じて死句に參ぜざるべし、目上人、人と爲り純實なり、若し能く活句上に薦得せば、祖佛の與に師と爲るに堪へん、老僧家風を惜まず、三種の機を示すと云ふ。

如㋕上座に示す

佛佛手を授く唯だ佗にあらず、只だ是れ自己恩力の處、方木圓孔に投じ、

下西河の獅子あり、門に當つて踞坐す、但だ來者あれば即ち復た咬殺す云々。」

㋷三種の機。學人の根機に上根と中根と下根との三種あり。

㋦庭前柏樹子。趙州に僧問ふ、「如何なるか祖師西來意、」門云く、「庭前の柏樹子。」

㋸麻三斤。洞山に僧問ふ、「如何なるか佛、」山曰く、「麻三斤。」

㋾一口吸盡。龐居士、馬祖に問ふ、「萬象と侶たらざるもの是れ什麼物ぞ、」祖曰く、「汝が西江水を一口に吸盡せんを待ちて即ち答へん。」

㋻六十烏藤。六十の痛棒のこと、臨濟、黄蘗の會下に打坐すること三年、師兄の睦州尊者の敎を受け入室す、臨濟如何なるか佛法的々の大意を黄蘗に問ふこと三度、三度又痛棒を受く。

土塊泥裏に洗ふ、祖祖相傳ふ、空谷聲に答ふ、南を呼んで北と作す、横三竪四、坐一走七、未だ誵訛を免れず、若し又一氣未だ兆さざる以前、杳冥恍惚たるに向つて信得及するも、尚ほ第二頭にあり、何に況んや更に混沌已に分るるの時に於て獲得し去らば、第三機に落在せん、自ら眼を著け去つて、直に佛祖の理致機關を超ゆべし、所謂佛の理致を超え、荊棘林を過得し、祖の機關を越え、銀山鐵壁を透得して始めて向上の本分あることを知りて、坐を得て衣を披し、人の爲めに黏を解き縛を去らん、如上座、座下に在りて積んで年あり、而今郷に歸る、呼喚すれども回らず、羅籠すれども住まらず、赤脚にして歸り去る、故に筆に信せて書して之を送る。

覺實上座に示す

祖師の宗風、向上の一著、大丈夫の氣槩を具して那邊に承當し、隨處自在妙用無礙なり、金剛王寶劍を揮ふて誵訛を坐斷し、殺活の杖子を用て是非を勦除し、棒喝時に隨うて坐一走七、是の故に黄面老師、三百餘會、㋵四衆㋟八部を集めて能く法王と爲りて、法に於て自在なり、碧眼の初祖、九年面壁、後學を提諭し、外諸縁を息めて内心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て道に入る可しと云ふ、此れ等は皆是れ始めに方便を設け、後に自ら證知せしむ、諸縁放下、萬事休息、是れ第一の方便なり、若

㋕上座。尚座とも書す、梵に悉替那と云ふ、上に更に人なきを上座と名く、阿毘達磨集異門足論に曰く「上座とは生年の上座、世俗の上座法性の上座、と三種あり。」

㋵四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

㋟八部。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

し此の方便に滯らば便ち不是、事已むことを得ず、老婆心、和泥合水、楔を以て楔を拔く、機を以て機を奪ふ、千變萬化、七縱八橫なり、若し口頭に則を取り、言に隨つて解を生じ、陰界に墮在せば、猶ほ方便を知らず、況や正宗をや、實上座、性を稟くる凡ならず、人と爲り純至なり、語を求めて警策とせんとす、故に書して之を與ふ。

禪人に示す

一頂顙上脚跟下、切に須らく薦取すべし、此の中一條通天の大路あり、普賢の行願を立てず、文殊の機智を說かず、毗盧を把斷して凡聖迹絕す、然して後に大機大用觸處に現成せん、百草頭上に權と說き實と說く、聲色堆裏に照を立し用を立す、接手方便自由自在なり、若し明眼の人をして見せしめば、猶ほ半途に在り、也た是れ枷を擔ひ狀を過す、然も是の如くなりと雖も、須らく接手方便あることを知るべし、一は坐禪方便、二は直示方便、㋪坐禪とは大定なり、直示とは大慧なり、蓋し空劫以前威音那畔は師無うして自ら發す、此等の方便なし、達磨の示す所の潛付密證とは是れなり、空劫以後は、悟あり迷あり、問あり答あり、㋡師あり資あり、皆是れ接手方便なり。佛祖出興して理致あり機關あり、向上あり向下あり、明頭來暗頭合、日面佛月面佛、手に夜明の符を執りて金剛劍を提取す、作家の眼目機に應ずるの鉗鎚、言詮を用ひず機境を用ひず、利

㋪坐禪。坐は漢語、禪は梵語なり、具に禪那と云ひ、正思惟と譯す。

㋡師資。師は授業師なり、資は弟子なり、資は取なり、師の教に從つて取りて之を行ふの義。

根上智は直下に透達す、謂つべし天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり、寛豁たること虚空の如く、遍照日月の如し、古人の云く㋡「黄梅會中七百の高僧、皆是れ佛法を會せる底、只だ㋧盧行者一箇ありて佛法會せざる底」と、是れは此れ直示底の樣子なり、若し亦坐禪の方便は、某人已に此に熟せり、老僧が舌頭を煩はさず、適々脣を袖にして語を求む、筆に信せて老草す。

又

空劫以前は師無うして自發し、佛祖以來は師に因つて打發す、所謂自發打發は皆是れ人に接するの方便なり、蓋し從上佛祖の相傳ふる自在妙用、皆是れ機語投契のみ、達磨大師海を渡り㋤江を過ぎ、面壁端坐隻履獨歸す、又是れ機語投契邊の事なり。上人投契せんと欲せば、直に須らく生死の根株を誅し、賢聖の窠窟を破して淨裸裸赤洒洒、一物に依倚せずして始めて小分の相應あるべし、老僧與麼の說話、且く道へ、投契ありや投契なきや、若し能く撿點得出せば、謂ふこと莫れ、老僧汝が爲めに說かずと。

藤丞相道家に示す

此の段の大事は、自己の脚跟下を彰はす、淨裸裸赤灑々、沒可把、水上に葫盧を放つが如し、佗を拘牽すること得ず、佗を惹絆すること得ず、云云、具眼の漢、大爐鞴を設けて、百煉千煆、一棒一喝、

㋡黄梅。黄梅山にして、達磨より五傳の祖大滿弘忍禪師を指す。
㋧盧行者。姓盧氏なるが故に云ふ、黄梅の法嗣にして慧能大鑑禪師を指す。
㋤過江。楊子江。

七顛八倒、淨に入り穢に入り、礙せず改めず、一々歴試して方に這の入頭の處を得て、少しく親近の分あらば、縱ひ能く之れを得るも之れを守り難く、之れを守るも之れを行じ難し、須らく知るべし此の事、直に是れ決定の志を具して、千差萬別の處に向つて、主宰となることを得べし、此除の外、畢竟什麼をか作さん。禪定殿下、我を閑靜の處に訪ひ、或は顯密性相の源を尋ね、波のごとく騰り、嶽のごとく立ち、或は直指單提の妙を問ひ、瓶のごとく瀉ぎ雲のごとく興る、余二十年の學力を以て僅に能く其の量に充し、其の欲を恣にするのみ、恁麼に筆を迅にす、請ふ、自ら看取せよ。

㋑偈頌

㋺佛鑑老師の生日を賀す

纔に胞胎を出で十方に歩す、遠く來り海を掛りて香湯を獻ず、嫌ふこと莫れ惡水驀頭に灌ぐことを、往昔の毒龍毒最も强し。

新命天王の智長老を賀す　㋩別山

夙債未だ酬いず眞の鐵牛、身を横へ重を負うて鄽市に入る、脚頭踏斷す六門關、限りなき清風步趾に隨ふ。

新命定慧圻　㋥長老を賀す　㋭方庵

春容春水蒼龍起る、雲衢に飛び上りて步步通ず、風雨私無く隨處に施す、須らく知るべし四海一雷同。

㋬蘭溪筍を送る韻を和す

竹林無數龍孫出づ、隱約春深く獨り門を閉す、惠意溫和にして頭角を寄す、憐む可し天性恩を知らざることを。

㋑偈頌。梵に伽陀、此處に孤起、又は玄妙と云ふ、重頌ならざるを孤起と云ひ、亦風頌と云ふ、西域には舊に偈と云ふ、又は偈他とも云ひて、伽陀を音訛したるなり。

㋺佛鑑。無準禪師の賜號なり、禪師の行狀初に載す。

㋩別山。佛鑑禪師の法嗣にて天童山に住す。

㋥長老。凡そ道眼を具し、尊ぶべき德ある者を號して長老と云ふ、西域に道高く臘長ずる須菩提等を呼んで云ふが如し云々。

㋭方庵。佛鑑禪師に嗣法す。

(ト)兀庵最明平(チ)元帥を印するの韻を和す

大機大用大根の人、鼻孔遼天獨露身、凜凜たる威風閫外に行る、五湖四海一天眞。

(リ)圓明藤丞相の韻を和し奉る

台星知んぬ是れ本文星、槐門を交照して家業榮ゆ、輔弼匪躬紫極を扶け、(ヌ)權衡手に入りて蒼生を惠む、靈山の付屬固に能く記す、雙徑の宗風已に與に盟ふ、駟馬時時梵宇に臨む、林泉此れより淸平を樂む。

藤の(ル)丞相に示す

妙は佛祖不傳の處に在り、高く理致を超えて機關を去る、機關を去りて窠臼沒し、水は是れ水山は是れ山。

又

五葉花開く無根の樹、一陣の香風天地寬し、天地寬し奉萬國、家門盛え民物安し。

(ヲ)術士月潭頌を求む

月潭底無うして人に逼つて寒し、本命元辰自ら識せず、淡薄の家風處

(ヘ)蘭溪。宋國の人、北條時頼公の請を受け、相州建長寺に住す、大覺禪師と賜號せらる。

(ト)兀庵。諱は普寧と云ふ、宋國の人、東福寺や建長寺に客居たり、爲めに衆僧集まる、後歸國するに北條時頼の使に送らる、諡して宗覺禪師と云ふ。

(チ)元帥。書言故事に、大將を元帥と云ふとあり、此のときの將軍は宗尊親王にして、時頼は其の執權なり、故に元亨釋書には副元帥平の時頼と出づ。

(リ)圓明。圓明寺殿、別に後一條殿とも云ふ、藤原道家公第三子にして一條家の祖なり、官には左大臣從一位攝政關白に昇進後出家して法名を行惠、又は行雄と云ふ、六十二歲にして薨去す。

(ヌ)權衡入手。禮記に「權衡は其の平を取る、故に先王是を貴ぶ」文選の注に、「衡は平な

に隨つて樂む、清貧の生計只だ吾れ安ず、尤も憐む月魂の遙漢を照すことを、且喜すらくは深聲遠灘を度ることを、切に忘む聲に隨ひ仍ほ色を逐ふことを、直に須らく北斗南に面して看るべし。

(ワ)天王を送る

處處の叢林妖怪多し、謾に平地に於て干戈を起す、天王住山の斧を提起して、南北東西凱歌を奏す。

子曇侍者か韵を次ぐ

絕學の道人(カ)帝寰に入る、玩水と游山とに隨はず、佛祖を烹る鉗鎚の手を具して、知んぬ是れ時に應じて鐵關を破す。

(ヨ)率庵を悼む

凝坐頹然として轉身を解す、鄮峰山畔變通新なり、千年の琥珀玉土に埋む、半夜珊瑚月人を照す。

(タ)寧(レ)知客を送る

從來道地は是れ蘇州、五馬の知音笑つて點頭す、十字街頭に(ソ)鋪席を開く、直に高價を須て輕く酬ゆこと莫れ。

り、權は重なり、權に任じて物を均しくして輕重を平ぐ」とあり、今此處にては天下の政務を柄るの謂なり。

(ル)藤丞相。圓明寺殿を指す。

(ヲ)術士。字彙に術は道業なり、又使術なり、按ずるに本文の術士は占卜者を謂ふ。

(ワ)天王。別山禪師を指す。

(カ)帝寰。帝都を云ふ。

(ヨ)率庵。諱は梵琮、光佛照に嗣ぐ、即ち大慧禪師の孫なり。

(タ)寧知客。寧は杭州の人、退耕能寧禪師を云ふ。

(レ)知客。職名なり、賓客を接して來意を上方丈に、又は衆僧に報する役なり。

(ソ)開鋪席。出世開堂のこと、今此處にては蘇州府報因光孝寺を指す、是れ寧知客初開堂の地なり。

(ツ)逢瀛。逢も瀛も共に仙境なり。

堯知客を送る

當年臂を掉つて(の)蓬瀛に出づ、(ネ)還丹を秘畜して直に今に至る、定慧門中に一粒を出さば、何ぞ憂へん鐵を點じて金と成さざることを。

梅花を剪る

陰陽の土地を假りて生せず、心に得手に應じて剪裁し成す、暗香些兒許りを缺くと雖も、松筠と弟兄と作るに堪へたり。

僧を送る

秋空水の如く水空の如し、衲子玆の時活路通ず、直に孤峰々頂上に向つて、草庵盤結して家風を展べよ。

(ネ)還丹。大藏法數五十九に還丹の圖あり。

佛祖(イ)贊

達磨

海に航し遠く來つて筋力を費す、(ロ)梁王動ぜざること盤石の如し、長蘆を抹過して少林に入る　一花五葉甚だ狼藉。

又

葦を折り江を渡りて人知らず、少林九年空しく面壁、隻履歸らず西竺乾、大虛抹過して東國に入る。

又

草に入りて人を求むる處、相逢ふ斷臂の客、看よ佗位に依る時、標格と爲すに足らず。

又

祖師西來、少林一欵、天下の衲僧、之が橛を拔かず。

魚籃

(イ)贊。叢林盛事に曰く、「前輩佛祖を贊するの偈句丼に自贊の語なり、各々吟式あり。」

(ロ)梁王。梁武帝のこと、俗に佛心天子と云ふ。

(ハ)寒山拾得。唐の高宗の代に、天台山に豐干禪師あり、偶々山中を經行して赤城に至る、道の側に數歳の一子あり、師之を携へ歸りて典座に付し、拾得と名づく、後に一貧子あり、寒巖より來る、寒山と云ふ、最も詩を能くす、常人に非ず、代宗の時に二人相供に寒巖に遁れ去れり、行く處を知らず、世に流布せる圖中、箒を持てるは寒山書卷を展べて立てるは拾得なり。

這箇の女人、魚を海濱に求む、籃を携へ拾ひ得て、綸を垂ることを用ひず。

㊅寒山拾得

路頭に拾ひ得て族親なし、直下に空を指して半途に在り、眉毛を剔起して相看て笑ふ、寒山歸り去つて工夫沒し。

㊀達磨

祖師西來、一字を說かず、聲前の語句、紅爐雪を點ず。

㊀達磨。西天の末葉にして東土の初祖なり。禪宗これを以つて第一祖と爲す。故に祖師西來と、一度當門に入りて又一字を說かず、只可一人を得て安心す、慧可雪中に立ちて得法す、これあとの三句あり。

自賛

東山長老の請

老漢百醜千拙、擧動すれば輙ち勘過せんことを要す、看よ毗盧華藏海、幾許の風波をか鼓起す。

㋑藏山長老の請

生前の面目、色に非ず心に非ず、手裏の竹箆、能縱能擒、龍淵の水を攪動して、波濤萬尋に揚る。

辨雅長老の請

萬象堆中半身を現ず、當陽に驗盡す作家の人、機語相投ずる處を知らんと要せば、垂下の鼻頭萬鈞重し。

智㋺侃侍者の請

覿面全く提ぐ栗棘蓬、應縁投契宗風を振ふ、等閑に噴嚏すれば乾坤動く、十世古今盡く透通。

任淵上座の請

老漢一生曲牀に坐す、烏藤拈起す沒商量、機前毫髪も存せざる處、個儻分明に獨り自ら彰る。

孝仙の請

㋑藏山。諱は順空と云ふ、東福五世に住す。
㋺智侃。直翁と云ふ、東福寺十世に住す。

手に無毛の拂子を把りて、寥寥たる ㋩宇宙に淸風を起す、今を照し古を鑑む頂門の眼、天下悉く知る ㋥草本同じ。

三林長老の請

普門禪寺の長老、口に信せて ㋭胡說亂道、誰か知らん葛藤を打するに慣れて、終に人の好む所に隨はず。

然奇山の請

吾儂一段の風、佛祖通じ難かるべし、端なく手を垂るる所、天下草木同じ。

顯正堂の請

盡大地これ ㋬般若の光、光未だ發せざるの時生佛なし、形容才に露はれ ㋣此の道を傳ふ、舌本瀾𦕓して口沸くが如し。

張四綱の請

久能の門下、法の人に與ふるなし、篦を握り座に據る、近前すれば便ち礥。

明辨庵主の請

秉拂緣に應じて說き、神仙妙訣あり、佛祖無住の心、是れ途轍を守るにあらず。

㋩宇宙　淮南子十一に曰く、四方上下之を宇と云ひ、往古來今之を宙と云ふ。

㋥草本同　無準師曰く、若し是れ經山ならば然らず草本天下同と佛鑑錄卷二に出づ。

㋭胡說亂道　胡亂と熟し、說道はとぐともいふ也。反語にして意深し。

㋬般若。梵語「にろばーな」にして智慧と譯す。

㋣此道。禪宗の命脈にして、是れ佛道をいふ也。

又本命元神敎外の傳、臨機の投契那邊の先、知るべし竹篦手頭の主、問著すれば時に隨つて月天に上る。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄 終

師範、東福堂頭長老に和南す、印上人來つて、書幷に前の一書及び寶塔を收む、一々領得す、甚だ不忘を感ず、第だ相去る事阻遠、即答するに由無し、且つ知る崇福より東福に遷り、四名刹に住して、衆を安じ道を行ずる事を、誠に老懷を慰む、但だ恁麼に操守して、力めて此の道を弘め、一枝の佛法をして、日本に流布せしめば、眞に宗乘中の人たるに忝ぢざるなり、長老は禪教兼通す、又能く踐履す、殊勝ならざることを患へず、只だ貴むらくは始終一節、介然として改めざる耳、此れ老僧が望む所なり、餘は它祝無し、多々大法の爲に自愛せよ、一々ならず。

大宋徑山住持圓照老僧師範書して、
日本東福堂頭佛長老に復す。

師範和南して承天堂頭長老に孚白す、向に曾て書を收む、已に嘗て囘答す。就て錦法衣壹頂有りて附去す、乃ち是れ從上來諸知識の傳ふ所の者なり、以て付授の妄ならざるを表はす、且知る、長老故國に還り、緣法殊勝にして、至る所、響きの如くに合す、更に宜しく此の道を以て力め行ふべし、吾祖の教をして、在々處々、熾然として興らしめよ、此れ至祝を爲すなり、便風聊か倦々の意を復す、未間、切に宜しく大法の爲め保愛すべし、餘は一々ならず。

師範和南して、
承天堂頭長老に手白す。

了惠頓首再拜、
東福堂上禪師法兄大和尚侍者に上覆す、即日春事闌を告ぐ、恭く惟れば、尊候、萬福を相くること有り、了惠竊審、道福を以て住出す、王臣贊護、聲稱奕々として、遠く華夏に被ると、乃ち知る、先師の左券、全く老手に歸することを爽、欽羨々々、切に乞ふ、師門の爲め、益々珍護を加へ、以て眞風を永くせよ、不宣。

大宋寶祐乙卯三月二十五日
天童初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜して、
建仁堂上聖一賢處禪師侍者に上覆す、即日仲夏之月、恭く惟れば 尊候動止、神龍冥相の祝を納め、了惠曩に大國の回船に因りて、嘗て尺書を布き、幷に正續 施經を蒙る石刻を以て附納す、相望

むこと萬里、几格に登徹するや否やを知ること莫し、神足元空二兄の提唱の妙語を傳授するを見る毎に、凜然として老圓照の氣味有り、人をして毛骨を森聳たらしむ、中間且つ聞く錫を名刹に移すと、恨むらくは親しく法會に臨むことを得ず、但だ能く斫額、東望する也、了惠茲に風便に因つて、字無かるべからず、但だ客邸物の芹倚を見る無し、復狀を需めて未だ間あらず、萬告大法の爲め、後學の爲め強ひて復せよ、不宣、了惠頓首再拜上覆。

右語錄國師年譜を以て、再刊助緣の餘資、重刻する者也。

元和六年庚申臘月下澣

見㆓東福集㆒雲叟守藤之れを記す。

惠日國師、楊岐一宗を振起し、雙徑の正脈を流傳す、提唱語錄、舊刻漫漶、重ねて釐整を加へ、刊行流通、南谷の一衆、各衣資を抽んて、板を常樂禪庵に置く、伏して願はくは佛種、世々に斷えず、光明幢を建て、祖印親傳して、人々無盡藏を開かんことを。

文政丁丑十月濟北劣孫令材識す

聖一國師住東福禪寺語錄序

佛唯說而已、不結集矣、結集者、諸子之事也、我慧日祖說法、可盈海藏焉、諸子之多、宛如耆蠅焉、然皆早敷化於四方、不遑結集矣、有忠首座者、謂予曰、吾祖貫花、無綴緝者、歲已半百、更加數年、恐微言之絕乎、師有意哉、予曰、兄與予共貽厥也、我言結集者、諸子之事也、予豈敢乎、曰、結集者誰、曰、妙德大龜及慶喜也、曰、慶喜嗣阿誰、曰、嗣大龜、曰、寧非孫謀乎、曰、似則似矣、是則未是也、曰、若有似者、亦庶幾焉、予不得而拒、纂集竟、告曰、今之所得者、蠹簡殘編也、豈能共收並蓄乎、所謂仙宮勅六丁、雷電下取將、流落人間者、太山一毫芒也耳矣、方今天下緹衣十襲惠日手澤者多矣、兄者遍參人也、或江或湖、剽聞切問、粽此冊焉、元德三年二月初五日、三聖孽孫師錬敬序。

聖一國師住東福禪寺語錄

三聖嗣孫　師錬　校纂

元日上堂、禪非意想、立意乖宗、道絕功勳、建功失旨、新年消息、不動纖塵、應節納祐、慶無不宜、若作佛法商量、喚鐘作甕、若作世諦流布、平地喫交、大衆還委悉麼、孟春猶寒、歸堂喫茶。

無準忌拈香、我昔行脚、航海梯山、拖泥帶水、徧歷南方、當時五髻峰頭、不覺撞著這老師、遭儂毒手、無回避處、眼上安眉、萬盡生涯、直至如今、無言可說、無理可伸、而今對衆、盡底揭翻、擧香云、劫石有消日、此恨幾時休。

浴佛上堂、悉達太子、法身示現、今日誕生、淨飯王宮、九龍吐水、沐浴金軀、地涌金蓮、捧承其足、普天匝地自矜伐、無端開口獨稱尊、具足大人相莊嚴、施作微妙大佛事、且作麼是大佛事、良久云、下座普請露柱燈籠、同入如來香水海、助這老子、轉大法輪。

結夏小參、靈山密付、少林單傳、機機相投、言言相契、以大圓覺、爲我伽藍、身心安居、平等性智、九旬禁足、三月護生、守蠟人冰、憐鵝護雪、起大精進、發大勇猛、秉智慧劍、一往直前、有學無學、一切皆殺、殺一切已、見山是山、見水是水、全體恁麼來、全體恁麼去、總無許多路布葛藤、正恁麼時、呼作衲僧本分事得麼、萬仭懸崖須撒手、大千沙界現全身。

復擧、德山示衆云、老漢見處、佛也無、祖也無、達磨大師是老臊胡、十地菩薩是擔屎漢、等妙二

覺、是破戒凡夫、菩提涅槃、是繫驢橛、十二分敎、是鬼神簿、拭瘡疣紙、四果三賢、初心十地、是守古塚鬼、自救不了、拈云、德山得逸群用、明辨古今、提振綱宗、誘掖後進、拈拄杖云、雖然如是、被老僧拄杖子穿卻鼻孔、直得無出氣處、衆中莫有出氣底麼、卓一下云、具眼者辨取。

結夏上堂、高超十地、不歷僧祇、物我一如、身心平等、不與萬法爲侶、不與千聖同途、全提佛祖大機、獨露人天正眼、直居孤峰頂上、禁足、卻向十字街頭垂手、殺活自在、檎縱縱橫、且道、還有應聖制分也無、良久云、日用無回互、當機有卷舒。

解夏小參、大機大用、自在縱橫、不帶千聖機關、不墮諸祖窠窟、淨躶躶絕滲漏、赤洒洒無覆藏、本地風光、本來面目、言發非聲、和言擊碎、色前不物、與物俱融、打開布袋口、擊碎鐵門關、提吹毛劍、南來北往、田地穩密、步步踏實、且道、如何是踏實地底一句、不喜蠟人氷、何憐鵝護雪。復擧、文殊三處度夏、至自恣日、迦葉欲白槌擯出、纔擧槌、便見百千文殊、世尊問迦葉、汝欲擯那箇文殊、迦葉茫然、拈云、三箇老凍膿、一人圓陀陀地、一人曲彎彎地、一人黑漆漆地、子細點撿將來、一得一失。

解夏上堂、擧、僧問雲門、初秋夏末、前程若有人問、未審對佗道什麼、門云、大衆退後、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、拈云、這僧用劍及上事、雲門具殺活手段、諸人還會麼、良久云、不如無事好、便下座。

開爐上堂、今朝應時節、東福開圍爐、三世諸佛、四聖六凡、情與無情、盡向火焰裏、共轉大法輪、有耳者聞、有眼者見、灰頭土面、衲被蒙頭、照顧眉毛、歸炭裏坐、且道、有爲人處也無、若又不會、

問取丹霞和尚。

冬至小參、朕兆未分、虛空無背面、一氣已動、萬象自崢嶸、曆運推移、日南長至、向本分田地、撥轉向上機、一段家風、輝騰今古、釋迦彌勒、無路退身、臨濟德山、目瞪口呿、千里萬里無片雲、擬議不來三十棒、正恁麼時、諸人還委悉麼、群陰消剝盡、來日是書雲。

復舉、僧問疎山、如何是冬來事、山云、京師出大黃、拈云、疎山明立信旗、密排陣敵、不犯鋒鋩、收放自在、雖然如是、東福若有問冬來事、劈脊便棒、何故殺人刀、活人劒、具眼底辨取。

冬至上堂、寒暑變遷、一陽來復、百昌崩動、劫外開花、竪起拄杖云、老僧拄杖子長多少、良久云、一冬二冬、叉手當胸。

臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾覩明星、打失眼睛、從古至今、承虛接響、眼裏撒沙、漏逗不少、畢竟作麼生、各請上殿炷香禮拜、宜著眼看黃面老子面皮厚多少、下座。

除夜小參、一機未露、毗盧元是凡夫、萬法縱然、普賢得其境界、徧界不曾隱、改故換新、東村王老、爆竹燒錢、驅神逐鬼、千聖拱手、天魔潛蹤、全體恁麼來、全體恁麼去、步步踏實地、句句透根源、通箇安排、應箇時節、驀拈拄杖卓一下云、還委悉麼、一聲雷發動、蟄戶一時開。

復舉、僧問香林、如何是衲衣下事、林云、臘月火燒山、拈云、香林撥轉關棙、踏翻路頭、這僧耀古騰今、歸家穩坐、且道、如何是歸家一句、覿面若無宗正眼、回頭只見翠山巖。

上堂、十方佛土中、唯有一乘法、更喚作得禪道佛法麼、若言作得、打失一雙眼睛、若言不作得、千古下作人笑端、本色行脚人、須具行脚眼始得、且道、如何是行脚眼、行到水窮處、坐看雲起

時。

上堂、棒頭取證、落逆墮坑、喝下承當、承虛接響、向上向下、轉更顢頇、說妙說玄、和泥合水、正恁麼時、行不動麈、語不動脣、直須到大休大歇大安樂之場、若也不會、問取當來彌勒慈尊。

上堂、萬機不到、千聖不携、把斷要津、不通凡聖、雖然如是、不免放一線道、向第二義門、無言處演言、無相中現相、始終一貫、前後無差、恁麼告報、諸人還甘麼、三生六十劫。

上堂、本色衲僧家、須具行脚眼、若未具行脚眼、落二落三了也、且道、作麼是行脚眼、良久云、朝看東南、暮觀西北。

上堂、擧、古德云、說得一丈、不如行取一尺、說得一尺、不如行取一寸、雖然如是、東福不然、說也說不得、行也行不得、何故得意忘言、猶揚家醜、寧可截舌、不犯國諱。

上堂、靈山獨付飲光、少室單傳可祖、黃梅半夜授衣、臨濟臨行付屬、東福門下、無密傳付屬底事、今日普爲諸人直示這箇事、且道、與古人有優劣麼、各宜著眼看。

上堂、靈鷲峰前、白雲靄靄、少室巖畔、白雪皚皚、遂拈拄杖卓一下云、瞿曇說不盡處、祖師提不起底、山僧對衆、八字打開了、也諸人還見麼、又卓一卓下座。

上堂、擧、乾峰示衆云、擧一不得擧二、放過一著、落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、却往徑山去、峰喚維那云、來日不得普請、拈云、乾峰無陰陽地、露箇消息、雲門袖裏藏金鎚、高持祖印、頭正尾正、始末相符、敢問、大衆有這般底麼、若無歸堂喫茶。

上堂、擧、僧問九峰、如何是不遷義、峰云、東生明月、西落金烏、僧云、非師不委、峰云、理當即行、僧

禮拜、峰便打、僧云、仁義道中禮拜何咎、峰云、來處不明、須行嚴令、拈云、九峰以的奪機、嚴令當行、這僧向劍及上、能辨曲直、互傾肝膽、各出毫芒、騰古出今、騎聲蓋色、大衆還委悉麼、試請、辨別看。

上堂、第一句下薦得、佛祖乞命、第二句下薦得、人天膽落、第三句下薦得、虎口橫身、坐斷毗盧頂、不稟釋迦文、不帶聲色、不落見聞、東福不敢覆藏被蓋、八字打開了也、遂擧拂子云、還見麼、擲下云、分明記取。

上堂、動絃別曲、葉落知秋、提向上鉗鎚、開作家爐鞴、德山棒無下手處、臨濟喝啓口不得、正恁麼時、如何通信去也、良久云、犵獠舌頭三千里、壺中日月自分明。

上堂、月生一、乾坤廓落、大方無外、月生二、師子奮迅、象王回旋、月生三、蟭螟眼裏、大鵬翻身、所以道、向上一路、千聖不傳、學者勞形、如猿捉影、拈拄杖卓一下云、有意氣時添意氣、不風流處也風流。

上堂、妙性圓明、離諸名相、本來無有世界衆生、因妄有生、因生有滅、生滅名妄、滅妄名眞、喝一喝云、黃面老漢、當時若下得這一喝、免得許多漏逗、何故既是圓明離相、妄從何起、眞從何生、若恁麼見得徹去、山河大地、萬象森羅、四聖六凡、情與無情、不消一揑、敢問大衆、卽今是什麼時節、擧拂子云、盧舍本身全體現、當機直下沒纖毫。

上堂、擧、金峰示衆云、老僧二十年前有老婆心、二十年後無老婆心、時有僧出問、如何是二十年前有老婆心、峰云、問凡答凡、問聖答聖、僧云、如何是二十年後無老婆心、峰云、問凡不答凡、

問聖不答聖、拈云、金峰顯大機發大用、這僧玉轉珠回流通正眼、雖然如是、東福不然、當時有恁麼問、劈脊與一棒、何故達者先知、賢明早悟、久立珍重。

上堂、不是目前法、亦非心外機、直下絕承當、當陽無向背、提持祖印、荷負宗乘、覿面相呈、更無餘事、正恁麼時作麼生、撥開向上一竅、千聖齊立下風。

上堂、孤峰頂上眠雲、十字街頭垂手、全機大用、觸處見成、溢目清光、貫通今古、一塵含法界、一念遍十方、淨裸裸無遺、赤洒洒全露、出沒自在、不隔纖塵、雖然如是、更須揮金剛王寶劍、直截根源、當陽顯露、不著也周由、正恁麼時、不依倚一物、一句如何道、萬象之中獨露身、百草頭邊著著親。

法語

示空明上人

祖師直示、無殊方便、放下諸緣、休息萬事、晝三夜三、守看鼻端、纔涉境界差別之時、只擧話頭、不作佛法想、不作破除想、不用存心等解、不用情生疑殆、沒理路、沒滋味、如鐵饅頭、單刀直入、不涉異想、悠久歲月、自然恰如睡夢惺、如蓮華開、正當恁麼時、從前話頭、只是扣門瓦子、抛下那邊、卻看祖佛機關語句、皆是止小兒啼耳、向上一路、更不通一線、截斷凡聖要津、學者勞形如猿捉月、可謂忘卻自身、向外馳求、何日可求得耶、安坐蒲團上、晝夜求成佛、厭卻生死、欲證菩提、皆如捉月猿、若欲眞實相爲處、只是無心是道、亦非木石、靈靈常知、了了分明、視聽尋常、更無委曲、空明上座、晝夜面壁、求語爲警策、不惜家風、信筆書之、文永四年月日。

示智禪上人

祖師門下、直指人心、言說方便、特地乖張、不墮見聞、不從聲色、百草頭上縱橫、萬象堆裏坐臥、出息不假塵緣、入息不繫陰界、盡大地解脫門、摠刹海眞實法、通方作者、擧著知歸、初心晚學、云何湊泊、若未薦得、且向第二義門、放一線道、無言處演言、無相中現相、如何是無言處演言、磨盤空裏走、如何是無相中現相、西河弄師子、日用應緣差別境界時、不用破除想、不作玄妙會、沒理路、沒滋味、晝夜忘寢食、看此話、若亦未薦得、更說第三頭、說心說性、說玄說妙、一塵含法界、一念遍十方、故古者道、無邊刹境、自佗不隔毫端、十世古今、始終不離當念、禪上人袖紙

求語信筆老草、一見後付丙丁。

示智日禪人

佛祖以來、大凡接人有三種機、若是第一機、更無方便、沒義理、難諸會、若於此直下承當、則與庭前柏樹子、麻三斤、一口吸盡西江水、更無差別、若是第二機、只是發起問端、隨手點破、則如臨濟問黃檗喫六十烏藤、若是第三、入泥入水、下箇注脚、瞎人眼目、滅胡種族、只是眞正衲子、直須撥卻參活句、不參死句、且上人爲人純實、若能活句上薦得、堪與祖佛爲師、老僧不惜家風、示三種機云。

示如上座

佛佛授手不離佗、只是自己恩力處、方木投圓孔、土塊洗泥裏、祖祖相傳、空谷答聲、呼南作北、橫三豎四、坐一走七、未免諸訛、若又向一氣未兆以前、杳冥恍惚信得及、猶在第二頭、何況更於混沌已分時獲得去、落在第三機、自著眼去、直超佛祖理致機關、所謂超佛理致、過得荊棘林、越祖機關、透得銀山鐵壁、始知有向上本分、得坐披衣、爲人解黏去縛、如上座在座下、積有年、而今歸鄕、呼喚不回、羅籠不住、赤脚歸去、故信筆書而送之、

示覺實上座

祖師宗風、向上一著、具大丈夫氣槪、那邊承當、隨處自在、妙用無礙、揮金剛王寶劍、坐斷諸訛、用殺活杖子、勦除是非、棒喝隨時、坐一走七、是故黃面老師、三百餘會、集四衆八部、能爲法王、於法自在、碧眼初祖、九年面壁、提諭後學、外息諸緣、內心無喘、心如墻壁、可以入道、此等皆是

始設方便、後自證知、諸緣放下、萬事休息、是第一方便也、若滯此方便即不是、事不得已、老婆心、和泥合水、以楔拔楔、以機奪機、千變萬化、七縱八横、若口頭取則、隨言生解、墮在陰界、猶不知方便、況正宗哉、實上座稟性不凡、為人純至、求語警策、故書與之。

示禪人

頂𩕳上、腳跟下、切須薦取、此中有一條通天大路、不立普賢行願、不說文殊機智、把斷毗盧、凡聖迹絶、然後大機大用、觸處現成、百草頭上、說權說實、聲色堆裏、立照立用、接手方便、自由自在、若使明眼人見、猶在半途、也是擔枷過狀、然雖如是、須知有接手方便、一坐禪方便、二直示方便、坐禪者、大定也、直示者、大慧也、蓋空劫以前、威音那畔、無師自發、無此等方便、達磨所示、潛付密證是也、空劫以後、有悟有迷、有問有答、有師有資、皆是接手方便也、佛祖出興、有理致、有機關、有向上、有向下、明頭來、暗頭合、日面佛、月面佛、手執夜明符、提取金剛劍、作家眼目、應機鉗鎚、不用言詮、不用機境、利根上智、直下透達、可謂如天普蓋、似地普擎、寛豁如虛空、遍照如日月、古人云、黃梅會中、七百高僧、皆是會佛法底、只有盧行者、一箇不會佛法底、此是直示底樣子也、若亦坐禪方便、某人已熟于此矣、不煩老僧舌頭、適袖紙求語、信筆老草。

又

空劫以前、無師自發、佛祖以來、因師打發、所謂自發打發、皆是接人方便也、蓋從上佛祖相傳、自在妙用、皆是機語投契耳、達磨大師、渡海過江、面壁端坐、隻履獨歸、又是機語投契邊事也、上人欲投契、直須誅生死根株、破賢聖窠窟、淨裸裸、赤灑灑、不依倚一物、始有小分相應、老僧

與麼說話、且道、有投契耶、無投契耶、若能撿點得出、莫謂老僧爲汝不說。

示藤丞相道家

此段大事、彰自己脚跟下、淨躶躶、赤灑灑、沒可把、如水上放葫蘆、拘牽佗不得、惹絆佗不得、云云、具眼漢、設大爐鞴、百煉千煆、一棒一喝、七顛八倒、入淨入穢、不礙不改、一一歷試、方得這入頭處、有少親近分、縱能得之、難守之、守之難行之、須知此事直是其決定志、向千差萬別處、得爲主宰、降此之外、畢竟作什麼、參禪定殿下、訪我於閑靜處、或尋顯密性相之原、波騰嶽立、或問直指單提之妙、瓶瀉雲興、余以二十年學力、僅能充其量、忝其欽耳、恁麼迅筆請自看取。

偈頌

賀佛鑑老師生日

纔出胞胎步十方、遠來掛海獻香湯、莫嫌惡水驀頭灌、往昔毒龍毒最强。

賀新命天王智長老　別山

夙債未酬眞鐵牛、横身負重入鄽市、脚頭踏斷六門關、無限清風隨步趾。

賀新命定慧圻長老　方庵

春空春水起蒼龍、飛上雲衢步步通、風雨無私隨處施、須知四海一雷同。

和蘭溪送筍韻

竹林無數出龍孫、隱約春深獨閉門、惠意溫和寄頭角、可憐天性不知恩。

和兀庵印最明平元帥韻

大機大用大根人、鼻孔遼天獨露身、凜凜威風行閫外、五湖四海一天眞。

奉和圓明藤丞相韻

台星知是本文星、交照槐門家業榮、輔弼匪躬扶紫極、權衡入手惠蒼生、靈山付屬固能記、雙徑宗風已與盟、驄馬時時臨梵宇、林泉自此樂清平。

示藤丞相

妙在佛祖不傳處、高超理致去機關、去機關兮沒窠臼、水是水兮山是山。

又

五葉花開無根樹、一陣香風天地寬、天地寬兮春萬國、家門盛兮民物安。

術士月潭求頌

月潭無底逼人寒、本命元辰不自謾、淡薄家風隨處樂、清貧生計只吾安、尤憐月魂照霄漢、且喜溪聲度遠灘、切忌隨聲仍逐色、直須北斗面南看。

送天王

處處叢林妖恠多、謾於平地起干戈、天王提起住山斧、南北東西奏凱歌。

次子曇侍者韵

絕學道人入帝寰、不隨玩水與游山、只烹佛祖鉗鎚手、知是應時破鐵關。

悼峯庵

癡坐頹然解轉身、鄮峰山畔變通新、千年琥珀玉埋土、半夜珊瑚月照人。

送尋知客

從來道地是蘇州、五馬知音笑點頭、十字街頭開鋪席、直須高價莫輕酬。

送堯知客

當年掉臂出蓬瀛、秘旨還丹直至今、定慧門中出一粒、何憂點鐵不成金。

剪梅花

不假陰陽土地生、得心應手剪裁成、暗香雖缺些兒許、堪與松筠作弟兄。

送僧

秋空如水水如空、漭乎茲時浩蕩通、直向孤峰峰頂上、草庵盤結展家風。

佛祖贊

達磨

航海遠來費筋力、梁王不動如磐石、抹過長蘆入少林、一花五葉甚猥精、

又

折葦渡江人不知、少林九年空面壁、隻履不歸西竺乾、大虛抹過入東國。

又

入草求人處、相逢斷臂客、看他依位時、不足爲標格。

又

祖師西來、少林一歇、天下衲僧、不拔之橛。

魚籃

這箇女人、求魚海濱、携籃拾得、不用垂綸。

寒山拾得

路頭拾得族親無、直下指空在半途、剔起眉毛相看笑、寒山歸去沒工夫。

達磨

祖師西來、一字不說、聲前語句、紅爐點雪。

自贊

東山長老請

老漢百醜千拙、舉動輙要勘過、看毗盧華藏海、鼓起幾許風波。

藏山長老請

生前面目、非色非心、手裏竹篦、能縱能擒、攪動龍淵水、波濤揚萬尋。

辨雅長老請

萬象堆中現半身、當陽驗盡作家人、要知機語相投處、垂下鼻頭重萬鈞。

智侃侍者請

覿面全提栗棘蓬、應緣投契振宗風、等閑噴嚏乾坤動、十世古今盡透通。

任淵上座請

老漢一生坐曲牀、烏藤拈起沒商量、機前毫髮不存處、倜儻分明獨自彰。

孝仙請

手把無毛之拂子、寥寥宇宙起清風、照今鑑古頂門眼、天下悉知草木同。

三林長老請

普門禪寺長老、信口胡說亂道、誰知慣打葛藤、終不隨人所好。

然奇山請

吾儂一段風、佛祖可難通、無端垂手處、天下草木同。

顯正堂請

盡大地是般若光、光未發時無生佛、形容才露此道傳、杏本瀾飜口如沸。

張四綱請

久能門下、無法與人、握篦據座、近前便磧。

明辨庵主請

秉拂應縁說、神仙有妙訣、佛祖無性心、不是守途轍。

又

本命元神教外傳、臨機投契那邊先、須知竹篦手頭主、問著隨時月上天。

聖一國師住東福禪寺語錄　終

師範和南東福堂頭長老、印上人來、收書并前一書及寶塔、一一領得、甚感不忘、第相去阻遠、無由即答、且知自崇福遷東福、住四名刹、安衆行道、誠慰老懷、但恁麼操守、力弘此道、使一枝佛法流布於日本、眞不忝爲宗乘中人也、長老禪教兼通、又能踐履、不患不殊勝、只貴始終一節、介然不改耳、此老僧所望、餘無它祝、多多爲大法自愛、不一一。

大宋徑山住持圓照老僧師範書、復日本東福堂頭爾長老。

師範和南手白承天堂頭長老、向曾收書、已嘗回答、就有錦法衣堂頂附去、乃是從上來諸知識所傳者、以表付授不妄、且知長老還故國、緣法殊勝、所至響合、更宜以此道力行、使吾祖之教、在在處處、熾然而興、此爲至祝也、便風聊復、眷眷之意、未間切宜爲大法保愛、餘不一一。

師範和南手白承天堂頭長老。

了惠頓首再拜、

上覆東福堂上禪師法兄大和尙侍者、即日春事告闌、恭惟

尊候有相萬福、了惠竊審、以道福住山、王臣贊護、聲稱奕奕、遠被中夏、乃知先師左券、全歸老手矣、欽羨欽羨、切乞爲師門益加珍護、以永眞風、不宜。

大宋寶祐乙卯三月二十五日。

天童初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜、
上覆建仁堂上聖一賢屬禪師侍者、即日仲夏之月、恭惟 尊候動止、納神龍冥相之祝、了惠曩因大國囘船、嘗布尺書、并以正續蒙 施經石刻附納、相望萬里、莫知登徹几格否、每見神足元容二兄傳誦提唱妙語、凜然有老圓照氣味、使人毛骨森聳、中間且聞移錫名刹、恨不得親臨法會、但能斫額東望也、了惠茲因風便、不可無字、但客邸無物見芹倚、需腹狀未聞、萬告爲大法爲後學強復、不宣、了惠頓首再拜上覆

右語錄以國師年譜再刊助緣之餘資、重刻者也。
元和六年庚申臘月下浣

見東福集雲叟守藤記之。

惠日國師、振起楊岐一宗、流傳雙徑正脈、提唱語錄、舊刻漫滅、重加釐整、刊行流通、南谷一衆、各抽衣資、置板于常樂禪庵、伏願、佛種不斷、世世建光明幢、祖印親傳、人人開無盡藏。

文政丁丑十月　　濟北劣孫令材識。

國譯一山國師語錄

解題

鎌倉時代に我が國に來朝したる支那の禪僧、其の數頗る多しと雖も、我が一山國師ほど上下の尊信を博したる者は稀ならん。師は初め法を頑極行彌に嗣いで、四明(今の浙江省鄞縣の南方にある山)の祖印寺に住し、轉じて慶元(今の浙江省甌海道慶元縣)の觀音寺に遷る。本朝の正安元年、來朝して鎌倉の建長寺に住す。同四年圓覺寺に轉じ、尋で建長寺、淨智寺に住す。正和二年京都の南禪寺を董す。本書一山國師語錄は乃ち斯の七會の語要を集めたるものにして、師一代の垂示言句は殆ど玆に網羅されたるものと言ふべし。而して其の編者は孰れも皆師の侍者等なり。其の內容は、以上七寺の住山語錄の外、小參、法語、拈古、頌古、偈頌、佛祖贊、自贊、小佛事及び師の行記等より成り、之に附するに、大元の靈石如芝禪師の序、古林淸茂禪師の跋、師の同參德明東山の跋、中峯明本和尙の後序等を以てす。更に卷末に、後宇多院宸書の國師號記、宸書の御贊、宸書の札等を附す。以て本書の價値如何を知るに足るべし。

師は實に我が國禪宗二十四派中の一たる一山派の祖にして、楊岐宗曹源下に屬す。法幢を高く掲げて

道を扶桑に唱へ、大いに宗風を振ふ。上は王公より下は庶民に至るまで、その道を慕ひて麕の如くに其の座下に集れり。而して師の詞藻と禪風とは、乃ち本書到る所に表示せらる。就中、法語中の『龜山法皇に上る書』の如きは、最も其の禪風の盛美を發揮せる大文字にして、彼の二十四派中の一異彩と言ふべし。

猶ほ師の傳と來朝の使命などに關しては、卷末に附する東福の虎關禪師の筆になる『行記』に悉し、出づるを以て、今は之を再錄せず。唯だ其れに洩れたるものを少しく記して、讀者の一粲に供すべし。師は南宋の理宗皇帝、淳祐七年を以て生る。稍々長じて容止端嚴、氣貌秀發なり。律部を應眞寺に學び、台教を延慶寺に習ひ、精勤修練、暄凉を憚らず。已にして歎じて曰く、「三藏十二部教は浩繁に勝へず。苦ろに之を學ばんとせば、誠に沙を算ふるが如し、毫も益なし」と。即ち棄て去る。それより天童に上つて簡翁敬和尙に依つて禪要を咨ふ。元の初に至りて祖印寺に住すること十載、後、補陀山に遷る。大德三年(我が正安元年)東渡して太宰府に寓す。副元帥平貞時、師を疑ひて游偵となし豆州に徙す。未だ幾もなくして疑釋け、尋で建長、圓覺、淨智、南禪などの諸大刹に住す。文保元年十月二十五日疾んで寂す。壽七十有一。後宇多太上皇、之を聞しめして嗟惜に堪へず、國師の號を賜ふ。語錄二卷あり、本書即ち是れなり。附法の弟子雪村梅友、石梁仁恭、無著良緣、無惑良欽、無相良眞、東林友丘等は咸一時の名衲たり。

師は又我が北畫の鼻祖と謂はる。師は素より丹青の道に秀づ。來朝後、法務の傍、屢々彩管を揮つて北宗畫の妙技を表はし、遂に其の術を傳ふ。是れ實に師の餘技に出づる處なりと雖も、後世我が美術史上に及ぼしたる影響、頗る大なるものあり。

後世、我が黃檗の高泉和尙、『東渡諸祖傳』を編んで師の傳を識し、其の終に贊して曰く、「畦衣の士、身を物外に置いて、佛法を操持すと雖も、而も君に忠あるの心、曷ぞ嘗て具へざらん。寧師當時、不請の友と爲りて、此の方に遊化して、陰かに王憲を翊く。坐滅の時、特に遺表を筆す。其の忠愛何如とかなすや。其の初め間諜を以て之を疑ふことは、蓋し察せざればなり焉」(原漢文)と。それは是れ師の眞面目を道破せる至言と謂ふべし。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄序

我が宗に語句なし、又一法の人に與ふるなし。若し一法の人に與ふる有らば、㋑土も亦消し難し。未だ古人與麼に、水泄せども通ぜずと。知らず、此の語此の錄、何れ從りしてか解することあらん。未だ口を啓かず未だ筆を落さざる以前に向つて會得せば、方に我が一山和尚、頑翁不傳の秘を傳へ、道を扶桑に倡ふ。大用峻機、震霆の窒を撃ち、㋺巨黍の的を破るが如く、王臣師とし仰ぎ、學者景のごとく從ひ、死生に洞徹して、了に凝滯なきことを見ん。所說雲のごとくに興り、水のごとくに涌き、所錄棟に充ち牛に汗すと雖も、剩れりと爲ず矣。一山余と生を台嶠に同じくし、夏を㋩玉几に同じうして、講磨奮勵、道術相忘る。戢化以來、嗟悼して已まず、㋥延祐庚申の冬、神足緣首座、錄する所の七會の語を携へて、爲に示さる、披覽して以て還す。覺えず卷を拊つて言ふて曰く、「佛法の東漸、予に以て見る矣」と。禾城本覺㋭如芝書す。

㋑土。土は一本には「田」とあり。
㋺巨。鉅に作る、良弓なり。
㋩玉几。育王山を云ふ。
㋥延祐。元の第八主仁宗の年號、庚申は七年なり。
㋭如芝。字は靈石、虛堂愚に嗣ぐ。

國譯㋑一山國師妙慈弘濟大師㋺語錄卷上

初住大元四明鰲峰山祖印禪寺語錄

侍者　了眞　編

師、至元甲申五月十八日に入院す。㋩三門を指し、左右を顧視して云く、「八字打開了也、龍門客少なり、鬧市人多し。」

㊁佛殿、「一坐具の地に、人人分有り、黄面の老漢知らず。」坐具を展べて云く、「今日伊が爲に説破す。」

據室、「任公の釣、六鼇を一掣す、若し是れ破鼈盲龜ならば、咄、頭を縮めて去れ。」

㋭拈疏、「相濡し相煦す、義、雲天に薄る。話りて譊譁に到るに及んで、又却つて肝膽楚越、信ぜずんば下文を聴取せよ。」

㋬法座、「祖佛行いて到らざる處、道ひ及ぼさざる處、新鰲峰歩を擧して踏

㋑山一。名は一寧、宗派系傳は、密庵咸傑―曹源道生―癡絶道沖―頑極行彌―一山一寧。元の第二主成宗皇帝、大師號并に江浙釋教總統を授く、大徳二年來朝、我國の正安元年なり。

㋺語錄。禪宗に傳はる語錄は生前滅後に拘らず、師の常談を以て宗旨を直説せらるるを侍者や小師共が聞くがままに筆錄せしものなり。故に華藻な

著し、口を開いて道著せんと要す。何が故ぞ、別に一路子あり。」遂に陞座す、祝聖罷つて。〔問答錄せず。〕

㋣提綱、「祖師の心印、古篆分明、端なく後來胡擔亂擔、眞を失し了れり。今日寧上座の手裏に在り、試に倒用せん、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「錦縫全く開いて、朱點露れず、靈樞を劫外に運し、大化を寰中に敷く。直に得たり巨鰲動ぜず、三山常に太虛に聳え、萬國の來賓、帝祚永く億載に隆ならんことを。然りと雖も、只だ紋篆未だ形れざる已前の如きんば、又作麼生。」又卓一下して云く、「收。」

復た楊岐、慈明に問ふ、「幽鳥語喃喃」の公案を擧す。師拈じて云く、「是なることは則ち是なり、猛虎其の子を食はず、甚に因つてか慈明連喝兩喝し、楊岐便ち禮拜す。」

㋠解夏上堂、禁足安居、尅期取證、何ぞ韓獹を紲いで獲ることを責むるに異ならん。我が者裏一切拘はること無し、其の自ら化するに任す。且つ秋初夏末、賞勞の事作麼生。臨濟雷奔の喝、德山雨點の棒。

㋷開爐　遠く出でて歸り、兼ねて相訪ふことを謝する　㋦上堂。「住山定

離る　禪門寶訓の序の注に「密に眞機を顯すを語と云ひ、總て衆事を集むるを錄と云ふ」と出づ。

㋩三門。山門の制、門に排列して三箇あり、故に謂ふ。

㋥佛殿。西域には香殿と云ふ、百丈及德山は佛殿を立てず、所以あり、文字禪白鹿山の章を見よ。

㋭拈疏。疏は文體明辨に布なりとあり、又正字通には條陳と出づ。

㋬法座。法堂の須彌壇上にあり、卽ち演法の座を云ふ。

㋣提綱。說法を提綱と云ふ、卽ち宗旨の大綱を提起して說く、又は提要と云ふ、萬庵曰く、「古人の上堂に大法の綱要を提ぐ」是れなり。

㋠解夏。又は解制と云ふ、安居の制を解き出遊期に入る、之れ七月十六日後なり、勅修清

力無し、茫茫として外邊に走る。鼻孔を打失し了つて、一張の口を拈得す。今日歸り來つて、火爐頭無賓主の話、試に諸人の與に擧す、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「明眼人前に、漏逗少からず。」

冬至上堂、晷運推し移つて日南長至、三家村裏の爛牛屎、動地放光、十字街頭の坵圾堆。演大の法義何を以てか見得す。道ふことを見ずや、是法住法位。

元宵上堂、擧す、教中に道ふ、「見聞覺知是法公案」と。師拈じて云く、「恁麽の説話、何ぞ油を將つて(ル)皂を洗ふに異ならん、只だ節、元夕に逢ふが如きんば、是の處管絃月を沸し、燈火空を燒く。衲僧家、眼に到つては是れ色、耳に入つては聲を成す、畢竟是れ法か、法を離るるか。拄杖を拈じて卓一下して云く、「江南地暖かに、塞北天寒し。」

佛生日上堂、「天を指し地を指して、醜を擧止に露す。唯吾獨尊、傍若無人、二千年前放過　べからず、二千年後放過不可。」下座。「大佛殿に詣り、更に與に驗過せん。」

上堂、翠巖芝和尚、衆に示して云く、「大家相聚りて莖虀を喫するの公案を擧す。師拈じて云く、「大衆、直饒ひ喚んで一莖虀と作さざるも、亦未だ地獄に入ること箭を射るが如きことを免れず。何が故

規に曰く、「解夏七月十四日の晩、念誦湯を煎じ、來日陞堂人事巡寮、煎點正に結夏の儀と同じ云云」と出づ。

(リ)開爐上堂。十月一日に爐開きの式あり。

(ヌ)上堂。二種あり、法堂に演法の上堂と、僧堂に粥飯を喫するの上堂とあり、前者は六祖大師に初まりしも不詳なり、六祖大師及び南嶽の章を傳燈錄にて見よ。後者は德山托鉢上堂及び聯燈會要石梯の章等に問答あり。

(ル)皂。櫪なり、うまやのねだ。

ど、武陵春色好し、塵世幾人か知る。」

祖印語終

住二大元慶元府寶陀觀音禪寺一語錄

侍者　惟鳳　編

㋑山門、「海濤澎湃、鐘鼓鏗鏘、是れ入理の門なること莫しや。」喝。

觀音殿、「具足神通力、現身三十二、只だ今是れ什麼の身ぞ。」坐具を展べて云く、「衆眼瞞じ難し。」

據室、拄杖を拈じて云く、「汝等諸人、此に來つて簇簇たり、立地に箇の甚麼をか覔む。」杖を靠けて云く、「且く一著を放過せよ。」

法座、「向上の一路、不傳不然、幸に自ら無事、各異端を說く。山僧一時に坐斷し去る。」

提綱、「一向に與麼に去るも、煙水連天、一向に與麼に來るも、塵埃滿面。直に得たり、去來象を以てせず、動靜心を以てせず、猶ほ是れ普請邊の事、未だ常情を出でず。山僧昨日、十字街頭に、高く祖師の心印を提げ、世出世間、萬法一印に印定す。直に是れ法法差なし、今朝白花巖前に、古佛の家風を敷揚し、聞思修より三摩地に入る、底を盡して揭翻す。便ち見る頭頭不昧、一十二面、鼻直く眼横に、三十二身、東倒西擂することを。與麼に會得

㋑山門。山は城市に對して云ふ、城市は俗處なり、山門は眞處なり、臨濟錄に曰く、「師松を栽ゑて曰く、一は山門の與に境致となし、一は後人の爲に標榜と作さんと。」

せば、皇恩佛恩、一時に報じ畢んぬ。」良久して云く、「天人群生類、皆此の恩力を承く。」

復た擧す、㊁雲門、衆に示して云く、「聞聲悟道、見色明心、觀世音菩薩、錢を將つて胡餅を買ふ。」手を放下すれば、却つて是れ饅頭。」拂子を竪起して云く、「者箇是れ色。」拂を擊つて云く、「者箇是れ聲、道作麼生か悟らん、心作麼生か明めん。」拂を後に擲つて云く、「錯つて定盤星を認めしむること莫れ。」

當晚㊅小參、「一喝賓主を分ち、照用一時に行ず。」喝一喝して云く、「那箇か是れ主、那箇か是れ賓、作麼生か照、作麼生か用。」拄杖を拈じて左邊に安じて云く、「者裏見得せば、賓なれば始終賓、主なれば則ち始終主。」拈じて右邊に向つて云く、「者裏見得せば、賓中に主あり、主中に賓あり。」拈じて中間に向つて云く、「者裏見得せば、賓主混融、照用歷落。」杖を靠けて云く、「舊處に安著せよ、動著することを得ざれ。」

復た擧す、高安本仁和尙、衆に示して云く、「尋常、聲前句後に向つて、人家の男女を鼓弄することを欲せず、何が故ぞ。要且つ聲是れ聲にあらず、色是れ色にあらず。」師頌して云く、聲前句後纖塵を絕す、聲前句後に向つて論ずること莫れ。恠むべし高安多事の老、絲來り線去り精魂を弄ず。」

㊁雲門。初め睦州に參じて、門扉を閉却せらるるに及んで、脚を折りて省悟し、後、雪峰に參じて嗣法し、雲門宗を唱へらる、惜しい哉、日本には傳はらず、而れども大師の語錄今に傳へらる、師は特に言句三昧を得て、妙唱奇絶なり。

㊅小參。祖庭事苑に「非時の說法之を小參と云ふ、」舊說に曰く「小參は不時に之を講ず、鼓を鳴すこと一通、其の規、大參より約す、故に小參と云ふ、參は交參の義なり、」勅修淸規に曰く「凡そ衆を集め開示する、皆之を參と云ふ。」

教僧相訪ふことを謝する上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「五須彌を擊碎して、人畜草芥甚れの處に向つてか著く。」又卓一下して云く、「四大海を攪翻して、魚龍蝦蟹何を以てか命となさん。山僧、與麼の提持、且く三乘十二分教の中、還つて者箇の消息有りや。」又卓一下して云く、「座間又江南の客あり、樽前に向つて鷓鴣を唱ふることを莫れ。」

上堂、春意融融、春風浩浩。野外の桃花、靈雲の己眼未だ開かざるを笑ひ、簷頭の雨滴、鏡淸の物を逐ふて顚倒するを怪む。阿呵呵。會すや、十字街頭酒醉の人、元是れ東村の王大老。

佛涅槃上堂、「胸を摩し衆に告ぐ、鉛刀の刃は、豈に洪鐘を剸るべけんや。槨に雙趺を示す、强弩の末、魯縞を穿つこと能はず。是なることは則ち是なり、寶陀今日且く死馬醫と作る。」拂子を拈起して云く、「紫金光聚、白毫相輝く。從敎あれ萬古業風吹くことを。」

上堂、「聲色全眞、見聞不昧。便ち與麼に去るも、大いに未だ眠らざるに先づ魘はれ、未だ飲まざるに先づ醉ふに似たり。」拂子を豎起して云く、「者箇は是れ色。」拂を擊つて云く、「者箇は是れ聲。」擲下して云く、「且く錯つて怪むことを莫くんば好し。」

上堂、擧す、㊁睦州、衆に示して云く、「一線道を放つも也た睦州に由る、一線道を放たざるも也た睦州に由る。」時に僧有り問ふ、「如何なるか是れ一線道を放つ。」州云く、「才を量つて職を補ふ。」「如何

㊁睦州。陳尊宿と云ふ、又蒲鞋を織つて母を養ふ、故に陳蒲鞋の稱あり、法を黃檗に嗣ぐ。

なるか是れ一線道を放たざる。」州云く、「萬里崖州。」拈じて云く、「勇三軍に冠たり、氣萬夫に雄なることは、老睦州無きにあらず、只だ是れ未だ勍敵に逢はず、當時箇の佗の興壓に道ふを見て、但だ咳嗽一聲することあれば、者の老漢、身を隱すに地なきことを管取せん。」

上堂、「(ホ)德山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れば便ち喝す。啞。六月熱せざれば、五穀結ばず。」

上堂、玉宇秋澄み、金莖露冷かなり。老胡鼻孔を打失し、今に至つて收拾し上さず。衆中忽ち箇の收拾し得るもの有らば、山僧伊が與に二十拄杖せん。何が故ぞ。功有る者は賞す。

中秋上堂、萬里秋空淨く、娟娟として桂月流る。寒輝列宿を沈め、皓魄潛蚪を動ず。因つて思ふ馬子父子、玩弄神變、光に隨ひ影を逐ふて羞を知らざることを。休みね休みね、既に然く鏡よりも明かなり、何ぞ用ひん鉤よりも曲れることを。

遠く出でて歸る上堂、「動に作相なし、靜に住相無し、潮滄溟に落ち、月青嶂を離る。忽ち箇の出で來つて、動靜雙べ忘ずる時如何と道ふもの有らば、」良久して云く、「果然として一釣に便ち上る。」

開爐上堂、趙州火爐頭無賓主の話の公案を擧して、拈じて云く、「趙州年老いて返つて小兒と成る、只だ灰を挑げ、火を弄ぜんと要す。爭か免れん傍人の笑怪することを。然りと雖も此の曲只だ天上に

(ホ)德山。宣鑒と號し、又執金剛と字す、律藏に精通し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の嗣龍潭和尚に法を嗣ぐ、壽八十六にして遷化せらる、勅して見性大師と諡せらる。

有るなるべし、人間能く幾回か聞くことを得ん。」

上堂。「風蕭蕭として木葉下る、滴水氷と成つて、飛霜野に徧し。」膝を拍つて云く、「見成の行貨、人の買ふ無し。」

㊅佛成道の上堂。擧す、世尊云く、「我れ一切衆生を見るに、如來の智慧德相を具有す、但だ無明煩惱を以て證得せず。」衆を召して云く、「者の老漢沒量の罪過有り、山僧訐露せんことを欲せず。」下座。「大佛殿に詣して、同じく與に懺悔せん。」

元正上堂。「新鮮の語句、玄妙の機關、寶陀是れ全く無きにあらず、只だ是れ曾て拈出せず。今日三陽交泰、萬物咸く新なり。未だ免れず拈出して諸人に布施し去ることを。」拄杖を拈じて卓一下して下座。

上堂。㊆雪峯・巖頭・欽山の三人、同じく河北に往き、臨濟を禮拜す。路に定上座に逢ふの公案を擧す。拈じて云く、「鷹、兎を搦め、鶻、鳩を捉ふ。定上座固に是れ行家の手段、只だ是れ臨濟の處に學得する底、未だ盡く用ふること能はず。若し能く盡く用ひなば、者の雪峰・巖頭に和して、總に須らく髑髏地に著くべし。」

㊅佛成道。禪林象器箋に曰く「八相事略の章に佛上堂に五大院の安然五說を出す、(一)二月八日(因果經)、(二)四月八日(方等泥洹經)、(三)三月八日(西域記)、(四)三月十五日(西域記)(五)八月八日。」譯者按ずるに、佛祖統記・正宗記等に二月八日の說を採る、因果經を以て正しと爲す、然るに中華日本は古今十二月八日を用ふ、僧史略に之を會して曰く、「臘月は周の二月なり、故に十二月八日を佛成道となせる乎。」

㊆雪峰。諱は義存、泉州南安の人、世世佛を奉じ、生れ乍らにして葷茹を惡む、年十二にして慶玄律師に事へ、十七に

上堂、拄杖を拈じて云く、「山僧尋常、敢て諸人に孤負せず。」拄杖を拈じて下座、大衆一時に散じ去る。

上堂。擧す、㋷雪峰和尙、衆に示して云く、「盡大地是れ解脫門、手を把つて拽けども伊れ入らず。」拈じて云く、「大小の雪峰、甚の死急をか著く、盡大地是れ解脫門、誰か門外に在る。」

上堂、拂子を拈じて云く、「卽心卽佛、遼天の俊鶻、非心非佛、皮を剝き骨を出す。不是心、不是佛、不是物。白日青天、神出鬼沒、畢竟如何。」良久して云く、「今朝四月一。」

㋠浴佛上堂、情と無情と本一眞、大千何れの地にか纖塵を著けん。朝來露濕ふ薔薇の錦、洗ひ出す毗盧の淸淨身。

寶陀語終

して落髮す、機緣、德山に契へり、師行脚のさき、到る所に笊籬木杓を以て典座となり、常に岩頭欽山の三人、共に結んで歷參す、其の嗣子に雲門大師を出す。

㋠浴佛。灌佛に同じ、摩訶利頭經に「四月八日は是れ佛生日なり、人民、佛を念じ佛の形像を浴す。」卽ち釋尊降誕會の式を行ふ。又灌沐とも云ふ。

住二日本國相模州巨福山建長興國禪寺一語錄

㋑侍者 ㋺崇喜 編

師、㋩正安元年十二月七日入院す。三門を指し、「火後門無し。」「十方壁落なく、四面亦門無し。」彈指一下して云く、「者裏入得す、別に是れ乾坤。」

據室。拄杖を拈じて、「者裏道ひ得るも也た打し、道ひ得ざるも也た打す。百錬の金、更に須らく火に入るべし。」

山門疏、肘臂只だ内に曲るべくとも、家醜何ぞ須ひん外に揚ぐることを。既に然く遮掩し及ぼさず。從敎あれ此の話大いに行はるることを。

法座、「頂𩕳の機、最初の句、立地に構得す、妨げず峭措なることを。」法座を指して云く、「啞、須らく我が上頭に向つて沙を拖き土を撒するを待つべし。」

陞座、拈香して、「此の香、至尊至貴、瑞たり祥たり、本一身にして以て群靈を化育す、根至妙にして萬物を出生す。恭しく爲に

㋑侍者。釋氏要覽に云く、「侍者は卽ち長老の左右なり。」彙云く、「己を恭ひ命に順する給侍の者なり。」菩薩從兜率下生經に云く「侍者八法を具す、一に信根堅固、二に其の心進を覓む、三に身に病なし、四に精進、五に念心を具す、六に心憍慢せず、七に能く定意を成す、八に聞智を具足す。」

㋺崇喜。見山、諱は崇喜、佛光國師の法嗣、南禪寺に住す。

㋩正安元年。建長十代となる、九代は桑田道海、十一代は西磵子曇。

今上皇帝聖躬(ニ)萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。恭しく願はくは、金輪永く御して中天日月の明を揭げ、玉燭常に調へて大地山河の壽に同じからんことを。」

次に拈香して、「本根秀異、枝葉繁昌、膏澤を(ホ)天潢に沛し、淸陰を東國に布く。(ヘ)吏部親王征夷大將軍洎び文武官僚の爲に、同じく祿算を增し奉る。伏して願はくは、乃ち王室を心として益〻維城の功を懋め、弘く佛乘を護して靈山の記を忘れざらんことを。」

次に拈香して、「靈根深固、問氣淸明、恩蔭を四方に垂れ、芬芳を萬世に繼ぐ。(ト)大檀越相模太守の爲に祿算を增し奉る。伏して願はくは、道佛祖に同じく、深慈を以て黎元を拯濟し、德乾坤に合ひ、至仁を以て社稷を鎭隆せんことを。」

次に拈香して、「此の香、些子の氣息なし、且つ地に炙し天に薫じて、前住大唐慶元府阿育王山廣利禪寺(チ)頑極老和尚に供養して、用つて法乳の恩に酬いんことを要す。」

提綱、「法幢を建て、」拄杖を拈じて一下して云く、「宗旨を立す。」又卓一下して云く、「法幢已に建て、宗旨已に立せば、極微塵刹海、只だ一毫端に在り、盡無量劫、悉く彈指頃に歸す。塵塵不昧、法法全

(ニ)萬歲。古人酒を飮めば必ず壽を上り、慶を稱して萬歲と云ふ、上下通じて慶賀の辭とす、唐の末に至るも尙ほ然り、其の後、專ら天子に限りて稱することとなり、又定めて朝制とせり。

(ホ)天潢。皇族をいふ。

(ヘ)吏部親王。久明親王なり。

(ト)相模太守。北條貞時公を指す。時の執權なり。一山は貞時の請ずるところなり。

(チ)頑極。諱は行彌、臨濟禪師より十七世にして即ち一山國師の本師なり、癡絕沖に嗣ぐ。

く彰る。帝網珠の如く交光相羅る。師子兒の如く遊行無畏、豈に去來の相有らんや。曾て何ぞ彼此の分あらん。便ち見る拈花付法、笑裏の刀鎗、面壁安心、口頭の人事、衣盂傳授、當仁を屈辱す。棒喝交馳、笑を作者に取る。自餘弓を張り箭を架し、主を列し賓を分つ。正に是れ空を鑿ち端を造す。胡を欺き漢を瞞ず、畢竟太平の時世、甚の(り)干戈をか說く。所以に山僧、萬里西來、只麼に素面相呈して、更に勞攘なし。然も是の如くなりと雖も、」卓一下して云く、「此の身心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲す。」

復た擧す、(ぬ)首山和尚、衆に示して云く、「佛法は國王大臣有力の檀那に付囑す、人人燈燈相續いで今日に至る。且く道へ、者の其麼をか續ぐ、須らく是れ迦葉師兄にして始めて得べし。」拈じて云く、「首山和尚、靈山の付囑を發揚す、固に是れ光明、要且つ只だ是れ一期の方便なり。爭か如かん今日大力量の人有つて、親しく記莂を承けて、二千年後に向つて、日本國內に於て、此の一燈を續ぐに。直に得たり、今に輝き古に輝くことを。諸人還つて見るや、若し又見ずんば、山僧更に爲に點出せん。靈山の佛法王臣に付す、今日扶桑話又新なり。一道の恩光塵刹に徧し、東溟天曉けて金輪を涌す。」

當晚小參、問答罷んで乃ち云く、「古今の天地、古今の日月、古今の人倫、山は是れ山、水は是れ水、僧

(り)干戈。干は盾、戈は矛にて、戰爭の意に用ふ、詩經に出づ。

(ぬ)首山。諱は省念、姓は狄氏、萊州の人なり、業を郡の南禪に受く、徧く叢席に遊び、遂に風穴の法を嗣ぐ、語錄一卷あり。

は是れ僧、俗は是れ俗、是法住法位、世間相常住。端なく老胡西來、疆を分ち界を列ね、悟を說き迷を說く。一地裏の人を引き得て、東を喚んで西と作し、南を指して北と爲さしむ。殊に知らず、扶桑日輪、依然として東より出でて、大洋海水、一日兩潮なることを。是の故に山僧、未だ唐土を離れず、時時現前の龍象と交參す。身海東に到つて、步步圓通の境界を離れず、自然に東西異ならず、賓主歷然。便ち與麼に會するも、猶ほ是れ平常相見、且く出格の一句、作麼生か道はん。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起る一潭の氷。」

復た擧す、僧、永明潛禪師に問ふ、「祖師西來、箇の什麼をか傳ふ。」潛云く、「箇の㋸策子を傳ふ。」僧云く、「恁麼なるときは則ち心外に法有り。」潛云く、「心內に法無し。」拈じて云く、「好箇の策子、只だ是れ年代深遠、諸方策子裏の事を將つて錯つて傳へ了れり。今夜忽ち人有り、和尚西來して箇の甚麼をか傳ふと問はば、只だ他に向つて道はん、箇の口訣を傳ふと。又和尙乍ち來つて言語通ぜず、如何が口訣を傳へ得んと問はば、瞎漢、我が㋾兩片皮を鼓せんと要せば、什麼を作すにか堪へん。」

㋻臘八上堂、「諸佛時時出現、星河夜夜天に在り、剛ひて雪山成道と謂ふも、分明に誑惑の言と。只だ諸人晝日を見、夜星を見るが如きんば、還つて悟底の消息有りや也た無や。」禪床を拍つて云く、「梅

㋸策子。「さつす」とよむくせなり、文書のこと。
㋾兩片皮。口なり。
㋻臘八。十二月八日なり、此の日を以て大聖釋尊は菩提樹下に於て、一見明星大悟せらる、故に今に至る、禪門は十二月一日より八日の鷄鳴に迄、茲期辨道の規を立つ。

花の香鼻を撲つことを得んと要せば、也た須らく徹骨一番寒なるべし。」

臘月半、公帖を受くる上堂。拄杖を拈じて云く、「得處分明、拈じ來つて便ち用ふ。」一畫一畫して云く、「佛祖の命根を斷じ、」卓一下して云く、「衲僧の鼻孔を穿つ。半合半開、全收全放、落落たる神珠影留めず、輝輝たる寶劍光初めて動く。便ち是れ福山爲人の處なること莫しや。」卓一下して、喝一喝。

上堂、「纔に正月一を見れば、又旬日を過し了れり、人事蝟毛多く、光陰劈箭疾し。㋕無位の眞人、汝が面門に在つて、時時出入す、還つて曾て證據すや也た未だしや。若し未だ證據せずんば、山僧汝が爲に點出せん。」良久しく云く、「頭長く頸短うして髮鬖鬆、相對して無言獨足にして立つ。」

元宵上堂、拂子を竪つ、「只だ此の一燈、傳來已に久し、十虚を融接し、㋵九有を照明す。即今雪月交〻輝き、星河並に耀く。甚に因つてか瞎眼の師僧、只だ光影裏に向つて走る。」拂子を以て、一吹擲下して云く、「山僧伊が爲に吹滅了也。」手を伸べて云く、「暗中毛手を伸出す、還つて辨得すや。」良久して云く、「既に辨じ得ず。」手を縮めて云く、「天寒且く藏めて懷袖にす。」

㋟首座を謝する上堂、「無絃と號す、」擧す、黃檗、南泉に在つて首座と作る、一日鉢を捧げ、南泉の位に在つて坐す。南泉、堂に入つて見て乃ち云く、「長老甚麼の年中にか行道す。」檗云く、「威音王已前。」

㋕無位眞人。「僧、臨濟に問ふ、赤肉團上に一無爲の眞人あり、常に汝等諸人の面門より出入す、云云」臨濟錄に出づ。

㋵九有。三界九地、之を九有と云ふ。

㋟首座。第一座、禪頭、座元、首座衆皆同じなり、蓋し大衆の首座たるより名く。

泉云く、「猶ほ是れ王老師が兒孫、下に在り去れ。」藥遂に自位に歸つて坐す。⦿頌に云く、「互換の機暫くも停らず、一賓一主自ら分明。寥寥たる此の曲今誰か繼ぐ、琴無絃を奏して韻更に淸し。」

因に⦿看經上堂、「藥山、僧の看經するを許さず、平白人に檢點せらる。福山、僧を普請して看經せしむ、特地に佗人を檢點す。道路各別にして、家を養ふこと一般なり。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「箇裏緇素の眼を開かず、牛皮も端的に也た須らく穿つべし。」

因に⦿普請上堂、「微笑、拈花、安心、面壁、書偈、傳衣、陞堂、掀席、擎叉、打地、般土、拽石、打鼓、輥毬、搖鈴、舞笏、金圈を擲ち、栗棘を抛ち、棒喝交馳、電の擊つが如し。山僧冷地に看來れば、是れ普請邊の事なりと雖も、也た些子の奇特あり。且く道へ、甚の奇特か有る。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「會すや、大家力を著けよ。」

因に江湖兄弟、頌を呈して拄搭を求むる上堂。擧す、古德、衆に示して云く、「南來の者も三十棒、北來の者も三十棒、然も是の如くなりと雖も、宗乘に當らず。」拈じて云く、「古德の一期、要津を把定す、若し後語なくんば、自ら出身の路無けん。

⦿頌。偈頌と云ふ、梵には伽陀、又玄妙と譯す。

⦿看經。「禪家には讀經を云ふ」と、塵添壒嚢鈔に出づ。

⦿普請上堂。普く大衆を請じて作務するを云ふ、即ち刈草、掃地、採薪等、凡て作業することなり。毘奈耶雜事に「佛曰く、要に隨つて地を掃ふべしと、若し月の八日或は十五日に、衆僧を集めて共に灑掃を爲すべし、」聯燈會要に華嚴靜の章に曰く、「師、洛浦に在つて維那と爲る、普請す、白槌して曰く、上間は柴を搬べ、下間は地を鋤けよと、首座曰く、聖僧甚をか作す、師曰く、座に當つて正座せず、何ぞ兩頭の機に赴かん。」

福山、線道を放開し、儞に容す身を轉じ氣を吐くことを。汝若し一句を道ひ得て、倜儻分明ならば、便ち明窻下に安排せん。然りと雖も、還つて宗乘の中の事に當得すや。」喝。

典座を謝する上堂。「栗棘蓬、鐵餕餡、人の取つて巧に安排する有らば、横呑竪咬するに一任す。忽然として咽喉を塞斷せば、虚空の失笑することを引き得ん。且く道へ、箇の什麼をか笑ふ。」手を展べて云く、「了。」

浴佛上堂、「幸に自ら清平の世界、何を用つてか造妖揑怪する。㊟天を指し地を指して尊と稱す、力を以て仁を假る者は霸たり。福山、今日佗を成褫す、香水洗ひ來つて驀面に唾す。」

㊟指天指地。四月八日、嵐毘尼園に於て世尊降誕す、一指を天に指し一指を地に指し、周行七歩して曰く、天上天下唯我獨尊と。

上堂、「十五日已前は、外放入せず、十五日已後は、內放出せず、正當十五日、出にあらず入にあらず、內に非ず外に非ず。釋迦彌勒惡口闡提、文殊普賢屠兒の魁膾。」良久して云く、「會すや、若し也た會せずんば、九十日中、須らく子細にすべし。」

上堂、擧す、古德、衆に示して云く、「結夏已に半月、水牯牛作麼生。」又一古德云く、「結夏已に半月、寒山子作麼生。」拈じて云く、「水牯牛と寒山子と、頭角殊なりと雖も、鼻孔相似たり。結夏已に半月、常露迥迥地、認著すれば依然として還つて不是。」

上堂、諸聖を求めず、己靈を重んぜず、進前路無く、退後憑ること無し。深淵に臨み薄氷を履む、

茶陵箇の村山主あり、驢に騎り橋を過ぎて一攧を喫す、錯つて山河を認めて眼睛と作す。良久して云く、「彩は賊家に奔る。」

上堂、擧す、應庵和尚偈有り、衆に示して云く、「金錫遊を罷めて留めて壁に寄く、草鞋乾晒して秋風を待つ。檀那長夏深く思省す、看よ是れ平生底の功か有る。眞實の行藏宜しく保惜すべし、虛頭の伎倆疾く消鎔せよ。老僧是れ多饒舌にあらず、諸人と氣味同じからんことを要す。」師云く、「五湖の龍象此に相從ふ、志を立てて應に須らく祖風を繼ぐべし、世事無窮宜しく自ら省すべし。玄關未だ透らず合に功を加ふべし、憍慵只だ精勤を用つて攝し、頑鈍唯だ猛烈を將つて鎔す。期九旬に滿つ、如し少驗あらば、身心の險は㋤鐵圍と同じ。」

太守の請、法光寺の爲に佛日庵に就いて、千部法華經を慶懺する陞座。拈香して云く、「此の香枝葉全く無し、唯だ眞實のみ有つて、六銖尠しと雖も、價直娑婆、㋶法光寺杲公禪門の爲に覺路を資嚴し奉る。伏して願はくは、此の一乘を悟つて、卽ち佛記を受け、此の餘慶を積んで、裕を後昆に垂れんことを。」

㋤鐵圍。「テッチ」と讀む、鐵圍山のこと、梵に斫迦羅、又は灼羯羅等と云ひ、輪山と譯す、彌勒、文殊、阿難等の大菩薩衆と識敎を結集せし地なり。

㋶法光寺。北條時宗の法諱なり。

㋰止啼黃葉。涅槃經第二十嬰兒品に曰く、「彼の嬰兒啼哭する時の如き、父母卽ち楊樹の黃葉を以て之に語りて曰く、啼くこと勿れ、啼くこと勿れ、我れ汝に金を與へんと、嬰兒見了りて眞金の想を生ぜん、便ち止めて啼かず」と出づ。

㋒三周。法、譬、因を云ふ。

㋼七喩。火宅、窮子、藥草、化城、髻珠、頂珠、醫子。

㋨五障龍女。五障とは輪王とな

提綱に云く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「者裏根源に洞徹せば、便ち見る釋迦老子、四十九年、三百餘會、黄と說き黑と道ひ、東を指し西を劃し、半滿偏圓、性相事理、總に是れ㋰止啼の黃葉なることを。明眼人前、一笑に直らず、端なく靈山會上に道ふ、箇の十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三と。向上の一著を提持して、大事因緣を發明す、權實大小、悉く圓融することを得て、佛の智見に開示悟入せしむ。㋒三周授記、㋼七喩明玄、乃至逆を造る調達も亦菩提を證し、㋨五障の龍女、卽ち成佛することを得。事妙ならずといふことなく、理圓ならずといふこと無し、檢點し將ち來れば、衲僧門下、略些子に較れり。故の我が法光寺、親しく此の時に於て、玆の妙義を聞き、大願力に乘じて、人間に示現し、至妙を一心に窮めて、十如を常念に了ず。珍好大車等を以て諸子に賜ひ、化城寶所を以て群迷を誘進す、弘く大法を持して、藥上藥王の如く精進明達、㋔淨藏淨眼の如し。所以に深仁厚澤、黎元に沾洽し、盛德豐功、今古に照耀す。化緣既に畢つて出沒自由、故に今孝子順孫、鴻業を嗣昌し、亦妙圓の法に依つて用つて追遠の情を伸ぶ。僧に命じて此の經を誦閱せしむ。圓滿千部、此の上善を以て、圓常を助證す。然りと雖も、諸人還つて法光寺、只だ今行履の處を知るや。道ふことを見ずや、是法住法位、世間相常住。」卓一下す。

ることを得ず、梵王となることを得ず、帝釋となることを得ず、魔王となることを得ず、佛身となる事を得ずと出づ。龍女は法華經に依り佛と成し因緣を錄す。

㋔淨藏。妙莊嚴王に二子あり、一を淨藏と名づけ、次を淨眼と名づく、二子共に大神通福德智慧あり。

復た擧す、(の)天台智者大師、大蘇山に於て法華經を誦す、「藥王本事品の是眞精進、是名眞法供養如來」といふところに至つて、豁然として大悟す。靈山の一會、儼然未散なることを見る。今日太守、僧に命じて此の經を披誦すること千部、法光寺の爲に冥福を資嚴す。宿熏忘ぜず、一問千悟せん。且く道へ、天台と是れ同か是れ別か、輙ち山偈を成して大衆に擧似す。靈山の一會未だ曾て散ぜず、落落たる玄音妙蓮を演ぶ。己眼豁開して親しく見了る、靑山綠水自ら依然。了に回互無く、迥かに(や)正偏を絕す。今古分明に目前に在り、瑞鹿峰頭良夜の月、淸光長へに照して性天圓なり。

上堂、擧す、黃檗、衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ噇酒糟の漢、與麼に行脚せば何れの處にか今日あらん。還つて大唐國裡に(ま)禪師無きことを知るや。」時に僧有り、出でて問うて云く、「只だ諸方徒を匡し衆を領ずるが如きんば、又作麼生。」檗云く、「禪無しとは道はず、只だ是れ師無し。」拈じて云く、「黃檗老漢龍韜豹略、油幢に宴坐して喑嗚叱吒、萬人氣索し、甚に因つてか者の僧に輕輕に一捺せられて、便ち見る手忙はしく脚亂るることを。且く道へ、利害什麼の處にか在る。」

(け)典座を謝する上堂、「有漏は笊籬、無漏は木杓、小乘は錢貫、大乘は井

(の)天台智者大師。天台山の修禪寺に住す、荊州の人、陳氏と云ひ、諱を智顗と云ふ、釋尊一代の聖教を判釋して五時八教を以てす。

(や)正偏。正位と偏位のこと、洞山の五位に詳かなり。

(ま)禪師。二儀あり、一には天子有德の禪僧を褒賞して徽號を賜ひ、二には凡ての禪僧を敬稱して云ふ、儀堂白工集に曰く、「禪師號は神秀を大通禪師と賜せしに初む、又本朝にては建長寺の蘭溪禪師に初む。」

索。然も閑家具なりと雖も、應用著くるに處有り。且く道へ、誰か是れ善く用ふる者ぞ。」良久して云く、「㋻潙山淨瓶を趯し、㋕普化鈴鐸を搖す。」

上堂、拄杖を拈じて、卓一下して云く、「德山拈じ出さず。」喝一喝して云く、「臨濟用ひ得ず、福山餘力を勞せず、且く機に中り、的に中ることを要す。」卓一下し、喝一喝して云く、「擲地の金聲瓦礫の如し。」

上堂、「今朝七月五、一雨袢暑を洗ふ、蟬聲古樹の頭、蛩韻青莎の下、達磨は只だ箇の不識を道ふ、老盧は只だ箇の不會を道ふ。是れ汝諸人、頭を聚めて商量し、意を恣にして妄想す。」膝を拍つて云く、「且く驢を認めて馬と作すこと莫れ。」

上堂、「一葉落ちて天下秋なり、一塵起つて大地收る。釋迦老子事を曉らず、只管に黃と說き黑と道ふ。達磨大師分に安ぜず、來つて赤縣神州に遊ぶ。」良久して、「將軍藍田の虎を射得して、細に看れば元來是れ石頭なることを。」

閏七月旦、檀那莊田を增給するを謝し幷に㋓雨を祈る上堂。「者の片田地、人人分有り、須らく契券分明なることを得べし。方に無明種を下し、

頓悟要門論に曰く、「客あり、問うて曰く、弟子未だ律師・法師・禪師の何者か最勝なるを知らず、師曰く、夫れ禪師は其の樞要を撮つて直に心源を了じ、出沒卷舒、縱橫物に應じ、咸く事理に均うして頓に如來を見、生死の深根を拔き現前三昧を獲。若し安禪靜慮せずんば、這裡に到りて總に忙然たるべし云云」と出づ。

㋸典座。永平大清規に曰く、「夫れ典座の一職は衆僧の辨食を掌るものにして、狙を以て道心をなす云云、」雪峰は笊籬木杓を以て歷參し、到る處、典座の職を勤む。

㋻潙山趯淨瓶。淨瓶とは釋氏要覽に、「梵には軍遲、此に瓶と云ふ、常に水を貯へ身に隨ひ以て手を淨む云云。」「百丈一日、會下に向つて淨瓶を指して問うて曰く、「喚んで淨瓶と

三毒の果を結ぶべし、更に慈雲密布、甘澤普く洽ふことを得、根莖大小、悉く潤を蒙ることを得、然して後成熟以て彼の飢虛を濟ふて、咸く飽足せしむべし。所以に古者に道く、心地諸種を含み、普雨悉く皆萌す、頓に花情を悟り已つて、菩提果自ら成ずと。福山與麼に道ふ、慚を知り媿を識る者有ること莫しや。如し無くんば、」拄杖を拈じて卓一下して云く、「三年一閏、五年再閏。」

㋢副寺を謝する上堂、「一見便見、思算するに勞せず、兩箇五百、元是れ一貫。」良久して、「秋風秋雨長空に滿つ、落葉堦前紅片片。」

相訪ふを謝する上堂、擧す、㋐慈明和尚、衆に示して云く、「颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ。茶を煮る山上の水、鼎に燒く洞中の樵。」拈じて云く、「大小の慈明、常住物を將つて、私己人情と作す、福山は卽ち然らず。颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ、相看て兩つながら語無し、唯だ道情の高き有り。」

前住癡鈍和尚、訃音至る上堂、「昔年山中より來る、滿面是れ塵埃、去年山中より去る、曾て跬歩を移さず。去去實に去らず、來來實に來らず、萬

作すことを得ず、喚んで甚とか爲す。」華林上座曰く、「喚んで木楔となす可からず」と、丈更に潙山典座に問ふ、山、淨瓶を趯倒して出で去ると云。『潙山警策』に出づ。

㋙普化搖鈴鐸。盤山寶積禪師に法を嗣ぐ、師常に鈴鐸を振ふて歌うて曰く、「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や旋風打、虛空來や連架打」と。後世鐸を改めて尺八と成す、今時の普化僧、一名虛無僧と云ふ之れなり。

㋓祈雨。勅修淸規に曰く、「祈晴、祈雨、祈雪、遣蝗、讓日蝕、讓月蝕などの疏語あり、凡そ災異あれば、別ち祈らずと云ふことなし」と。楞嚴回向に「風調雨順民康樂」と出づ。

㋢副寺。勅修淸規に曰く、「古規に庫頭と云ふ、今諸寺にては

里一大雲霧開く、南世の偈に云く、「雲霧都べて卷く。萬里一天。」諸人者裏に向つて癡鈍和尚を見ば、直に是れ未在、見んと要すや。」拂子を竪てて云く、「些子無明の火、光を分つて九垓に徧し。」

上堂、「雨蕭蕭たり紅葉の下、鴈長空に叫び、蟲永夜に吟ず。觀音大士、渾身を賣却す、甚に因つてか人の價を酬ゆること少き。福山も也た端なく今日貴く買つて賤く賣るに似たり。」拄杖を卓して下座。

中秋、㋘都寺を謝する上堂、「月朔月旦、月圓月半、甚に因つてか今宵人爭ふて賞翫す。光境未だ曾て忘ぜず、眞月何に由つてか見ん。見んと要すや。」拂子を以て圓相を打して云く、「是れ寒山一片の心にあらざれば、便ち是れ石窓の滿燈盞。」

重陽、㋫書記を謝する上堂、逢ふことを欣ぶ佳節是れ重陽。籬落西風菊又黃なり。因つて惜しむらくは陶潛千載の後、半は煙草に和して秋光を老いしむ。山僧與麼に道ふ、忽ち箇の出で來つて、和尚、禪道佛法を說かず、却つて四六文章を說くと道ふもの有らば、瞎漢儞豈に道ふことを見ずや、詩は會人に向つて吟ずと。

櫃頭と云ふ、北方にては財帛と云ふ、卽ち常住の錢帛米麥を掌りて出入時に隨つて曆に上す云云。」

㋮慈明。諱は楚圓、姓は李氏、全州の人なり、年二十二歲にして出家す、汾陽に法を嗣ぐ、語錄一卷あり。

㋘都寺。永平大清規に曰く、「古時は鑑寺のみ、近時都寺と稱するは卽ち鑑寺のことなり。」卽ち副寺は庫頭のことなり。

㋫書記。慈覺の龜鏡文に曰く、「衆僧の爲めに、翰墨を典る故に書狀あり、」勅修清規に曰く、「書記は卽ち古規の書狀なり、文翰を職掌さす云云、」禪苑清規に、「山門の書疏を主執す」とあり。

㋙藏主。慈覺の龜鏡文に「衆僧の爲に經教を守護す、故に藏主あり」と。備用清規に曰く、「藏主は金文を掌握し、几案を嚴

書記。㊂藏主を謝する上堂、一字畫を著けず、八字兩ノ無し。大藏と小藏者裏より流出す。明眼の衲僧辨別し難し。會すや、大唐國裏鼓を打てば、日本國裏に鉢を展ぶ。〔藏主は唐人〕

開爐上堂、「雪嶺六年、少林九年、死柴餘なく冷灰燃えず。建長今日別に方便を作す。」拄杖を拈じ、撥一撥、吹一吹して云く「汝等諸人、照顧せば面門を爍破せん。」一卓して下座。

太守請ふ、㊄地藏寶殿を慶讃し、五部大乘經を供養す。提綱、「正眼洞明、十虛無間、大機圓應、萬象俱に融ず。妙に聲色の先に超え、逈かに思議の表に出づ。卽心卽佛、塵塵刹刹、名模を絶す、非心非佛、煒煒煌煌、向背に非ず。此を以て諸法を建立し、此を以て群迷を開悟す。金剛王劍の如く、之を揮へば則ち魔外踪を潛め、獅子筋琴の如く、之を撫づれば則ち群音頓に絶す。所以に道ふ、大人、大見を具し、大智、大用を得、一毫端に寶王刹を現じ、微塵裏に坐して、大法輪を轉ず。物物全く彰れ、頭頭昧からず。茲の名刹を眷みるに、東州に雄冠たり。始め最明寺、基を創め、大覺師、法を開いてより、㊅竺嶺の眞風再び振ひ、㊆少林の五葉重ねて芳ゆ。中し劫燒の餘に因り、未だ宏規の舊に復せず、大檀那太守、佛囑を忘れず、益願輪を運し、紺殿崇成、

殿し、常に湯茶香燭を備へて延迎す云云。」

㊄地藏。地藏本願經に出づ、まさして六道の迷路に立ちて、苦衆生をして濟度す、故に六道能化の地藏尊とも云ふ、又凡ての願力を成就せしむ、故に願王尊とも云ふ、建長寺の大殿に千體地藏を安置す。

㊅竺嶺。天竺の靈鷲山なり。

㊆少林五葉。達磨大師傳法の偈に曰く「吾れ本此の土に來りて、法を傳へて迷情を救ふ、一華五葉を開いて、結果自然に成ず。」

像設嚴備、金碧焜燿、棟宇（エ）翬のごとく飛び、高脊空に横ふ。璇題月を納る、延いて地藏千身の妙相を奉じ、五部の大乘眞詮を供養す。賢聖交參し、神龍（ヒ）翊衛し、皇圖を有永に固うし、至化を無窮に敷き、四生九有、咸く苦輪を脫し、萬姓六軍、同じく壽域に躋り、長者の布金を笑つて、未だ奇特と爲ず。況んや（モ）賢于の挿草、豈に是れ（セ）作家ならんや。直に見者聞者をして、悉く圓常を悟らしむ。此生他生、長に福報を臻さん。然も是の如くなりと雖も、只だ功自ら功に非ず、道常の道に非ず。全く數量を超えて見聞に落ちざるが如きんば、畢竟如何が諦會せん。妙德空生齊しく稽首し、千萬億載恩光を仰ぐ。」復た偈を說いて曰く、「偉なる哉世に過量の人あり、乃ち能く過量の事を成就す。是れ積劫に於ても諸佛に事へ、親しく諸佛の授記を承け來つて、大願力を以て世間に生ず、威德大人の相を示現して、佛祖向上の事を究明す。大心弘く護す諸佛乘、無爲の中に於て有爲を示す、無邊勝妙の事を建立し、寶殿を幻成して極めて嚴麗、璀璨たる光明心目を耀す。地藏大士恒に端居、金錫靈珠群品を度す、一身の中に於て千身を現じ、千身還つて一身に於て攝す。色に非ず相に非ず虛空に非ず、大に非ず小に非ず差別に非ず。光帝網の相交羅するが如く、重重涉入して廻互無し、亦知る五部の大乘典、無說無聞無所證、無聞無證の中に於て、無作の功德力を顯示し、普く正法を常に流衍せしめ、救世護國悉く安寧、

（エ）翬。雉子の一種なり。
（ヒ）翊、翼と同じ、「たすく」なり。
（モ）賢于。于は漢書にある于定（ウテイ）國も、その父于公も共に賢明にして、定國は丞相となれり、その故事よりいふ。
（セ）作家、禪門にては斯道に老熟せし人を呼ぶに用ふ、臨濟錄に「作家戰將」と出づ。

名門福慶陪綿綿、德澤滂流區宇に徧く、壽岳穹崇禍海深し、永固基を拜して勳業を茂す。此を以て先世の魂を升濟し、勝樂土中佛位に登る。世出世間俱に了了、缺なく餘なく亦盡なし、只だ此の無盡亦無盡、三際に彌綸し十方に亘る。東大海水常に渺瀰、扶桑日輪恒に烜爀、我れ今讃揚亦是の如し、百千萬劫終極なからん。」

㋦頭首の㋑秉拂を謝する上堂、廣庭の風月夜遲遲たり、㋺韶濩雲英迭に奏する時、萬象森羅齊しく耳を側つ、至音の端的誰か知ることを許す。

佛涅槃上堂、雙林樹下手胸を摩す、死眼瞠開又脫空、生滅有無何を用つてか說かん、年年二月是れ休中。

上堂、乍ち暖乍ち寒、一晴一雨、花空庭に落ち、鶯綠樹に吟ず。毗盧の師、㋩法身の主、知んぬ他は是れ眞か是れ假か。眼を眨得し來れば、劍去つて久し矣。

頭首の秉拂を謝する上堂、說の時默、默の時說、電を掣き雷を轟す、風を飄し雪を灑ぐ。㋥舜若多神笑つて點頭、㋭憍梵鉢提驚いて舌を吐く。

禪興の無及和尚を謝する上堂、擧す、趙州、茱萸を訪ふ、拄杖を携へて法堂に於て東より西に過ぐ。萸云く、「甚麼をか做す。」州云く、「水を探る。」

㋦頭首。佛家に東序西序あり、恰も朝廷の文武兩官の如し、中に就いて西序とは正に頭首を指す、明極禪師曰く「參請多く叢林の熟者を以て西序に歸せしめ、之を頭首と云ふ」とあり。

㋑秉拂。拂子を拈じて說法するの式あり、之を云ふと勅修淸規に出づ。

㋺韶濩。韶はうるはしいの意にて、虞舜の樂を云ふ、濩はながれちるの意、布濩。

㋩法身。天台では法身を山門派で「ほつしん」といひ、寺門派で「ほふしん」といふ。

莫云く、「我が者裏一滴も又無し、箇の其麼をか探る。」州、拄杖を靠けて便ち出づ。師云く、「一人は武を奮つて城を攻め、一人は關を開いて敵を延く。則ち勝敗を分たずと雖も、未だ免れず刀鎗徧地なることを。今日無及和尚到來、福山只だ是れ尋常の笑語、更に餘事なし。何が故ぞ、元是れ屋裏の人。」

新命淨妙(ヘ)高峰和尚を謝する上堂、拄杖を拈じて云く、「巴鼻あり巴鼻なし、是れ尋常に非ず、亦差異に非ず。金烏夜半高峰に上り、泥牛を驚起して大地を耕さしむ。只だ今淨妙國中に向つて、深く(ト)蒺藜を種ゑ去る、諸人後五日、東行西行、大いに須らく子細にすべし。」拄杖を卓して下座。

解夏上堂、「(チ)蠟人の氷、鵝護の雪、竺嶺二千年、建長九十日、還つて諸(リ)誵の處有りや也た無や。」良久して、「瞿曇面皮黄なり、(ヌ)歸宗眼睛赤し。」

開爐上堂、「二千年前の火種、多くは是れ胡挑亂弄、福山香匙火筯、諸人切に忌む妄りに動ずることを。何が故ぞ、忽ち冷灰豆爆を撥著するが若き、照顧せば眼睛鼻孔を打失せん。」

正旦上堂、「一年三百六十日、今朝正に是れ正月一、一、二を生じ、二、三を生ず、三、萬物を生じ、萬物既に生じて時和し歲成る。蒲團靜に依つて餘事なし、永日寥寥太平を謝す。」

(ニ)舜若多神。祖庭事苑に主空神と譯す、楞嚴經に曰く「舜若多神は身なくして觸を覺ゆと云。」

(ホ)憍梵鉢提。釋尊在世の五大弟子の一人なり。

(ヘ)高峰。顯日、佛光無學元に嗣ぐ。

(ト)蒺藜。茨（ひし）なり、鐵蒺藜などといつて、近づき難きをいふ。

(チ)蠟人氷。この解は前輯にありこれを略す。

(リ)誵。訛に同じ。

(ヌ)歸宗。智常なり。

上堂、目を潑げば韶華是れ二旬、梅顋柳眼芳新を鬪はしむ。君に勸む光陰の好きに負くこと莫れ、畢竟光陰人に負かず。

上堂、㋸冉冉として春光暮る、茫茫として煙草綠なり。各人水牯牛、溪山隨處に牧す。收放時の宜しきを要し、水草飽足せんことを要し、蹄角分明ならんことを要し、性氣純熟せんことを要す。苗稼を犯さしむること莫れ、㋾根觸を亂さしむること莫れ、一朝鞭索忘じて更に驅逐するを勞せず。露地月明に臥す、請ふ末後の句を續げ。

雨に因る上堂、纔に結制を見又五日を過ぐ、修證即ち無きにあらず、染汙即ち得ず。何となれば、簷頭滴滴、分明歷歷。

方丈得月樓成る上堂、㋻毗耶詞を杜づ、風光輕く漏泄す。㋕彌勒彈指、門戶關防を缺く。福山我が諸人を勞して、茲の丈室を成す。六窓玲瓏、一室虛白、簷楹水に近し、良宵偏に得たり月の先づ臨むことを、欄檻雲に連り、青漢自ら疑ふ星の摘む可きことを。總に是れ現成の門戶、本地の風光に非ずといふことなし。直に見者聞者をして、心開き目明かならしむるも、只だ是れ別に一關有り、却つて諸人玄微盡くるに及ぶ處に向つて、撈

㋸冉冉。行く又は進むなどいふ字にて、春のけしきもおひおひすぎ去るなり。

㋾根觸。つきふるゝの意。

㋻毗耶杜詞。維摩經入不二門品に曰く、「維摩一日室を閉ぢて默然たり、此の默實に雷の如し云云」と出づ。

㋕彌勒彈指。禪林類聚卷三に曰く、「善財童子、五十三の善智識に參ず、末後に彌勒の樓閣の前に到り、樓閣、門閉づるを見て、善財暫時念を斂めて曰く、大慈大悲、願はくは樓閣門開いて、我をして得入せしめよと、時に彌勒諸の眷屬を領じて善財の前に至り、彌

して透脱し、拶し得て透ら教めんと要す。福山却つて汝に棒を與へて喫せしむ、既に拶得透す、甚に因つてか却つて又棒を喫す。豈に道ふことを見ずや、老僧笑つて指す猿の啼く處、更に靈蹤の上方に在る有り。」〔玄關上方の二扁有り。」

東福(ヨ)山叟和尚、訃音到る上堂。「(タ)慧日峰前一機を露す、翻身拶到す五須彌、照天の夜月光輝滿つ、廓爾として無依獨り歸る。此れ猶ほ是れ東福山叟和尚、當面に人を謾ずる底の一著、若し是れ末後全提ならば、下座同じく靈前に詣して分明に聽取せん。」〔辭世の偈、「照天夜月、無依獨り歸る」の語有り。」

新舊(レ)直歲を謝する上堂、「古に道く、終日茫茫那事か妨げなきと。古人與麼に道ふ、也た是れ耳を掩ふて鈴を偸むと。山僧三日圓覺を過ぎ、兩日建長に來る。毎日茫茫、東奔西走、眼睛鼻孔一時に打失し了れり。如何が箇の妨げなき底の道理を説かん。然りと雖も、東籬を析き西壁を補ふ、前後各其の人あり、若し是れ那事ならば、自然に總に妨げ得ず。

圓覺に住して、建長を退く上堂、五載住山補ふ所無し、孤踪奈すべき閑雲に似たることを。一家

・指一下すれば、樓閣門開く、善財得入すれば、樓便ち閉づ、百千萬億の樓閣を見れば、一一の樓閣毎に一彌勒あり、並に一善財あり、而して前に在つて立つ。」詳しくは舊譯華嚴教五十八に出づ。

(ヨ)山叟。諱は慧雲、佛智禪師さ謚す、聖一に嗣ぐ、正安二年七月廿日寂す、正覺菴に塔す。

(タ)慧日峰前。慧日山のこさ、東福寺の山號なり。

(レ)直歲。正字通に直は當なりさ蓋し一歲中、幹事の職に當る故に云ふ、僧堂清規に曰く、「直歲さは年中寺内の修理を掌る、門窓牆壁を修補し、動用の什物道具器具を修換し、山林の竹木田園の栽種を提擧す」さあり。

の桃李春色を同じうす、畢竟元彼此の分無し。

建長語終

兼住相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄

侍者 ㋑仁恭 編

師、㋺正安四年十月十一日に於て入院す。山門を指して、「盡大地是れ圓覺の伽藍。」左右を顧視して云く、「儞既に入作するに門なし、今日爲に線路を通ず。」喝。

佛殿、「光明藏中、眼眼厮觀る、坐立儼然、彼我異なるなし。」坐具を展べて云く、「何ぞ妨げん自ら倒れ自ら起つことを。」

據室、「汝が命を放ち、汝が氣を通ず。」拄杖を拈じて云く、「且く道へ者箇是れ甚麼ぞ、擬議不來ならば、」拄杖を以て左邊を過して云く、「且く一壁を過ぐ。」

拈帖、「把住放行。」帖を提起して云く、「只だ者の一著、正眼に看來れば兩重の㋩公案、信ずんば下文を聽取せよ。」法座を指して、「從上若しくは佛若しくは祖、皆茲に到つて歩を進むる處なく、口を啓くの分なし。山

㋑仁恭。字は石梁、一山國師の俗姪、台州の人、一山と同船して來朝し、建仁寺の興雲庵を開基し、滅後に慈照慧燈禪師と謚す。

㋺正安四年。圓覺七代となる、六代は西澗子曇、八代は無隱圓範なり。

㋩公案。公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所にして王道の治亂實に係る、公とは賢聖其の微を同じ、天下其の途を一にするの至理なり、案は賢聖理を爲すことの正文なり、佛祖の機緣相契ひ時に隨ひ、緣に應じて宗綱開示を錄す、

僧又作麼生、遂に驟歩して座に登る。

祝　聖、拈香して云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に、今上皇帝聖躬萬歳萬歳萬萬歳を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、一人端拱、四海隆平、壽考萬年、子孫千億ならんことを。」

又拈香して云く「此の香は征夷大將軍の爲にし奉る。伏して願はくは、㋥家に祿算を增し、益功勳を懋め。雨露を蒼生に沛ぎ、藩垣を東國に固うせんことを。」

又拈香して云く、「此の香は本寺大檀那の爲にし奉る。伏して願はくは、壽山福海、增固增深。德本道芽、愈堅く愈茂り。皆猷を有永に佐け、佛法を無窮に隆にせんことを。」

提綱、「㋭微笑に心を傳へ、夢中に夢を說く。㋬三拜髓を得、頭上に頭を安ず。則ち千載一時なりと雖も、其れ隻身兩役なることを奈せん。山僧粗羞恥を識る。端なく知つて故に犯す、今日只だ權時の施設を得去れり。」驀に拄杖を拈じて云く、「無上法王に大陀羅尼門あり、名けて圓覺と爲す。一切清淨、眞如菩提、涅槃及び波羅蜜を流出す。」一拈して云く、「作みね住み

之を公案と云ふ、中峯の山房夜話に出づ。

㋥家。深固の意。

㋭微笑傳心。世尊、靈山會上に在つて華を拈じて衆に示す、此のとき衆、皆默然たり、唯だ迦葉尊者のみ破顏微笑す、世尊の曰く、「吾れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門、不立文字、教外別傳あり、摩訶迦葉に付屬す」と、五燈會元一卷に出づ。

㋬三拜得髓。達磨、唐土の化緣盡きて西天に歸らんとす、時に門人に命じて曰く、「時將に至らんとす、汝等各各何ぞ所得を言はざる」と時に道副、尼總持、道育、各各所得を述ぶ、祖曰く、「汝等我が皮肉骨を得たり」と、最後に慧可、禮拜して位に依つて立つ、祖曰く、「汝我が髓を得たり」と五燈會元卷一に出づ。

ね、道泰にして傳へず天子の令、時淸うして唱ふることを休めよ太平の歌。」

擧す、乾峰和尙云く、「一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば第二に落在す。」雲門、衆を出でて云く、「昨日人有り、天台より來つて、却つて徑山に往き去る。」乾峰云く、「典座、來日普請することを得ざれ」と。師云く、「一人は癡頑、一人は奸黠、驀箚に相逢ふ、巧を弄して拙と成す。山僧或時は一を擧し、或時は二を擧す、總に事を妨げず。何となれば、自ら主人翁の在る有り。」

當晩小參、「正令全提、大地を荒却す、垢衣權に挂け曲げて今時の爲にす。」拄杖を拈じて云く、「五位君臣を列ね、三玄戈甲を展ぶ。權實兼ね擧げ、照用同時。便ち見る賓中に主あり、主中に賓あり、賓主混融し、賓主歷然たることを。」卓一下して云く、「纖塵元動ぜず、佛日正に高く懸く。」

ⓣ法光寺の爲に上堂、「大道無門、三世十方常に廓徹、大方無外、色空明暗本全眞、直下に一念虛融すれば、自然に塵塵超越す。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「重關を劈碎し、」畫一畫して云く、「路布を截斷す、靈機妙轉、大用全く彰る。日月を胸中に懸け、乾坤を掌上に運す。群生茲を以て化育し、海宇此を以て淸寧、ⓣ著著仁に通じ、頭頭轍に合す。故に我が法光寺杲公禪門、願力に乘じ來つて全く此の令を提ぐ。直に得たり、名四裔に喧しく、威八紘に震ひ、佛祖の淵源に了達し、向上の一著を洞明し、出生入死に至つて、焜燿光輝することを。然りと雖も、此れ猶ほ是れ杲公禪門、功勳邊の

ⓣ法光寺。北條時宗公なり。
ⓣ著著。次第次第に、一步一步に、頭頭も同じ意なり。

事、且く道へ功勳に墮せず、一句作麼生か道はん。」良久して云く、「巨に十三華藏界を闢いて、身を藏すに跡なく海波を騰ぐ。」復た偈を說いて云く、「至化功成つて自ら知らず、翻身攧倒す五須彌、紫檀の樓閣黃金の闕、坐ながら見る龍華記莂の時。」

(り)大檀那山に入りて請ずる上堂、「黃檗、臨濟を打つこと三頓、蒿枝の拂ふが如く、窮坑滿ち難し。德山、雪峰を打つこと一棒、桶底の脫するが如く、小器盈ち易し。」拄杖を拈じて云く、「此の棒、鹿峰が手裏に在らしめば、大いに土曠れ人稀なるに似たり。今日幸に衡鑑前に在るに遇ふ、未だ免れず拈出して、略威光を展べて去らんことを。」卓一下して喝一喝。

上堂、「丹楓葉墮ち、紫菊香殘る。老胡明め破せず、獨り自ら西乾に返る。是れ汝諸人、取次に搏量し、頭を聚めて妄想す。」良久して云く、「驢年。」

(ぬ)東堂(る)西澗和尙を謝する上堂。諸佛強ひて出頭し、諸祖妄に事を生ず。病痛一般なりと雖も、脈息亦異なること有り。瑞鹿峰前に逗倒し、自然に別に道理あり。任ひ是れ佛病祖病、一切衆生の心病毛病萬病も、總に脫然として同じく大安樂の地に到らしむ。見るや、綠水青山自在の身、菩薩神通暫く遊戲す。

四頭首の秉拂を謝する上堂、「昔日臨濟・韶陽・汾陽・大陽各三句あり、宗要を發明す。瑞鹿却つて四

(り)檀那。南海寄歸傳に曰く、「梵語に陀那鉢底と云ひ、譯して施主と云ふ、檀越とあるは正譯に非ず。」

(ぬ)東堂。象器箋に曰く、「當寺前住の人を東堂と云ふ、蓋し東は是れ主位なり、前住の人は是れ舊主、故に東堂に居す。」

(る)西澗。諱は子曇、宋人なり、石帆衍に嗣ぐ、蓮庵三世、東來して建長等に住す、十一代なり、一山は十代なり。

句あり、今日諸人に擧似す。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「第一句。」又卓して云く、「第二句。」又卓して云く、「第三句。」又卓して云く、「第四句。一句、四句を具し、四句只だ一句、是れ唐言に非ず、亦梵語に非ず、自然に句句朝宗、機機相赴く。石火光中主賓を定め、百戰場中文武あり。」擲下して云く、「機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」

臘八上堂、「六年荒草に冷坐し、飢を受け凍を受くること少からず。夜半夢驚き魔倒る、強ひて謂ふ見星悟道と。二千餘載今に至る、寐語人を惑すこと未だ了ぜず。鹿峰今日者の老子を喚び醒す看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋒瞿曇瞿曇、金烏翅を拍つて扶桑に耀く、那箇か知らざる天大いに曉くることを。」

上堂、「向上の一機、言前に薦得するも、已に第二に落つ。頂門の一竅、機先に撥透するも、腦後猶ほ一椎を缺く。與麼不與麼。」拄杖を拈じて云く、「直下七花八裂、東大海軸底の紅塵、富士山連天の白雪。」拄杖を卓して下座。

元旦上堂、「有爲僞なりと雖も、之を棄つるときは則ち道業成らず、無爲眞なりと雖も、之に著するときは慧性明かならず。灼然として一出一入、半合半開、但だ願はくは、春風の齊しく力を著けて、一時に吹いて我が門に入り來ることを。」拄杖を卓して下座。

㋒瞿曇。刹帝利種の姓なり、純淑、又は地最勝と譯す、又星の名なり、星に從つて姓と爲す、後代に至り、改稱して釋迦と云ふ、祖庭事苑に曰く、梵語に瞿答摩、又は瞿曇彌と云ふ、此に地勝と譯す、謂ふ、天を除くの外、地に在る人類中の最勝なればなり。

上堂、「梅腮玉を散じ、柳眼青を垂る。春光漸く妍媚、物理自ら分明、諸人東行西行、左覷右覷、照顧せば鼻孔眼睛を打失せん。」左右を顧視して云く、「且喜すらくは無事なることを。」

新舊首座を謝する上堂、「綱を提ぐるときは則ち綱正しく、領を振ふときは則ち衣端し。所以に叢林の綱領、貴ぶらくは人を得るに在ることを。人を得るときは則ち宗風振ひ正令行はる。只だ黃檗、南泉の鉢位に坐し、睦州、臨濟の喫棒を賺すが如きは、是れ提綱か振領か。」良久して云く、「三尺の吹毛光膽を照す、萬人叢裏高標を奪ふ。」

上堂、「心を識得すれば山岳沈む、水、水を洗はず、金、金を博へず。端的一回曾て與麼、從教あれ大地㋻知音を絶することを。」拄杖を卓して下座。

㋕知客を謝する上堂、「賓中の主、虛空手を拍って須彌舞ふ、主中の賓、桃紅李白共に芳春、主中の主、堯風舜日寰宇淸し、賓中の賓、紅塵世路間人少なり。」驀に拄杖を拈じて云く、「者箇は是れ圓覺が拄杖子、且く如何が是れ主、如何が是れ賓。」擲下して云く、「龍蛇は辨じ易く、衲子は謾じ難し。」

臘八上堂、晝は日を見、夜は星を見る。雪山成道、口說憑る無し。半夜三更困じて未だ醒めず、打失す㋵娘生の雙眼睛。

㋻知音。語原に伯牙、琴を鼓すれば鍾子期其の妙音を知る、鍾子期死するに及びて其の妙音を知る者少し、故に琴を鼓せずとあり、之れより己が消息を知る人を知音、又は知己と云ふ。

㋕知客。勅修淸規に曰く、「知客は職の名、賓客を典り、凡て官員、檀越、尊宿、名德の士等、來山の節は香茶を拈じ、迎待時に隨って行ひ、方丈に通遑する所、賓客に關することは蓋般此の職に當るの責なり。」

㋵娘生。娘生の面目と本來の面目と同じ。

臘月望上堂、風頭稍硬く、煖處に商量せよ、平地端なく陷坑を掘る。天寒人寒、大家都裏に在り。自家の骨肉尙ほ此の如し。古人の家私、圓覺已に揣刮し了れり、圓覺が家私又作麼生。局局促促大寒酸、慚愧す人の眼を著けて看る無きことを。

元正上堂、「新年頭舊年尾、四序已に端を更む。三陽猶ほ未だ啓かず、是れ佛法にあらず、亦世諦に非ず、是れ因緣にあらず、亦自ら爾るに非ず。」拂子を竪てて云く、「會得せば徧地の祥風、普天の和氣。」

上堂、景新春に入つて、萬物欣欣、野梅玉を飄し、庭艸茵を鋪く。風光限りなく好し、白日間人少なり。

上堂、「諸佛出世、水を擔つて河頭に賣る。祖師西來、土上に泥を加ふ。諸人軒昂の氣宇、特達の胸懷、第一疑猜を用ひざれ。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「但だ雪の消え去ることを得て、自然に春到來。」

雪後上堂、一回虛空を粉碎し了る、大地明明に點埃を絕す。獨り峨眉山上の客のみ有つて、人の手を携へて高臺に上るなし。

上堂、「睦州の㊀擔板漢、趙州の㊁喫茶去、口、崖蜜の甜きが如く、心、黃連の苦きに似たり。所以に圓覺尋常、諸人に於て敢て絲毫も錯悞せず。」

㊀擔板漢。一方面を見て他方面を見ざる鈍漢を云ふ、傳灯錄

良久して云く、「虎を射て眞ならず、徒に羽を沒するに勞す。」

上堂、擾擾匆匆、晨雞暮鐘、水溶海に流れ、月高峰に上る。憶ひ得たり⑴瑞巖の老凍膿、時時只だ喚ぶ主人翁。

上堂、⑵一笑法を付す、傾城傾國の妖、三拜髓を得、破業破家の嗣。此の妖未だ息まず、此の恨窮り難し。今日何人か能く屈を雪ぐ、風に臨んで幾度か眉峰を蹙む。

中夏上堂、「世事匆匆として過ぎ、今朝又中夏、衲僧本參の事、大蟲水磨を看る。諸譌有り縫罅無し、嵩山僧の破竈墮あり。」拄杖を卓して下座。

上堂、索索たる秋聲碧桐に墜つ、蕭蕭たる涼氣簾櫳に入る。體露金風の句を明めんと擬して、又韶陽網子の中に墮す。

中秋上堂、「仲秋三五、桂影婆娑、人間天上、競つて光華を賞す。憐む可し老長沙、小釋迦を踏倒す。蒼龍角を折り虎牙なし、笑倒す東村の李⑶大哥。禪牀を拍つて下座。

上堂、和氏の璧瑕無し、隋侯の珠纇を絶す。然りと雖も稀世の珍、得る者は更に須らく撲碎すべし。何が故ぞ斯の如くなる。道ふことを見ずや、

陳尊宿の章に曰く、「講唯識座主を召して曰く、座主、主應諾す、師云く、擔板漢。」

⑴喫茶去。趙州、新到に問ふ、「曾て此間に到るや。」曰く、「曾て到る。」師曰く、「喫茶去。」又僧に問ふ、僧曰く、「曾て到らず。」師曰く、「喫茶去。」五燈會元四卷に出づ。

⑵瑞嵒。台州にあり、諱は師彥、閩の許氏の子なり、嚴頭に法を嗣ぐ、師常に丹丘の瑞巖に居す、盤石に坐して終日愚の如し、自ら主人公と喚ぶ、復た應諾して乃ち曰く、「惺惺着、他後人の瞞を受くることを勿れ。」五燈會元七卷に出づ。主人翁は本來の面目なり、ここにては、年寄りて色澤の失せたるをいふ、へさしおやぢといふの意。

⑶一笑。迦葉なり、三拜は二祖をいふ。

匹夫罪なし、璧を懷いて其れ罪あり。

清(ナ)西堂、東光寺の請を受け、瓊首座博多より來るを謝する上堂。擧す、(ラ)三聖、衆に示して云く、「我れ人に逢ふては卽ち出でず、出づる時は便ち人の爲にす。」(ム)興化云く、「我れ人に逢ふては卽ち出で、出でては卽ち人の爲にせず。」頌に云く、「兄は鈍钁を携へて東邊に去り、弟は生鋤を放つて西畔より來る。兄弟各人活計を成す、相逢ふて一笑兩眉開く。」

重陽上堂。「九日今朝是、東籬㷋菊黃なり、因つて思ふ陶靖節、寂寞として壺觴を待つ。殊に知らず露幽艷を凝し、風淸香を拂ふことを。醉人限り無き意、何ぞ必ずしも(ウ)瓊漿を泛べん。」膝を拍つて云く、「茫茫として多くは是れ秋光を負ふ。」

(ヰ)長樂月船(ノ)和尙を謝し、幷に知客を請ず、(オ)小師、上堂。「百丈喝せられて耳聾す、寃憎會苦、臨濟嵩枝三頓、冷債還し難し。趙州水を探る平地の風波、南泉背を撫して徒に多事を成す。則ち啐啄同時、箭鋒相拄ふと雖も、要且つ主賓轉缺き、父子情乖くことを。圓覺只だ見定に據る、且つ要す恰恰相宜しからんことを。」拄杖を拈じて卓一下し云く、「客來つて茶

(ネ)大哥。哥は兄なり。

(ナ)西堂。象器箋に曰く、「他山の前住の人を西堂と云ふ、蓋し西は是れ賓位、他山の退院の人此の山に來る、此れ賓客なり、故に西室に處らしむ。」

(ラ)三聖。鎭州三聖院慧然禪師、法を臨濟に嗣ぐ。

(ム)興化。魏府の興化存奬禪師、法を臨濟に嗣ぎ、廣濟禪師と諡せらる。

(ウ)瓊漿。美酒か。

(ヰ)長樂。上野國世良田にあり、榮西の法嗣榮朝和尙の開山、關東十刹の一。今は天台宗。

(ノ)和尙。又は和上と書す、梵には鄔波遮迦と云ふ、于闐國に和尙と譯す、漢土には之を力生と譯す、卽ち師は弟子の功德を生ぜしむる力を有するが故に、師を力生と稱す、舍利弗問經に曰く、「夫れ出家は其の父母生死の家を捨てて法門中

の喫するなし、蒿湯禮儀を備ふ。」

至日上堂、「葭管灰を飛し、新陽候に應ず。觀臺の書雲、以て休咎をトす、圓覺、俗に順つて也た書せんことを要す。」拂子を以て、字を寫す勢を作して云く、「東西南北、赤白青黃、已に書し了れり、衆中氣候を識り休咎を別つ底あること莫しや。縱ひ有るも也た須らく勘過了して打すべし。忽ち若し箇の出で來つて、卽今萬里雲なく、又箇の甚麼をか書すと道はば、拄杖を拈じて臂脊に一頓を與へん。何が故ぞ、豈に道ふことを見ずや、青天も也た須らく棒を喫すべし。」

明因西堂無絃和尙を謝する上堂。「一曲の無絃古調淸し、十三徽外韻冷冷、塵中是れ知音少なる可し、時に松風に和して石屛に倚る。

上堂、擧す、㋻佛眼遠和尙の頌に云く、「一日日一時時、龍門老心自ら知る。」拈じて云く、「龍門和尙、謔偈則ち甚だ美なりと雖も、鹿山若し來れば、情識裏に坐在す。鹿山も亦頌あり、云く、一日日一時時、鹿山老衆中、若し箇の者裏に向つて一句を道ひ得て、㋕倜儻分明なる有らば、山僧半院を分つて伊に與へん。」

圓覺語終

に入り、微妙の法を受く、蓋し師の力法身を生長し、功德の財を出し、智慧の命を養ふ、功德之れより大なるはなし。」又和尙を近誦と譯す、弟子年少にして師を離れず、常に近いて經を受けて誦するを以てなり。或は親教師と譯す。

㋾小師。沙門謙下の稱、又は弟子、師に對して自ら小師と呼ぶ。

㋻佛眼遠。五祖演に嗣ぐ、龍門に住す、宋の徽宗宣和二年寂す。

㋕倜儻。才氣のすぐれて獨立すること。

再住巨福山建長興國禪寺語錄

侍者㋑聰一編

㋺兩班の㋩耆舊を謝する上堂。「普化、臨濟を㊁成褫し、珍重して下り去る。楊岐、慈明を補佐し、時に㋭惷語を出す。是れ皆㋬碔砆の質、豈に瑚璉の材たらんや。福山耆裏、左眄するときは則ち氷のごとく清く玉のごとく潔く、右顧するときは則ち虎のごとく驟き龍のごとく馳せ、機鋒星電を閃し、號令風雷を鼓す。山僧贏ち得て放憨癡、閑に看る峰雲の自ら去來することを。然りと雖も便ち是れ福山爲人の處なること莫しや。」良久して云く、「妙舞廻雪の手に誇ること莫れ、三臺須らく是れ大家催すべし。」

㋣鏡堂和尚の㋠遺書至る上堂。「甲子六十三、森羅萬象本同參、法の人の爲に說くなし、刀を打することは須らく邠州の鐵なるべし。任運自ら去來す、南天台と北五台と、天上只だ一月、夜夜の清光常に皎潔。大衆、鏡堂老子、末後の全提、建長已に與に解注し了れり。只だ涅槃後大人の相あ

㋑聰一。聰一の字は喝岩、萬壽寺に住す、建長寺の葦航道然に嗣ぐ、葦航は大覺禪師の法嗣なり。

㋺兩班。朝廷の制に文武の兩班あるが如く、禪林も又之に擬して兩班あり、又之を東序、西序と云ふ。

㋩耆舊。猶ほ老宿と云ふが如し、戒臘五十以上の人を尊稱して云ふ。

㊁成褫。褫は就と同じ意なり、成就なり、事を成し遂ぐるをいふ。

㋭惷語。惷は愚なり、暗なり、

るが如きんば、諸人還つて見るや。若し也た未だ見ざれば、未だ免れず更に指出することを。」拄杖を卓すること一下して云く、「鏡を打破し來つて親しく見了る、團團舊に依つて乾坤に輝く。」

元宵上堂、「花柳春陰に媚び、歌管衢市に鬧し。」大衆を召して云く、「會すや、我見燈明佛、本光瑞如此。」拄杖を卓すること一下して下座。

新舊維那を謝する上堂、克賓、興化の爲に拈香、田夫、國政を論じ、㋷法昌、北禪の帽子を還す。癡客主人に勸む、冷地に看來れば總に一笑するに堪へたり。福山が者裏、進むに禮を以てし、退くに義を以てす。清機掌を歷、風凜凜地。

上堂、「百丈、馬師の喝下に於て耳聾すること三日、臨濟、高安より回り來つて攔腮一掌。謾く謂ふ是れ師資契合と。知らず是れ寃債相求むることを。諸人、百丈臨濟二大老、立地の處を知らんと要すや。」良久して、「一たび潘郎に從事卻せられて後、便ち解す人前に羞を識らざることを。」

上堂、桃花は紅に李花は白し、色是れ色にあらず、燕子語り黃鶯鳴く。聲是れ聲にあらず、是れ色にあらず、是れ聲にあらず、是れ甚麼ぞ。靈雲

㋬ 碔砆。碔は石にして玉に似る、砆は石に次ぐ玉。

㋣ 鏡堂。諱は覺圓、環溪一に嗣ぐ、無準三世、弘安二年佛光國師と共に日本に來る、建長圓覺及び建仁等に住す、德治元年九月二十六日寂す。

㋠ 遺書。勅修清規尊宿遷化の章に曰く、「官員、檀越、諸山法眷の遺書あり、卽ち遺送すべし」とあり、一定の書式あり、今は略す。

㋷ 法昌。諱は倚遇、北禪の智賢に嗣ぐ、雲門五世。

㋦ 嵩山破竈墮。五祖下二世に嵩嶽安國師の法嗣に破竈墮和尚あり、嵩嶽に隱居す、山塢に廟あり、殿中に一竈を安ず、此の靈神、物の命を稱ふ事甚だし、師一日廟に入り、杖を以て竈を敲くこと三下して曰く、「咄、此の竈、只だ是れ泥瓦合成のみ、聖何れより來り

打失す雙眼睛、笑倒す㋦嵩山の破竈墮。

㋸桃溪和尚の遺書至る上堂。「鹿峰憔へて擧す三玄の要、東漸歸り去つて閑に吟嘯、忽然として一轉して無生に入る、引き得たり虛空の口を開いて笑ふことを。芭蕉虛幻の體を見徹して、本に返り根に歸して自ら妙を得たり。此の意只だ今誰と共にか論ぜん。海天目斷す千峰の曉。「辭世の頌「芭蕉虛幻の體」の語あり。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「選佛場開く。」一卓して云く、「此を以て題と爲す、儞若し出格の句を道ひ得ば、儞に許す心空及第することを。」杖を靠けて下座。

上堂、結制已に五日を過ぐ、修證の事須らく猛烈なるべし。騰身驀に太虛を過ぐ、妨げず迥然として獨脫なることを。若し只だ隊を逐ひ群に隨はば、更に又時に逢ひ節を失せん。噇眠噇飯無明を肆にし、熱鐵牀に坐して熱鐵を吞む。

解夏上堂、「尅期取證、鬼窟裏に活計を作す。休夏自陳、且く夢中に夢を說くこと莫れ。此の秋初夏末に當つて、兄弟東に去り西に去る。前途忽ち人の本分の事を問ふもの有らば、未審し如何が祗對せん。」良久して云く、「馬あれば馬に騎り、馬無ければ步行す。」

再住建長語　終

竈何れにか去る、恁麽にして物命を烹宰す」又打つこと三下す、竈乃ち傾破墮落す、須臾にして一人あり、青衣峩冠、拜を師の前に設く、師云く、「是れ何人ぞ、」曰く、「我れ本此の廟の竈神なり、久しく業報を受け、今日師の說法に遇ふて此處を得脫す、」會元の卷二に出づ。

㋸桃溪。諱は德悟、蘭溪に嗣ぐ、圓覺四世。

住相模州金寶山(イ)淨智禪寺語錄

侍者　(ロ)居中　編

上堂。狗子佛性あり、堂に當つて拈起す秦時の鏡、狗子佛性無し、利劍拂開して天地靜かなり。有佛性無佛性。拂子を擲下して云く、急急如律令。

至日上堂。晷運推し移り、日南長至、焔氷河に起り、花碓觜に生ず。是れ因緣にあらず、亦法爾に非ず、且く道へ是れ何の道理ぞ。拄杖を拈じて云く、我れ今分明に儞に說向す。卓一下して下座。

望日、頭首秉拂、新舊兩班、并に白雲(ハ)東明和尚を謝する上堂。冬至前後、沙飛び石走る、三世の諸佛あることを知らず、狸奴白牯却つてあることを知る。象王回旋し、師子哮吼す、箇の折脚鐺子を提げ、且く要す大家手を出して、推せども進前せず、約すれども退後せざることを。因つて思ふ東土の(ニ)小釋迦、天宮夢を說いて自ら醜を呈し、白雲を引き得て笑口を

(イ)淨智寺。金寶山と號す、相模鎌倉山の内に在り、文永六年、北條師時の開基、開山は宋僧大休正念、鎌倉五山の第四に位す。

(ロ)居中。字は嵩山、南禪寺に住す、宋僧西礀子曇の法嗣なり。

(ハ)東明。諱は慧日、宋の人、直翁擧に嗣ぐ、日本延慶二年來る、時に歲三十八、相州の禪興に住すること七年、白雲庵に退く、建長等に住す。

(ニ)小釋迦。潙山禪師の法嗣仰山慧寂禪師を指す、師臥する次で、彌勒の內院に入る、衆堂の中、諸位皆足れり、惟だ第

開かしむ。拄杖を卓して下座。

臘八上堂、岸容臘を待つて將に舒べんとする柳、山意寒を衝いて放かんと欲する梅。盡く謂ふ雪山覺道を成ずと、誰か知らん瞌睡眼方に開くことを。

上堂、「今朝七月、秋意凄切、露草蛩吟じ、風林葉脫つ。如來禪、祖師意、直下分明に一時に漏泄す。是れ汝諸人還つて神清く氣爽なることを覺ゆるや。其れ或は然らずんば、手を以て搖曳して云く、「不說不說。」」

上堂、禪意想に非ず、道功勳を絶す。路頭極まる所急に身を翻さんと要す。(ホ)高安灘頭、(ヘ)尿牀の鬼、(ト)龍潭室裏(チ)點燈の人。

上堂、百丈再び馬師に參じ、臨濟回つて黃檗を看る。飢鷹韝絲を脫し、猛虎翅角を挿む、撒泰生獰著くるに處なし。諸人飢ゑては飯を喫し、困じては瞌眠す、熱しては涼に乘じ、寒じては火に向ふ。輙ち邪に隨ひ惡を逐ふこと莫れ。然りと雖も、作者好し無病の藥を求むるに。

上堂、「臘月二十五、競ふて(リ)雲門の曲を唱ふ。寶山格調新翻、且く時に隨ふて俗に習はず。拄杖を拈じて卓一下して云く、「白雪陽春和するもの稀な

二位空し、師遂に座に就く、一尊者あり、白槌して曰く、「今第二座の說法に當る」と、師起つて白槌して曰く、「摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶す、諦聽せよ諦聽せよ、」衆皆散じ去ると夢見る、覺むるに及んで潙山に奉似す。五燈會元第九に出づ。

(ホ)高安。大愚を指す。

(ヘ)尿牀の鬼。臨濟を指す。

(ト)龍潭。崇信を指す。

(チ)點燈の人。德山をいふ。

(リ)雲門の曲。僧、雲門に問ふ、「如何なるか雲門の一曲、」門云く、「臘月二十五。」

(ヌ)克賓維那の公案。興化存奬禪師、一日克賓維那に謂つて曰く、「汝久しからずして唱導の師と爲らん、」賓曰く、「我れ這の保社に入らず、」師云く、「爾會し了つて入らざるか、會し了らずして入らざるか、」賓曰

り、斷絃須らく是れ鸞膠の續なるべし。」

新舊維那を謝す。擧す、興化、(3)克賓維那を打する公案。頌に云く、「令賞罰を全うし、情恩怨を忘る、透頭徹尾、一刀兩段、梭陶壁に飛び夜雷奔り、魚禹門に躍つて春浪暖かなり。利害只だ今誰と共にか明めん、出群は須らく是れ英靈の漢なるべし。」

結夏上堂、「一切處是れ圓覺の伽藍、一切心是れ平等性智、一切處留まらず、一切心住することなし。飢ゑては即ち飡し、困じては即ち睡る。」禪牀を拍つて云く、「瞎驢靈山の記を受けず。」

元宵上堂、拂子を竪てて云く、「此の燈鷲嶺首めて迦葉に傳ふ、少林護に神光に付す。燈燈相傳へて今日に至る、檢點し將ち來れば一箇箇、總に是れ光影を弄ずる底、以て天下の師僧盡く光影裏に向つて頭出頭沒することを致す。若し是れ光未だ發せざる時の消息ならば、未だ一人も會得する有らず。只今會せんと要すや。」拂子を擊つて云く、「正月十五是れ元夕。」

解夏上堂、「修あり證あり、己靈を埋沒す、修なく證なく、先覺を屈辱す。寶山期已に滿つ、衆中超宗越格底あること莫しや。」左右を顧視して云く、「異獸頭角を藏し、靈禽羽毛を惜む。」

淨智語終

く、「總に不恁麼、」師便ち打つて云く、「克賓維那、法勝勝たず、罰錢饡飯を設けよ。」

住㆓在城瑞龍山太平興國南禪禪寺㆒語錄

侍者　㋑志謹　編

師、㋺正和二年八月一日に入院す。三門を指して云く、「重關互に闢けて、作者歸を同じうす、未歸底あること莫しや。」彈指一下して云く、「者裏一歩を進む。」

・佛殿、「金剛王寶殿」㋩敷座して坐す、「幸に自ら端嚴具足、端なく箇の漢に个の希有しき道はれて、便ち見る七花八裂。」坐具を敷いて云く、「山僧今日伊が爲に蓋覆著。」

㋥土地堂、「鄭一通。」香を以て爐を扣いて云く、「只だ者个、正を顯し邪を摧く、風凜凜地。」

㋭祖師堂、「佛は是れ假名、祖云何が有らん。面面厮覷よ、泥猪疥狗。」

據室、拄杖を拈じ、竪てて云く、「盡從上若しくは佛若しくは祖、天下師僧の性命、今日山僧が手裏に落在す。放行把住、一切時に臨む、甘はざ

㋑志謹。古泉と號す、後に東福寺に住す。

㋺正和二年。九十四代花園院天皇の御宇。

㋩敷座而坐。金剛般若波羅密經法會因由分第一に曰く、「次第乞已還至本所飯食訖收衣鉢洗足已敷座而坐」とあり。

㋥土地堂。土地神護法神の堂、佛殿の東邊に設く。象器箋に出づ。

㋭祖師堂。佛殿の西邊に設け、其の中に初祖達磨大師及び叢林開祖百丈大智禪師の像牌を安置して、西に向はしめ、而して其の本山の開祖及び其の

る底あること莫しや。」蘋けて云く、「吽吽。」㊀勅黄を拈じて、「者の一著子、殊勝中の殊勝、奇特中の奇特、且く道へ是れ箇の甚麼ぞ。見るや、㊁法皇の大寶。九重より降る。」

山門の疏。鍋子の大小、杓柄の短長、山僧未だ門に入らざる時、已に一一見了す。今日甚に因つてか鉢盂に柄を添へ、渾沌耳を鑿る。信ぜずんば聽取せよ。」

㊂諸山の疏、「壁炬輝きを分つ、鄰光之れ義。稍諸謂に渉る、肝膽即ち異なり。相罵ることは儞に饒す觜を接げ、相照することは儞に饒す水を潑げ。道ふことを見ずや、爾に出でて爾に返る。」

法座を指して、「向上の一路滑に、壁立萬仞險なり。山僧今日滑險、一時に坐斷し去らんと要す。

陞座、〔問答錄せず、〕提綱に云く、「幸に是れ太平世界、安然無事。端なく雪嶺六年の後、少林九載の餘。爾してより互に出頭し來る。艸木を拈出して亂に懵袋を呈す。陰陽を迷昧し、晝を呼んで夜と作す。六十甲子を將つて打亂し了れり。山僧久しく不平を負ひて、今日出で來つて略整頓を爲さんと要す。人人をして道を知つて三百六旬、及び閏餘歲を成し、四時平分、一陰一陽、晝を分ち夜を分ち、時を違ひ候を失せざることを得ざらしめんことを要す。然りと雖も猶ほ是れ世俗邊の事、只だ物義を

寺の開祖の像牌を安じ、東に向はしむと、林間錄に出づ。

㊀勅黄。黄麻紙を用つて詔勅の文を寫すなり。勅修清規香記に曰く、「聖旨の勅黄を奉じて名山大剎に住持するものと云ふ。」

㊁法皇。後宇多院天皇、大寶は天子の位をいふ。

㊂諸山疏。本寺隣封の諸山新住持入寺の疏を製す、即ち讃を促すことを叙す。

傷らざるが如き一句、又作麽生。」良久して云く、「但だ見る皇風一片と成ることを、知らず何れの處か是れ封疆。」

當晩小參。入寺の始め、今夜諸人と聚集すること片時、既に彼彼心眼相照し。事一家に同じうす。更に敢て佛法の玄妙機關事理、⑪濟北の三玄。⑫洞山の五位を將つて、諸人に觸忤せず。又況んや衆中三人兩人、乃ち是れ舊時の道伴。所以に山僧此に來つて、一切但だ舊に仍らんことを要す。若し能く舊に仍らば、則ち妨げず我れ更に般若三昧を證得することを。內空外空。一切皆空、二十の空門悉く皆證得す。妨げず諸々の三昧を超えて、逈然として獨脫、與麽に道ふことを。衆中忽ち箇の出で來つて、善く柳下惠を學んで。終に其の跡を師とせずと道ふものの有らば、又且つ如何。只だ佗に向つて道はん、低聲低聲と、淨地上に狼藉藉すべからず。

復た擧す、僧、六祖に問ふ、「黃梅の衣鉢、甚麽人か得る」の公案。拈じて云く、「大小の祖師、心肝五臟を摟出し了れり、只だ是れ識者に逢ふこと罕なり。山僧輙ち偈を成して曰く、『一曲の陽春玉徽を奏す、夜堂風細にして月華遲し、調高く絃絕えて知音少なり、誰か擬せん⑬黃金子期を鑄ることを』と。」

⑪濟北の三玄。臨濟錄に云く、「一句語に須らく三玄門を具すべし、一玄門に須らく三要を具すべし、權あり用あり、汝等諸人作麽生か會せん」と云つて下座。

⑫洞山の五位。正中偏、偏中正、正中來、兼中至、兼中到。詳しくは五位顯訣元字脚を見よ。

⑬黃金鑄子期。伯牙琴を善くす、鐘子期之を聞いて其の妙音を嘆ず云云。

次の日、㋾龜山聖廟の爲に上堂。「大人、大見を具し、大智、大用を得。一毫端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉ず。卷舒方外の乾坤を立て、縱横域中の日月を挂く。乃至伽藍を建造し、己事を悟明す。猶ほ是れ　先皇自己運用底の事、只だ末後の大事光明爍爍たるが如きんば、且く道へ只今甚麼の處に在つてか行履せん。諸人還つて會すや。」良久して云く、「口に十三華藏界を闘いて、身を藏すに跡なく海波を騰ぐ。」

中秋、藏主并に維那を謝する上堂。「月月月半、月圓明、唯だ今宵のみ圓潔に陪するあり。世上人人爭ふて賞翫す。且く道ふ圓明又還つて別なりと。只だ別處の如きんば又作麼生。見ずや㋻馬簸箕父子賞翫の時、末後却つて道ふ、經は藏に歸し禪は海に歸す、唯だ㋕普願のみ有つて、獨り象外に超ゆと。」良久して云く、「明明たる此の意、知んぬ誰か會せん、法戰場中作者知る。」

㋵頑極和尚忌、拈香して曰く、「者箇の㋟老凍膿、素來情義薄し、一味是を睹ず、頑と惡とを恣肆す。年老いて變じて魔と成る、我れ魔力に攝せられて、眼を開いて陷穽に落つ。屈あり雪ぐに處なし、如今已に喜ぶ、兩ながら分張することを。年年西に望めば恨尤も切なり、今日香を燒いて伊に供養す。

㋾龜山聖廟。南禪寺の山内南禪院にあり、龜山天皇御分骨所にして、天皇の尊影を奉安す。
㋻馬簸箕。馬祖大師をいふ、父子云々は百丈と馬祖との公案、前に出づ。
㋕普願。南泉をいふ。
㋵頑極。諱は行彌、育王に住す、癡絶沖に嗣ぐ、沖は曹源道生に嗣ぐ、生は密菴傑に嗣ぐ。
㋟老凍膿。膿は腫血なり、虚堂錄抄に「蓋し老人の面に浮垢あり、而して凍膿に似たり。」

且く道へ、是れ恩に酬ゆるか屈を雪ぐか。」燒香して云く、「道ふことを見ずや、劍を記して舟を刻み、棒を掉つて月を打す。」

上堂、一喝 ㋹ 三日耳聾することを得、廚に聚蠅の傪に乏し、三頓六十拄杖を喫す、囊に繫蟻の絲なし。直に得たり、戶破れ家殘ひ、寃を懷ひて屈を負ふことを。祖禰了ぜざれば、殃兒孫に及ぶ。南禪を帶累して、今日窮厮煎じ、餓厮炒す。屈あり雪ぐに處分なし。然も是の如くなりと雖も、心人に負かざれば、面慚づる色なし、短長自ら間人の說くあり。

重陽上堂、今朝九月九、空山所有なし、茱萸の囊を帶びず、黃花の酒を飮まず。因つて憶ふ陶淵明、悠然として南山を見ることを。萬象森羅齊しく醜を出づ、何ぞ眉を攢めて便ち首を回すに似かん。

大衆、藏經を看ることを謝する上堂。「三秋景殘はれて千林蕭瑟、回鴈 ㋵ 嗈嗈、吟蛩 ㋡ 嘖嘖。的的たり諸佛の玄言、明明たり西祖の消息。直下に會得せば正に是れ落葉を認めて黃金と作し、此を離れて別に求むるも、又珠珍を棄てて沙礫を尋ぬることを成す。者裏兩重鐵壁相似たり、須らく是れ一一拶透して始めて得べし。且く道へ。拶透して後如何。」拄杖を卓して云

㋹ 三日耳聾。百丈、馬祖に參ず、侍立する次で、祖繩床角の拂子を目視す、師云く、「此の用に卽するか此の用を離するか、」祖曰く「汝向後、兩片皮を開いて、何を以てか人の爲にせん、」師、拂子を取つて竪起す、祖曰く、「此の用に卽するか、此の用に離するか、」師拂子を舊處に掛く、祖威を振つて一喝す、師直に得たり三日耳聾することを云云と會元に出づ。

㋵ 嗈嗈。やはらぎなり、噰々に同じ。

㋡ 嘖嘖。口やかましき貌。

く、「鐵壁鐵壁。」

上堂、「仲冬嚴寒、泥團を凍破す、滴水滴凍、言端語端、黄面老漢、拈弄し出さず、㋭金色の頭陀に、當面に冷笑せらる。二祖大師、落陷も知らず、缺齒老胡に一時に熱瞞せらる。與麼與麼、大難大難。南禪與麼に道ふ、別に見處あること莫しや。」驀に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「水落ちて幽石を露し、雲開いて遠山を列す。」

至日上堂、「晷運推し移り、日南長至。共しく惟れば首座大衆、各各時に膺つて納祐、慶にして宜しからずといふことなし。惟だ南禪が拄杖子のみ有りて、舊に依つて㋬鱗皴刺竭節、笑つて看る花は不萌の枝に綻ぶことを。」拄杖を卓すること一下、便ち喝一喝して下座。

上堂、擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ雲門の一曲。」門、答へて云く、「臘月二十五。」僧云く、「唱ふる者如何。」門云く、「㋣且緩緩。」拈じて云く、「者の僧、城を攻め㋠邑を摲するの心あり、雲門文韜武略倶に備る、者の僧未だ免れず、才に鋒を交へて便ち㋷退衄せらるることを。山僧今日他の一機を奪ひ、先一歩を攙し去らんことを要す。」復た頌して云く、「雲門の

㋭金色の頭陀。」迦葉尊者を指す、金色佛祖統紀五卷の二、左に曰く、「嘗て久遠劫の時に於て毘婆尸佛、入涅槃の後、四衆塔を起つ、塔中の像の面上金色少しく缺壞あり、時に貧女あり、金珠を以て佛面を飾らんと請ふ、時に迦葉は鍛金師と爲りて既に補治を爲す、因つて共に願を發す、「願はくば我れ二人無姻の夫妻と爲らん」と、是の因緣に由つて九十一劫、身皆金色なり、後に梵天に生る、天壽盡きて中天摩竭陀國の婆羅門の家に生る、名けて迦葉波と云ふ。」頭陀とは梵語抖擻と譯す、煩惱の塵垢を抖擻するの謂なり、此の修行を頭陀行と云ふ、十二頭陀とは一、但三衣、二、糞掃衣、三、塚間、四、樹下、五、露地、六、阿蘭若、七、隨坐、八、乞食、九、受食、十、不

一曲今古に超ゆ、箇の臘月二十五と道ふ、南禪今日先を搀さんことを要す。且た月圓にして正に戶に當ることを趁ふ。」

新舊兩班を謝する上堂、㋔祖師の偈を擧して云く、「心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に隨つて性を認得すれば、喜もなく又憂もなし。」與麼なるときは則ち佗に從つて覓むること莫れ、但だ己に向つて求めよ。是の如くなるときは、則ち一進一退、一去一留、左あり右あり、放あり收あり、妙用縱橫自由を得たり。」良久して云く、「大抵は佗の肌骨の好きに還す、紅粉を搽らず也た風流。」

佛涅槃上堂、衆を召して云く、「㋨無憂樹下、天を指し地を指して尊と稱す、娑羅樹間、手を以て胸を摩して衆に示す。三百餘會、賢を欺き聖を罔す、八十年鎖夢闕空。南禪今日慇懃に効ふ、是れ死蛇なりと雖も、活弄せんと要す。」

首座を謝する上堂、「雪に値ふ。」衆を召して云く、「臨濟の喫棒を賺し、南泉の鉢位に坐す。一種の風流、十分の標致、佗家曾て上頭の關を踏む。是れ當陽意氣を誇るにあらず、帝城の梅柳正に暄妍、添へ得たり六花の異瑞を呈することを。」

食餘味、十一、不博食、十二、坐不臥を云ふ。

㋕黧黝。主丈の色を云ふ、剝蝎節は主丈の形をいふ。

㋵日緩緩。まあ御ゆつくりなさいさ。

㋓撕岜。とを討つなり。

㋒退鼓。敗走と同じ。

㋔祖師の偈。西天二十二祖摩拏羅尊者傳法の偈なり　傳燈に出づ、祖師とは永平學道用心集の注に「行解相應する之を云ふ」と出づ。

㋨無憂樹下。佛陀は中天竺迦毘羅城藍毘尼園の中に降誕す。

上堂、三月皇都浩蕩たる春、桃花爛熳として㊅靈雲を笑ふ。眼睛打失して人の會するなし、暢殺す釣魚船上の人。

閏三月旦上堂、「三月又三月、光景暗に相催す。箇の甚麼をか相催す、人の老死を催し來る。古者に道く、衲僧家高高たる峰頂に立ち、深深たる海底に行くと。且く道へ、妙高峰頂高きこと多少ぞ、東大海水深きこと多少ぞ。諸人若し又頂に到り底に到り來らば、妨げず一切處、以て自由自在なるべし。若し又未だ然らずんば、十二時中也た須らく些の精彩を著くべし、更に瞎驢大隊を逐ふが若きんば、閻老子未だ儞を放さざること在らん。」拄杖を卓して下座。

上堂、大衆を召して云く、「三春已に去り、九夏斯に臨む。園林花事退き、庭樹綠陰森なり。梁間に燕語り、枝上に蟬吟ず。隴麥黃雲を翻し、田秧綠針を長ず。祖師意諸佛心、目前明歷歷、何ぞ自ら沈吟することを得ん。」拂子を擊つて下座。

結制上堂、十方同聚會、凡聖同居、龍蛇混雜、箇箇學無爲、白日青天、眼を開いて夢を作す。此れは是れ選佛場、甚れの處よりか者の消息を得る。心空及第して歸る。也た是れ鬼家の活計、然も是の如くなりと雖も、南禪更に一句子あり、諸人の爲に說破す。一、進前することを得ず、二、落後することを得ず、三、無事甲裏に坐在するとを得ず。若し吾が言ふ所に依らば、則ち一切處に大自在を得

㊅靈雲。靈雲志勤禪師、初め潙山に在って因に桃花を見て悟道す、偈あり曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽んづ、桃華を一見してより後、直に如今に至るまで更に疑はず、」會元の四に出づ。

ん。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む牆に撞き壁に撞くことを。

頭首秉拂を謝する上堂。衆を召して云く、「諸佛說不到の處一句を說き、日月を奔忙し、祖師行不到の處一步を行ず、山河を翻倒す、說不倒行不倒、未だ免れず特地の㋫波吒、只だ行到說倒の如きんば、又作麼生。」良久して云く、「少年曾て決す龍蛇の陣、老倒還つて聽く稚子の歌。」

上堂、一夏已に半を過ぐ、那事辨未辨、男兒大丈夫、一刀に須らく兩段すべし。若し未だ辨せざれば、光陰箭よりも急なり、若し已に辨ぜば、十影の神駒海涯に立ち、五色の祥麟天岸に步す。辨ぜんと欲して未だ辨ぜざる時如何。歷歷分明 君自ら看よ。

新舊兩班を謝する上堂。「石、玉を藏すときは則ち山潤ひ、水、珠を藏すときは則ち川媚び、㋳叢林正人を得るときは則ち綱紀を振興し、自然に雲のごとく合し響のごとく應ふ。刄を事海に遊ばしむるに至つて、機に中り的に中らずといふこと靡し。乃至左右其の原に逢ひ、進退其の宜しきに合ふ。然りと雖も、諸人其の人を見んと要すや。」乃ち左右を顧視して云く、「見るや、眼三角を生じ、頭五岳より峭し。」

中秋上堂、河漢秋中月正に輝き、十分の圓潔更に虧くることなし。南泉袖を拂ふの機尤も峻し、藥嶠雲を披き嘯いて自ら怡ぶ。光境倶に忘ず復た何物ぞ、七八を吐呑して更に誰をか疑ふ。此の宵大地

㋫波吒。波は波波奔走のこと、不安の意、吒は吒吒嗔怒のこと。
㋳叢林。祖庭事苑に曰く、「梵語に貧婆那、此に叢林と云ふ、智度論に曰く、「多くの比丘、一所に和合す、大樹の叢生するが如く、衆の和合するより來るなり」今僧衆く相聚り修行する所を云ふ。

人皆望む、誰か薦む清光未發の時。

正和㋮乙卯四月十三日、再住、敕黄を拈じて云く、「此れは是れ上皇、一毫端に於て、正法眼藏を拈出し傳持する底の一著子、諸人若し又未だ會せずんば、更に維那を煩して衆の爲に重演せん。」

上堂、領破れ蹄穿つ一老牛、已に閒散を甘つて林丘に臥す。端なく更に犂杷を牽かしむ、傍觀を引き得て笑ひ休せず。

上堂、「一夏恰も半を過ぐ、本參の事何ぞ慢ぜん。懞懞たる癡禪和、外に向つて方便を覓む。殊に知らず大事本來成現することを。」拂子を擊つて云く、「耳に在つては聞と曰ひ、」竪起して云く、「眼に在つては見と曰ひ、聞見歷然了了無聞。」良久して云く、「聲前色後新羅の箭。」

上堂、擧す、古著に道く、「萬法是れ心光、諸緣唯だ性曉、本迷悟の人なし、只だ要す今日了ぜんことを。」師、衆を召して云く、「古人與麼に道ふ、大いに靈龜尾を曳くに似たりと。山僧今日直截に時の人に擧示し去らん。」良久して云く、「玉を煆ふことは三日の火を經んことを要し、珠を探ることは須らく九重の淵に下るべし。」

二月旦上堂、「二月仲春漸く暖に、處處花明かに柳娬し。梁間の紫燕呢喃、枝上の黃鸝睍睆。觀世音菩薩、諸人の爲に普門法を說く、諸人還つて見るや聞くや。歷歷妨げず、同じく金剛三昧を證

㋮乙卯。正和四年なり。

することを。若し也た見ず聞かずんば、」良久して云く、「山轉じて路なきかと疑ひ、溪斜にして別に村あり。」

因に夜遁れて回る上堂。自ら劾して云く、「閑を求めて夜遁る、詔して追回す、的的要津を把斷し來る。滿面の塵埃眞に笑ふべし、誰か憐む百念已に全く灰することを。」

南禪語終

小參

結夏、門の入るべき無し、目前徑に重霄を透る。路を得て便ち行く、脚下泥深きこと三尺。所以に鰲峰が者裏、安居結制、只だ要す諸人分に隨つて時を渡ることを。忽ち一箇の脚蹉ひ手跌ふことあらば、便ち雲龍の水を出で、金鳳の空を搏つが如し。圓覺の伽藍に住せず、平等性智を毀罵す、山僧只だ低聲に伊に向つて道ふ未在と。何が故ぞ、大海若し足ることを知らば、百川應に倒に流るべし。

冬至、「一法有にあらず、天何ぞ高く地何ぞ厚き、萬法無にあらず、白は是れ鵠、玄は是れ烏、寶陀與麼の告報、箇の出で來つて道ふもの有り、此の一陽來復、萬彙發生するに當つて、石筍條を抽んで、氷河焔を起す、畢竟是れ有か是れ無か。」良久して云く、「岸に到つて筏を尋ぬることを休めよ、家に歸つて途を問ふことを罷めよ。」

除夜、「今日明日、新年舊年、四時密に運り、萬化迭に還る。西舍東隣、窮を送り富を待つ。張公李老、鬼を祭り錢を燒く。唯だ禪和家ありて、鬧蕩蕩地、緣に逢ひ境に遇ひて、眼鼻孔を見るが如きと一般なり。然りと雖も、甚に因つてか十箇の指頭、長あり短ある。寶陀箇の道ふ處あり、只だ恐る人の點首する無きことを。」良久して云く、「大盡三十日、小盡二十九。」

結夏、「禁足護生、胡孫露柱に繫ぐ、尅期取證、盲鶴清池に下る。衲僧家一切處破除、一切處成就、閙市裏放憨賣峭、孤峰頂月に嘯き雲に眠る。若し是れ二千年前の舊路ならば、終に肯て容易に脚を下さず。然も是の如くなりと雖も、開眼も也た著、合眼も也た著。」拄杖を卓すること一下。

解夏、「晝飡夜寢、潙山薄處先づ穿つ、粟を植ゑ畬を開く。大仰奸中黠を放つ、福山一夏空しく過して空しく過さず、曾て儞諸人を謾ぜず。一夏空しく過して空しく過さざるも、也た鶴は長く鳧は短し、棘は曲り松は直し。物は是れ定價、錢は是れ足陌。然りと雖も明日布袋頭開く。諸人東に去り西に去る。前途忽ち人ありて本分の事を問はゞ、未審し如何が箇の消息を露さん。」拂を撃つて云く、「牛角長きこと二寸、兎角長きこと三尺。」

除夜、「雪に因む。」「要津を把定す、凜凜たる千峰に寒玉聳ゆ、線路を放開す、融融たる萬國祥光を動す。儞若し放開把定の處に向つて摶量せば、紛飛裏に輥じて、出身の路なし、放開把定の處に向はずして領會せば、冷地上に臥して甚の了時かあらん。直饒ひ虛空粉碎し、大地氷稜し、逈に塵を絶して、洞然として明白なるも、」拄杖を拈じて云く、「福山拄杖子、也た未だ肯て儞が過を放さざること在り。何が故ぞ。一年三百六十日、今宵正に是れ㊀結交頭。」拄杖を卓すること一下。

結夏、「向上の一路、千聖不傳。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「者裏箇

㊀結交頭。頭は新年のこと、交は交替の義、結は結尾にして年の終りのこと、新年頭と交代する年の終りにして、大晦日則ち除夜なり。

の入頭を得、三世の諸佛、只だ脚跟下に在り、十方世界、只だ一針鋒に在り、甚の禁足護生とか說き、甚の尅期取證とか說かん。與麼與麼、水を退けて鱗を藏す、不然不然、雲を望んで樹に上る。」卓一下して云く、「三世の諸佛影迹を絕す。」卓一下して云く、「十方世界百雜碎、七縱八橫、東倒西擂、笑倒す明州の㊀憨布袋。」

冬至、全く巴鼻なし、死水獰龍を躍らす、別に生涯あり、虛空孔竅を開く。等しく是れ通天の活路、多少の人か脚高く脚低き。則ち自己の家鄉なりと雖も、也た儞が親行親倒せんことを要す。是なることは則ち固に是、其れ奈せん我が此の一衆、總に軒昂の氣宇、洒落の風標を具し、妙、環中に契ひ、智、象外に遊ぶ、終に此の機境に墮せざることを。然りと雖も、冬至寒食一百五、前頭大いに雪の在るあり。

結夏、「直下に承當するも、鐵關是れ險にあらず、別に解會を求むるも、弱水未だ遙なりとせず。若し也た眼戸に挂けず、意玄に停めざるも、影響の流、又持論し難し。所以に福山尋常、敢て諸人に錯誤すること一絲毫許りもせざることは、蓋し冬寒く夏熱く、東土一同、夜暗く晝明かなることは、西天に異ならざるが爲なり。是なることは卽ち是なり、只だ那の蘭陀寺の如きんば、明日幾人有りてか結制せん。」拄杖を拈じ、卓一下して喝一喝。

冬至。德山の棒、皮下に血なき底痛からず、臨濟の喝、耳根聽なき底聞かず。若し也た痛を知得し、

㊀憨。愚なり。

聞を聽得せば、正に是れ沙尾顋を曝し、蘆根翮を鎩ぐ。衲僧家、上攀仰なく、下己躬を絶す。玄機を未兆に戢め、冥運を卽化に藏す。騰騰任運、蕩蕩拘なし、豈に寒暑の變遷に屬せんや、甚の陰陽消長をか管せん。譬ひ伊れ是の如くなるも、福山也た未だ儞を許さざることあり。何が故ぞ。一冬二冬叉手當胸。

解夏、僧問ふ、「棒頭に薦得するも未だ是れ作家にあらず、喝下に承當するも猶ほ鈍漢となす。此の二途を去つて、乞ふ師方便せよ。」師云く、「退後退後。」僧云く、「謂つべし、是れ蘆花兩岸の雪、江水一天の秋と。」師云く、「事を聽くこと眞ならざれば、鐘を喚んで甕となす。」僧云く、「記得す、僧、古德に問ふ、『正恁麼に來る時如何。』云く、『金剛鐵券を鑄る』と、意旨如何。」師云く、「帽を買ふに頭を相す。」僧云く、「一向に恁麼に去る時如何。」云く、『道士倒に驢に騎る。』又作麼生。」師云く、「席を像つて令を打す。」僧云く、「恁麼、不恁麼の時如何。」師云く、「甜瓜は蔕に徹して甜し。」僧云く、「恁麼、却つて恁麼の時如何。」師云く、「苦瓠は根に連つて苦し。」僧云く、「總に不恁麼の時如何。」師云く、「百雜碎。」僧云く、「只だ一夏已に過ぎて布袋頭開くが如きんば、親切の一句如何が垂示せん。」師云く、「石鏡を懸くるを勞せず、天曉けて自ら鷄鳴。」僧云く、「與麼なる時は卽ち柳標横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」師云く、「脚跟下好し三十を與ふるに。」乃ち云く、「三世の諸佛あることを知らず、眞、僞を拈はず、狸奴白牯卻つて有ることを知る。曲、直を藏さず、來由ありて準的なし。恁麼も也た得たり。

不恁麼も也た得たり、恁麼不恁麼總に得ず。座盤に和して一掲に掲翻す。便ち見る、地、八維を絕し、天、四壁なきことを。拄杖頭邊、此土西天、艸鞋跟底、閻浮檀特。然りと雖も、此れ猶ほ是れ衲僧、尋常の遊戲、只だ九十日の內、諸人所修所證の如きんば、親切底の事作麼生。」喝一喝して、「我れは荒草裏に行き、汝は又深村に入る。」

除夜、「臘は更籌を逐ふて盡き、春は斗柄に隨つて回る。寒暄一夜隔り、客髮兩年催す。與麼與麼、滴水滴凍、徹骨の寒威、不與麼不與麼、春幽谷に回つて和氣熙熙たり。與麼不與麼。」拄杖を拈じて云く、「大いなる哉乾元新歲の曆、天然の奇格去年の梅。」卓一下。

冬至、「畫榜堂前、灰を篩ひ鬼を厭ふ、菓卓を撥退して、陣を突き旗を爭ふ。豈に知らんや、朕兆未分已前、一毫も了に差互なきことを。衲僧家、智、象外に游び、妙、環中に契ふ、時に隨つて寒暑任運、西東驀到渾べて伎倆なし。窮まるときは卽ち變じ、變ずるときは卽ち通ず。水の水に入るが如く、空の空を藏すに似たり。」拄杖を拈じて云く、「從前の汗馬人の識るなし、卻つて重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。」

解夏、擧す、僧、趙州に問ふ、「承はり聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや否や。」州云く、「鎭州に蘿蔔頭を出す。」師云く、「蘿蔔親しく曾て鎭州より出づ、門前千古路悠悠、朝朝暮暮人來去す、幾箇か親しく曾て地頭に到る。」

小參　終

法語

㋑龜山法皇に上る

佛祖の大事、明白徑截、相を離れ名を離れて、唯だ大智願を貴ぶ。大力量の人、纎塵未動已前に於て、猛に精彩を著く。一提に提得して便ち見る古今に輝赫し、天地を照耀するとを。大にしては九有に梯杭し、四生に津濟たり、小にしては語默動靜、俯仰折旋、左右原に逢ひ、遠近的に中らずといふとなし。所謂大人、大見を具し、大智、大用を得ること是れなり。若し也た智願微に、力量小なるときは、情塵に循ひ世網に纒はられて、勇んで自ら決裂すること能はず。夫の探集を務め、見知を銜ひ、詞辯を逞しうし、精魂を弄し、頓に自ら休歇すること能はざることは、皆當面に蹉過するものなり。故に達磨大師、梁皇に對して、只だ箇の㋺不識と道ふ、㋩無業唯だ云ふ、莫妄想と。後來或は㋥叉を擎げ、㋭地を打し、㋬指を竪て、㋣拂を竪て、㋠棒を行じ、㋷喝を行じて、種々慈を垂る。覿面提持するに

㋑龜山法皇。人皇九十代、後二條院嘉元三年九月十五日崩御。

㋺不識。梁武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか聖諦第一義、」磨云く「廓然無聖、」帝曰く、「朕に對するものは誰ぞ、」磨曰く、「不識。」

㋩無業。汾州無業國師曰く、凡そ請問あれば只だ莫妄想と答ふ。

㋥擎叉。南嶽下四世、五台山秘魔嵓和尚、常に一の木叉を持して、僧の來つて禮拜するを見る、卽ち頸を叉却して曰く、「那箇の魔魅か汝を出家せしむ、那箇の魔魅か汝をして行

非ずといふことなし、人の直下に便ち領ぜんことを要す。豈に肯て二に落ち三に落ちんや。仰ぎ惟みれば、陛下、記を靈山に受け、海宇を統御して、累劫の熏習、信を宗乘に篤うす。茲に問を賜ふことを蒙こ、誠に菲薄を媿づ。謾に管見を以て槩陳すること右の如し。

天縱の聖、悟は師に由らず、正眼豁開し、全機獨脫するときは、則ち一切處一切時、聖子を導養し、天下を光宅し、日に萬機に應じ、物を開き務を成すに至る。本有光明の妙用、佛祖向上の一著に非ずといふことなし。外此れ別に求めば、則ち所謂道に非ず矣。

相州太守に示す

(リ)即心即佛の一轉語、眞に是れ渾鋼鑄就す。如今此の旨を明めんと欲せば、但だ正信を存し、心、決定を具し、志、應酬事物、折旋俯仰、行住坐臥、飲食起居、一切處一切時に於て、常常提撕し、反覆究觀し、常に身心をして虛豁ならしめば、正念現前し、久久の間に、必然として心體廓然たらん。雲開いて日朗かに、塵盡きて鏡明かなるが如く、直下に疑滯なか

脚せしむ、道ひ得るも又叉下に死せしめ、道ひ得ざるも又叉下に死せしめん、速に道へ、速に道へ、云云。」

(ホ)打地。忻州打地和尚、江西に旨を領じて常に其の名を晦ます、凡そ學者問を致さば、唯だ棒を以て地を打つて之を示す、時に之を打地和尚と云ふ、一日僧に棒を藏却せらる、然して後問を致す、師但だ其の口を張る。

(ヘ)竪指。倶胝和尚、凡そ所問あれば一指を竪つ、師臨終、衆に謂いて曰く、「我れ天龍の一指頭の禪を得て、一生受用不盡。」卽ち一指を竪てて逝す。

(ト)竪拂。靑原因に石頭に參ず、師問ふ、「甚れの所よりか來る、」石曰く、「曹溪より來る、」師、拂子を竪起す。

(チ)行棒。德山、凡そ僧の門に入るあれば便ち棒す。

るべし。況んや此の心本來明妙、蓋し無始無明、妄想執著に由る、所以に昏蔽なり。若し一旦洞徹するときは、則ち諸佛と無二無別ならん。從上の佛祖、世に出興して種種化誘し、衆生をして此の心を明了ならしむるに過ぎざるのみ。但だ學道の人、根に利鈍あり、緣に淺深あり。上根利智の若きは、一聞千悟、家堂を穩鎭して、更に何の事か有らん。中下の機の如きは、當に勉めて自ら修習すべし。仰山和尚の所謂、若し安禪靜慮せずんば、者裏に到つて、總に須らく茫然たるべしと、是れなり。然も安禪の時、必ず二障あり、一に謂ふ、昏沈睡眠、二に謂ふ、雜想紛亂。此の障起る時、只だ箇の卽心卽佛を提げて、便ち一截に截斷す可し、又心を將つて湊泊すべからず、意を用つて摶量すべからず、緩にすべからず急にすべからず、又自ら疑慮を生ずべからず。我が塵俗の身心、如何が便ち是れ佛と言はん、又預め憂ふべからず、此の心如何が便ち明了を得ん。才に此の念あれば、便ち障道を成す、但だ請ふ此の如く功を用ひば、忽然として築著磕著せん。直下に桶子底の脫するが如く一番せば、妨げず是れ箇の了事の大丈夫なることを。古人云く、但だ當心に辨ぜよ、必ず相賺さざれと。

㋺行喝。臨濟和尚、凡そ僧の門に入るあれば便ち喝す。
㋫卽心卽佛。馬祖因に大梅に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖曰く、「卽心卽佛。」

雲州禪門慧徧に示す

一心無事なれば萬境生ぜず、心境虛融せば聖凡何ぞあらん。聖凡情盡き、體露眞常、體虛空の如眞常本寂、三界の出づべきなく、菩提の求むべきなし。一道空平、逈然として獨脫、之を寶王三

味と謂ひ、亦大總持門と名く。祖師門下之を金剛王寶劍と謂ふ、之を得る者其れ善く護持せよ。喝。

義則侍者に示す

則侍者、母の訃を以て至り、別れを言ふて里に還る。紙を袖にして語を覓む。余が曰く、「汝、侍司に居ること一年、旦暮相從ふ。豈に知らざらんや、山僧元語句なきことを。今乃ち之を求めば、是れ我れを知らざるなり。」之を扣くこと愈力む。因つて虛空を借りて口と爲して、以て之に問ふ。「汝曾て漸源、道吾の侍者と爲り、因つて同じく往いて弔慰す。㊈生死の話を擧して、道吾、拳頭を用ふる底の消息を聞くや否や。」則云く、「某甲粗知る、只だ是れ敢て造次ならず。」余が曰く、「大丈夫、虎鬚を捋づ、也た是れ尋常、今既に未だ能はず、且く去つて、北堂元曾て死せざる底の面目を見得して分曉ならば、妨げず再來一著を懆暴せしむることを、山僧那時又別に區處を作さん。」

良眞首座に示す

絲毫の係念、三塗の業因、瞥爾として情生ずれば萬劫の羈鎖、直に絲毫淨盡、一念不生なることを得るも、未だ是れ衲僧行履の處にあらず。衲僧

㊈生死話を擧す。潭州漸源仲興禪師、道吾の會下に在つて侍者となる、一日吾に侍して檀越家に往いて弔慰す、師、棺を撫して曰く、「生耶死耶、」吾曰く、「生とも道はじ死とも道はじ、」師云く、「甚麼としてか道はざる、」吾曰く、「道はじ道はじ、」歸つて中路に至つて、師云く、「和尚今日須らく某甲が爲に道へ、若し道はずんば和尚を打し去らん、」吾曰く、「打つことは打つに任す、道ふことは即ち道はじ、」師便ち吾を打つ、院に歸つて曰く、「汝宜しく此を離れて去るべし、恐らくは知事知ることを得ば不便ならん、」師乃ち禮辭して村落に離れて三年を經、後大悟す云云、五燈會元五に出づ。

家、一法を取らず、一法を捨てず、眼裏に見、耳裏に聞く。若し智眼明かならずんば、區宇に墮在せん。者裏能く道理なき處に向つて、放心捨命、一回再甦せば、起き來つて心眼清寒、隨處に自在ならん。若し也た稍遲回に渉らば、便ち石火中に向つて參取せよ。咄。

法語終

㋑拈古

梁の武帝、達磨大師に問ふ「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く「廓然無聖。」帝云く「朕に對する者は誰そ。」磨云く「不識。」

大小の祖師、力を盡して道ひ得ず、未だ麻纏紙裹することを免れず。

僧、谷隱慈照禪師に問ふ「如何なるか是れ道。」照云く「臘月三十日。」

是なることは則ち是、王言絲の如く、其の出づること綸の如し。若し不言を以て化し、無爲にして治めば、之を輥ずること卽ち遠し。

僧、雲門大師に問ふ「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く「東山水上行。」圜悟拈じて云く「天寧は卽ち然らず、如何なるか是れ諸佛出身の處と問ふものあらば、只だ佗に向つて道はん、薰風自南來、殿閣生微凉と。」大慧聞き得て豁然として悟る。

掣電の機懸河の辯は、佗の跛脚の阿師、包齒の老漢に還す。若し是れ諸佛出身の處ならば、直に是れ天地遼遠。只だ大慧の如きんば、甚に因つてか悟り去る。道ふことを見ずや、物見て主眼卓

㋑拈古。卽ち拈提と同じ、古則を拈弄することなり、東山外集に曰く「建祖禪人、東山に拈古を問ふ、山曰く、拈古の法は他なし、只だ眼正しくして古人に出づる手段ある事を要す、若し又古人の田地に到るのみならば、亦他底を動ずることを得ず云云。」

竪す。

㋺藥山和尙、㋩雲巖。㋥道吾と同じく遊山する次で、樹二株を見る、一は枯れ一は榮ゆ。山遂に問ふ、「榮者が是か枯者が是か。」雲巖云く、「榮者是。」山云く、「灼然として一切處、光明燦爛として去らん。」又道吾に問ふ、吾云く、「枯者是。」山云く、「一切處、枯淡にし去らん。」㋭高沙彌忽ち到る、遂に高に問ふ、高云く、「榮者は從佗あれ自ら榮え、枯者は從佗あれ自ら枯る。」山云く、「不是不是。」

樂は其れ知んぬ可し、始めて作るときに翕如たり、縱すときに純如たり、皦如たり、繹如たり、以て成ることを。

僧、風穴和尙に問ふ、「語默、離微に涉る、如何が不犯を通ぜん。」穴云く、「常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」雪竇和尙云く、「若し人の雪竇に問ふもの有らば、只だ佗に對して道はん、劈腹剜心と。」云。又作麼生。復た云く、「風に因つて火を吹く、別に是れ一家、鼈を傷つけ龜を恕すことは、必ず應に主あるべし。」

勇、㋬賁育の如く、智、㋣良平の如し。二大老固に是れ作家の手段、若し離微を犯さざることを要せば、也た恐らくは未在。且く作麼生か不犯を得ん、明日來れ汝に向つて道はん。

㋺藥山。澧州藥山惟儼禪師、法を青原下二世石頭に嗣ぐ、五燈會元卷五に詳にあり。

㋩雲巖。潭州雲巖曇晟禪師を云ふ、百丈に參ずること二十年、機緣契はず、終に藥山に行きて嗣法す。

㋥道吾。潭州道吾山宗智禪師、法を藥山に嗣ぐ。

㋭高沙彌。藥山禪師に嗣法す。

㋬賁育。孟賁、夏育の二人、共に古の勇者なり、戰國策に曰く、「烏獲之力而死、賁育之勇死」

㋣良平。漢の張良、陳平、共に漢の謀臣なり。

臨濟、德山に侍立する次で、山云く、「老僧今日困ず。」濟云く、「老漢寐語、作麼生。」山、棒を拈ぜんと擬す、濟便ち禪牀を掀倒す。

諸人會すや、二老漢、小を爭ふて大を失す。

僧、投子和尚に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」投子、禪牀を下つて立つ。

投子老人、僧に一問せられて、直に得たり身を起し地に立つことを。若し是れ十身調御ならば、大いに蠡を持して海を酌み、草を折つて空を量るに似たり。

文殊、三處に夏を度る、迦葉白椎して文殊を擯出せんと欲す。方に椎を拈ずる次で、乃ち百千の文殊を見る、椎舉ぐること能はず。世尊云く、「迦葉、汝那箇の文殊をか擯せんと擬す。」迦葉對なし。

一朝權手に在り、令行ずる時を看取せよ。迦葉未だ曾て椎を舉せず、黄面の老漢、文殊大士、已に俱に擯出し了る。甚麼の那箇を擯せんと擬すとか說かん。然も是の如くなりと雖も、法を盡せば民なし。且く一著を放過せよ。

拈古　終

頌古

洞山 ㋑麻三斤

鐵蒺藜槌當面に擲つ、忽忙として首を回せば已に遲遲。春光眼に滿ちて花笑を含み、東君に問著すれば總に知らず。

瑞巖 ㋺主人翁

自ら呼び自ら應ふ來由あり、傍觀を引き得て笑ひ休せず。盡く謂ふ莊周胡蝶を夢むと、誰か知らん胡蝶莊周を夢みることを。

心不是佛、智不是道

年去り年來りて舊又新、雪消し風暖にして自ら春を回す。蓬頭垢面時に隨つて過ぐ、佛祖從來人を度せず。

日面佛月面佛

羞らくは菱花に對して鬢雲を整ふことを、玉顏二八正に春に嬌ぶ。風に傷られて咳嗽す尋常の事、卻つて虛勞と作つて人に說向す。

㋑麻三斤。洞山和尚、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛、」山曰く、「麻三斤。」

㋺主人翁。瑞巖和尚、常に盤石の上に坐して自ら主人公と呼び、自ら應諾して惺惺著云々、前に已に揭ぐ。

㊅國師三たび侍者を喚ぶ

門外の羊腸世路危し、綢繆寧ろ免れんや家私を話ることを。然も毫髮も留隱なしと雖も、肝膽楚越の時を防ぎ難し。

玄紹二上座、烏臼に參ず

電火裏白刃縱横、石火中紅旗閃爍。人をして長く李將軍を憶はしむ、一箭雙鵰手に隨つて落つ。

㊁萬法と侶たらず、是れ何物ぞ

一口に吸盡す西江水、四海五湖皇化の裏。官酒を喫し了つて官街に臥す、起き來つて箇の邏邏哩を唱ふ。

大家相聚りて莖虀を喫す

大家相聚りて莖虀を喫す、路は門前にあり自ら迷ふこと莫れ。臺榭綠陰人寂寂、風光は元是れ武陵溪。

萬里寸草なし、門を出づれば便ち是れ草

孤鶴冷翹す松頂の風、片雲忽ち過ぐ大虛空、衲僧の動止渾べて無碍、肯て宅家荒草の中に落ちんや。

㊅國師三喚。六祖大師の法嗣慧中國師、三度侍者を呼び、侍者三度應諾す、國師云く、「將に謂へり、吾れ汝に辜負することを、元來却つて是れ汝吾れに辜負す」と。

㊁不與萬法。龐居士、馬祖に參す、一日問うて曰く、「萬法と侶たらざるもの是れ什麼人ぞ、」祖曰く、「汝が一口に西江水を吸盡せんことを待つて、即ち汝に向つて曰はん、」士言下に玄旨を領す。

風頭稍硬し、且く暖處に歸つて商量せよ

玉帳沈沈として巧に籌を運す、安南塞北全く收めんと要す。當時若し英雄の漢あらば、鼓を奪ひ旗を爭ふて未だ肯て休せず。

居一切時、不起妄念

千峰雨過ぎて寒翠を瞻る、萬木霜餘落紅を看る。飮啄緣に隨つて時節を過す、誰か知らん身は太平の中に在ることを。

婆子、趙州の笋を偸む

蒼龍頭上角を拶折す、猛虎口中牙を拔得す。是れ渠儂が意氣を張るにあらず、相逢ひ正に遇ふ惡冤家。

京師に大黃を出す

古本方書世に行ふの際、臭腐を將つて神奇と作すに慣ふ。生を回し死を起す些兒の妙、盧扁耆婆未だ知ることを得ず。

頌古　終

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下

偈頌

❶古源

一川虛漾淥粼粼、流注知んぬ幾劫塵をか經ん。桃小紅を破つて春岸に著く、曾て路に秦人に接する無かるべし。

儉上人の鄕に還るを送る

特地今朝又程を問ふ、扶桑未だ必ずしも東溟に在らず。南朝四百八十寺、那の處か春山草青からざる。

梅峰

大庾嶺頭根種別なり、氷肌玉骨自ら天眞。曉來孤頂雪深き處、五葉一花天地の春。

畢世面壁　扁

蒙頭一衲餘年を送る、百煉の精金色轉た鮮かなり。卻つて是れ老胡元會せず、人の雙臂を誤つて完

❶古源。桃花源のことを詠じたるもの。

全ならず。

夢　庵

一枕の蘿窻萬境閒なり、槐宮は元人寰に異ならず。若し門壁に於て㊀心字を書せば、又黃粱未熟の間にあり。

雪中、均侍者の京に歸るを送る

漫空袞袞として六花新なり、短策肩に横へて遠く津を問ふ。一色明邊歩を移し得たり、東風桃李洛城の春。

險　崖

峭峻たる一方窺ふことを得ず、紛紛斫額して但だ空しく回る。上頭更に孤危の處あり、手を撒して渠が親しく到來せんことを要す。

準侍者を送る

眼光遙に海色に映じて碧なり、短策秋を陵いで又東に向ふ。若し諸方に對して來歷を話らば、言ふこと莫れ相見途中に在りと。

師齊禪人、師を省するを送る

見は師と齊しうして師德を減ず、紛紛たる佛祖是れ何人ぞ。行行高く踏む毗盧の頂、花柳洛陽三月

㊀心字。昔し一老僧あり、庵の門上に心の字を書し、窓上にも心の字を書し、壁上にも又心の字を書す。

の春。

密　室

六窗深く閉ぢて豈に開くべけんや、佛眼未だ窺はず亦自ら迷ふ。既に是れ曾て水泄を通ぜず、曾て讒に道ふ爛れて泥の如しと。

寒　潭

直下窺ふ時深きこと萬丈、冷氷氷地瀾を生ぜず。霜天夜迴にして月璧を沈む、未だ許さず蒼龍の此に屈蟠することを。

南　山

碧羅浮に聳ゆ更に那邊、空に倚る孤峻蹟攀を絶す。霏霏たる密霧玄豹を隱す、眼を著けて誰か曾て一斑を見ん。

達　心

紛飛撲くる處自ら明白、内外中間讒に求むること莫れ。夜半腰に齊しうして人見えず、三星聯り照して月鉤の如し。

字　堂

濃研香墨霜毫を蘸し、揮灑軒に當つて意氣豪なり。一點空中八法に誇る、睦州の門戸未だ高しと

せず。

古　樵

斧鈍く柯消して春を記せず、一肩の枯燥重きこと千鈞。笑ふ他の當日嶺南の獠、低價門に沿ふて人に㊟摠與す。

> ㊟摠與。二字とも「あたへる」なり。

鐵　船

六州の頑と鈍とを收拾して、潑天の爐鞴巧に鎔し成す。時に乘じて含靈を運濟し去る、華亭月明を載するに似かず。

無　相

九十七種元有に非ず、誰か言ふ千百億分身と。更に色後聲前に於て覓めば、舜若多神笑轉た新なり。

石　門

巖崖の險しき處重關を立つ、碓は實に須らく知るべし入作の難きことを。一拶東西南扇と成る、苺苔路滑にして雨初めて乾く。

少　林

面壁人歸つて歳月移る、叢叢の寒樹半ば枝無し。霜に凋む萬葉血よりも紅なり、又是れ魂驚く斷臂の時。

雨夜の作

一秋長に是れ雨淋零、點滴空堦夜夜の聲。三十餘年江海の夢、博山煙斷えて一燈明かなり。

雪夜の作

寒は添ふ少室齊腰の恨、凍は結ぶ鰲山客路の情。一夜窻を打して聲淅瀝、又閒事に因つて無明を長ず。

紅白梅　然翁禾上の韻を和す

花五葉に開いて韶光に媚ぶ、艷質同じと雖も卻つて粧異なり。是れ枝南北に分つ後なる可し、搽坯抹粉馨香を鬪す。

四時般若

品物陽和

暖風晴日山川媚ぶ、細雨輕煙草木薰ず。活意明明委せざるが如し、桃花羞ぢ見ん老靈雲。

園林清暑

殿閣薫風日正に長し、綠槐紅藕林塘に徧し。言ふこと莫れ人世炎蒸甚だしと、馳求を歇得すれば心自ら涼し。

萬里清光

爽籟蕭蕭として玉宇寛し、桂花芬馥として月輪圓なり。韶陽體露金風の句、知んぬ是れ何人か擧し得て全し。

千峰寒色

雪霽れて層巒爭ふて玉を聳す、曉風高く拂ふて凍雲開く。瑤英滿樹天香遠し、一夜清寒骨に徹し來る。

獨脫無依

萬物既に唯だ我れ、㊁翛然として只だ自由。宗乘竟に何か有る、佛祖是れ怨讎。天は闊し孤雲の晩、風は高し一鶚の秋。寥寥として閑に目を送る、新月叉鉤を懸く。

隨流得妙

手に信せて拈じ來つて用ふ、當機著著親し。烏藤夜鼠を驅り、白拂窓塵を拂ふ。池靜にして魚の樂しむを知り、松疎にして鶴の身を見る。絲毫も曾て間てず、眼を開けば迷人あり。

正和丙辰立春の日

太上皇、㋭慈濟庵に幸したまふ。謾に野語を成し、上奏すと云ふ。

庵を結んで聊か爲に衰殘を養ふ、敢て望まんや　皇明の野菅を顧みることを。陋巷の士民寶仗を

㊁翛然。疾きことなり。

㋭慈濟庵。庵は昔年京師粟田口、華頂山下にあり、三河阿闍梨の開創地なり。

瞻、近鄰の兒女堯顏を覩る。和融せる陽煦寒谷に生じ、赫奕たる衣冠掩關に耀く。睿恩を感荷して三祝して願ふ、福は東海に同じく壽は南山。

○御製和　卽席

⊕河東を瞻覩して此の庵に到る、載めて陽にして雪盡く路邊の菅。參禪夜に向つて閒坐を訪ひ、慈濟春を迎へて老顏に謁す。花色水聲意地に通じ、臘梅寒樹悉く機關。靈光今照して天外從す、新月始めて昇る檻上の山。

⊕陽明里前博陸甲第

異邦の珍玩妙莊嚴、花柳春に逢ふて滿院芳し。法法元來內外に非ず、更に何れの處に於てか西方を覓む。

⊕銀青光祿大夫有忠卿。立春の韻

盤に堆き青菜佳節に酬ゆ、漸く見る南枝小梅拆くことを。名卿に坐對して兩つながら語なし。唯だ華髮を將つて高才に伴ふ。

十牛の圖に和す、幷に序

十牛の圖は、古宿途轍なき中の途轍なり。若し此の事を論ぜば、眉毛を眨上して、早く已に蹉過す、況んや淺深次第の異あるをや。然れども聖を去ること逾遠くして、法、危末に當る

○御製。後宇多院天皇なり。
⊕河東。鴨川の東南禪寺の境內。
⊕陽明。近衞公第なり、博陸は攝政をいふ。こゝには近衞家平公を指す、公は正和二年七月關白に任じ、同四年九月二十一日薨む。
⊕銀青。銀色青綬の約、漢代に光祿大夫の佩びたるもの。光祿大夫は宮殿禁門の事を掌る職。和名春宮大夫、有忠は六條家の三代なり。

根性優劣多く、機用遲速あり、又一槩に之を定むべからず。故に未だ免れず曲設多方、以て之を誘掖することを。此の圖の作れること是耶。此の微旨を究め、各各安樂休歇の地に至つて、以て自利利人すべし。此の圖後來世に布く、諸老頌する者、和する者頗る多し。今山僧揣らず、貂を諸老の後に續ぐ。覽者謾に一笑を發せよと云ふのみ。

尋牛

本形跡の求尋すべきなし、雲樹蒼蒼として煙艸深し。脚下然も岐路別なりと雖も、巖前の枯木自ら龍吟。

見跡

艸窠裏に走る路何ぞ多き、只だ此の㊀蹄跡是なること莫き麼。脚力窮る邊重ねて歩を進む、昂昂たる頭角佗に逢はんと要す。

見牛

風暖なり幽禽枝上の聲、雨餘の原艸色尤も青し。者の囘已に渠が頭面を覩る、㊁戴氏が毫端も寫し成らず。

得牛

鼻孔遼天渠を拽轉す、今より狂逸の性須らく除くべし。雪山の香艸煙に和して細し、且く要す驅り

㊀蹄跡。牛馬の足あと。
㊁戴。戴嵩、牛の畫の名人。

來つて此に向つて居せんことを。

牧牛

時に隨つて水艸渠が身を活す、純淨何ぞ曾て一塵を染めん。苗稼自然に混じ犯さず、收來放去却つて人に由る。

騎牛還家

羸牛已に純にして却つて家に回る、樹下の柴門暮霞を啓く。放教あれ駒駒として欄裏に臥す、靜に看る新月の簷牙に挂るを。

忘牛存人

蓑笠玆れより山に入らず、鞭繩拋却して一身間なり。更に㋾觳觫の牽拽に勞するなし、贏ち得て謳歌す翠靄の間。

㋾觳觫。死を怖れるさま。

人牛倶忘

一念空ずる時萬境空ず、重重の關隔豁然として通ず。東西南北了に跡なし、只だ此の虛玄正宗に合ふ。

返本還源

既然無作何の功か有る、眼見て盲の如く聽いて聾に似たり。澗水湛として藍色の碧なるが如く、山

花開いて錦機の紅なるに似なり。

入鄽垂手

毛皮を換却して歩を轉じ來る、烏觜と魚腮とに依稀たり。通身固に是れ泥水に混ず、我が此の宗門大いに開かんことを要す。

山中四威儀　(ワ)大休和尚の韻に和す

山中の行、艸鞋跟斷えて脚頭輕し。閒情を縱にす、眼裏の風光耳裏の聲。悠然として心跡既に雙淸、歩歩是れ證明に非ずといふことなし。

山中の住、閒踪只だ孤雲の寓するに似たり。門前の路、艸沒し苔荒みて渾べて顧みず。客到れば灰を撥つて半芋を分つ、(カ)懶殘特地に鹽醋に傷らる。

山中の坐、六門用ひず重關を鎖すことを。誰か我れに似たり、獨り雲峰の千葉(ヨ)朶に對す。雪夜若し人臂の墮するなくんば、面壁の胡僧懡㦬を成さん。

山中の臥、松根石榻平かにして座の如し。造作に非ず、黑甜境裏乾坤大なり。只だ(タ)奯公の者箇を知るあり、鰲店當年曾て說破す。

偈頌　終

(ワ)大休。諱は正念、宋僧にして東來す、石溪月に嗣ぐ、松源三世、鎌倉淨智寺開山、圓覺二世、建長三世。
(カ)懶殘。俗に芋懶瓚といふ。
(ヨ)朶。「えだ」なり。
(タ)奯公。巖頭の諱は全奯なり。

贊佛祖

出山の相

門裏に身を出すことは易く、身裏に門を出づることは難し。六年折合なし、北斗南に面つて看る。

頭陀の相

錫を持し盂を擎げ去つて分衞、七佛の儀式豈に是の如くならんや。增金の面皮特地に黃なり、人を瞞ずる手脚全く敗露。

觀音大士

大圓鏡に立つて、如來藏を空ず。動靜の相生ぜず、音聞性俱に淨し、斷崖流水頭を低れて聽く。海上に蓮舟を踏み、俯視す水中の月。一滴楊枝の雨、淸凉塵刹に徧し、是れ普門の境なることなしや。咄。

補陀巖上の人、現身三十二。我れと同じく東溟を涉り、三摩地を離れず。

文殊大士

女子の定を出し、維摩の默に對す。叱怒の金毛、更に須らく返擲すべし。

普賢大士

如是經を轉じ、五濁の迷を開く。截流の香象、猶ほ淤泥に溺る。

達磨大師

風颺颺として衣を吹き、一葦に航して之を安んず。敎化別傳兮法なし、梁に游び魏を歷て兮奚をか爲す。

十萬迢迢として遼漠を渡る、卻つて梁皇に對して醜惡を呈す。既に平地に波瀾を起してより、知らず袈裟角を打濕することを。

西來行路錯、御に對して口を開く錯。長江風浪麤し、少林花木落つ、更に言ふ傳法迷情を救ふと。錯錯。

❶形墀語を出して天聽に忤ふ、國を去つて身一葉の輕きが如し。揚子の大江東に去る水、今に至るまで風激す怒濤の聲。

❶形墀。「あかきには」のこと、梁の朝廷をいふ。

布袋和尚

露胷坦腹、醜を擧止に弄す。一般に是れ小兒の戯なりと雖も、兜率陀天を打失する底。

滯貨貨售らず、等人人來らず。憨坐布袋に靠る、笑口誰が爲にか開く。

寶誌和尚

杖刀尺を挑げて塵中に走る、善綴如何が脚手を露さん。良いかな十二面觀音、生は㋺鷹巢に在り㋩塟は龍阜。

魚籃

色を以て盲聾を誑す、誰か知らん伎已に窮ることを。籃中活底なし、徧界腥風を扇ぐ。

馬郎婦

雲鬢亂れて縱横、悲みは深し一寸の情。金沙灘上の月、長く照す誦經の聲。

寒拾

澗泉墨を研いて苔石を汙す、斷壁詩を題して蘚紋を雜ふ。好句依然として顯すことを得ず、峩眉山の月五臺の雲。

㋥舡子和尚

數曲の漁歌和する者稀なり、華亭江上自ら逶迤。舟を艤し手を袖にす風林の下、怜俐の闍梨未到の時。

玄沙和尚

雨笠煙簑一釣篷、蘆花深き處從容を得たり。㋭螺臺江景窮りなき樂み、路を借つて如何が雪峰に

㋺鷹巢。師は鷹の巢中より拾ひ上げられたる故にいふ。
㋩塟。葬に同じ。
㋥舡子。船子誠か。
㋭螺臺江。師は初め南臺江に於て漁者たりし故にいふなり。

上らん。

猪頭和尚

古佛應現すと雖も、敗缺殊に少からず。滋味苦だ多きことなく、粗飡飽を得易し。時の人を引き得て、口を開いて笑はしむ。

蜆子和尚

三文の撈波、東撈西摝。咄。者の窮鬼、蝦を以て目と爲す。

政黄牛

午夜頻に呼ぶ熟炙の時、人に可なる風味誰か知ることを許す。朝來牛背新句を得たり、驚起す溪頭の白鷺鷥。

郁山主

溪橋一攧兩眉橫ふ、瓦礫拈じ來つて夜光と作す。脚下今に至るまで浮逼逼、蹇驢間に跨つて斜陽を踏む。

朝陽

閒處些の工夫を著く、急時須らく受用を得べし。敗壞を以て敗壞を補ふ、金烏曉に東より涌く。

對月

言言月を標するの指、句句啼を止むるの黄葉。了義と不了義と、玉兎夜西に從つて沒す。

亮座主

虛空に講經を聞き、西山に入つて冷坐す。首を回せば碁石空し、熊措大を疑殺す。

智覺禪師

大法の盟主、衆生の導師。向上の事を以て、（へ）法眼の宗派を起す。無礙の智を以て、佛祖の玄微を發す。落落たる慈舟苦海に横はり、輝輝たる（と）宗鏡群迷を照す。定身淨域に歸り、冥帝慈儀を禮す。光明千古（ち）西湖の水、宗旨の發揮盡くる時なし。

密庵和尙

行脚錯つて人に逢ふ、投機の語未だ親しからず。却つて正法眼を將つて、喚んで破沙盆と作す。雷を轟し電を制す、乾を旋し坤を轉ず。東山正續の統を大いにして、濟北瞎驢の群を空しうす。箇箇巴鼻なきことは、只だ（り）渠儂が腦門なきが爲なり。

癡絶祖翁

蜀を離れて已に列祖の業を領ず、南に到つて深く（ぬ）曹源の毒に中る。但だ窮相一雙の手を叉して、諸方に向つて妙に搜抉するに慣ふ。法性海寬うして波瀾闊し、一生妙に轉ず風雷の舌。始め秀水より

（へ）法眼。師は法眼下三世なり、天台德韶國師に嗣ぐ。
（と）宗鏡。宗鏡錄一百卷、永明智覺禪師の著なり。
（ち）西湖水。門前の西湖水云云の句あり。
（り）渠儂。他人をいふ俗語なり
（ぬ）曹源。諱は道生、密庵に嗣ぐ、一山はその三世なり。

㋸陵嶺に至つて、五十餘年巨嶽を興す。當機妙用翳睛の法、破砂盆に觸れて恣に除滅す。嬰兒行を行じて少缺なし、一片の身心鐵よりも堅し。王臣多く居す弟子の列、老い去つて爲人尤も直截。我れ慚づ庸昧の餘烈に嗣ぐことを、西の方玉山を望めば心膽折く。

㋾頑極先師

憶ふ昔伊に逢ふ鄮嶺の頭、端なく我れと寃讎を結ぶ。今朝海上重ねて相見、彼此遮り難し滿面の羞。

蘭溪和尚　英長老の請

南詢西蜀を離れ、傳法東國に來る。濟北の濤瀾を鼓し、㋻無明の惡毒を肆にす。龜毛握に在り兮、佛祖畏避す。頂門四照兮、人天悅服す。是れを此土禪宗の初祖と謂ふ。故に敕旨之に謚して大覺と曰ふ、宗風自ら英賢の續ぐあり。

㋕千光法師

氣貌淸靜、德行虛奇、西に游んで黃龍下の尊宿、老盧室の旨を得たり。東に歸つて扶桑の盛時、㋵兩代帝者の師と爲る。宏に㋟三處の道場を開き、遠く千古の淸規を貽す。其の平生潛行密行、眞に末世光明の勝幢なり。其の祖意敎意に融通する、乃ち東方法道の㋹著

㋸陵嶺。徑山の凌霄峯か。
㋾頑極。明州育王山の住持なり。
㋻無明。諱は慧性、松源岳に嗣ぐ、蘭溪の師なり。
㋕千光。榮西禪師、建仁開山なり、黃龍派の虛庵敞に嗣ぐ、
㋵兩代。土御門・順德の二帝。
㋟三處。博多聖福、鎌倉壽福、京建仁の三なり。
㋹著龜。「うらなひ」「めどきぐさ」轉じて模範、又は龜鑑などに用ふる語なり、「後學の著龜」と虛堂錄の九にあり。

龜なり。

(ソ)無學和尚

風神清峻、氣宇宏豁、(ツ)北礀の波瀾を跳出して、(ネ)龍淵の鱗鬣を奮迅す。四十年宋土憨を放にし、七八載扶桑黠を肆にす。出格の機を提げ、鎖口訣を用ふ。佛眼無門を覰はんと欲す、衲子雪ぎ難きの恨あり。龜毛の拂子手に信せて揮ふ、海岳掀翻して雷電掣す。臨濟の一宗、楊岐の正續、渠に陵滅せらる。別別。耿光千古塵剎を照す。

(ナ)虛舟和尚

矍鑠たる精神、沈深たる器量、路を借つて青山に入る。無得の得を得、袒肩祖道を荷ふ。難行の行を行じ、冷泉の水輥底瀾を飜し、古龍の淵滔天の浪を起す。四十年令吳越に行はれ、數萬里名海上に飛ぶ。夫れ是れを楊岐の直下、松源の的孫、虛舟和尚と謂ふ。

(ラ)大休和尚

心絃よりも直にして、性火よりも急なり。(ム)天池の滴水を以て、東海の濤瀾を助翻す。楞嚴三昧を守つて、平時の功課を勤修す。三四處爲人全提、一平生清坐不臥。佛法の身心微なりと雖も、大いに

(ソ)無學。祖元佛光國師、圓覺の開山、無準範に嗣ぐ。
(ツ)北礀。居簡、佛照光に嗣ぐ、大慧三世なり。
(ネ)龍淵。徑山の方丈の銘なり、無準範禪師をいふ。
(ナ)虛舟。普度、竺元妙道に嗣ぐ、道は横川珙に嗣ぐ、珙は滅翁禮に嗣ぐ、禮は松源岳に嗣ぐ、源は密庵傑に嗣ぐ。
(ラ)大休。諱は正念、敕諡佛源禪師、石溪心月の法嗣。
(ム)天池。石溪禪師の塔扁なり。

師僧の殃禍と作る。末後瑞鹿峯前、煒然として因を收め果を結ぶ。本形相の描貌すべきなし、今虛空を把つて强ひて彩畫す。龜谷山前㋐六を藏する處、傳芳を續ぐに英賢の者あり。

㋖西澗和尙　小師正開の請

高明の氣節、清朗の容儀、太白の的嗣、冷泉の孫枝。唐土に在つて已に兩び鋪席を開き、扶桑に來つて重ねて爐鞴を運らす。大用の處佛祖を存せず、妙唱の時離微を犯さず。此れを大通の眞と謂はゞ、是れ錯つて渠を認む。大通の眞に非ずと謂はゞ、是れ伊を蹉過す。竹篦橫に揮ふ處、又見る花の五葉を開く時。

㋗鏡堂和尙

壯年蜀を離れ走つて唐に游ぶ、藤杖芒鞋四方に徧し。太白峰前轍老に逢ふ、卻つて毒氣を傳へて扶桑に向ふ。

㋭無關和尙

嬌嬌たる龍驤、眈眈たる虎視、聖一師の窮活計、蕩盡無餘、徐師叔の無口刀、用ひ得て正に快なり。三尺の竹篦橫に揮ふ、大地風飛び雷厲し。是れを淩霄の的孫、南屛の家嗣と謂ふ、巍巍たる王臣の師、的的たる衲僧の殃害、㋞慧日峰前、淸風未

㋐藏六庵。大休の塔所、鎌倉龜谷にあり。

㋖西澗。子曇、石帆衍に嗣ぐ、太白は天童をいふ、石帆の住するところ、冷泉は靈隱の名所なり、松源岳をいふ、曇は衍に嗣ぐ、衍は運庵巖に嗣ぐ、巖は岳に嗣ぐ、日本にては建長十一世、圓覺六世なり、滅後に大通禪師と諡す。

㋗鏡堂。圓は環溪一に嗣ぐ、一は無準範に嗣ぐ、建長に住す、七世なり、轍老は環溪をいふ。

㋭無關。字は普門、聖一翁に嗣ぐ、南禪寺開山、元亨釋書六に傳あり。

㋞慧日。東福寺の山號。

だ已まず。

㋳ 葦航和尚

法中の傑、僧中の英、大覺の妙用を得て、濟北の法城を立つ。東州名山廣く佛事を作す、巨福瑞鹿大いに嘉聲を振ふ。檀那の德を欽する所、衲子の誠を傾くる所、又其れ妙圓の智、耆頤の齡なり。又丹青に備ふべからざる者なり。

㋮ 藏山和尚

雲心玉格質に瓌奇、披削先づ聖一師に依る。年少游方大覺に參じ、福山多衆綱維を振ふ。十載徧く唐土に參ず、徑塢と思溪とを勘破す。一帆晚歲鄉國に回る、宗風四處力めて提持す。王臣悉く欽敬を生ず。緇素依歸せずと云ふことなし。七十六年末後の句、八海枯れ九山崩る。無生の曲調人の知ること少なり。

㋘ 桃溪和尚　小師則都寺の請

英明の氣宇、清朗の眉目、大覺の的生、無明の餘毒。西游して道を問ひ、知識に逃ふて名高く位高し。東歸して山に住す、玄風を西國東國に播す。檀信歸崇、禪徒悅服す。小杉田に隱れ、兩ひ瑞鹿を

㋳ 葦航。道然、建長六世、圓覺五世に住す、大覺に嗣ぐ、信州の人、正安三年十二月六日寂す、濟北は虎關師錬をいふ。

㋮ 藏山。順空、聖一に嗣ぐ、宋に入りて石林鞏に依る、徑塢は徑山辭世の偈に云く、「無生一曲、調入㆓指端㆒、九山崩倒、八海枯乾。」延慶元年五月九日寂す、壽七十六、瓌は「うるはしきたま」なり。

㋘ 桃溪。德悟、大覺に嗣ぐ、圓覺四世なり。

尸るに至つて、末後游戯去來す。直に是れ光明照燭、只だ箇の描貌し將ち來つて、永く人天の軌則と爲る。

㊀覺心和尙

無門喝下便宜に落つ、生涯を蕩盡して自ら知らず。赤手歸り來つて活業を成す、東山五葉橫枝を盛にす。御に對する時天顏喜悅し、全提の處衲子眉を攅む。九十二年游戯するのみ、鷲峰千古碧巍巍たり。

㊁高峰和尙

圓照叟の孫　無學翁の嗣、本色を以て住山し、眞慈を以て應世す。文武火再び東方に輝く、鎖口訣重ねて此の地を挫ぐ。話は行はる巨福峯前、老いて憩ふ金寶山內、更に東山の暗號あり、人爭ふて擧揚す。又中峯の沙盆を提げて、手に信せて撲碎す。夫れ是れを眞の濟北直下の子孫と謂ふ、扶桑國大いに別傳の宗旨を振ふ者なり。

㊂規庵和尙

舂空の雲、秋水の月、舒卷高閒、光明澄潔なり。法道の龜鑑、僧中の奇傑、早く龍江老子に依る。剗草の機に契ふて、便ち超方の志を具す、後佛光佛心に侍す。棒喝下妙に

㊀覺心。字は心地、後醍醐天皇、法燈圓明國師と諡す、入宋して無門佛眼禪師に嗣ぐ、虛堂にも參ず、御は龜山上皇、法要を問ひ給ふと云ふ。永仁六年十月十三日寂す、壽九十二なり、鷲峰は紀伊の由良興國寺の山號なり。

㊁高峰。顯日、後嵯峨天皇の皇子、佛光無學元に嗣ぐ、圓照は無準をいふ、巨福は建長の山號、金寶は淨智の山號なり、建長寺の山內正統庵に御塔あり、佛國應供廣濟國師と諡す。

㊂規庵。祖圓、南禪第二世、南院國師と諡す、信州の人、佛光に嗣ぐ、年五十三にて寂す、正和二年四月二日歸雲院に塔す。

錯口訣に稱ふ、妙密の鉗鎚を以て諸方の衲子を煆煉す。眞實の道を以て、福龜山上皇に契合す。二十餘年、其の設施を大いにし、荒棘の林を化して、一方の巨刹と爲す。功成つて居らず、時至つて便ち行く。末後の全提、尤も奇絶と爲す。些子徑山の文武火、今日扶桑煙氣に烈し。

孔子

擧萬世の爲に師とせられ、道一貫に由つて傳ふ。也た知る三千の高弟、尙ほ六籍の陳言に泥むことを。

老子

天地に先んじて生あり。玄妙を極めて傳なし。關尹喜に遇徉せずんば、誰か五千言を授く可き。

巢父洗耳

萬乘君に於て一羽輕し、憐む可し利を逃れて名を逃れざることを。崖泉自ら洗ふ是非の耳、千古潺湲として恨聲を瀉ぐ。

仲父飲牛

義讓清逃各涯あり、徒に聞見を將つて天和を汙す。松根石上一たび首を回せば、觳觫として朝來渇正に多し。

和靖先生

一夜凍つて吾枝痩す、童子寒飢して鶴夢長し。句は目前にあつて吟じ到らず、愁を凝し鼻を擁して㋢匡牀に隱る。

樂天居士

㋐烏窠已に往いて韜光老ゆ、平生の功名一夢非なり。八節の淸灘新に鑿り了つて、吟じて懸瀑を看て苔磯に坐す。

本朝名德の贊

上宮太子

漢地の南嶽、累世善道を修持す。扶桑の東宮、願に乘じて正敎を弘通す。前身後身、一夢兩覺。㋚救世悲心滄海に似たり、萬古の熱光蓬島に滿つ。

上宮太子、病達磨を見る

不來の相にして來り、不見の相にして見す。臥底立底、覿體對現す。既に已に儞が病痛を知り得たり、何ぞ必ずしも更に手を出して面を露さん。更に言ふ傳法迷情を救ふと、如何が英靈の漢を瞞じ得ん

弘法大師

普賢の願海に遊び、佛祖の印明を傳ふ。五筆謾に遊戯す、一注群情を度す。杵を高峰に飛して[illegible]

㋢匡牀。ねどこのことなり。
㋐烏窠。道林、國一道欽に嗣ぐ、牛頭十一世、樂天之に問法す。
㋚救世。太子傳に曰く、一敬禮救世觀世音、傳燈東方粟散王と

老ゆ、定身遺化儼として生けるが如し。

(キ)最明寺

英明の盛德を以て、丕に皇猷を賛く、菩提の大心を以て、佛法を興隆す。世間出世間、一一倶に超越し、靈機密運妙窮りなし、千古の恩光塵刹を照す。

(ユ)最勝園寺

天生英明東國の主、四十年間民の父母。威惠兼ね行ふ六十州、功成つて還つて率陀に向つて去る。

(キ)最明寺。北條時賴なり。
(ユ)最勝園寺。北條貞時なり、時宗の子、相模太郎と稱す。

佛祖贊　終

自讃

㋑慧日譚長老の請

心は止水の如く、貌は枯松の若し。佛法不會、宗說豈に通ぜんや。短拙を懷藏して、赤窮を賣弄す。合に唐土に死すべきに、錯つて海東に來る。曲彔に踞して塵尾を揮ひ、知見を衒ふて盲聾を誑す。怨に敢て風を呵し雨を罵る。能く鳳を打し龍を羅せず。會作家ありて放過せず、却つて五彩を將つて眞容を繪く。

保福㋺猷長老の請

高坐に踞坐して、白塵尾を揮ふ。佛法の傳持すべき無し、世事料理すること能はず。必ず惡業緣あり、遠く扶桑の地に來つて、四五處住山、一些の能事なく、一處、方に通ぜず。鼻孔能く氣を出す、汝今强ひて吾が眞を貌らんと要す。萬古の徽猷只だ箇の是れ。

㋩良眞首座の請

眼眈眈として鼓槌に似たり。頭兀兀として木杓の如し、既に是れ禪なく道なし、何を用つてか海を

㋑慧日譚。古泉と號す。
㋺猷長老。古岩と號す、信州の慈雲寺、播州の法雲寺に住す。
㋩良眞。元相と號す。

迎え漢を撲つ。良い哉眞正の衲人、三尺の龜毛手に信まて揮ふ。烏藤冷熱す禪林角。

㊀良舜維那の請

傳持佛法なし、應用意智沒し。但だ能く飢ゑては飯を喫し、渇しては水を飲む。端なく名元君に徵して金襴を賜ふ。官職妙慈弘濟と號す。迢迢として送過す東大海、年來老病百堪ふることなし。人前全體を露すことを欲せず。「半身」

㊀良舜。日峯と號す。

性淳道人の請

木石の體質、雲水の精神。佛祖を陵辱し、平人を屈抑す。心を說き性を談ずることを解せず。渠が朴に返り淳に還らんことを要す。龜毛手に在ることを得ば、方に能く佗の眞を識得せん。

禪人の請

西來法の傳持すべきなし、今に深雲に向つて遁れて時を過すべし。强ひて胡牀に據つて禪病を掃ふ。佗の佛祖を累して暗に眉を攢む。

尼明宗の請

有にして本空、動にして常に靜。江南水上の閑雲、滄海東邊影を布く。有る時は格外に宗を明め、只だ聲前に曉領せんことを要す。龜毛握にありて縱橫に任す、勘破す末山の頂を露さざることを。

尼明皓の請

唐土老を終へず、海東に驅到せらる。貌陋にして意氣高し、年多くして福德少し。釋迦の嘍囉を嫌ひ、達磨の潦倒を笑ふ。爲人の一句子、目前明皓皓。

又

貌枯れて柴の如く、心頑にして鐵に似たり。明明法の人に敎ふるなし、只だ嗔拳熱喝あり。石上花を栽ゑんと要す、火中偏に鼈を釣る。只だ此れ玄機を付す、輕く漏泄することを得ず。

㊟雲巖居士の請

藤牀に據つて麈尾を揮ふ、禪の談ずべきなく、法の示すべきなし、一味放憨癡。剛ひて道ふ唐土の五嶽山に非ず、扶桑の大海水に非ず、此の無意智の老僧に似たりと。雲巖描貌を要す、佗知らず何の意ぞ。

㊟雲巖居士。俗名は小串範秀、曹源集、少林訣を作る。太淸宗渭和尙の祖父なり。

自讚終

小佛事

葦航和尚の秉炬　臘八

「雪嶺今朝成道、葦航此の日茶毘、今古了に二致なし、信に知る達者歸を同じうすることを。某人、東國の門生、大覺の嫡嗣、一生義を尙ぶ。忠孝志節を以て師門を補贊す。數處の住山、本色の鉗鎚を以て學者を煆煉す。王侯の敬慕する所、士庶の歸依する所、年八十有三を逾えて、老景庵居自ら佚す。時節既に至つて、手を撒して便ち行く、全く色象の先に超ゆ。誰か謂ふ空花亂墜すと。」辭世の偈、「生死の海を驀過して、何ぞ妨げん一葦波に航することを。然りと雖も諸人若し者裏に向つて此の老子を見んと要せば、直に是れ未在。且く道へ甚れの處に向つてか見得せん。」火把を提起して云く、「伊に饒す急に機先の眼を著けよ、疾燄過風第二籌。」

壑典座の火

「有漏の笊篱、無漏の木杓、用過して了れり、甚れの處に向つてか著く。雲は山に歸り、水は壑に歸る。」火把を擲つて云く、「烈燄容さず蚊蚋の泊まることを。」

合首座　㋑入骨　　雪中の逕に値ふ

㋑入骨。入塔に同じ、遺骨を塔中に收むること。

一香煙起る處便ち與麼に去る、大地氷稜合し、千山雪絮を飛す。便ち與麼に去る、太だ本據なし。」
骨を撫して云く、「蒼龍骨を蛻する時、澄潭の裏に在らず。」

㊐癡鈍和向㊇入祖堂

動靜心を以てせず、古來都べて跡を絶す。斯の如き癡鈍の者、佛祖も又識らず。某人、半世水雲の身、一生氷蘗の質、誤つて蘭溪の滴水に沾ひ、生涯を喪盡す。再び無明の一燈を續いで四極に光揚す。兩處に正令を提持して、一毫肯て顧惜せず。直に得たり淨躶躶、赤洒洒、清寥寥、白的的。興來つて雲山に歸隱す、佛眼も也た窺ふことを得ず。時來つて路を得て便ち行く、萬里一天の秋色、既に位次の安排すべきなし。此に到つて知らず誰か委悉することを。某人、水牯從來共に一欄、鼻繩截き斷ゆ東西に觸るることを。

㊐癡鈍。空性、大覺に嗣ぐ、建長八世なり。
㊇入祖堂。師の位牌を、その寺の祖師堂に納むるを云ふ。

西澗和尚入祖堂

「去年元去らず、今年亦來ることなし。不來と不去と。南岳と天台と。故の我が前住當山大通禪師西澗和尚、松源の直下、石帆の嫡生。唐土に在るときは則ち天台南岳、妙に玄要を提ぐ。日東に來るときは則ち瑞鹿巨福、大いに宗綱を振ふ。面皮を翻轉する處、佛祖驚避し、機鋒を提起する時、衲子を出す。功成つて居らず、身を翻して便ち行く。直に得たり。聖君風を欽びたまふことを。謚號を

賜ふて大通と曰ふ、本位次なし、豈に遮藏すべけんや。卽今此の老蹲坐の處を見んと要すや。」牌を呈起して云く、「鐵眼銅睛窺ふことを得ず、髑髏隊裏共に徜徉。」

則首座、請を受けて淨居に住す、衣を授く。

雞足峰前、黃梅夜半、寸絲挂けず。一場の熱亂、人天の與に軌則と爲らんと欲せば、作家我れに堂中の箇を還せ。

尾藤金吾衣を授く　性常と名く

此の事本來授受なし、言ふこと莫れ授受本來無しと。鷲峰昔日迦葉に傳へ、梅嶺當年老盧に付す。一片做り成す宜しく自ら着るへし、祖肩擔負して相㊂孚することを要す。更に知る法性常に淸淨なることを、世上堂堂たり大丈夫。

㊂孚。信なり、めぐみたすくる意。

小佛事　終

行記

師諱は一寧、㋑一山と號す。大宋國台州臨海縣、胡氏の子なり。齠齔にして村塾に入る、㋺吾伊琅琅たり、鄕先生其の敏悟なることを稱す。無等の融禪師、郡の浮山の鴻福寺に住す、主藏の者月靈江は、師の俗叔なり。怙恃其の塵累の姿なきことを察して、月を介して等に投ず、等、撫念を加ふ。三年にして月、四明の太白山に在り、使を遣して師を取つて、普光寺の處謙に與へて、法華等の諸經を習はしむ。二歳を踰えて得度す。間城中の應眞律寺に如いて開遮を聽く、延慶教寺に天台の教觀を學ぶ。杭州の集慶院の文節法師、台譽あるとを聞いて、足に躡して之に依る。已にして義學の支離を嫌ふ、棄てて歸つて月に就いて所疑を質す。時に月、天童の板首たり、堂頭は㋩簡翁の敬なり。月、主者に讓る、師便ち之に謁す。翁、師の台教に粹なることを知つて、問うて曰く、「一心三觀、何を以つてか體となす。」師卽ち一笑す。翁參堂を許す。坐究すること二朞、月、定海の資聖寺に㋥瑞世す、師、道義を講じて隨つて往く。年を越えて、月、靈峰に移る、又之に隨ふ。久しからずし

㋑一山。宋の淳祐七年に生る、我が寶治元年なり。

㋺吾伊。讀書の聲、琅琅は鈴のやうになるこゑをいふ。

㋩簡翁。居敬、癡絕沖に嗣ぐ。

㋥瑞世。最初の出世を云ふ。

㋭鄮山。育王山をいふ。

㋬藏叟。善珍、妙峰之善に嗣ぐ、善は佛照光に嗣ぐ、大慧四世なり。

㋣東叟愷。大川普濟に嗣ぐ、濟

て辭して(ホ)鄮山に上つて珍(ヘ)藏叟に依る、叟、淨慈の詔に應ず、交代は(ト)愷東叟なり。愷、師の妙英なるを見て主客に侍せしむ、愷罷めて照(チ)寂窻繼ぐ、朞年にして大く、窻又(リ)南屏に遷る。頑極の彌來つて主の位に據る、窻の燼餘を受けて、早く輪奐を復す。師以爲らく、一居四主我れ分なし、今此の老和尚、化權を(ヌ)靳まず、又我が幸なり。意を傾けて親炙、從容醻醋す。我れに一法の人に與ふる無しといふに至つて、忽然として冥契す。翌歲に授くるに大藏の關鑰を以てす。印を解いて友人の明自誠を拉して、天台雁蕩の間に雲游す。錫を肩にして來り歸り、適〻一(ル)環溪天童に踞す、衲子輻湊す。法社甚だ盛なり。師、挂錫を求む、溪拒まず、幾ならずして寺祝融に奪はる。是れに因つて又育王に回つて珙横川に附く。川逝く、祥巧庵來る、庵逝く、沅(ヲ)清溪來る、皆座下に居す。師已に諸老に參覲す、淵默雷轟く。太元の革命に逮んで法を昌國の祖印寺に開く。(ワ)至元甲申、仲夏中八なり。據室に曰く、「任公の釣、六鰲を一掣す。若し是れ跛鼈盲龜ならば、咄、頭を縮めて去れ。」衲子掌を抵つて善と稱す。瓣香、頑極に供ず、所得を識るとなり。一住十載、佛殿外門を新にし、又衣資を捨てて、湖田圃地を買つて寺産を添ふ。寶陀の智(カ)愚溪、(ヨ)維桑の舊あり、往來款密なり。一日語つて曰く、「我れ老

は浙翁琰に嗣ぐ、琰は佛照光に嗣ぐ、大慧五世なり。

(チ)寂窻。有照、枯禪鏡に嗣ぐ、鏡は密庵傑に嗣ぐ。

(リ)南屏。淨慈なり。

(ヌ)靳。吝なり。

(ル)環溪。無準の法嗣なり。

(ヲ)清溪。了沅、枯禪鏡に嗣ぐ。

(ワ)至元甲申。時に一山の年三十八歲なり。

(カ)愚溪。如智、偃溪聞に嗣ぐ、大慧五世なり。

(ヨ)維桑。詩經に「維桑維梓」と、古は墻の下に桑と梓とを栽うる所以に云ふ、故鄉の意なり。

いて衆を領ずるに倦む。我が兄を煩して可ならんか。」師耳を掩ふ、智潜に使を僧官に馳せて、讓賢の志を道ふ。府帖遽に至る、已むことを得ずして遷る。補陀の地、海岸の靈區、師の道價、勝域と竝び騰る、六たび歲序を更ふ。一日(タ)謂く、「巖洞に忽ち圓光を現ず、聖像光中に隱映す。」師、感喜して作禮す、須臾にして卽ち沒す。(レ)大德二年の夏、我が商舶、明州に薄る、大元國主、初め我れを狙窺するの心あり、故に(ソ)辛巳、戰艦數、十萬に盈つ。然も風濤一夕破蕩狼狽す。是を以て我が國の神靈を恐るれども、(ツ)贏志未だ歇まず、屢奇籌を畫す。此の方の佛乘に傾鄕するが爲に、有道の衲子を聘して、勸誘して以て附庸と爲んと欲す。愚溪既に其の任に當る、然も老病にして未だ發するに遑あらず。偶商舡の至るを聞いて、先策を成さんと欲して、俊髦を遴選す、臺評師に湊る。卽ち宣慰使阿答剌相公に勅して、一省郎及び慶元府の判官、僧錄司知書、昌國州の知州、僧正司、知書等五十餘人を遣して寺に入る。宣慰使手書及び僧錄司の官書を出して曰く、「皇帝聖旨、省府に下して師に金襴の衣及び妙慈弘濟大師の號を賜ふ。溟波に泛んで、日本に到つて二國の好を通ぜよ。」乃ち衣帖を以て師に付して輭語慰勞す、師遁る可からざるを思ふて之を受く。明日に一の行官、師を將ゐて府に到る、府官僧官皆在り、細に(ネ)通好の事を說き、而して元朝の信書一通を付す。又官吏五人を差して侍衞せしむ、蓋し師の逃匿に備ふるなり。

(タ)謂。一本には「謂は恐らくは謁か」とあり。
(レ)大德二年。元の成宗の年號、我伏見天皇永仁六年に當る。
(ソ)辛巳。元の至元十八年、本邦の後宇多院弘安四年。
(ツ)贏。餘なり。
(ネ)通好。和好なり。

尋いで燕參政公來る、國主の詔旨及び省部の文書を持して、宣讀し了つて、急に舟に登らんことを請ふ。寶陀に歸つて猶ること一日、行宮吏、三船を差して劇に送つて日本の舶に附す。是に於てか風浪鼓蕩して、檣折れ柁摧く。修補僅に成る。進み馳すること三四日、高麗の絕徼に到る。又速奔すること一日、濤山浪嶽の間に出沒して、飄簸して博多に著く。本朝㊅正安元年なり。舶主、書を以て元帥府に白す。府議して曰く、「敵國の命使命活せず。」或人の曰く、「使命活せず、然れども僧儀を奈何せん。先づ豆州の修禪寺に編置すべし。」或人の曰く、「宋僧の我が土に入る、多く道術を挾むなり。傳へ聞く、寧公は元國の望士なりと。其れ重寄を受くると又知んぬ可し、而も又抑逼に出でたり。且つ夫れ沙門は福田なり、有道の士は萬物に心なし、元國に在つては元の福なり、我が國に在つては我が福なり、豈に必ずしも區區として子卿が節を慕はんや。若し長く窮裔に朽ちなば、吾が土、比丘に鄉ふの素に非ず。」茲に因つて追ふて相陽に赴かしむ。而も猶ほ僻處に居す、未だ府寺に入らず。東方の緇白、初め師の錮居を聞いて大いに㊆衋す。其の來るに及んで、奔波禮謁して只だ後れんことを恐る、山內の寓舍門外市の如し。十二月十日、福山の大道場を主る、叢規肅如として萬衲鑽仰す。府主其の提唱を耳いて、中塗の稽帶を悔ゆ。會ゝ曇西澗、鹿山の事を謝す、府命、師をして之を權せしむ。兩山一矩にして衆望翕如たり。已にして建長を辭し、獨り圓覺の席を正すこと又四歲。偶ゝ昏眩の疾を以て

㊅正安元年。我國の後伏見天皇御宇なり、大元は成宗大德三年、この前年、心地覺心寂す。
㊆衋。傷むの意なり。

㋰壽藏に退居す。府帖再び建長を領ぜしむ、病魔荐りに孽して退休保養す。府命鹿峯の壽塔其の地狹隘なるを以て、巨福の右掖の杉谷に移す、庵成つて玉雲と名く。蓋し癡絶祖の其の塔庵、玉山と號す。頑極考の雲西、並に取つて焉に扁く、本を忘れずとなり。老拳長杓儼然として自怡す、然も旦望の禮賓、福鹿の主人に邁えたり。何も無うして、又起つて ㋒淨智寺を領ずる者四涼燠。正和二年、圓規庵、龍山に寂す。龍山は宮寺、望み輦轂に高し、初め ㋼建治太上皇、師の德譽を聞いて 覲見未だ由あらず。是に於てか ㋨元帥府に敕して、師を召して南禪の缺を補せしむ。師老いて羇旅に艱る、而も 詔旨府命、逼つて辭するを容さず、來つて山務を領ず。 太上皇、洊に山に入りて道を問ふ、搢紳の儔、戶外に屨滿す。輦下の道俗、叢社の人あることを喜ぶ。然も老病侵し尋いで槌拂に懶し、數表を上つて院の事を解く。 太上皇、眷遇復た渥くして允さず、故を以て一再濟に去つて、其の越州に遁るるや、宸書慰諭して回ることを促す。文保元年の秋、恙瘵彌留して十月に益々革なり。 太上皇、寺に幸して 龜山の廟塔に蹕して、時時に疾を問ふ。二十四曉、手染の遺表に曰く、「某、頓首、 法皇陛下、 聖駕本山に幸す、寔に緇門の觀光なり。某、不幸にして疾に臥すこと數日、百體舉すれども不仁なり、再び 龍顏を瞻望すること能はず、大變時至つて、幼質將に摧けんとす。僣して忠情を攄べて、無生三昧に入るのみ。年月日臣僧某頓首。」表を廟塔に獻

㋰壽藏。生前に定むる自分の塔所、玉雲菴。
㋒淨智寺。鎌倉五山の四。
㋼建治太上皇。後宇多天皇なり。
㋨元帥府。鎌倉幕府なり。

ず。又偈を書して曰く、「一世に横行して、佛祖の氣を飲む、箭既に弦を離る、虚空地に落つ。」筆を置いて化す、壽七十一。　太上皇、表を得て蒼皇として寢室に幸す、趺坐儼然として宛も生けるが如し。君臣嗟悼す。　太上皇、便ち　宸奎の贈國師の號を賜ふ。老師直示の的旨に報ゆといふの句あり。又僕射源有房公「時に門下侍郎」に宣して、文を作つて之を祭らしむ。又敕して　龜廟の側に一塔を創りて、法雨の額を書して之を賜ふ。又其の像を賛して曰く、「宋地萬人の傑、本朝の一國師」と。其れ人主の爲に崇ばるゝこと此の如し。門弟子、塔を玉雲に分つ。師の性、慈和にして涯岸なし。近世道柄を執る者、嚴莊威重以て法助と爲し、且つ把鞭とす也。師は一榻に孤坐して、通謁を須ひず、新到遠來、出入間なく、人參請に便なり。禪策の中索隱なし、僅に事苑のみ、往々に漫に雌黄を下すこと多し、江湖之を患ふ。師の至つて闕疑を理するに及んで、然も言語通ぜず、乃ち觚牘に課す。隻字片句、朝諮暮詢、師の道韻柔婉にして、翰を執つて之に酧ゆ。教乘諸部、儒道百家、稗官小說、鄉談俚語、出入泛濫、輙ち數幅を累ぬ、是を以て學者博古に推す。又魯公の屋漏の法を善し、紙帛を擕へて掃寫を乞ふ者、鐵閫或は折く可し。其の七會の語、棟に充ち牛に汗す、未亡の前、手づから修删を加ふ。今只だ數十紙、其の徒海を跨る者、齎して元土に入る、彼の地の衲子、玩味嗟服す。故に芝靈石、茂古林、本中峯、一時の名宿、各跋尾に證して讃を容れず。余、師の門に遊ぶこと十數祀、請ふ所の益鮮からず。龍阜に

㋔大手筆。大元の趙孟頫(子昂)、爲二一山寧公一賛す、「巖彼南山、一仰之極、嵩嶽之寧、中流砥石、補陀孤絕、東海茫茫

在るに覃んで、又密邇に境す、故に師の事を知ること熟せり。諸孤、師の自書の行錄を抱き來つて曰く、「宋地の事は此に見えたり、入朝以來皆略す、況んや末後の榮遇、師の當に言ふべきに非ず。公の親しく見る者、乞ふ焉を足せ。」余が曰く、「竊に聞く、元遊の士、師の行實を彼の地の㋖大手筆に索むと、盍ぞ需めざる。」對へて曰く、「遠く聞いて文略するは、曷ぞ近く見て質備はるに若かん。」余辭すること能はず。元亨元年霎節の日、濟北庵居の沙門㋗虎關師錬謹んで記す。

紫雲垂ㇾ錫、承二天子之寵光一、巨浪浮ㇾ杯、顯使二星之皇華一、聲聞二華夷一、名振二扶桑一、泰山之重、東瀛之長」と。鄰交徵書初篇の一を引いて、五山編年史料にあり。

㋗虎關。東山照に嗣ぐ、聖一三世なり、東福に住す、海藏院に塔す。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下 終

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄

後宇多太上法皇宸書國師號

朕、曾て師の道風を聞いて、一たび德儀を覩んと思欲す。頃年詔を下し請じ來つて、先皇の聖跡南禪に補す。遂に夙志に酬ゆることを獲たり。神交り道契ふて、頓に法味を增して、中に得ることあり矣。師告ぐるに衰暮を以てして、屢歸休を乞ふ。朕、祖道の徽運を嘆じて、固く留止すること今茲に五載、法體違和、疾至つて彌留す。期に臨んで別を告げ、寂を本山に唱ふ。末後の全提、靈明天眞、所謂無心の道人、大法の主盟なるものなり。稱するに國師を以てす。老師直示の的旨に報じ、鰲嶺付屬の金言を旌さんと欲すと爾云ふ。

文保元年十月二十五日

一山國師門徒等

同帝❶宸書賛

內充而爲二道機一、　外發而爲二德儀一、

---

❶宸書賛。師の肖像の宸賛なり。

竹篦横揮兮威風動二沙界一、金襴斜搭兮慈雲覆二坤維一、拓二開人天區域一、捨二破佛祖藩籬一、宋地萬人傑、本朝一國師。

元應元年初冬二十五日　　芝山老叟書す

同帝宸㋺書札

親しく書して特に南禪の長老一山禪師に告ぐ。

朕、師の道價を聞くこと久し矣、所以に詔を關東に下して、官差を以て請來す。一たび會晤することを得て、宛も司南の車を獲るが如し。德を慕ひ風を欽じて、三たび青黄を閱す。而して聞く、退席に心ありて、數數行裝を理すと。去年親しく寶刹に詣して、爲に之を勾す。近ごろ亦行李を打㋩拼すと、書以て慰諭す。　公、乃し蒲輪を屈して、來つて　朕が意に諾許す。料らざりき暗裏に城を出でて、遠く山川を涉らんとは矣。若し回り來つて再び相見することを得ば、必ず自便に隨ひ、病を庵中に養ひて、懷璉の古風を追ふことを許さん。何ぞ更に東關に歸ることを須ひん矣。直饒ひ南禪の東堂に燕居して、小師等をして元の如く安著せしむとも、何の不可かあらん、寧ろ又魔賊の擾すことあらんや。大都そ　公長く此の方を化し、廣く四衆の緣を結ぶときんば、則ち　朕が願ふ所の者也。宜ろしく快く歸來すべし、千萬切に面話を要す。不

㋺書札。天皇の御親書簡なり。
㋩拼。辦に同じ。

備。

五月六日　　洞中隱叟書㊁

一山禪師

應制祭文　　源㊅有房公

維れ大日本國、文保改元十月二十七旦、特進前御史大夫源有房に勅して、昭に一山國師大和尙の尊靈に告して曰く、摩騰漢に來りて、顯宗欽を致し、初祖梁に入りて、武帝襟を紆す、至道を增崇すること、古乃今を稽ふるに、先皇の梵刹、揀んで保任を託し、靈山の附囑、眷命僣はず、克く明に克く哲に、法を問ひ心を問ひ、爾の德を麟鳳にし、爾の音を金玉にす。祖域に光輝し、緇林に榮敷す。千載適に期す、功と化と參ることを。倏ち眞に歸して、幻質を留めず、玆の偉人を隕して、良弼を亡ふが若し、思慕鬱くること罔し、死生一の如し。國師を賜諡す、名を以て實に副ふ、聖衷孔だ昭なり。青天白日、賻して香を奠ぜしむ。靈饗必すべし、尙はくは享けよ。

㊁洞中。仙洞御所なり。
㊅有房公。久我家の分家、六條家の二代なり、後醍醐天皇の元應元年六月、內大臣從一位となる、同年七月二日薨ず、年六十九。

大師號宣命　〔大元國成宗皇帝〕

中書左丞行浙東道の宣慰使記事、寶陀堂上一山總統大師、今奉る、省劄有燕右丞、宣命を賚し齎げて、寧一山に妙慈弘濟大師江浙釋教の總統を授け、又錦襴の袈裟、鈔一百定を賜ふ。行に隨ふ伴當五名、段子表幷に詔書を賚し齎げ、慶元に前來し、起つて倭船を發せしむ。今本路幷に僧錄司をして、官に委して詣請達するが如し。一山總統、行かんとするに就いて、行に隨ふ伴當五名、即便ち城に到つて、欽んで宣命を受く。賞賜理會、倭船㋬勾當更に別に來つて此を附せず、意を愚溪長老に致す、爲に禱る、併せ希はくば法照せよ。不備。

五月二十有一日修　寶陀堂上一山總統大師

中峰の彼沙盆、三傳して癡絕に至り、更に二傳して、一山に至る。其の金聲玉振、黃鐘大呂の音の若く、能く人を瘖鬱聾聵に起すこと多し矣。故に外國王臣尊禮して之を師とす。此れ豈に朽ちたる索を操りて、奔輪を馭するものと、日を同じうして語らんや。予、師を至元戊寅に識り、藏鑰を玉几に掌る時、今四十二年矣。㋣緣首座、此の錄を持して、爲に示さる。其の顯發呈露を觀るに、東山の法門を開いて之を見ば、即ち心死し路絕し、人をして降嘆して已まざ

㋬勾當。公事を勾當すさて、任務をさりあつかふを云ふ、後にある伴當もほゞ同じきものなり。

㋣緣首座。字は無著、西禪に住す、一山の法嗣なり。

らしむ。因つて其の後に題すと云ふ。

延祐七年夏五二十日　　鄱陽永福住山（ホ）清茂書す

慶元路育王弟（リ）德明、一山法兄の禪錄を拜觀す。道に南北無く、人に古今あり。大唐日本七坐勝棲、提唱語意、人の意表に出づ。龍象を走らしめて、翳睛の妙を得たり。端に尊んで一國の師と爲すべし。予、與に同條に生じて、與に同條に死せず、末後の句を覓めんと要せば、分明に只だ者れ是れ。歳次に庚申十二月望日、無異堂に書す。德明東山。

去年儞が郷裏に一兄弟あり、曾て一山和尚臨終の事實を將つて、此に到る。幷に國王（ヌ）親契國師號を賜ふの詔章（ル）來る。我れ曾て見了る、佗也た語錄の跋を求めんと要す。我れ生平與に語錄に跋し、（ヲ）錄字を苯せず、佗去年亦乞ふ、大都ね（ワ）生に儞曾て他に相見すや也た（カ）不やといふことを知らず。曾て一山和尚、道眼精明、學問深遠、況んや身、一國の師と爲る。合朝敬仰、他の（ヨ）語要必ずしも（タ）別に跋序を求めざれ。既に一兩處茲を了ふることあり、亦多く求めざれ。幻者一例曾て

（ホ）清茂。字は古林、横川珙に嗣ぐ、竺仙・月林・石室の師なり、松源三世。
（リ）德明。字は東生、師と同參なり、育王に住す。
（ヌ）親契。一本には親望に作る。
（ル）來。一本には第に作る。第は但の字に同じ。
（ヲ）錄。一本には多の字に作る。
（ワ）生。一本には主に作る。
（カ）不。一本には否に作る。
（ヨ）語要。一本には行要に作る。
（タ）別。一本には則に作る。

人の與に題跋せず。
是の心何を用つてか名を安ぜん、至寶酬價を容れず。西庭柏侍者、乃師一山和尚垂示の語要を出して、跋語を求む。予、禪道佛法に於て、素より未だ解せざる所なり。故を以て、生平敢て妄に一字を尊宿の語中に加へず、恐らくは價を酬ゆるの誚を大方に貽さんや。柏領首して卷を掩ふ焉。

幼住⑫明本

⑫明本。明本を一に峯に作る、誤なり。明本字は中峯、高峯妙に嗣ぐ、號するに幻住を以てす、或は船居、或は菴居す、元の英宗、至治三年八月十四日寂す、年六十一。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄　終

一山國師妙慈弘濟大師語錄序

我宗無語句、亦無一法與人、若有一法與人、土亦難消、古人與麼、水泄不通、不知此語此錄、何從而有解、向未啓口未落筆以前會得、方見我　一山和尙、傳頑翁不傳之秘、倡道扶桑、大用峻機、若震霆擊空、巨黍破的、王臣師仰、學者景從、洞徹死生、了無凝滯、雖所說雲與水涌、所錄充棟汗牛、不爲剩矣、一山與余生同台嶠、夏同玉几、講磨奮厲、道術相忘、戢化以來、嗟悼不已、延祐庚申冬、神足緣首座、携所錄七會語、爲示、披覽以還、不覺拊卷而言曰、佛法東漸于以見矣。

禾城本覺如芝書。

便禮拜。

解夏上堂、禁足安居、尅期取證、何異繼韓盧而責獲、我者裏一切無拘、任其自化、且秋初夏末、賞勞事作麼生、臨濟雷奔喝、德山雨點棒。

開爐、遠出歸衆謝相訪上堂、住山無定力、茫茫外邊走、打失了鼻孔、拈得一張口、今日歸來、火爐頭無賓主話、試與諸人舉看、拈拄杖、卓一下云、明眼人前、漏逗不少。

冬至上堂、寒暑運推移、日南長至、三家村裏爛牛屎、動地放光、十字街頭垃圾堆、演大法義何以見得、不見道、是法住法位。

元宵上堂、舉教中道、見聞覺知是法公案、師拈云、恁麼說話、何異將油洗皂、只如節逢元夕、是處管絃沸月、燈火燒空、衲僧家、入眼是色、入耳成聲、畢竟是法耶、離法耶、拈拄杖、卓一下云、江南地暖、塞北天寒。

佛生日上堂、指天指地、露醜擧止、唯吾獨尊、傍若無人、二千年前、不可放過、二千年後、放過不可、下座、詣大佛殿、更與驗過。

上堂、舉翠巖芝和尚示衆云、大家相聚、喫莖虀公案、師拈云、大衆直饒不喚作一莖虀、亦未免入地獄如箭射、何故、武陵春色好、塵世幾人知。

祖印語終

一山國師妙慈弘濟大師語錄卷上

初住大元四明鰲峰山祖印禪寺語錄

侍者了眞編

師於至元甲申五月十八日入院、指三門、顧視左右云、八字打開了也、龍門客少、鬧市人多。

佛殿、一坐具地、人人有分、黃面老漢不知、展坐具云、今日爲伊說破。

據室、任公之釣、一掣六鰲、若是跛鱉盲龜、咄、縮頭去。

拈疏、相濡相呴、義薄雲天、及乎話到諸譌、又卻肝膽楚越、不信聽取下文。

法座、祖佛行不到處、道不及處、新鰲峰要舉步踏著、開口道著、何故、別有一路子、遂陞座、祝聖罷（問答不錄。）

提綱、祖師心印、古篆分明、無端後來、胡攙亂擠、失眞了也、今日在寧上座手裏、試倒用看、拈拄杖、卓一下云、錦縫全開、米點不露、運靈樞於劫外、敷大化於寰中、直得巨鰲不動、三山常聳於太虛、萬國來賓、帝祚永隆於億載、雖然全如紋篆未形已前、又作麼生、又卓一下云、收。

復舉、楊岐問慈明、幽鳥語喃喃公案、師拈云、是則是、猛虎不食其子、因甚慈明連喝兩喝、楊岐

住大元慶元府寶陀觀音禪寺語錄

侍者　惟鳳　編

山門、海濤澎湃、鐘鼓鏗鏘、莫入理之門麼、喝、

觀音殿、具足神通力、現身三十二、只今是什麼身、展坐具云、衆眼難瞞。

據室、拈拄杖云、汝等諸人、來此簇簇、立地覓箇甚麼、靠杖云、且放過一著。

法座、向上一路、不傳不然、幸自無事、各說異端、山僧一時坐斷去也、

提綱、一向與麼去、煙水連天、一向與麼來、塵埃滿面、直得、去來不以象、動靜不以心、猶是普請邊事、未出常情、山僧昨日、十字街頭、高提祖師心印、世出世間萬法一印印定、直是法法無差、今朝白花巖前、敷揚古佛家風、從聞思修入三摩地、盡底揭翻、便見頭頭不昧、一十二面、鼻直眼橫、三十二身、東倒西擂、與麼會得、皇恩佛恩一時報畢、良久云、天人群生類、皆承此恩力。

復舉、雲門示衆云、聞聲悟道、見色明心、觀世音菩薩、將錢買胡餅、放下手、卻是饅頭、豎起拂子云、者箇是色、擲拂云、者箇是聲、道什麼生悟、心作麼生明、擲拂於後云、莫教錯認定盤星。

當晚小參、一喝分賓主、照用一時行、喝一喝云、那箇是主、那箇是賓、作麼生照、作麼生用、拈拄杖、安左邊云、者裏見得、賓則始終賓、主則始終主、拈向右邊云、者裏見得、賓中有主、主中有賓、

拈向中間云、者裏見得賓主混融、照用歷落、靠拄杖云、安舊處著、不得動著。

復舉、高安本仁和尚示衆云、尋常不欲向聲前句後鼓弄人家男女、何故、要且聲不是聲、色不是色、師頌云、聲前句後絕纖塵、莫向聲前句後論、可惜高安多事老、絲來線去弄精魂。

謝教僧相訪上堂、拈拄杖卓一下云、擊碎五須彌、人畜草芥向甚處著、又卓一下云、攪翻四大海、魚龍蝦蟹以何爲命、山僧與麼提持、且三乘十二分教中、還有者箇消息麼、又卓一下云、座間亦有江南客、莫向樽前唱鷓鴣。

上堂、春意融融、春風浩浩、野外桃花、笑盡雲已眼未開、鶯頭雨滴、怪鏡清逐物顛倒、阿呵呵、會也麼、十字街頭酒醉人、元是東村王大老。

佛涅槃上堂、摩胸告衆、鉛刀之刃、豈可剸洪鐘、槨示雙趺、强弩之末、不能穿魯縞、是則是、寶陀今日且作死馬醫、拈起拂子云、紫金光聚、白毫相輝、從教萬古業風吹。

上堂、聲色全眞、見聞不昧、便與麼去、大似未眠先魘、未飲先醉、竪起拂子云、者箇是色、擊拂云、者箇是聲、擲下云、且莫錯怪好。

上堂、舉、睦州示衆云、放一線道也由睦州、不放一線道也由睦州、時有僧問、如何是放一線道、州云、量才補職、如何是不放一線道、州云、萬里崖州、拈云、勇冠三軍、氣雄萬夫、不無老睦州、只是未逢勍敵、當時有箇見佗與麼道、但咳嗽一聲、管取者老漢隱身無地。

上堂、德山入門便棒、臨濟入門便喝、啞、六月不熱、五穀不結。

上堂、玉宇秋澄、金莖露冷、老胡打失鼻孔、至今收拾不上、衆中忽有箇收拾得、山僧與伊二十

拄杖、何故有功者賞。

中秋上堂、萬里秋容淨、娟娟桂月流、寒輝沈列宿、皓魄動潛虯、因思馬師父子、玩弄神變、隨光逐影不知羞、休休、既然明似鏡、何用曲如鉤、

遠出歸上堂、動無作相、靜無住相、潮落滄溟、月離青嶂、忽有箇出來道、動靜雙忘時如何、良久云、果然一釣便上。

開爐上堂、擧趙州火爐頭無賓主話公案、拈云、趙州年老返成小兒、只要挑灰弄火、爭免傍人笑怪、雖然此曲只應天上有、人間能得幾回聞。

上堂、風蕭蕭木葉下、滴水成氷、飛霜徧野、拍膝云、見成行貨無人買。

佛成道上堂、擧、世尊云、我見一切衆生、具有如來智慧德相、但以無明煩惱而不證得、召衆云、者老漢、有沒量罪過、山僧不欲訐露、下座、詣大佛殿、同與懺悔。

元正上堂、新鮮語句、玄妙機關、寶陀不是全無、只是不曾拈出、今日三陽交泰、萬物咸新、未免拈出布施諸人去也、拈拄杖卓一下、下座。

上堂、擧、雪峰巖頭欽山三人、同往河北、禮拜臨濟、路逢定上座、公案、拈云、鷹搦兎、鶻提鳩、定上座固是行家手段、只是臨濟處學得底、未能盡用、若能盡用、和者雪峰巖頭、總須髑髏著地。

上堂、拈拄杖云、山僧尋常不敢孤負諸人、拈拄杖下座、大衆一時散去。

上堂、擧、雪峰和尚示衆云、盡大地是解脫門、把手拽伊不入、拈云、大小雪峰、著甚死急、盡大地是解脫門、誰在門外。

上堂、拈拂子云、卽心卽佛、遼天俊鶻、非心非佛、剝皮出骨、不是心、不是佛、不是物、白日青天、神出鬼沒、畢竟如何、良久云、今朝四月一。

浴佛上堂、情與無情本一眞、大千何地著纖塵、朝來露濕薔薇錦、洗出毘盧淸淨身。

寶陀語終

住日本國相模州巨福山建長興國禪寺語錄

侍者　崇　喜　編

師於正安元年十二月七日入院、指三門、火後無門、十方無壁落、四面亦無門、彈指一下云、者裏入得、別是乾坤。

據室、拈拄杖、者裏道得也打、道不得也打、百錬之金、更須入火。

山門莊嚴只可內曲、家醜何須外揚、既然遮掩不及、從教此話大行。

法座頂顯機、破初句、立地構得、不妨峭措、指法座云、喝須待我向上頭抛沙撒土。

陞座、拈香、此香至尊至貴、爲瑞爲祥、本一眞以化育群靈、根至妙而出生萬物、恭爲祝延今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、恭願　金輪永御、揭中天日月之明、玉燭常調、同大地山河之壽。

次拈香、本根秀異、枝葉繁昌、沛膏澤於天潢、布清陰於東國、奉爲　東部親王征夷大將軍洎文武官僚、同增祿算、伏願乃心王室、從懋維城之功、弘護佛乘、不忘靈山之記。

次拈香、靈根深固、尚氣清明、垂恩蔭於四方、播芬芳於萬世、奉爲　大檀越相模太守、增祿算、伏願道同佛祖、以深慈拯濟黎元、德合乾坤、以至仁鎭隆社稷。

次拈香、此香無些子氣息、且要炙地熏天、供養前住大唐慶元府阿育王山廣利禪寺頑極老和尚、用酬法乳之恩。

提綱、建法幢、拈拄杖一下云、立宗旨、又卓一下云、法幢已建、宗旨已立、極微塵刹海、只在一毫端、盡無量億劫、悉歸彈指頃、塵塵不昧、法法全彰、如帝網珠交光相羅、如師子兒遊行無畏、豈有法來之相、曾何彼此之分、便見拈花付法、笑裏刀鎗、面壁安心、口頭人事、衣盂傳授、屈辱當仁、棒喝交馳、取笑作者、自餘張弓架箭、列主分賓、正是鑿空造端、欺胡瞞漢、畢竟太平時世、說甚干戈、所以山僧、萬里西來、只要素面相呈、更無勞擴、然雖如是、卓一下云、將此身心奉塵刹、是則名爲報佛恩。

復擧、首山和尚示衆云、佛法付囑國王大臣有力檀那、人人燈燈相續至于今日、且道、續箇甚麼、須是迦葉師兄始得、拈云、首山和尚發揚靈山付囑、固是光明、要且只是一期方便、爭如今日有大力量人、親承記莂、向二千年後、於日本國內、續此一燈、直得輝今耀古、諸人還見麼、若也不見、山僧更爲點出、靈山佛法付王臣、今日扶桑話又新、一道恩光徧塵刹、東溟天曉涌金輪。

當晩小參、問答罷乃云、古今天地、古今日月、古今人倫、山是山、水是水、僧是僧、俗是俗、是法住法位、世間相常住、無端老胡西來、分疆列界、說悟說迷、引得一地裏人、喚東作西、指南爲北、殊不知、扶桑日輪依然東出、大洋海水、一日兩潮、是故山僧、未離唐土、時時與現前龍象交參、身到海東、步步不離圓通境界、自然東西不異、賓主歷然、便與麼會、猶是尋常相見、且出格一句、

作麼生道、拈拄杖卓一下云、鶴飛千尺雪、龍起一潭氷。

復擧、僧問永明潛禪師、祖師西來、傳箇什麼、潛云、傳箇策子、僧云、恁麼則心外有法、潛云、心內無法、拈云、好箇策子、只是年代深遠、諸方將策子裏事、錯傳了也、今夜忽有人、問和尙西來傳箇甚麼、只向他道、傳箇口訣、又問和尙乍來言語不通、如何傳得口訣、瞎漢要我鼓兩片皮、堪作什麼。

臘八上堂、諸佛時時出現、星河夜夜在天、剛謂雪山成道、分明誑惑之言、只如諸人晝見日、夜見星、還有悟底消息也無、拍禪牀云、要得梅花香撲鼻、也須徹骨一番寒。

臘月半、受公帖上堂、拈拄杖云、得處分明、拈來便用、畫一畫云、斷佛祖命根、卓一下云、穿衲僧鼻孔、半合半開、全收全放、落落神珠影不留、煇煇寶劍光初動、莫便是福山爲人處麼、卓一下、喝一喝。

上堂、纔見正月一、又過了旬日、人事蝟毛多、光陰嫪箭疾、無位眞人、在汝面門、時時出入、還曾證據也未、若未證據、山僧爲汝點出、良久云、頭長頸短髮鬈鬆、相對無言獨足立。

元宵上堂、竪拂子、只此一燈、傳來已久、融接十虛、照明九有、卽今雪月交輝、星河並耀、因甚瞎眼師僧、只向光影裏走、以拂子一吹擲下云、山僧爲伊吹滅了也、伸手云、暗中伸出毛手、還辨得麼、良久云、既辨不得、縮手云、天寒且藏懷袖。

謝首座上堂、號無絃、擧、黃檗在南泉作首座、一日捧鉢在南泉位坐、南泉入堂見乃云、長老甚麼年中行道、檗云、威音王已前、泉云、猶是王老師兒孫、在下去、檗遂歸自位坐、頌云、互換之機

不暫停、一賓一主自分明、寥寥此曲今誰繼、琴奏無絃韻更清、

因看經上堂、藥山不許僧看經、不自遭人檢點、福山普請僧看經、特地檢點他人、道路各別、發家一般、拈拄杖、卓一下云、箇裏不開緇素眼、牛皮端的也須穿、

因普請上堂、微笑、拈花、安心、面壁、書偈、傳衣、陞堂、卷席、擎叉、打地、般土、拽石、打鼓、輥毬、搖鈴、舞笏、擲金圈、拋栗棘、棒喝交馳、如雷擊、山僧冷地看來、雖是普請邊事、也有些子奇特、且道、有甚奇特、拈拄杖、卓一下云、會麼大家著力。

因江湖兄弟呈頌求拄搭上堂、舉、古德示衆云、南來者三十棒、北來者三十棒、然雖如是、不當宗乘、拈云、古德一期、把定要津、若無後語、自無出身之路、福山放開線道、容儞轉身吐氣、汝若道得一句、個儻分明、便明窻下安排、雖然還當得宗乘中事麼、喝、

謝典座上堂、栗棘蓬、鐵餕餡、有人取巧安排、一任橫吞豎咬、忽然塞斷咽喉、引得盧容失笑、且道、笑箇什麼、展手云、了、

浴佛上堂、幸自淸平世界、何用造妖揑怪、指天指地稱尊、以力假仁者霸、福山今日成褫他、香水洗來驀面唾。

上堂、十五日已前、外不放入、十五日已後、內不放出、正當十五日、不出不入、非內非外、釋迦彌勒、惡口闡提、文殊普賢、屠兒魁膾、良久云、會麼、若也不會、九十日中須子細。

上堂、舉、古德示衆云、結夏已半月、水牯牛作麼生、又一古德云、結夏已半月、寒山子作麼生、拈云、水牯牛寒山子、頭角雖殊、鼻孔相似、結夏已半月、常露迥迥地、認著依然還不是、

上堂、不求諸聖、不重己靈、進前無路、退後無憑、臨深淵履薄氷、茶陵有箇村山主、騎驢過橋與一擷、錯認山河作眼睛、良久云、彩奔嚴家。

上堂、舉、應庵和尚有偈、示衆云、金錫罷遊雷葉壁、草鞋乾晒待秋風、檀那長夏深思省、看是平生有底功、眞實行藏宜保惜、虛頭伎倆疾消鎔、老僧不是多饒舌、要與諸人氣味同、師云、五湖龍象此相從、立志應須繼祖風、世事無窮宜自省、玄關未透介加功、憍慵只用精勤攝、頑鈍唯將猛烈鎔、期滿九旬如少驗、身心驗與鐵圍同。

太守請、爲法光寺就佛日庵、慶懺千部法華經陞座、拈香云、此香枝葉全無、唯有眞實、六銖雖妙、價直娑婆、奉爲法光寺某公禪門資嚴覺路、伏願、悟此一乘、即受佛記、積茲餘慶、垂裕後昆。

提綱云、是法非思量分別之所能解、拈拄杖、卓一下云、者裏洞徹根源、便見釋迦老子、四十九年、三百餘會、說黃道黑、指東劃西、半滿偏圓、性相事理、總是止啼黃葉、明眼人前、不直一笑、無端靈山會上道、箇十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三、提持向上一著、發明大事因緣、權實大小、悉得圓融、開示悟入佛之知見、三周授記、七喩明玄、乃至造逆、調達亦證菩提、五障龍女即得成佛、非無不妙、理無不圓、檢點將來衲僧門下、略較些子、故我法光寺、親於此時聞茲妙義、乘大願力、示現人間、窮至妙於一心、了十如於當念、以珍好大車等賜諸子、以化城寶所誘進群迷、弘持大法、如藥上藥王、精進明達、如淨藏淨眼、所以深仁厚澤、沾洽黎元、盛德豐功、照耀今古、化緣既畢、出沒自由、故令孝子順孫嗣昌鴻業、亦仗妙圓之法、用伸追遠之情、命僧誦閱此經、圓滿千部、以茲上善、助證圓常、雖然諸人還知法光寺只今行履處麼、不見道、是法住

法位、世間相常住、卓一下。

復擧、天台智者大師於大蘇山、誦法華經、至藥王本事品、是眞精進、是名眞法供養如來、豁然大悟、見靈山一會、儼然未散、今日太守、命僧披誦此經千部、爲法光寺、資嚴冥福、循熏不忘、一聞千悟、且道、與天台是同是別、輙成山偈、擧似大衆、靈山一會未曾散、落落玄音演妙蓮、已眼豁開親見了、青山綠水自依然、了無回互、迴絕正偏、今古分明在目前、瑞鹿峰頭良夜月、淸光長照性天圓。

上堂、擧、黃檗示衆云、汝等諸人、盡是噇酒糟漢、與麼行脚、何處有今日、還知大唐國裏無禪師麼、時有僧出問云、只如諸方匡徒領衆、又作麼生、檗云、不道無禪、只是無師、拈云、黃檗老漢、韜豹略、宴坐油幢、喑嗚叱咤、萬人氣索、因甚被者僧輕輕一撥、便見手忙脚亂、且道、利害在什麼處。

謝典座上堂、有漏笊籬、無漏木杓、小乘錢貫、大乘井索、雖然閑家具、應用有處著、且道、誰是善用者、良久云、潙山趯淨瓶、普化搖鈴鐸。

上堂、拈拄杖卓一下云、德山拈不出、喝一喝云、臨濟用不得、福山不勞餘力、且要中機中的、卓一下、喝一喝云、擲地金聲如瓦礫。

上堂、今朝七月五、一雨洗袢暑、蟬聲古樹頭、蛩韻靑莎下、達磨只道箇不識、老盧只道箇不會、是汝諸人聚頭商量、恣意妄想、拍膝云、且莫認驢作馬。

上堂、一葉落天下秋、一塵起大地收、釋迦老子不曉事、只管說黃道黑、達磨大師不安分、來遊

赤縣神州、良久、將軍射得藍田虎、細看元來是石頭。

閏七月旦、謝檀那增給莊田、幷祈雨上堂、者片田地、人人有分、須得契券分明、方可下無明種、結三毒果、更得慈雲密布、甘澤普洽、根莖大小、悉得蒙潤、然後成熟、可以濟彼飢虛、咸令飽足、所以古者道、心地含諸種、普雨悉皆萌、頓悟花情已、菩提果自成、福山與麼道、莫有知慚識媿者麼、如無、拈拄杖、卓一下云、三年一閏、五年再閏。

謝副寺上堂、一見便見、不勞思算、兩箇五百、元是一貫、良久、秋風秋雨滿長空、落葉堦前紅片片。

謝相訪上堂、舉、慈明和尚示衆云、颯颯涼風景、同人訪寂寥、煑茶山上水、燒鼎洞中樵、拈云、大小慈明將常住物作私己人情、福山即不然、颯颯涼風景、同人訪寂寥、相看兩無語、唯有道情高。

前住癡鈍和尚訃音至上堂、昔年山中來、滿面是塵埃、去年山中去、不曾移踕步、去去實不去、來來實不來、萬里一天雲翳開、辭世偈云、雲翳都卷、萬里一天、諸人向者裏見癡鈍和尚、直是未在、要見麼、豎拂子云、些子無明火、分光徧九垓。

上堂、雨蕭蕭紅葉下、鴈叫長空、蟲吟永夜、觀音大士、賣卻渾身、因甚少人酧價、福山也似無端今日貴買賤賣、卓拄杖下座。

中秋謝都寺上堂、月朔月旦、月圓月半、因甚今宵人爭賞翫、光境未曾忘、眞月何由見、要見麼、以拂子打圓相云、不是寒山一片心、便是石窓漏燈盞。

重陽謝書記上堂、欣逢佳節是重陽、籬落西風菊又黃、因惜陶潛千載後、牛和煙草老秋光、山僧與麼道、忽有箇出來道、和尚不說禪道佛法、卻說四六文章、瞎漢倆豈不見道、詩向會人吟、

謝書記・藏主上堂、一字不著、畫八字無兩ノ、大藏與小藏、從者裏流出、明眼衲僧難辨別、會麼、大唐國裏打鼓、日本國裏展鉢、（藏主唐人。）

開爐上堂、雪嶺六年、少林九年、死柴無餤、冷灰不燃、建長今日、別作方便、拈拄杖撥一撥、吹一吹云、汝等諸人、照顧燦破面門、一卓下座、

太守請、慶讃地藏寶殿、供養五部大乘經、提綱、正眼洞明、十虛無間、大機圓應、萬象俱融、妙超聲色之先、迴出思議之表、卽心卽佛、塵塵刹刹、絕名模、非心非佛、煒煒煌煌、非向背、以此建立諸法、以此開悟群迷、如金剛王劍、揮之則魔外潛蹤、如獅子筋琴、撫之則群音頓絕、所以道、大人具大見、大智得大用、於一毫端現寶王刹、坐微塵裏轉大法輪、物物全彰、頭頭不昧、旌茲名刹、雄冠東州、始自最明寺創基、大覺師開法、笠嶺眞風再振、少林五葉重榮、曩因劫燒之餘、未復宏規之舊、六檀那太守、不忘佛囑、益運願輪、紺殿崇成、像設嚴備、金碧焜燿、棟宇翬飛、高脊橫空、璇題納月、延奉地藏千身妙相、供養五部大乘眞詮、賢聖交參、神龍翊衞、固皇圖於有永、數至化於無窮、四生九有、咸脫苦輪、萬姓六軍、同躋壽域、笑長者布金、未爲奇特、況賢于插草豈是作家、直教見者聞者、悉悟圓常、此生他生、長臻福報、然雖如是、只如功不自功、道非常道、全超數量、不落見聞、畢竟如何話會、妙德空生齊稽首、千萬億載仰恩光、復說偈曰、偉哉世有過量人、乃能成就過量事、是於積劫事諸佛、親承諸佛授記來、以大願力生世間、示現威德大

人相究明佛祖向上事、大心弘護諸佛乘、於無爲中示有爲、建立無邊勝妙事、幻成寶殿極嚴麗、璀璨光明耀心目、地藏大士恆端居、金錫靈珠度群品、於一身中現千身、千身還於一身攝。非色非相非虛空、非大非小非差別、光如帝網相交羅、重重涉入無迴互、亦知五部大乘典、無說無聞無所證、而於無聞無證中、顯示無作功德力、普令正法常流衍、救世護國悉安寧、名門福慶隨綿綿、德澤傍流徧區宇、壽岳穹崇福海深、永固邦基茂勳業、以此升濟先世魂、勝樂土中登佛位、世出世間俱了了、無缺無餘亦無盡、只此無盡亦無盡、彌綸三際亘十方、東大海水常渺瀰、扶桑日輪恒烜赫、我今讃揚亦如是、百千萬劫無終極。

謝頭首秉拂上堂、廣庭風月夜遲遲、韶濩雲英迭奏時、萬象森羅齊側耳、至音端的許誰知。

佛涅槃上堂、雙林樹下手摩胸、死眼瞠開又脫空、生滅有無何用說、年年二月是春中。

上堂、乍暖乍寒、一晴一雨、花落空庭、鶯吟綠樹、毘盧師、法身主、知他是眞是假、貶得眼來劍去久矣。

謝頭首秉拂上堂、說時默、默時說、掣電轟雷、飄風灑雪、舜若多神笑點頭、憍梵鉢提驚吐舌。

謝禪興無及和尚上堂、舉趙州訪茱萸、攜拄杖於法堂從東過西、萸云做甚麼、州云探水、萸云、我者裏一滴也無、探箇甚麼、州靠拄杖便出、師云、一人奮武攻城、一人開關延敵、雖則勝敗不分、未免刀鎗徧地、今日無及和尚到來、福山只是尋常笑語、更無餘事、何故、元是屋裏人。

謝新命淨妙高峰和尚上堂、拈拄杖云、有巴鼻沒巴鼻、不是尋常、亦非差異、金烏夜半上高峰、驚起泥牛耕大地、只今向淨妙國中、深種蒺藜去也、諸人後五日、東行西行、大須子細、卓拄杖

下座。

解夏上堂、蠟人氷、鵝護雪、笠嶺二千年、建長九十日、還有誵訛處也無、良久、瞿曇面皮黄、歸宗眼睛赤

開爐上堂、二千年前火種、多是胡挑亂弄、福山香匙火筯、諸人切忌妄動、何故、忽若撥著冷灰豆爆、照顧打失眼睛鼻孔。

正旦上堂、一年三百六十日、今朝正是正月一、一生二、二生三、三生萬物、萬物既生、時和歲成、蒲團靜依無餘事、永日寥寥謝太平。

上堂、潑目韶華是二旬、梅顋柳眼鬭芳新、勸君莫負光陰好、畢竟光陰不負人。

上堂、冉冉春光暮、茫茫煙草綠、各人水牯牛、溪山隨處牧、收放要時宜、水草要飽足、蹄角要分明、性氣要純熟、莫令犯苗稼、莫令亂根觸、一朝鞭索忘、更不勞驅逐、露地臥月明、請續末後句。

因雨上堂、纔見結制、又過五日、修證即不無、染汙即不得、何也、簷頭滴、滴分明歷歷。

方丈得月樓成上堂、毘耶杜詞、風光輕漏泄、彌勒彈指、門戶缺關防、福山勞我諸人、成玆丈室、六窓玲瓏、一室虛白、簷楹近水、良宵偏得月先臨、欄檻連雲、青漢自疑星可摘、總是現成門戶、無非本地風光、直敎見者、聞者、心開目明、只是別有一關、卻要諸人向玄微及盡處、撥敎透脫撥得透、福山卻與汝棒喫、既撥得透、因甚卻又喫棒、豈不見道、老僧笑指猿啼處、更有靈蹤在上方。〔有玄關上方二扁。〕

東福山叟和尚、訃音到上堂、慧日峰前露一機、翻身撥到五須彌、照天夜月光輝滿、廓爾無依

又既歸、此猶是東福山叟和尚、當面讓人底一著、若是末後全提、下座同詣靈前、分明聽取辭世偈、有照天夜月、無依獨歸語。

謝新舊直歳上堂、古者道、終日茫茫那事無妨、古人與麼道、也是掩耳偸鈴、山僧三日過圓覺、兩日來建長、每日茫茫、東奔西走、眼睛鼻孔、一時打失了也、如何說箇無妨底道理、雖然析東籬補西壁、前後各有其人、若是那事、自然總不妨得。

住圓覺退建長上堂、五載住山無所補、孤踪可奈似閑雲、一家桃李同春色、畢竟元無彼此分。

建長語終

兼住相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄

侍者　仁　恭　編

師、於正安四年十月十一日入院、指山門、盡大地是圓覺伽藍、顧視左右云、儞既入作無門、今日爲通線路、喝。

佛殿、光明藏中、眼眼厮覷、坐立儼然、彼我無異、展坐具云、何妨自倒自起。

據室、放汝命通汝氣、拈拄杖云、且道、者箇是甚麼、擬議不來、以拄杖過左邊云、且過一壁。

拈帖、把住放行、呈起帖云、只者一著、正眼看來、兩重公案、不信聽取下文。

指法座、從上若佛若祖、到者裏無進步處、無啓口分、山僧又作麼生、遂驟步登座、祝聖拈香云、此一瓣香、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、一人端拱、四海隆平、壽考萬年、子孫千億。

又拈香云、此香奉爲　征夷大將軍、伏願宗增祿算、益懋功勳、沛雨露於蒼生、固藩垣於東國

又拈香云此香奉爲　本寺大檀那、伏願壽山福海、增固增深、德本道芽、愈堅愈茂、佐皇猷於有永、隆佛法於無窮。

提綱、微笑傳心、夢中說夢、三拜得髓、頭上安頭、雖則千載一時、其奈隻身兩役、山僧粗識羞恥、

無端知而故犯、今日只得權時施設去也、驀拈拄杖云、無上法王有大陀羅尼門、名爲圓覺、流出一切淸淨、眞如菩提涅槃及波羅蜜、一畫云、住住、道泰不傳天子令、時淸休唱太平歌。

擧、乾峰和尙云、擧一不得擧二、放過一著、落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、卻往徑山去、乾峰云、典座來日不得普請、師云、一人凝頑、一人紆黠、驀劄相逢、弄巧成拙、山僧或時擧一、或時擧二、總不妨事、何也、自有主人翁在。

當晩小參、正令全提、荒卻六地、垢衣權拄、曲爲今時、拈拄杖云、列五位君臣、展三玄戈甲、權實兼擧、照用同時、便見賓中有主、主中有賓、賓主混融、賓主歷然、卓一下云、纖塵元不動、佛日正高懸。

爲法光寺上堂、大道無門、三世十方常廓徹、大方無外、色空明暗本全眞、直下一念虛融、自然塵塵超越、拈拄杖、卓一下云、劈碎重關、畫一畫云、截斷路布、靈機妙轉、大用全彰、懸日月於胸中、運乾坤於掌上、群生以茲而化育、海宇以此而淸寧、著著通途、頭頭合轍、故我法光寺杲公禪門、乘願力來、全提此令、直得名喧四裔、威震八紘、了達佛祖淵源、洞明向上一著、至於出生入死、焜燿光輝、雖然此猶是杲公禪門、功勳邊事、且道、不墮功勳、一句作麼生道、良久云、巨闕十三華藏界、藏身無跡海騰波、復說偈云、至化功成不自知、翻身撥倒五須彌、紫檀樓閣黃金闕、坐見龍華記莂時。

大檀那入山請上堂、黃檗打臨濟三頓、如蒿枝拂、窮坑難滿、德山打雪峰一棒、如桶底脫、小器易盈、拈拄杖云、此棒合在鹿峰手裏、大似土曠人稀、今日幸遇衡鑑在前、未免拈出、略展威光、

去也、卓一下、喝一喝。

上堂、丹楓葉墮、紫菊香殘、老胡明不破、獨自返西乾、是汝諸人、取次搏量、聚頭妄想、良久云、驢年。

謝東堂西澗和尚上堂、諸佛强出頭、諸祖妄生事、病痛雖一般、脈息亦有異、逗倒瑞鹿峰前、自然別有道理、任是佛病祖病、一切衆生心病毛病、萬病總教脫然同到大安樂地、見麼、綠水青山自在身、菩薩神通暫遊戲。

謝四頭首秉拂上堂、昔日臨濟韶陽汾陽大陽、各有三句、發明宗要、瑞鹿卻有四句、今日擧似諸人、拈拄杖卓一下云、第一句、又卓云、第二句、又卓云、第三句、又卓云、第四句、一句具四句、四句只一句、不是唐言、亦非梵語、自然句句朝宗、機機相赴、石火光中定主賓、百戰場中有文武、擲下云、發機須是千鈞弩。

臘八上堂、六年冷坐荒草、受飢受凍不少、夜半夢驚魔倒、强謂見星悟道、二千餘載至今、寐語惑人未了、鹿峰今日喚醒者老子看、拈拄杖、卓一下云、瞿曇瞿曇、金烏拍翅耀扶桑、那箇不知天大曉。

上堂、向上一機、言前薦得、已落第二、頂門一竅、機先撥透、腦後猶缺一椎、與麼不與麼、拈拄杖云、直下七花八裂東大海輥底紅塵富士山連天白雪卓拄杖下座。

元旦上堂、有爲雖僞、棄之則道業不成、無爲雖眞、著之則慧性不明、灼然一出一入、半合半開、但願春風齊著力、一時吹入我門來卓拄杖下座。

上堂、梅腮散玉、柳眼垂青、春光漸妍媚、物理自分明、諸人東行西行、左覷右覷、照顧打失鼻孔眼睛、顧視左右云、且喜無事。

謝新舊首座上堂、提綱則綱正、振領則衣端、所以叢林綱領、貴在得人、得人則宗風振正令行、只如黄檗坐南泉鉢位、睦州賺臨濟喫棒、是提綱耶振領耶、良久云、三尺吹毛光照膽、萬人叢裏奪高標。

上堂、識得心山岳沈、水不洗水、金不博金、端的一回曾與麼、從教大地絕知音、卓拄杖下座。

謝知客上堂、賓中主、虛空拍手須彌舞、主中賓、桃紅李白共芳春、主中主、堯風舜日清寰宇、賓中賓、紅塵世路少間人、驀拈拄杖云、者箇是圓覺拄杖子、且如何是主、如何是賓、擲下云、龍蛇易辨、衲子難謾。

臘八上堂、晝見日夜見星、雪山成道、口說無憑、半夜三更困未醒、打失娘生雙眼睛。

臘月望上堂、風頭稍硬、煖處商量、平地無端掘陷坑、天寒人寒、大家在者裏、自家骨肉尙如此、古人家私、圓覺已與揣刮了也、圓覺家私、又作麼生、局局促促大寒酸、慚愧無人著眼看。

元正上堂、新年頭舊年尾、四序已更端、三陽猶未啓、不是佛法、亦非世諦、不是因緣、亦非自爾、竪拂子云、會得偏地祥風、普天和氣。

上堂、景入新春、萬物欣欣、野梅飄玉、庭草鋪茵、風光無限好、白日少間人。

上堂、諸佛出世、擔水河頭賣、祖師西來、土上加泥、諸人軒昂氣宇、特達胸懷第一不用疑猜、驀拈拄杖、卓一下云、但得雪消去、自然春到來。

雪後上堂、一回粉碎虛空了、大地明明絕點埃、獨有峨眉山上客、無人携手上高臺。

上堂、睦州擔板漢、趙州喫茶去、口如崖蜜甜、心似黃連苦、所以圓覺尋常、於諸人不敢絲毫錯惧、良久云、射虎不眞、徒勞沒羽。

上堂、擾擾匆匆、晨雞暮鐘、水流滄海、月上高峰、憶得瑞巖老凍膿、時時只喚主人翁。

上堂、一笑付法、傾城傾國之妖、三拜得髓、破業破家之嗣、此妖未息、此恨難窮、今日何人能雪屈、臨風幾度蹙眉峰。

中夏上堂、世事匆匆過、今朝又中夏、衲僧本參事、大蟲看水磨、有諸譌無縫罅、嵩山有箇破竈墮、卓拄杖下座。

上堂、索索秋聲墜碧桐、蕭蕭涼氣入簾櫳、擬明體露金風句、又墮韶陽網子中。

中秋上堂、仲秋三五、桂影婆娑、人間天上、競賞光華、可憐老長沙、踏倒小釋迦、蒼龍折角虎無牙、笑倒東村李大哥、拍禪牀下座。

上堂、和氏之璧無瑕、隋侯之珠絕纇、雖然稀世之珍、得者更須撲碎、何故如斯、不見道、匹夫無罪、懷璧其罪。

謝清西堂受東光寺請、璵首座自博多來上堂、舉、三聖示衆云、我逢人即不出、出則便爲人、興化云、我逢人即出、出即不爲人、頌云、兄携鈍钁東邊去、弟放生鋤西畔來、兄弟各人成活計、相逢一笑兩眉開。

重陽上堂、九日今朝是、東籬媆菊黃、因思陶靖節、寂寞待壺觴、殊不知露凝幽艷、風拂淸香、醉

人無限意、何必泛瓊漿、拍膝云、茫茫多是負秋光。

謝長樂月船和尚并請知客、小師、上堂、百丈遭喝耳聾、怨憎會苦、臨濟蒿枝三頓、冷債難還、趙州探水、平地風波、南泉撫背、徒成多事、雖則啐啄同時、箭鋒相拄、更且主賓禮缺、父子情乖、圓覺只據見定、且要恰恰相宜、拈拄杖卓一下云、客來無茶與、蒿湯備禮儀。

至日上堂、葭管飛灰、新陽應候、觀臺書雲、以卜休咎、圓覺順俗也要書看、以拂子作寫字勢云、東西南北、赤白青黃、已書了也、衆中莫有識氣候別休咎底麽、縱有也須勘過了打、忽若箇出來、道即今萬里無雲、又書箇甚麽、拈拄杖、劈脊與一頓、何故、豈不見道青天也須與棒。

謝明因西堂無絃和尚上堂、一曲無絃古調清、十三徽外韻冷冷、塵中可是知音少、時和松風倚石屛。

上堂、擧佛眼遠和尚頌云、一日日、一時時、龍門老心自知、拈云、龍門和尚、謔偈雖則甚美、鹿山看來、坐在情識裏、鹿山亦有頌、云、一日日、一時時、鹿山老衆中、若有箇向者裏道得一句、倜儻分明、山僧分半院與伊。

圓覺語終

再住巨福山建長興國禪寺語錄

侍者　聰一編

謝兩班耆舊上堂、普化成褫臨濟、珍重下去、楊岐補佐慈明、時出惷語、是皆碔砆之質、豈爲瑚璉之材、福山者裏、左顧則氷清玉潔、右顧則虎驟龍馳、機鋒閃星電、號令鼓風雷、山僧贏得放憨癡、閒看峰雲自去來、雖然莫便是福山爲人處麼、良久云、妙舞莫誇迴雪手、三臺須是大家催。

鏡堂和尚遺書至上堂、甲子六十三、森羅萬象本同參、無法與人說、打刀須邠州鐵、任運自去來南天台與北五台、天上只一月、夜夜清光常皎潔、大衆、鏡堂老子、末後全提、建長已與解注了也、只如涅槃後有大人相、諸人還見麼、若也未見、未免更指出、卓拄杖一下云、打破鏡來親見了、團團依舊輝乾坤。

元宵上堂、花柳媚春陰、歌管鬧衢市、召大衆云、會麼、我見燈明佛、本光瑞如此、卓拄杖一下、下座。

謝新舊維那上堂、克賓爲興化拈香、田夫論國政、法昌還北禪帽子、癡客勸主人、冷地看來總堪一笑、福山者裏、進以禮、退以義、清機歷掌、風凜凜地。

上堂、百丈於馬師喝下耳聾三日、臨濟自高安回來攔腮一掌、盡謂是師資契合、不知是寃債相求、諸人要知百丈臨濟二大老立地處麼、良久、一從事卻潘郎後、便解人前不識羞。

上堂、桃花紅李花白、色不是色、燕子語黃鶯鳴、聲不是聲、不是色不是聲、是甚麼、靈雲打失雙眼睛、笑倒嵩山破竈墮。

桃溪和尚遺書至上堂、鹿峰爐舉三玄要、東漸歸去間吟嘯、忽然一轉入無生、引得虛空開口笑、見徹芭蕉虛幻體、返本歸根自得妙、此意只今誰共論、海天目斷千峰曉。(辭世頌、有芭蕉虛幻體語。)

上堂、拈拄杖云、選佛場開、一卓云、以此爲題、儞若道得出格句、許儞心空及第、靠杖下座。

上堂、結制已過五日、修證事須猛烈、騰身驀過太虛、不妨迥然獨脫、若只逐隊隨群、更又違時失節、噇眠飯肆無明、坐熱鐵牀吞熱鐵。

解夏上堂、尅期取證、鬼窟裏作活計、休夏自陳、且莫夢中說夢、當此秋初夏末、兄弟東去西去、前途忽有人問本分事、未審如何祇對、良久云、有馬騎馬、無馬步行。

再住建長語 終

住相模州金寶山淨智禪寺語錄

侍者居中編

上堂、狗子有佛性、當堂挂起秦時鏡、狗子無佛性、利劍拂開天地靜、有佛性、無佛性、擿下拂子云、急急如　令。

至日上堂、晷運推移、日南長至、焰起氷河、花生碓觜、不是因緣、亦非法爾、且道、是何道理、拈拄杖云、我今分明說向儞、卓一下下座。

望日謝頭首秉拂、新舊兩班、并白雲東明和尚上堂、冬至前後、沙飛石走、三世諸佛不知有、貍奴白牯卻知有、象王迴旋、師子哮吼、提箇折脚鐺子、且要大家出手、推不進前、約不退後、因思東土小釋迦、天宮說夢自呈醜、引得白雲開笑口、卓拄杖下座。

臘八上堂、岸容待臘將舒柳、山意衝寒欲放梅、盡謂雪山成覺道、誰知瞌睡眼方開。

上堂、今朝七月、秋意凄切、露草蛩吟、風林葉脫、如來禪、祖師意、直下分明、一時漏泄、是汝諸人、還覺神清氣爽麼、其或未然、以手搖曳云、不說不說。

上堂、禪非意想、道絕功勳、路頭極處要急翻身、高安灘頭尿牀鬼、龍潭室裏點燈人。

上堂、百丈再參馬師、臨濟回看黃檗、飢鷹脫韝縧、猛虎插翅角、慥慕生獰無處著、諸人飽喫飯、

困噎眠、熱乘涼、寒向火、賴莫隨邪逐惡、雖然、作者好求無病藥

上堂、臘月二十五、競唱雲門曲、寶山格調新翻、且不隨時習俗、拈拄杖、卓一下云、白雪陽春和者稀、斷絃須是鸞膠續。

謝新舊維那、舉、興化打克賓維那公案、頌云、令奎賞罰、情忘恩怨、透頭徹尾、一刀兩段、梭飛陶壁夜雷奔、魚躍禹門春浪暖、利害只今誰共明、出群須是英靈漢。

結夏上堂、一切處是圓覺伽藍、一切心是平等性智、一切處不留、一切心無作、飢即飡、困即睡、拍禪牀云、瞎驢不受靈山記。

元宵上堂、竪拂子云、此燈爇嶺首傳迦葉、少林讓付神光、燈燈相傳至于今日、檢點將來一箇箇、總是弄光影底、以致天下師僧盡向光影裏頭出頭沒、若是光未發時消息、未有一人會得、只今要會麼、擊拂子云、正月十五是元夕。

解夏上堂、有修有證、埋沒己靈、無修無證、屈辱先覺、寶山期已滿、衆中莫有超宗越格底麼、顧視左右云、異獸藏頭角、靈禽惜羽毛。

淨智語終

住在城瑞龍山太平興國南禪禪寺語錄

侍者　志　謹編

師於正和二年八月一日入院、指三門云、重關互關作者同歸、莫有未歸底麼、彈指一下云、者裏進一步。

佛殿、（金剛王寶殿、）斂座而坐、幸自端嚴具足、無端被箇漢道个希有、便見七花八裂、斂坐具云、山僧今日爲伊蓋覆著。

土地堂、那一通、以香扣爐云、只者个、顯正摧邪、風凜凜地。

祖師堂、佛是假名、祖云何有、面面厮覷、泥猪疥狗。

據室、拈拄杖竪云、盡從上若佛若祖、天下師僧性命、今日落在山僧手裏、放行把住、一切臨時、莫有不甘底麼、靠云、咋咋。

拈勅黄、者一著子、殊勝中殊勝、奇特中奇特、且道、是箇甚麼、見麼、　法皇大寶、降自九重。

山門疏、鍋子大小、杓柄短長、山僧未入門時、已一一見了也、今日因甚鉢盂漆柄、渾沌鑿耳、不信聽取。

諸山疏、壁炬分輝、鄰好之義、稍涉諂諛、肝膽即異、相罵饒儞接觜、相唾饒儞潑水、不見道、出乎

爾返乎爾、指法座、向上一路滑、壁立萬仞險、山僧今日、滑險要一時坐斷去也。

陞座、(問答不錄、)提綱云、幸是太平世界、安然無事、無端雪嶺六年之後、少林九載之餘、自爾互出頭來、拈出草木、亂呈慒袋、迷昧陰陽、呼晝作夜、將六十甲子打亂了也、山僧久負不平、今日出來、要略爲整頓、要使人人知道、三百六旬、及閏餘成歲、四時平分、一陰一陽、分晝分夜、不得違時失候、雖然猶是世俗邊事、只如不傷物義一句、又作麼生、良久云、但見皇風成一片、不知何處是封疆。

當晚小參、入寺之始、今夜與諸人聚集片時、既彼彼心眼相照、事同一家、更不敢將佛法玄妙機關事理、濟北三玄、洞山五位、觸忤諸人、又況衆中三人兩人、乃是舊時道伴、所以山僧此來、一切但要仍舊、若能仍舊、則不妨我更證得般若三昧、內空外空一切皆空、二十空門悉皆證得、不妨超諸三昧、迥然獨脫與麼道、衆中忽有箇出來、道善學柳下惠、終不師其跡、又且如何、只向佗道、低聲低聲、淨地上不可狼狼藉藉。

復擧、僧問六祖、黃梅衣鉢甚麼人得、公案、拈云、大小祖師、摟出心肝五臟了也、只是罕逢識者、山僧輙成偈曰、一曲陽春奏玉徽、夜堂風細月華遲、調高絃絕知音少、誰擬黃金鑄子期。

次日爲　龜山聖廟上堂、大人具大見、大智得大用、於一毫端現寶王刹、坐微塵裏轉大法輪、卷舒立方外乾坤、縱横拄域中日月、乃至建造伽藍、悟明己事、猶是　先皇自己運用底事、只如末後大事光明煒燁、且道、只今在甚麼處行履、諸人還會麼、良久云、巨闢十三華藏界、藏身無跡海騰波。

中秋謝藏主幷維那上堂、月月月半月圓明、唯有今宵陪圓潔、世上人人爭賞翫、盡道圓明久還別、只如別處又作麼生、不見馬鐙箕、父子賞翫時、末後卻道、經歸藏、禪歸海、唯有普顧獨超象外、良久云、明明此意知誰會、法戰場中作者知。

頑極和尚忌、拈香曰、者箇老凍膿、素來情義薄、一味不諳是、恣肆頑與惡、年老變成魔、我被魔力攝、開眼落陷穽、有屈無處雪、如今已喜兩分張、年年西望恨尤切、今日燒香供養伊、且道、是報恩邪、雪屈邪、燒香云、不見道、記劍刻舟、掉棒打月。

上堂、一喝得三日耳聾、廚乏聚蠅之餕、三頓喫六十拄杖、囊無繫蟻之絲、直得戶破家殘、懷冤負屈、祖禰不了、殃及兒孫、帶累南禪、今日窮厮煎、餓厮炒、有屈無處分雪、雖然如是、心不負人、面無慚色、短長自有閒人說。

重陽上堂、今朝九月九、空山無所有、不帶紫萸囊、不飲黃花酒、因憶陶淵明、悠然見南山、萬象森羅齊出醜、何似攢眉便回首。

謝大衆看藏經上堂、三秋景殘、千林蕭瑟、回鴈嗈嗈、吟蟲嘖嘖、的的諸佛玄言、明明西祖消息、直下會得、正是認落葉作黃金、離此別求、又成棄珠珍而尋沙礫、者裏兩重鐵壁相似、須是一一撥透始得、且道、撥透後如何、卓拄杖云、鐵壁鐵壁。

上堂、仲冬嚴寒、凍破泥團、滴水滴凍、言端語端、黃面老漢、拈弄不出、被金色頭陀當面冷笑、二祖大師、落陷不知、遭缺齒老胡一時熱瞞、與麼與麼、大難大難、南禪與麼道、莫別有見處麼、蓦拈拄杖、卓一下云、水落露幽石、雲開列遠山。

至日上堂、晷運推移、日南長至、共惟首座大衆、各各膺時納祐、慶無不宜、惟有南禪拄杖子、依舊鱗皴刺蝎節、笑看花綻不萌枝、卓拄杖一下、便喝一喝下座。

上堂、擧、僧問雲門、如何是雲門一曲、門答云、臘月二十五、僧云、唱者如何、門云、且緩緩、拈云、者僧有攻城撕邑之心、雲門文韜武略俱備、者僧未免、才交鋒便見退避、山僧今日、要奪他一機、攙先一步去也、復頌云、雲門一曲超今古、道箇臘月二十五、南禪今日要攙先、且趁月圓正當戶。

謝新舊兩班上堂、擧祖師偈云、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂、與麼則莫從他覓、但向己求、如是則一進一退、一去一留、有左有右、有放有收、妙用縱橫得自由、良久云、大抵還他肌骨好、不搽紅粉也風流。

佛涅槃上堂、召衆云、無憂樹下、指天指地稱尊、娑羅樹間、以手摩胸示衆、三百會歎寶閣墜、八十年鎖夢關空、南禪今日效慇懃、雖是死蛇、要活弄、

謝首座上堂、值雪、召衆云、賺臨濟喫棒、坐南泉鉢位、一種風流、十分標致、他家會踏上頭關、不是當陽誇意氣、帝城梅柳正暄妍、添得六花呈異瑞、

上堂、三月皇都浩蕩春、桃花爛熳笑靈雲、眼睛打失無人會、暢殺釣魚船上人。

閏三月旦上堂、三月又三月、光景暗相催、相催箇甚麼、催人老死來、古者道、衲僧家高高峰頂立、深深海底行、且道、妙高峰頂高多少、東大海水深多少、諸人若也到頂到底來、不妨一切處可以自由自在、若也未然、十二時中也須著些精彩、更若驢趁大隊、閻老子未放儞在、卓拄

杖下座。

上堂、召大衆云、三春已去九夏斯臨、園林花事退、庭樹綠陰森、梁間燕語、枝上蟬吟、隴麥翻黃雲、田秧長綠針、祖師意諸佛心、目前明歷歷、何得自沈吟、擊拂子下座。

結制上堂、十方同聚會、凡聖同居、龍蛇混雜、箇箇學無爲、白日青天、開眼作夢、此是選佛場、甚處得者消息、心空及第歸、也是鬼家活計、然雖如是、南禪更有一句子、爲諸人說破、一不得進前、二不得落後、三不得坐在無事甲裏、若依吾所言、則一切處得大自在、其或未然、切忌撞牆撞壁。

謝頭首秉拂上堂、召衆云、諸佛說不到處說一句、奔忙日月、祖師行不到處行一步、翻到山河、說不到行不到、未免特地波吒、只如行到說到、又作麼生、良久云、少年曾決龍蛇陣、老倒還聽稚子歌。

上堂、一夏已過半、那事辨未辨、男兒大丈夫、一刀須兩段、若未辨、光陰急如箭、若已辨、十影神駒立海涯、五色祥麟步天岸、欲辨未辨時如何、歷歷分明君自看。

謝新舊兩班上堂、石藏玉則山潤、水藏珠則川媚、叢林得正人則振興綱紀、自然雲合響應、至於遊及車海、靡不中機中的、乃至左右逢其原、進退合其宜、雖然諸人要見其人麼、乃顧視左右云、見麼、眼生三角、頭峭五岳。

中秋上堂、河漢秋中月正輝、十分圓潔更無虧、南泉拂袖機尤峻、藥嶠披雲嘯自怡、光境俱忘復何物、吐吞七八更誰疑、此宵大地人皆望、誰薦清光未發時。

正和乙卯四月十三日、再住、拈勅黄云、此是
上皇於一毫端拈出傳持正法眼藏底一著子、諸人若也未曾、更煩維那爲衆重演。

上堂、領破蹄穿一老牛、已甘閒散臥林丘、無端更使牽犂杷、引得傍觀笑不休。

上堂、一夏恰過半、本參事何慢、懞懂癡禪和、向外覓方便、殊不知大事本來成現、擊拂子云、在耳曰聞、豎起云、在眼曰見、聞見歷然、了了無間、良久云、聲前色後新羅箭。

上堂、擧、古者道、萬法是心光、諸緣唯性曉、本無迷悟人、只要今日了、師召衆云、古人與麼道、大似靈龜曳尾、山僧今日、直截擧示時人去也、良久云、煅玉要經三日火、探珠須下九重淵。

二月旦上堂、二月仲春漸暖、處處花明柳媆、梁間紫燕呢喃、枝上黄鸝睍睆、觀世音菩薩、爲諸人說普門法、諸人還見麼聞麼、歷歷不妨同證金剛三昧、若也不見不聞、良久云、山轉疑無路、溪斜別有村。

因夜適回上堂、自劾云、求閒宵適詔追回、的的要津把斷來、滿面塵埃眞可笑、誰憐百念已全灰。

南禪語 終

小參

結夏、無門可入、目前徑透重霄、得路便行、腳下泥深三尺、所以鰲峰者裏安居結制、只要諸人隨分度時、忽有一箇腳蹉手跌、便如雲龍出水、金鳳搏空、不住圓覺伽藍、毀罵平等性智、山僧只低聲向伊道未在、何故、大海若知足、百川應倒流。

冬至、一法不有、天何高地何厚、萬法不無、白是鵠玄是烏、寶佗與麼告報、有箇出來道、當此一陽來復、萬彙發生、石筍抽條、氷河起焰、畢竟是有是無、良久云、到岸休尋筏、歸家罷問途。

除夜、今日明日、新年舊年、四時密運、萬化迭遷、西舍東鄰、送窮待富、張公李老、祭鬼燒錢、唯有禪和家、鬧蕩蕩地、逢緣遇境、如眼見鼻孔一般、雖然因甚十箇指頭、有長有短、寶陀有箇道處、只恐無人點首、良久云、大盡三十日、小盡二十九。

結夏、禁足護生、胡孫繫露柱、尅期取證、盲鶴下清池、衲僧家一切處破除、一切處成就、鬧市裏放憨賣峭、孤峰頭嘯月眠雲、若是二千年前舊路、終不肯容易下腳、然雖如是開眼也著、合眼也著、卓拄杖一下。

解夏、晝飡夜寢、潙山薄處先穿、種粟開畬、大仰好中放黥、福山一夏空過不空過、不曾謾個諸人、一夏空過不空過、也鶴長鳧短、棘曲松直、物是定價、錢是足陌、雖然明日布袋頭開、諸人東去西去、前途忽有人問本分事、未審如何露箇消息、擊拂云、牛角長二寸、兎角長三尺。

除夜、因雪、把定要津、凜凜千峰聳寒玉、放開線路、融融萬國動祥光、儞若向放開把定處搏量、紛飛裏輥、無出身路、不向放開把定處領會、冷地上臥有甚了時、直饒虛空粉碎、大地冰稜、逈絕纖塵、洞然明白、拈拄杖云、福山拄杖子、也未肯放儞過在、何故、一年三百六十日、今宵正是結交頭、卓拄杖一下。

結夏、向上一路、千聖不傳、拈拄杖、卓一下云、者裏得箇入頭、三世諸佛、只在脚跟下、十方世界、只在一針鋒、說甚禁足護生、說甚尅期取證、與麼與麼、退水藏鱗、不然不然、望雲上樹、卓一下云、三世諸佛絕影迹、卓一下云、十方世界百雜碎、七縱八橫、東倒西擂、笑倒明州憨布袋。

冬至、全無巴鼻、死水躍獰龍、別有生涯、虛空開孔竅、等是通天活路、多少人脚高脚低、雖則自己家鄉、也要儞親行親到、是則固是、其奈我此一衆、總具軒昂氣宇、洒落風標、妙契環中、智遊象外、終不墮此機境、雖然、冬至寒食一百五、前頭大有雪在。

結夏、直下承當、鐵圍非是險、別求解會、弱水未爲遙、若也眼不掛戶、意不停玄、影響之流、又難持論、所以福山、尋常不敢錯誤諸人一絲毫許、蓋爲冬寒夏熱、東土一同、夜暗晝明、西天不異、是則是、只如挪蘭陀寺、明日有幾人結制、拈拄杖、卓一下、喝一喝。

冬至、德山棒、皮下無血底不痛、臨濟喝、耳根無聰底不聞、若也知得痛、聽得聞、正是沙尾曝顋、蘆根鍛翮、衲僧家、上無攀仰、下絕己躬、戢玄機於未兆、藏冥運於卽化、騰騰任運、蕩蕩無拘、豈屬寒著變遷、管甚陰陽消長、饒伊如是、福山也未許儞在、何故、一冬二冬、叉手當胷。

解夏、僧問、棒頭薦得未是作家、喝下承當猶爲鈍漢、去此二途、乞師方便、師云、退後退後、僧云、

可謂是蘆花兩岸雪、江水一天秋、師云、聽事不眞、喚鐘作甕、僧云、記得僧問古德、正恁麼來時如何、云、金剛鑄鐵券、意旨如何、師云、買帽相頭、僧云、一向恁麼去時如何、云、道士倒騎驢又作麼生、師云、像席打令、僧云、恁麼不恁麼時如何、師云、甜瓜徹蔕甜、僧云、恁麼卻恁麼時如何、師云、苦瓠連根苦、僧云、總不恁麼時如何、師云、百雜碎、僧云、只如一夏已過布袋頭開、親切一句如何垂示、師云、不勞懸石鏡、天曉自鷄鳴、僧云、與麼則柳標橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、師云、脚跟下好與三十、乃云、三世諸佛不知有、眞不掩僞、狸奴白牯卻知有、曲不藏直、有來由無準的、恁麼也得、不恁麼也得、恁麼不恁麼總不得、和座盤一揭揭翻、便見地絕八維、天無四壁、拄杖頭邊、此土西天、草鞋跟底閻浮檀特、雖然、此猶是衲僧尋常遊戲、只如九十日內、諸人所修所證、親切底事作麼生、喝一喝、我行荒草裏、汝又入深村。

除夜、臘逐更籌盡、春隨斗柄回、寒暄一夜隔、客鬢兩年催、與麼與麼、滴水滴凍、徹骨寒威、不與麼不與麼、春回幽谷、和氣熙熙、與麼不與麼、拈拄杖云、大哉乾元新歲曆、天然奇格去年梅、卓一下。

冬至、畫榜堂前、篩灰厭鬼、撥退菓卓、突陣爭旗、豈知朕兆未分已前、一毫了無差互、衲僧家、智游象外、妙契環中、隨時寒暑任運、西東驀到渾無伎倆、窮則變、變則通、如水入水、似空藏空、拈拄杖云、從前汗馬無人識、卻要重論蓋代功。

解夏、擧、僧問趙州、承聞、和尚親見南泉、是否、州云、鎭州出大蘿蔔頭、師云、蘿蔔親曾出鎭州門前千古路悠悠、朝朝暮暮人來去、幾箇親曾到地頭。

小參　終

法語

上龜山法皇

佛祖大事、明白徑截、離相離名、唯貴大智願、大力量人、於纖塵未動已前、猛著精彩、一提提得、便見輝赫古今、照耀天地、大而梯杭九有、津濟四生、小而語默動靜、俯仰折旋、靡不左右逢原、遠近中的、所謂大人具大見、大智得大用是也、若也智願微、力量小、循情塵纏世網、不能勇自決裂、與夫務採集衒見知、逞詞辯弄精魂、不能頓自休歇、皆當面蹉過者也、故達磨大師、對梁皇、只道箇不識、無業唯云、莫妄想、後來或擎叉、打地、豎指、豎拂、行棒、行喝、種種垂慈、無非覿面提持、要人直下便領、豈肯落二落三耶、惟

陛下、受記靈山、統御海宇、累劫熏習、篤信宗乘、玆蒙賜問、誠媿菲薄、謾以管見槼陳如右。

天縱之聖、悟不由師、正眼豁開、全機獨脫、則一切處一切時、至於導養聖子、光宅天下、日應萬機、開物成務、莫非本有光明之妙用、佛祖向上一著也、外此別求、則非所謂道矣。

示相州太守

卽心卽佛一轉語、眞是渾鋼鑄就、如今欲明此旨、但存正信、心具決定、志於應酬事物、折旋俯仰、行住坐臥、飲食起居、一切處、一切時、常常提撕、反覆究觀、常令身心虛豁、正念現前、久久之間、必然心體廓然、如雲開日朗、塵盡鏡明、直下可無疑滯矣、況此心本來明妙、蓋由無始無明、

妄想執著、所以昏蔽、若一旦洞徹、則與諸佛無二無別矣、從上佛祖、出興于世、種種化誘、不過令衆生明了此心而已、但學道之人根有利鈍、緣有淺深、若上根利智、一聞千悟、穩鎭家堂、更有何事、若中下之機、當勉自修習、仰山和尚、所謂若不安禪靜慮、到者裏總須茫然是也、然安禪之時、必有二障、一謂昏沈睡眠、二謂雜想變亂、此障起時、只提箇卽心卽佛、便可一截截斷、又不可將心湊泊、不可用意摶量、不可緩不可急、又不可自生疑慮、我塵俗身心、如何便言是佛、又不可預憂、此心如何便得明了、才有此念、便成障道矣、但請如此用功、忽然築著磕著、直下如桶子底脫一番、不妨是箇了事大丈夫也、古人云、但辨肯心、必不相賺。

示雲州禪門慧徧

一心無事、萬境不生、心境虛融、聖凡何有、聖凡情盡、體露眞常、體若虛空、眞常本寂、無三界可出、無菩提可求、一道空平、逈然獨脫、謂之寶王三昧、亦名大總持門、祖師門下、謂之金剛王寶劍、得之者其善護持、喝。

示義則侍者

則侍者、以母訃至、言別還里、袖紙覓語、余曰、汝居侍司一年、旦暮相從、豈不知、山僧元無語句、今乃求之、是不知我也、扣之愈力、因借虛空爲口、以問之、汝曾聞漸源爲道吾侍者、因同往弔慰、擧生死話、道吾用拳頭底消息否、則云、某甲粗知、只是不敢造次、余曰、大丈夫捋虎鬚也是尋常、今既未能且去、見得北堂元不曾死底面目分曉、不妨再來使儙綦一著、山僧那時又別作區處。

示良眞首座

絲毫係念、三塗業因、瞥爾情生、萬劫羈鎖、直得絲毫淨盡、一念不生、未是衲僧行履處、衲僧家、不取一法、不捨一法、眼裏見、耳裏聞、若智眼不明、墮在區宇、者裏能向無道理處、放身捨命、一回再甦、起來心眼清爽、隨處自在、若也稍涉遲回、便向石火中參取、咄。

法語終

拈古

梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝云、對朕者誰、磨云、不識。

大小祖師、盡力道不得、未免麻纏紙裹。

僧問谷隱慈照禪師、如何是道、照云、臘月三十日。

是則是、王言如絲、其出如綸、若以不言而化、無爲而治、覰之即遠矣。

僧問雲門大師、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、圓悟拈云、天寧即不然、有問如何是諸佛出身處、只向他道、薰風自南來、殿閣生微凉、大慧聞得、豁然而悟。

掣電機懸河辯、還他跛脚阿師、包齒老漢、若是諸佛出身處、直是天地遼遠、只如大慧因甚悟去、不見道、物見主眼卓竪。

藥山和尙、同雲巖道吾遊山次、見樹二株、一枯一榮、山遂問、榮者是、枯者是、雲巖云、榮者是、山云、灼然一切處、光明燦爛去也、又問道吾、吾云、枯者是、山云、一切處、枯淡去也、高沙彌忽到、遂問高、高云、榮者從他自榮、枯者從他自枯、山云、不是不是。

樂其可知也、始作翕如也、縱之純如也、皦如也、繹如也、以成。

僧問風穴和尙、語默涉離微、如何通不犯、穴云、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香、雪竇和尙云、曾有人問雪竇、只對他道、劈腹剜心、又作麽生、復云、因風吹火、別是一家、傷鼈恕龜、必應有

主。

勇如賁育、智若良平、二大老固是作家手段、若要不犯離微、也恐未在、且作麼生得不犯、明日來向汝道、

臨濟侍立德山次、山云、老僧今日困、濟云、老漢寐語作麼生、山擬拈棒、濟便掀倒禪牀。

諸人會麼、二老漢、爭小失大。

僧問投子和尚、如何是十身調御、投子下禪牀立。

投子老人被僧一問、直得起身立地、若是十身調御、大似持蠡酌海、折草量空。

文殊三處度夏、迦葉白椎欲擯出文殊、方拈椎次、乃見百千文殊、椎不能舉、世尊云、迦葉汝擬擯那箇文殊、迦葉無對。

一朝權在手、看取令行時、迦葉未曾舉椎、黃面老漢、文殊大士、已倶遭擯出了、也說甚麼擬擯那箇、然雖如是、盡法無民、且放過一著。

拈古終

頌古

洞山麻三斤

鐵蒺藜槌當面擲、忽忙回首已遲遲、春光滿眼花含笑、問著東君總不知。

瑞巖主人翁

自呼自應有來由、引得傍觀笑不休、盡謂莊周夢胡蝶、誰知胡蝶夢莊周。

心不是佛、智不是道

年去年來舊又新、雪消風暖自回春、蓬頭垢面隨時過、佛祖從來不度人。

日面佛月面佛

羞對菱花整鬢雲、玉顏二八正嬌春、傷風咳嗽尋常事、卻作虛勞說向人。

國師三喚侍者

門外羊腸世路危、綢繆尋覓話家私、雖然毫髮無留隱、肝膽難防楚越時。

玄紹二上座、參烏臼

電光裏白刃縱橫、石火中紅旗閃爍、令人長憶李將軍、一箭雙鵰隨手落。

不與萬法侶、是何物

一口吸盡西江水、四海五湖皇化裏、喫官酒了臥官街、起來唱箇邏邏哩。

大家相聚喫茶茗

大家相聚喫茶茗、路在門前莫自迷、臺樹綠陰人寂寂、風光元是武陵溪、

萬里無寸草、出門便是草

孤鶴冷翹松頂風、片雲忽過大虛空、衲僧動止渾無礙、肯落它家荒草中。

風頭稍硬、且歸暖處商量

玉帳沈沈巧運籌、安南塞北要全收、當時若有英雄漢、奪鼓爭旗未肯休。

居一切時、不起妄念

千峰雨過瞻寒翠、萬木霜餘看落紅、飲啄隨緣過時節、誰知身在太平中。

婆子偸趙州筍

蒼龍頭上拶折角、猛虎口中拔得牙、不是渠儂張意氣、相逢正遇惡冤家。

京師出大黄

古本方書行世、醫慣將臭腐作神奇、回生起死些兒妙、盧扁耆婆未得知。

一山國師妙慈弘濟大師語錄卷上 終

一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下

偈頌

古源

一川虛漾淥粼粼、流注知經幾劫塵、桃破小紅春著岸、可曾無路接秦人。

送儉上人還鄉

特地今朝又問程、扶桑未必在東溟、南朝四百八十寺、那處春山草不青。

梅峰

大庾嶺頭根種別、氷肌玉骨自天眞、曉來孤頂雪深處、五葉一花天地春。

畢世面壁扁

蒙頭一衲送餘年、百煉精金色轉鮮、卻是老胡元不會、誤人雙臂弗完全。

夢庵

一枕羅窻萬境閒、槐宮元不異人寰、若於門壁書心字、又在黃粱未熟間。

雪中送均侍者歸京

漫空袞袞六花新、短策橫肩遠問津、一色明邊移得步、東風桃李洛城春。

險　崖

峭峻一方窺不得、紛紛斫額但空回、上頭更有孤危處、撒手要渠親到來。

送準侍者

眼光遙映海色碧、短策陵秋又向東、若對諸方話來歷、莫言相見在途中。

送師齊禪人省師

見與師齊滅師德、紛紛佛祖是何人、行行高踏毘盧頂、花柳洛陽三月春。

密　室

六窗深閉豈容開、佛眼未窺亦自迷、既是不曾通水泄、曾郎謾道爛如泥。

寒　潭

直下窺時深萬丈、冷冰冰地不生瀾、霜天夜迥月沈璧、未許蒼龍此屈蟠。

南　山

碧聳羅浮更那邊、倚空孤峻絕躋攀、霏霏密霧隱玄豹、著眼誰曾見一斑。

雪　心

紛飛盡處自明白、內外中間莫謾求、夜半齊腰人不見、三星聯照月如鉤。

字　堂

濃研香墨蘸霜毫、揮洒當軒意氣豪、一點空中誇八法、睦州門戶未為高。

古　樵

斧鈍利消不記春、一肩枯燥重千鈞、笑他當日嶺南獠、低價沿門揺與人。

鐵船

收拾六州頑與鈍、潑天爐鞴巧鎔成、乘時運濟含靈去、不似華亭載月明。

無相

九十七種元非有、誰言千百億分身、更於色後聲前覓、舜若多神笑轉新。

石門

巖崖險處立重關、確實須知入作難、一拶東西成兩扇、莓苔路滑雨初乾。

少林

面壁人歸歲月移、叢叢寒樹半無枝、霜凋萬葉紅於血、又是魂驚斷臂時。

雨夜作

一秋長是雨淋零、點滴空堦夜夜聲、三十餘年江海夢、博山煙斷一燈明。

雪夜作

寒添少室齊腰恨、凍結鰲山客路情、一夜打窻聲淅瀝、又因閒事長無明。

紅白梅　和然翁禾上韻

花開五葉媚韶光、艶質雖同卻異粧、可是枝分南北後、搽坯抹粉鬪馨香。

四時般若

品物陽和

暖風晴日山川媚、細雨輕煙草木薰、活意明明如不委、桃花羞見老靈雲。

園林清著

殿閣薰風日正長、綠槐紅藕徧林塘、莫言人世炎蒸甚、歇得馳求心自涼。

萬里清光

爽籟蕭蕭玉宇寬、桂花芬馥月輪圓、韶陽體露金風句、知是何人擧得全。

千峰寒色

雪霽層巒爭聳玉、曉風高拂凍雲開、瑤英滿樹天香遠、一夜淸寒徹骨來。

獨脫無依

萬物既唯我、翛然只自由、宗乘竟何有、佛祖是怨讎、天闊孤雲晚、風高一鶚秋、寥寥閒送目、新月又懸鉤。

隨流得妙

信手拈來用、當機著著親、烏藤驅夜鼠、白拂掃窗塵、池靜知魚樂、松疎見鶴身、絲毫曾不間、開眼有迷人。

正和丙辰立春日

太上皇幸慈濟庵、謾成野語上　奏云

結庵聊爲養衰殘、敢望　皇明顧野萱、陋巷士民瞻寶仗、近鄰兒女覿　堯顏、和融陽煦生寒谷、赫奕衣冠耀掩關、感荷　睿恩三祝願、福同東海壽南山。

御製和　即席

瞻覩河東到此庵、載陽雪盡路邊萱、參禪向夜訪閒坐、慈濟迎春謁老顏、花色水聲通意地、朧梅寒樹悉機關、靈光今照從天外、新月始昇牆上山。

陽明里前博陸甲第

異邦珍玩妙莊嚴、花柳逢春滿院芳、法法元來非內外、更於何處覓西方。

銀青光祿大夫有忠卿、立春韻

堆盤青菜晴佳節、漸見南枝拆小梅、坐對名卿兩無語、唯將華髮伴高才。

和十牛圖并序

十牛圖、古宿無途轍中途轍也、若論此事、眨上眉毛、早已蹉過、況有淺深次第之異乎、然去聖逾遠、法當危末、根性多優劣、機用有遲速、又不可一槩定之、故未免曲設多方、以誘掖之、此圖之作是耶、究此微旨、各各至於安樂休歇之地、可以自利利人也、此圖後來布世、諸老頌者和者頗多、今山僧不揣續貂於諸老之後、覽者謾發一笑云耳

尋牛

本無形跡可求尋、雲樹蒼蒼煙草深、腳下雖然岐路別、巖前枯木自龍吟。

見跡

草窠裏走路何多、只此蹄跡莫是麼、腳力窮邊重進步、昂昂頭角要逢他。

見牛

風暖幽禽枝上聲、雨餘原草色尤青、者回已覩渠頭面、戴氏毫端寫弗成。

得牛

鼻孔遼天拽轉渠、從今狂逸性須除、雪山香草和煙細、且要驅來向此居。

牧牛

隨時水草活渠身、純淨何曾染一塵、苗稼自然混不犯、收來放去卻由人。

騎牛還家

羸牛已純卻回家、樹下柴門啓暮霞、放教駒駒欄裏臥、靜看新月挂簷牙。

忘牛存人

簑笠從茲不入山、鞭繩抛卻一身閑、更無觳觫勞牽拽、贏得謳歌翠靄間

人牛俱忘

一念空時萬境空、重重關隔豁然通、東西南北了無跡、只此虛玄合正宗。

返本還源

既然無作有何功、眼見如盲聽似聾、澗水湛如藍色碧、山花開似錦機紅。

入鄽垂手

換卻皮毛轉步來、依稀鳥觜與魚腮、通身固是混泥水、我此宗門要大開。

山中四威儀　和大休和尚韻

山中行、草鞋跟斷脚頭輕、縱閒情、眼裏風光耳裏聲、悠然心跡既雙清、步步無非是證明。

山中住、閒踪只似孤雲寓、門前路、草沒苔荒渾不顧、客到撥灰分半芋、懶殘特地傷鹽醋。

山中坐、六門不用重關鎖、誰似我、獨對雲峰千葉朶、雪夜若無人臂墮、面壁胡僧成懡㦬。

山中臥、松根石榻平如座、非造作、黑甜境裏乾坤大、只有嬾公知者箇、繁痁當年曾說破。

偈頌 終

贊佛祖

出山相

門裏出身易、身裏出門難、六年無折合、北斗面南看。

頭陀相

持錫擎盂去分衛、七佛儀式豈如是、增金面皮特地黃、瞞人手脚全敗露。

觀音大士

立大圓鏡空如來藏、動靜相不生、音聞性俱淨、斷崖流水低頭聽。

海上踏蓮舟、俯視水月中、一滴楊枝雨、淸凉徧塵刹、莫是普門境麽、咄。

補陀巖上人、現身三十二、同我涉東溟、不離三摩地。

文殊大士

出女子定、對維摩默、叱想金毛、更須返擲。

普賢大士

轉如是經、開五濁迷、截流香象、猶溺淤泥。

達磨大師

風飄飄兮吹衣、航一葦兮安之、教外別傳兮無法、游梁歷魏兮奚爲。

十萬迢迢渡遼淡、卻對梁皇呈醜惡、既從平地起波瀾、不知打濕袈裟角。

西來行路錯、對御開口錯、長江風浪麤、少林花木落、更言傳法救迷情、錯錯。

形墀出語忤天聽、去國身如一葉輕、揚子大江東去水、至今風激怒濤聲。

布袋和尚

露胷坦腹、弄醜擧止、一般雖是小兒戲、打失兜率陀天底。

滯貨貨不售、等人人不來、憨坐靠布袋、笑口爲誰開。

寶誌和尚

杖排刀尺塵中走、善竊如何露脚手、良哉十二面觀音、生在鷹巢塟龍阜。

魚籃

以色誑盲聾、誰知伎已窮、籃中無活底、徧界扇腥風。

馬郎婦

雲鬢亂縱橫、悲深一寸情、金沙灘上月、長照誦經聲。

寒拾

澗泉研墨汙苦石、斷壁題詩雜蘚紋、好句依然顯不得、峩眉山月五臺雲。

舡子和尚

數曲漁歌和者稀、華亭江上自逶迤、艤舟袖手風林下、伶俐闍梨未到時。

玄沙和尚

雨笠煙簑一釣篷、蘆花深處得從容、螺臺江景無窮樂、借路如何上雪峰。

猪頭和尚

古佛雖應現、敗缺殊不少、滋味苦無多、粗飡易得飽、引得時人開口笑。

蜆子和尚

三文撈波、東撈西摝、咄者窮鬼、以蝦爲目。

政黃牛

午夜頻呼熟炙時、可人風味許誰知、朝來牛背得新句、驚起溪頭白鷺鷥。

郁山主

溪橋一蹶兩眉橫、瓦礫拈來作夜光、脚下至今浮逼逼、蹇驢閒跨踏斜陽。

朝陽

閒處著些工夫、急時須得受用、將敗壞補敗壞、金烏曉從東涌。

對月

言言標月之指、句句止啼黃葉、了義與不了義、玉兎夜從西沒。

亮座主

開虛空講經、入西山冷坐、回首青石空、疑殺熊措大。

智覺禪師

大法盟主、衆生導師、以向上事、起法眼宗派、以無礙智、發佛祖玄微、落落慈舟橫苦海、輝輝宗

鎔爍群迷、定身歸淨域、其帝禮慈儀、光明千古西湖水、宗旨發揮無盡時。

密庵和尚

行脚錯逢人、投機語未親、卻將正法眼、喚作破沙盆、轟雷掣電、旋乾轉坤、大東山正續之統、奈濟北瞎驢之群、個個無巴鼻、只爲渠儂無腦門。

癡絕祖翁

離蜀已領列祖業、到南深中曹源毒、但餘窮相一雙手、慣向諸方妙搜取、法性海寬波瀾闊、一生妙轉風雷舌、始自秀水至陵霄五十餘年與巨孽、當機妙用翳睛法、觸破砂盆恣除滅、行嬰兒行無少缺、一片身心堅似鐵、王臣多居弟子列、老去爲人尤直截、我慚庸昧嗣餘烈、西望玉山心屢折。

頑極先師

憶昔逢伊鄮嶺頭、無端與我結冤讎、今朝海上重相見、彼此難遮滿面羞。

蘭溪和尚　英長老請

南詢離西蜀、傳法來東國、鼓濟北濤瀾、肆無明惡毒、龜毛在握兮、佛祖提避、頂門四照兮、人天悅服、是謂此土禪宗之初祖、故　勅旨諡之曰大覺、宗風自有英賢續。

千光法師

氣貌清靜、德行虛奇、西游得黃龍下餘緒、老虛室之旨、東歸爲扶桑盛時、兩代　帝者之師、宏開二處道場、遠貽千古清規、其平生潛行密行、眞末世光明之勝幢、其融通祖意教意、乃東方

法道之著龜、

無學和尙

風神淸峻、氣宇宏豁、跳出北硼波瀾、奮迅龍淵鱗鬣四十年、宋土放恣七八載、扶桑肆點、提出格機用鎻口訣、佛眼欲覰無門、衲子有恨難雪、龜毛拂子信手揮、海岳掀翻雷電掣、臨濟一宗、楊岐正續、被渠陵滅、別別、耿光千古照塵刹。

虛舟和尙

矍鑠精神、沈深器量、借路入靑山、得無得之得、祖肩荷祖道、行難行之行、冷泉水裩底飜瀾、古龍淵滔天起浪、四十年介行吳越、數萬里名飛海上、夫是謂楊岐直下、松源的孫虛舟和尙。

大休和尙

心直如絃、性急於火、以天池滴水、助翻東海濤瀾、守楞嚴三昧、勤修平時功課、三四處爲人垂提、一平生淸坐不臥、雖微佛法身心、大作師僧殃禍、末後瑞鹿峯前、煒然收因結果、本無形相可描貌、今把虛空強彩畫、龜谷山前藏六處、傳芳續有英賢者。

西澗和尙　小師正開請

高明氣節、淸朗容儀、太白的嗣、冷泉孫枝、在唐土已兩開鋪席、來扶桑則重運爐鎚、大用處不存佛祖、妙唱時不犯離微、謂此大通之眞、是錯認渠、謂非大通之眞、是蹉過伊、竹篦橫揮處、又見花開五葉時。

鏡堂和尙

壯年離蜀走游唐、藤杖芒鞋徧四方、太白峰前逢瞎老、卻傳毒氣向扶桑。

無關和尙

嬌嬌龍驤、眈眈虎視、聖一師窮活計、蕩盡無餘、徐師叔無口刀、用得正快、三尺竹篦橫揮、大地風飛雷厲、是謂陵霄的孫、南屏家嗣、巍巍　王臣之師、的的衲僧殃害、慧日峰前、淸風未已。

葦航和尙

法中之傑、僧中之英、得大覺之妙用、立濟北之法城、東州名山廣作佛事、巨福瑞鹿、大振嘉聲、檀那之所欽德、衲子之所誠傾、又其妙圓之智、耆頤之齡、又不可備於丹靑者也。

藏山和尙

雲心玉格實瓌奇、披剃先依聖一師、年少游方參大覺、福山多衆振綱維、十載徧參於唐土、勘破徑塢與思溪、一帆晚歲回鄕國、宗風四處力提持、　王臣悉生欽敬、緇素無不依歸、七十六年末後句、八海枯九山崩、無生曲調少人知。

桃溪和尙　　小師則都寺請

英明氣宇、淸朗眉目、大覺的生、無明餘毒、西游問道、遇知識而名高位高、東歸住山、播玄風於西國東國、檀信歸崇、禪徒悅服、至於隱小杉田兩戶、瑞鹿末後游戲去來、直是光明照燭、只箇描貌將來、永爲人天軌則。

覺心和尙

無門喝下落便宜、蕩盡生涯不自知、赤手歸來成活業、東山五葉盛橫枝、對　御時　天顏喜

悅、全提處衲子攢眉、九十二年游戲耳、鷲峰千古碧巍巍。

高峰和尚

圓照叟之孫、無學翁之嗣、以本色住山、以眞慈應世、文武火再輝東方、鎖口訣重拙此地、話行巨福峯前、老憩金寶山內、更有東山暗號、人爭舉揚、又提中峯沙盆、信手撲碎、夫是謂眞濟北直下子孫、扶桑國大振別傳宗旨者也。

規庵和尚

春空之雲、秋水之月、舒卷高朗、光明澄潔、法道之龜鑑、僧中之奇傑、早依龍江老子、契剗草機便具超方之志、後侍佛光佛心、棒喝下妙稱鎖口之訣、以妙密鉗鎚、煅煉諸方衲子、以眞實道、福契合　龜山上皇、二十餘年、大其設施、化荒棘之林、爲一方巨刹、功成不居、時至便行、末後全提、尤爲奇絕、些子徑山文武火、今日扶桑燄氣烈。

孔子

學爲萬世所師、道由一貫而傳、也知三千高弟、尙泥六籍陳言。

老子

先天地而有生、極玄妙而莫傳、不遇關尹喜、誰可授五千言。

巢父洗耳

萬乘於君一羽輕、可憐逃利不逃名、崖泉自洗是非耳、千古潺湲瀉恨聲。

仲父飲牛

義讓清逃各有涯、徒將聞見汙天和、松根石上一回首、觳觫朝來渴正多。

和靖先生

古壺夜凍苦枝瘦、童子寒飢鶴夢長、句在目前吟不到、凝愁擁鼻隱匡牀。

樂天居士

鳥窠已往韜光老、平世功名一夢非、八節清灘新鑿了、吟看懸瀑坐苔磯。

○本朝名德贊

上宮太子

漢地南嶽、累世修持善道、扶桑東宮、乘願弘通正教、前身後身、一夢兩覺、救世悲心似滄海、萬古慈光滿蓬島。

上宮太子見病達磨

不來相而來、不見相而見、臥底立底、覿體對現、既已知得儞病痛、何必更出手露面、更言傳法救迷情、如何瞞得英靈漢。

弘法大師

游普賢願海、傳佛祖印明、五筆謾遊戲、一法度群情、飛杵高峰松翠老、定身遺化儼如生。

最明寺

以英明盛德不贊　皇猷、以菩提大心、興隆佛法、世間出世間、一一俱超越、靈機密運妙無窮、千古恩光照塵刹。

最勝園寺

天生英明東國主、四十年間民父母、威惠兼行六十州、功成還向率陀去。

佛祖讃終

自讃

慧日謹長老請

心如止水、貌若枯松、佛法不會、宗說豈通、懷藏短拙、賣弄赤窮、合死唐土、錯來海東、踞曲彔揮麈尾、衒知見、誑盲聾、謾敢呵風罵雨、不能打鳳羅龍、會有作家不放過、卻將五彩繪眞容。

保福猷長老請

踞坐高座、揮白麈尾、無佛法可傳持、世事不能料理、必有惡業緣、遠來扶桑地、四五處住山、無一些能事、一處不通方、鼻孔能出氣、汝今强要貌吾眞、萬古徽猷只箇是。

良眞首座請

眼眈眈似鼓槌、頭兀兀如木杓、既是無禪無道、何用逾海越漠、良哉眞正爲人、三尺龜毛信手揮、烏藤冷嶪禪牀角。

良舜維那請

傳持無佛法、應用沒意智、但能飢喫飯渴飲水、無端名徹元君、賜金襴官職號妙慈弘濟、迢迢送過東大海、年來老病百無堪、人前不欲露全體。(半身。)

性淳道人請

木石體質、雲水精神、陵辱佛祖、屈抑平人、不解說心談性、要渠返朴還淳、得龜毛在手、方能識

得佗眞。

禪人請

西來無法可傳持、合向深雲遁過時、强據胡牀掃禪病、累佗佛祖暗攅眉。

尼明宗請

有而本空、動而常靜、江南水上閑雲、滄海東邊布影、有時格外明宗、只要聲前喚領、龜毛在握兮任縱横、勘破末山不露頂。

尼明皓請

唐土不終老、海東被驅到、貌陋意氣高、年多福德少、嫌釋迦嘍囉、笑達磨潦倒、爲人一句子、目前明皓皓。

又

貌枯如柴、心頑似鐵、明明無法教人、只有嗔拳熱喝、石上要栽花、火中偏釣鱉、只此付玄機、不得輕漏泄。

雲巖居士請

據藤牀揮麈尾、無禪可談、無法可示、一味放憨癡、剛道唐土五嶽非山、扶桑大海非水、似此無意智老僧、雲巖要描貌佗不知何意。

自讃終

小佛事

葦航和尙秉炬　臘八

雪嶺今朝成道、葦航此日茶毘、今古了無二致、信知達者同歸、某人、東國門生、大覺嫡嗣、一生尙義、以忠孝志節補贊師門、數處住山、以本色鉗鎚煆煉學者、王侯之所敬慕、七庶之所歸依、年逾八十有三、老景庵居自佚、時節既至、撒手便行、夳超色象先、誰謂空花亂墜、辭世偈、蘂過生死海、何妨一葦航波、雖然諸人若向者裏要見此老子、直是未在、且道向甚處見得、提起火把云、饒伊急著機先眼、疾餤過風第二籌。

竪典座火

有漏笊籬、無漏木杓、用過了也、向甚處著、雲歸山、水歸壑、擲火把云、烈餤不容蚊蚋泊。

合首座入骨　値雪中送

香煙起處、便與麼去、大地冰稜合、千山飛雪絮便與麼去、太無本據、撫骨云、蒼龍蛻骨時、不在澄潭裏。

癡鈍和尙入祖堂

動靜不以心、去來都絕跡、如斯癡鈍者、佛祖亦不識、某人、半世水雲身、一生冰蘗質、誤沾蘭溪滸水、遽盡生涯、再續無明一燈、光揚四極、兩處提持正令、一毫不肯顧惜、直得淨躶躶、赤洒洒、

清寥寥、白的的、與來歸隱雲山、佛眼也窺不得、時來得路便行、萬里一天秋色、既無位次可安排、到此不知誰委悉、某人、水牯從來共一欄、鼻繩拽斷東西觸。

西澗和尙入祖堂

去年元不去、今年亦無來、不來與不去、南岳與天台、故我前住當山大通禪師西澗和尙松源直下、石帆嫡生、在唐土則天台南岳、妙提玄要、來日東則瑞鹿巨福、大振宗綱、翻轉面皮處、佛祖驚避、提起機鋒時、衲子奔忙、功成不居、翻身便行、直得 聖君欽風、賜諡號曰大通、本無位次、豈可遮藏、卽今要見此老蹲坐處麼、呈起卓云、鐵眼銅睛窺不得、髑髏隊裏共徜徉。

則首座受請住淨居、授衣

雞足峰前、黃梅夜半、寸絲不挂、一場熱亂、要與人天爲軌則、作家還我堂中箭。

尾藤金吾授衣　名性常

此事本來無授受、莫言授受本來無、鷲峰昔日傳迦葉、梅嶺當年付老盧、一片做成宜自看、祖肩擔負要相孚、更知法性常淸淨、世上堂堂大丈夫、

小佛事終

行記

師諱一寧、號一山、大宋國台州臨海縣胡氏子也、齠齔入村塾、吾伊琅琅、鄉先生稱其敏悟、無等融禪師、住郡之浮山鴻福寺、主藏之者月靈江、師之俗叔也、怙恃繇其無塵累之姿、介月而投等、等加撫念、三年而月在四明太白山、遣使取師、與普光寺處謙、習法華等諸經、踰二歲得度、聞如城中應眞律寺、聽開遮、延慶教寺學天台教觀、聞杭州集慶院文節法師有台學、裹足依之、已而嫌義學之支離、棄而歸、就月質所疑、時月爲天童板首、堂頭簡翁敬也、月讓于主者、師便謁之、翁知師之粹台教、問曰、一心三觀、以何爲體、師即一笑、翁許參堂、坐久二朞、月瑞世定海之資聖寺、師講道義、隨往、越年月移靈峰、又從之、不久辭上鄮山、依珍藏叟、叟應淨慈之詔、交代愷東叟也、愷見師妙英、侍主客、愷罷照寂窻繼、朞年寺火、窻又遷南屏、頑極彌來據主位、受窻之燼餘、早復輪奐、師以爲一居四主、我無分、今此老和尚、不斬化權、又我之幸也、傾意親炙、從容醻醋、至我無一法與人、忽然冥契、翌歲授以大藏之關鑰、解印拉友人明自誠、雲游天台雁蕩之間、肩錫而來歸、適一環溪踞天童、衲子輻湊、法社甚盛、師求挂錫、溪不拒、不幾寺奪祝融、因是又回育王、附珙横川、川逝、祥巧庵來、庵逝、沅清溪來、皆居座下、師已參覲諸老、淵默雷轟、逮太元革命、闡法昌國之祖印寺、至元甲申、仲夏中八也、據室曰、任公之釣、一掣六鰲、若是跛鱉盲龜、咄、縮頭去、衲子拊掌稱善、瓣香供頑極識所得也、一住十載、新佛殿外門、又捨

衣資、買湖田廻地、添寺產、寶陀智愚溪有維桑舊、往來款密、一日語曰、我老倦于領衆也、煩我
兄可乎、師掩耳焉、智潛馳使於僧官、道讓賢之志、府帖遽至、不得已而遷、補陀之地、海岸靈區、
師之道價、與勝域並騰、六更歲序、一日謂、巖洞忽現圓光、聖像隱映光中、師感喜作體、須臾即
沒、大德二年夏、我商舶薄明州、大元國主、初有狙窺我之心、故辛巳戰艦數盈十萬、然風濤一
夕破蕩狼狽、是以恐我國之神靈、贏志未歇、屢畫奇籌、為此方傾鄉佛乘、欲聘有道衲子、勸誘
以為附庸、愚溪既當其任、然老病未遑發、偶聞商舡至、欲成先策、遴選俊髦、臺評湊師、即敕宣
慰使阿答剌相公、遣一省郎、及慶元府判官、僧錄司知書、昌國州知州、僧正司、知書等五十餘
人入寺、出宣慰使手書及僧錄司官書曰、皇帝聖旨、下省府賜師金襴衣及妙慈弘濟大師號、
泛溟波、到日本、通二國之好、乃以衣帖付師、輙語慰勞、師思不可逭受之、明日一行官將師到
府、府官僧官皆在焉、細說通好之事、而付元朝信書一通、又差官吏吾人侍衛、蓋備師之逃匿
也、尋燕參政公來、持國主詔旨及省部文書、宣讀了、急請登舟、歸寶陀宿一日、行官吏、差三船
劇送附日本舶、於是乎風浪鼓蕩、檣折柁摧、修補僅成、進馳三四日、到高麗絕徼、又速奔一日、
出沒濤山浪巖間、飄颻而著于博多、本朝正安元年也、舶主以書白元帥府、府議曰、敵國命使
命不活矣、或曰、使命不活、然奈僧儀何、先編置豆州修禪寺、或曰、宋僧之入我土、多挾道術也、
傳聞、寧公元國望士、其受重寄又可知矣、而又出于抑逼也、且夫沙門者福田也、有道之士、無
心於萬物也、在元國元之福也、在我邦我之福也、豈必區區慕子卿之節哉、若長朽于窮裔、非
吾土鄉比丘之素也、因玆追赴相陽、而猶居僻處、未入府寺、東方緇白、初聞師錮居大盡焉、及

其來、奔波禮謁只恐後、山內寓舍門外如市、十二月七日、主福山大道場、叢規肅如、萬衲鑽仰、府主耳、其提唱、悔中途稽滯矣、會曇西澗謝鹿山事、府命令師權之、兩山一矩衆望翕如也、已而辭建長、獨正圓覺席、又四歲、偶以昏眩疾、退居壽藏、府帖再領建長、病魔荐孽、退休保養、府命以鹿峯壽塔其地狹隘、移于巨福右掖杉谷、庵成名玉雲、蓋擬絕祖其塔庵號玉山、頑極考雲西、竝取扁焉、不忘本也、老拳長杓、儼然自怡、然旦望禮賓邁福鹿主人也、無何又起領淨智寺者四涼燠矣、正和二年、圓規庵寂龍山、龍山宮寺、望高耋數、初　建治太上皇、聞師德譽、覬見未由也、於是乎敕元帥府、召師補南禪之缺、師老艱于羈旅、而　詔旨府命、逼而不容辭、來領山務、　太上皇、洊入山問道、搢紳之儔、蹙頞戶外、輦下道俗、喜叢社之有人、然老病侵尋、懶於槌拂、數上表解院事、　太上皇、眷遇復渥不允、以故一再潛去、其遁越州也、　宸書慰諭促回、文保元年秋、恙瘵彌留十月益革、　太上皇幸寺、蹕　龜山廟塔、時時問疾、二十四曉、手染遺表曰、某頓首、　法皇陛下、　聖駕幸本山、寔緇門觀光也、某不幸臥疾數日、百體舉而不仁、不能再瞻望　龍顏、大變時至、幻質將摧、借攄忠情、入無生三昧耳、年月日臣僧某頓首、表獻于廟塔、又書偈曰、橫行一世、佛祖飲氣、箭既離弦、虛空落地、置筆而化、壽七十一、　太上皇得表、蒼皇幸寢室、趺坐儼然、宛如生也、君臣嗟悼、　太上皇、便賜　宸奎贈國師之號、有報老師直示之的旨之句、又宣僕射源有房公時門下侍郎、作文祭之又敕　龜廟側創一塔、書法雨額賜之、又贊其像曰、宋地萬人傑、本朝一國師、其爲人主被崇如此、門弟子分塔于玉雲、師性慈和無涯岸、近世執道柄者、嚴莊威重以爲法助、且杷鞭也、師孤坐一榻、不須通謁、新到遠

來、出入無間、人便於參請、禪策中無索隱、僅事苑而已、往往漫下雌黃者多、江湖患之、及師至理闕疑、然言語不通、乃課觚牘、隻字片句、賴譯寮詢、師道韻柔婉、執翰篇之、教乘諸部、儒道百家、稗官小說、鄉談俚語、出入泛濫、輙累數幅、是以學者推博古、又善魯公屋漏之法、攜紙帛乞掃寫者、鐵閫或可折矣、其七會語、充棟汗牛、未亡之前、手加修刪、今只數十紙、其徒跨海者、齎入元土、彼地衲子、玩味嗟服、故芝靈石、茂古林、本中峯、一時名宿、各證跋尾、不容議焉、余游師門十數祀、所請之益不鮮矣、曩在龍阜、又境於密邇、故知師之事熟矣、諸孤抱師自書行錄、來曰、宋地之事見於此、入朝以來皆略焉、況末後榮遇、非師常言、公之親見者乞足焉、余曰、竊聞、元遊之士、索師行實於彼地大手筆、盡需焉、對曰、遠聞而文略、曷若近見而質備、余不能辭也、

元亨元年雲節日、濟北庵居沙門虎關師鍊謹記。

一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下　終

一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄

後宇多太上法皇宸書國師號

朕曾聞師道風、思欲一覲德儀、頃年下詔請來、補先皇聖跡南禪、遂獲酬夙志、神交道契、頓增法味、有得於中矣、師告以衰暮、屢乞歸休、朕嘆祖道衰運、固留止焉、五載于今茲、法體違和、疾至彌留、臨期告別、唱寂於本山、末後全提靈明天眞、所謂無心道人、大法主盟者也、稱以國師、欲報老師直示之的旨、旌鷲嶺付屬金言云爾。

文保元年十月二十五日　一山國師門徒等

○

同帝宸書贊

內充而爲道機、外發而爲德儀、竹篦橫揮兮威風動沙界、金襴斜搭兮慈雲覆坤維、拓開人天區域、掊破佛祖藩籬、宋地萬人傑、本朝一國師。

元應元年初冬二十五日　芝山老叟書

○

同帝宸書札

親書特告南禪長老一山禪師、　朕聞師之道價久矣、所以下詔闕東、以官差請來也、一得會

晤、宛如獲司南之車也、慕德欽風、三閲青黄、而聞有心退席、而數數理行裝也、去年親詣寶刹爲勾之也、近者亦聽打拼行李、書以慰諭、　公乃屈蒲輪、來諾許　朕意、不料暗裏出城、遠渉山川矣、若得回來再相見、必許隨自便、養病庵中、追於懷璉之古風也、何須更歸東關矣、直饒燕居南禪東堂、使小師等如元安著、有何不可、寧又有魔賊之擾乎、大都　公長化此方、廣結四衆之緣、則　朕所願者也、宜快歸來也、千萬切要面話、不備。

五月六日　　洞中隱叟書

一山禪師

○

應制祭文　　源有房公

維大日本國、文保改元十月二十七日、　勅特進前御史大夫源有房、昭告于　一山國師大和尚之尊靈曰、摩騰來漢、顯宗致欽、初祖入梁、武帝紆襟、增崇至道、稽古乃今、　先皇梵刹、揀託保任、靈山附屬、眷命弗僭、克明克哲、問法問心、麟鳳爾德、金玉爾音、光輝祖域、榮敷緇林、千載遒期、功與化參、倏矣歸眞、不留幻質、隕玆偉人、若亡良弼、思慕罔罄、死生如一、賜謚國師、以名副實、聖衷孔昭、靑天白日、賻令奠香、靈饗可必、尙享。

○

大師號宣命　〔大元國成宗皇帝〕

中書左丞行浙東道宣慰使記事、寶陀堂上一山總統大師、今奉省劄有燕右丞、賫擎　宣命、

寧一山授妙慈弘濟大師江浙釋教總統、又賜錦襴袈裟、鈔一百二、隨行伴當五名、段子表幷賚擎詔書、前來慶元、起發倭船、今令東路拜僧錄司、委官詣請如達、一山總統、就將行、隨行伴當五名、卽便到城、欽受宣命、賞賜理會、倭船勾當、更不別來附此、致意愚溪長老、爲禱、併希法照、不備。

五月二十有一日修

寶陀堂上一山總統大師

○

中峰破沙盆、三傳而至巖絕、更二傳而至一山、其金聲玉振、若黃鐘大呂之音、能起人於瘖聾瞶多矣、故外國王臣、尊禮師之、此豈操朽索、馭奔輪者、同日而語哉、予識師於至元戊寅、掌藏鑰于玉几時、今四十二年矣、緣首座、持此錄、爲示、觀其顯發呈露、開東山法門、見之卽心死路絕、使人降嘆不已、因題其後云。

延祐七年夏五二十日

鄱陽永福住山清茂書

○

慶元路育王弟德明、拜觀一山法兄禪錄、道無南北、人有古今、大唐日本七坐勝棲、提唱語意、出人意表、走龍象、得點睛之妙、端可尊爲一國之師、予與同條生、不與同條死、要覓末後句、分明只者是、藏次庚申三月望日、無異堂書、德明東山。

○去年儞鄉裏有一兄弟、曾將一山和尙臨終事實到此、幷　國王親望、賜國師號之　詔章來、我曾見了、伱也要求語錄跋、我生平不與跋語錄著錄字、伱去年亦乞、大都主不知儞曾相見他也不曾　一山和尙、道眼精明、學問深遠、況身爲　一國之師、合朝敬仰、他之語要、不必別求跋序、既有一兩處了茲、亦不多求、幻者一例不曾與人題跋。

是心何用安名、至寶不容酬價、西庭柏侍者、出乃師　一山和尙垂示語要、求跋語、予於禪道佛法、素所未解、以故生平不敢妄加一字於尊宿語中、恐貽酬價之誚於大方也、柏領首而掩卷焉。

幻住明本

一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄　終

國譯狂雲集

解題

狂雲集は京都紫野大德寺一休和尚一代の偈頌を蒐集したるものにして、其の異本數種ある事は既に凡例に於て述ぶるが如し。今之等の異本に就いて考察するに、寛永十九年の版は、刊本としては最も古く、從來世上に流布するものは多くは是れなり。次に續群書類從第十二輯三百三十二卷中に所收の狂雲集は、其の內容は寛永の刊本と同じけれども、唯だ之に續狂雲詩集を加へたるのみ。又東京民友社出版の一休和尚狂雲集は、是れ亦續群書類從本と大同小異なり。されど民友社本は其の發刊に際して內閣本を底本となし、之に數種の刊本及び寫本を參考して訂正增補したるものなれば、一休の偈頌集としては最も完備したるものと謂ふべし。然れども今次、國譯するに際しては、頁數の都合により、寛永の刻本を底本となし、校合には民友社本に據れり。

本書狂雲集の編者及び編輯の年時等は未だ詳かならず。恐らくは師の門弟等が輯纂せしものならん。師の年譜にも、「平日述ぶる所の頌古偈贊等。編して狂雲集と目づけ、已に人の爲に傳稱せらる」（原漢文）とあるのみ。又其名の狂雲は師の號を取りしのみ。其の詩偈たるや、何れかと云へば、飄逸にして流麗、

些の難澁凝滯の跡なく、一讀して直に一休其の人の天眞なる面目に接するが如く、禪門の詩偈としては寔に上乘の作と謂ふべし。

師の傳を案ずるに、名は宗純、字は一休、別に狂雲子と號す。又外に夢閨、瞎驢、國景算などの號もあり。後小松帝の應永元年正月朔日を以て生る。母藤原氏は南朝簪纓の胤、後小松帝のために愛寵せらる。其の嫉めるに逮び、后宮に讒せられて宮を出で、師を民家に生む。襁褓の中より已に龍鳳の姿あり。年六歳にして京都の安國寺長老像外鑑公に投じて童子の役を執り、十二歳にして壬生の清叟仁藏主に謁して維摩經の講義を聽き、翌年、建仁の慕喆龍樊に依つて作詩の法を學び、毎日一首を作るを以て課となす。師既に作者の風あり。時に見惠侍者、師に諭して曰く、「吾が祖別源翁に、『秋風白髮三千丈、夜雨靑燈五十年』の句あり、子之を誦せば、必ず佳境に入らん」と。一日、長門の春草を詠じて、「君恩淺處草方深」の句あり、聞くもの皆嘆服せり。十七歳にして西金寺の謙翁に參じて關山（京都妙心寺開山玄慧禪師）の宗旨を聽き、其の高風に服膺して執侍すること六年、翁の寂するに及び、江州堅田に赴き、華叟曇和尚に謁せんことを求む。叟、峻拒して容れず、師、死を決して謁せんと數日懇求す。遂に相見を許さる。是れより孳々として參請し、服勤すること九年。師二十五歳の時、瞽者の妓王が落魄する一條の平家琵琶を聞き、忽ち雲門、洞山三頓の棒を放す因緣に於て投機す。華叟師、一休の二大字を書して師に與へて號となさしむ。一夕、鴉鳴を聞いて脫然として省あり、卽ち所見を呈す。叟曰く、

「此れは是れ羅漢の境界、作家の衲子に非ず」と。師曰く、「某は只だ羅漢を喜び、作家を嫌ふのみ」と。叟頷いて記を授け、又傳來の印書を以て之に附す。是れ師年二十七歳の五月二十日の夜なり。然れども師は之を地に擲つて去り、これより放曠漫遊して定處あることなし。京の尸陀寺、酬恩庵、泉州の慈濟、松棲の兩寺の如きは其の卓錫の地なり。

應永三十四年、後小松帝、神器を稱光帝に付して以降、師を召して宮に入れ、常に法要を問ひ、寵遇甚だ厚し。稱光、後花園の二帝も亦相繼いで崇信す。初め稱光帝、未だ東宮を立てず、叡慮猶豫す。師密かに入りて奏して曰く、「天の曆數を咨るに、正に彥仁親王の躬に在り、時失ふべからず、左右の袒を待つこと勿れ」と。帝喜んで曰く、「朕が儲定れり、良いかな師の言や」と。乃ち親王立つ、是れを後花園帝となす。故を以て師は三帝の後を受けて、到る所、衆徒常に席に盈つ。正長元年六月、先師華叟の訃を聞いて堅田に赴き、祭を致すこと一七日。尋で京に還れり。同五年、師年四十、後小松帝不豫、登遐の前數日、師を召して對御す、問を俟つて心要を演べ、喜び龍顏に見はる。因つて金匣を發いて、先朝の寶墨及び聖草の飛白等を親ら賜ふ。師拜稽首して退く。是れより四方に遊化す。文明六年二月、攝州尼崎の廣德寺柔中隆和尙、勅黄を捧げて來り、大德寺に視篆せんことを請ふ。師二偈を作りて恩を謝し、且つ自ら警めて遂に住せず、但だ鳳書紫袍を賜ふのみ。七年、門人等、城州薪の里の虎丘に壽塔を作りて成る。師牓して慈楊塔となす。同十三年十一月の初め疾を示し、水漿口に入らず。同二十一日

卯の時、遺偈を書して曰く、「須彌南畔、誰會我禪。虛堂來也、不直半錢」と。筆を收め、泊然として化す。壽八十八。門人、全身を舁いて慈楊の塔下に瘞む。滅後三年、門人等、師の肖像を圖し、入明の客に託して讃を彼の地の名卿に需む。四明の張應麒、之が讃を作つて曰く、

學通儒典、道闡禪宗。爲叢林之表率、致譽望之尊崇。源源才思、落落心胸、觀止水而自安。行藏有定、取狂雲以爲號。變化無蹤、是宜行兒孫之昌盛、續燈焰於東海也耶。

成化乙巳秋七月既望　都臺後人四明仕隱張應麒焚香拜讃。

師は當時、祖意を會せずして濫に大寺に主たるものを憤り、常に跡を混じて威儀に拘らず、城邑聚落を巡行して緇素を諭す。又木劍を腰にし、尺八を吹き、詩偈を賦し、和歌を詠じ、頗る其の言行を恣にして恰も風狂の如くす。然も華叟師の病に侍しては自ら穢を清め、又大德の火後、四方を勸化して法堂を建て、龍翔寺の頽廢するを慨き、緣を募りて舊觀に復するが如き、洵に是れ大信根の所作と言ふべし。著書は本書の外、續狂雲詩集、一休下炬錄、一休いろは歌、一休假名法語、一休骸骨、一休禪師世の中百首、あみだはだか物語、二人比丘尼、水鏡、目なし用心抄、佛鬼軍、山姥、般若心經解などあり。皆世に行はる。

國譯狂雲集上卷

㋑虛堂和尚を贊す

育王の住院世皆乖く、法衣を放下して破鞋の如し、臨濟の正傳一點無し、一天の風月吟懷に滿つ。（一本放下を抛下に作る。）

㋺大燈國師行狀の末に題す

大燈を挑げ起して一天に輝く、鸞輿譽を競ふ法堂の前、風餐水宿人の記する無し、第五橋邊二十年。

㋩五祖演

「如何なるか是れ臨濟下の事。」曰く、「五逆雷を聞く。」

機先の一喝鐵圍崩る、五逆元來衲僧に在り、桃李春風清宴の夕、半醒半醉酒繩の如し。（繩を一

㋑虛堂は智愚禪師、四明象山の人なり、運庵巖に參じ、大いに契悟する所あり、南宋咸淳五年寂し、臨濟下楊岐方會の流なり。

㋺大燈國師の行狀。是れは大燈錄の終りに附せる行狀にて春作禪興の作なり、其の行狀の終に題せられしもの。偈の意に謂ふ、「春作は盲坊主なり、國師が天子の歸依を受けられし事ばかり麗々しく書き立てて、第五橋邊二十年を恥と思ふて載せず、何と云ふ手落なりや」と。風餐水宿、頭陀乞食を發揮せられたる作なり。

㋩五祖演。白雲守端の法嗣。

㋥雲門宗。青原下雪峰義存の法嗣の雲門文偃の唱道する所。

㋭雲門の公案、例へば「乾屎橛、倒一說、須彌山」の如く滔々たる奔流に向つて、雙手能く之れを一決するの概あり、故に紅旗閃爍と評せらる、間に髮を入れず、一閃光の霹靂に忽然大悟を貴ぶ。

㋬碧巖集に「雲門大師、八十餘の善知識を出す」と是れなり、以て其の宗風の盛なるを知るべし。

㋣雲門、機に應じて往々一字の酬應を用ふ、故に叢林之れを目づけて一字關といふ。例へば、「如何なるか是れ雲門の劍、」曰く、「祖、」「如何なるか是れ玄中的、」曰く、「塑、」「如

本瀞に作る。)

「如何なるか是れ㋥雲門宗。」演曰く、「㋭紅旗閃爍。」

華旗風暖かにして春臺に動く、㋬八十餘員師席開く、㋣一字關分㋠三句體、幾人か眼裏に紅埃を着く。

「如何なるか是れ㋷潙仰宗。」演曰く、「斷碑古路に橫ふ。」

慧寂は釋迦靈祐は㋦牛、披毛作佛也た風流、古碑路斷ゆ長溪の客、萬世の姓名黃葉の秋。

「如何なるか是れ㋸法眼宗。」演曰く、「巡人夜を犯す。」

一滴の㋾曹源一滴深し、巡人㋻鬧々夜沈々、青山滿目是れ何の法ぞ、家醜猶ほ捧心を學ぶが如し。

臨濟の㋕四料簡

㋵奪人不奪境

百丈潙山名未だ休せず、㋟野狐の身と水牯牛と、前朝の古寺僧の住する無し、黃葉秋風共に一樓。(僧を一に人に作る。)

㋹奪境不奪人

何なるか是れ吹毛劍、」曰く、「體」の如し。雲門接化の法の一に數へらる。

㋠函蓋乾坤、目機銖兩、不涉世緣の三句、皆接化の機關として用ひらる。

㋷五家七宗の一、潙山靈祐、仰山慧寂を以て祖となす。

㋦潙山の示衆に、「老僧百年後、山下檀越の家に向つて、一頭の水牯牛となり、左脇下に於て五字を書して曰く、「潙山僧某甲」と、この時若し喚んで潙山となさば、又是れ水牯牛、喚んで水牯牛となさば、又是れ潙山僧某甲。且く道へ、喚んで甚麼となさば即ち得てん。仰出でて禮拜し去る。』

㋸羅漢桂琛の法嗣法眼文益の唱道せし宗旨をいふ。

㋾曹溪の水深きは六祖の流れを汲むをいふ。

㋻喧しきをいふ。

臨濟の兒孫誰か的傳、宗風滅卻す㋞瞎驢邊、
芒鞋竹杖風流の友、㋡曲椽木牀名刹の禪。

㋧人境倶奪

雉翳縋焦身㋤迍邅、幷汾信を絶して話頭圓かなり、夜來滅卻す詩人の興、桂は折る秋風白露の前。

㋶人境倶不奪

道ふ莫れ再來錢半文と、㋰婬坊酒肆に功勳有り、祇だ人の相如が渇を話すに緣つて、腸斷す琴臺日暮の雲。（緣を一に因に作る。）

陳蒲鞋

諸人を賣弄し諸方を瞞す、㋒德山臨濟沒商量、拈槌竪拂吾が事に非ず、只だ要す聲名の北堂に屬せんことを。

岩頭船居の圖　二首

㋕臨濟慧照大師の爲人の施設。料簡は標準といふが如し、深玄なる宇宙の眞理を說明する四種の範疇、即ち奪人不奪境、奪境不奪人、人境倶奪、人境倶不奪これなり、これ參學者の針南なりと。

㋵人を奪つて境を奪はず、法の獨立を示す語なり。即ち一法立する時は、萬法其の內に接し、人法の別なく、主客の兩觀なし、法々絕對にして此の間に何物の出頭をも放さず、即ち人を奪つて萬法に一如たらしむるの施設なり。

㋟百丈禪師の野狐の公案、無門關に出づ。

㋹人の獨立を示したる語なり。人とは自己にして、一切萬法を以て、直ちに自己の露現なりと見るなり、古人が「盡大地沙門の一隻眼」といふこれなり、尅符、此の意を頌して「奪境不奪人、言を尋れ何の處か眞、禪を尋れ、禪是れ妄、理を究め、理親に非らす、日寒光を照して淡し、山遙かにして翠色新なり、直饒ひ玄會し得るも、亦是れ眼中の塵」。

㋞臨濟、寂に臨んで、三聖に正法眼藏滅却瞎驢邊の證明を與へて頌して曰く「沿流止らず如何と問はゞ、眞照無邊似他を說け、相を離れ、名を離れ、人稟けず、吹毛用ひ了つて急に還た磨す」と。正法眼藏瞎驢邊に滅却し了つて、却つて照として心眼を存するなり、是れ傳心の妙所なり。

㋡花紅柳綠、皆これ禪心を照現す。

㋧主觀の人も客觀の境も二つながら奪ひ去つて、何ものの出頭をも放さゞる向上の一路の端的を提起する把住の手段な

會昌以後僧形を毀る、一段の風流㋭何似生、棹を舞して未だ爲人の手を懷にせず、杜鵑月に叫んで夜三更。

蒲葉半は凋む江漢の秋、生涯受用扁舟に在り、乾坤一箇の閑家具、年代波を撈つて情未だ休せず。

二祖を賛す

大唐今古禪師沒し、斷臂の虛傳人知らず、只だ許す㋷南山道宣が筆、恰も痛所に針錐を下すが如し。

㋔栽松道者を賛す

周家當處に出生し來る、法の爲に身を喪す徒に苦なる哉、宿昔何の時の德本をか植う、栽松老漢也た黃梅。

㋨松源和尙の三轉語

り。臨濟、僧問ふ、「如何なるか是れ人境倶奪。」師曰く、「竝汾信を絶し、獨り一方に處す」と答ふ。

㋤たちもとほること。

㋶客觀の境の存立を放開して、一切を自由ならしむる積極の手段なり、即ち放行の作略とす。臨濟、僧問ふ、「如何なるかこれ人境倶不奪。」曰く、「王寳殿に登り、野老謳歌す」と。又剋符、頌して曰く、「人境倶不奪、思量意偏せず、主賓言異ならず、問答理倶に全し、澄潭の月を踏破し、碧落の天を穿開す、妙用を明むること能はず、淪溺無緣にあり。」

㋰主賓言異ならざるをいふなり。

㋒靑原下、龍潭崇信の法嗣、德山宣鑑禪師なり。

㋭何似生は支那の俗語、怎麼、甚麼、作麼生などと同じ、何ぞ、如何といふ程の意なり。

㋷太祖慧可、賊に遭ひて臂を斫られたるも、法を以て心を御し、痛苦を覺えず、火を以て斫所の血を燒き、帛を斷じて裹み、食を乞ふこと故の如く、曾て人に告げず、後林法師、又賊に臂を斫られ、叫號通夕す、可、爲に治裹し、食を乞ふて林に供す、林、可の手の不便なるを怪み、之れを怒る、可の曰く、「餅食前に在り、何ぞ自ら裹まざる」と。林の曰く、「我れ臂なし、可、知らざるか。」可の曰く、「我れ亦臂なし、復た何ぞ怒るべけん」と、唐の南山道宣律師の筆になる續高僧傳にあり。世此の斷臂を、可自ら雪中に斷ちて達磨に示すといふ、故に之れをいふなり。

㋔五祖大滿弘忍禪師の異名、舊

㋳大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さゞる
㋖鬼窟黒山の禪を商量して、神力の金剛目前に現ず、普天の下是れ王土、脚を擡ぐる句中公案圓かなり。

㋘口を開く、甚に因つてか舌頭上に在らざる
㋫三寸の舌頭禍門を開く、河沙の諸佛轉た多言、夜來百勞五更の月、奈ともせず聲々夢魂に祟ることを。（月を一に目、或は日に作り、祟を崇に作る。）

明眼の衲僧、甚に因つてか、㋙脚跟下紅絲線不斷なる
二㋓三四七諸禪師、衆を領じ徒を匡して心絲を亂す、錢に因つて癖有るは是れ和嶠、娘生脚下血淋漓。

虚堂和尚の三轉語
己眼未だ明かならざる底、甚に因つてか虚空を將つて布袴と作して着く。
畫餠冷腸飢未だ盈たず、娘生の己眼見て盲の如し、寒堂一夜衣を思ふ意、羅綺千重暗に㋢現成。

說に曰く、「四祖大醫禪師、牛頭山に居る、山中に老僧ありて松を植う、人呼んで栽松道者となす、曾て四祖に請ふ、「法道聞くことを得べきや。」曰く、「汝已に老ゆ、聞くことあるも、夫れ能く化せんや」と。「儻し能く再來せば、吾れ尙ほ汝を待つべし」と。乃ち去つて水邊に行き、周家の女子の衣を浣ふを見、揖して曰く、「宿を寄することを得るや否や。」女曰く、「我れに父兄あり、往いて之れを求むべし。」曰く、「諾せば我れ卽ち行かん。」女之れを首肯す、僧策を回らして去る、女歸つて輙ち孕む、父母大いに之れを惡みて逐ふ、女一子を生む、不祥として水中に棄つ、明日之れを見るに、流に泝つて上る、氣體鮮明なり、大いに驚いて之れを擧ぐ、童となりて

地に劃して牢と爲す底、甚に因つてか
者箇を透り過ぎざる。

何事ぞ春遊興未だ窮らず、人心は尤も是れ㋐客盃の弓、天堂成就し地獄滅す、日は永し落花飛絮の中。

海に入りて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ。

土を撒し沙を算へて深く功を立つ、針鋒に足を翹てて神通を現ず、山僧が者裡無能の漢、東海の兒孫天澤の風。

㋚大燈國師の三轉語

朝に眉を結び、夕に肩を交ふ、我れ何似生。

透關更に一重の關有り、例に隨ひ條に依る攀づ可からず、奇菓の㋖茘子天上の味、名は天寶よ

母に隨つて食を乞ふ、邑人呼んで無生兒と爲す、今の五祖大師これなり』と、後黄梅に居る。

㋗松源年二十二にして靈石妙に謁し、徑山に大慧杲に見ゆ、後應菴に參じ、大いに得所あり、隆興二年白蓮精舍に得度し、諸尊宿の門を叩き、慶元元年詔を奉じて靈隱寺に住す、語錄二卷あり。

㋳大悟底の人などに同じ、又力量の大なる人にもいふ。

㋮倶舍世間品に「黒山の下地獄あり」と。鬼窟は死人の入る暗黒界、動きのとれぬ、自由のきかぬことにいふ。

㋘言必ずしも口を開くを須ひず、以身說これ尊し、無言の月良く其の明を輝かす、之れによりて萬靈を度す、人も正にかくの如くなるべきか。

㋻口は却つて之れ禍の門、如かず同の終日愚なるには。

㋙足下の纒綴羈絆を斷たざるといふが如し。

㋢寂滅現成にして涅槃の現成するをいふ。

㋓六祖及び達磨を云ふ。

㋐「客、盃中の弓影を見て蛇となす、遂に病む、後其の弓影なるを知り、卽ち愈ゆ」と。天堂地獄迷悟の內にあり。

㋚大德寺開山宗峰妙超禪師、花園上皇特に勅して興禪大燈國師と賜ふ。

㋖茘子は龍眼肉をいふ。

㋙むきだしの柱、目に見えて居る柱、燈籠、牆壁、瓦礫などの語と共に、無情又は非情の意を現はす代表語に用ふ「露柱に問取し去れ」といふが如き是れなり。

㋱幽深玄妙の理なり。

㋯生死煩惱の羈絆を脫するなり。

り人間に落つ。（子を一に支に作る。）

露柱盡日往來、我れ甚に因つてか動かざる

草鞋脚瘦せて知音沒し、㋵露柱同行我が吟に伴ふ、錢に靈神有り十萬貫、杜鵑血に啼いて春心に託す。

若し箇の兩轉語を透得せば、一生參學の事畢んぬ

二十餘年曾て苦辛す、乾坤誰か是れ我が般の人、參じ來つて直に㋱幽玄の底に徹す、㋯歇し去つて獨り要路の津に登る。

靈山㋛徹翁和尚の末後の垂示を擧して、以て徒に示す。其の垂示に云く、「㋻正法眼藏人に付する無し、自ら荷擔して㋪彌勒下生に至る。噫。」

古佛靈山名虛しからず、當來の彌勒是れ同居、兒孫一箇の狂雲子、邪法大いに興つて殃餘り有り。

（「虛し」を一に「空し」に作る。）

牢關の一句工夫を費す、百鍊の精金再び爐に入る、話して當來來劫の曉に到る、只だ愁ふ枕上に夢魂無きことを。

凡そ參禪學道の輩は、須らく日用清淨なるべし、日用不淨なる可からず。所謂、日用清淨と

㋛釋義亨、徹翁と號す、雲州の人なり、始め鏡堂圓和尚を師となし、後宗峰禪師に見えて悟る所あり、洛東の雲居寺に住す、宗風大いに揚る、天應大現國師と謚す。

㋻即ち涅槃妙心にして、靈山に於て佛の迦葉尊者に付與し給へるものなり。

㋪南天竺の波羅門にして、兜率天に上生し、現に兜率の內院に居て、當來には此の土に出興して、釋迦佛の所說を補ふと。

は、一則の因緣を究明して、無理會の田地に到つて、晝夜工夫怠らず、時々に根源を切斷して、佛魔も窺ひ難き處、分明に坐斷して、往々に名を埋め跡を藏し、山林樹下に、一則の因緣を擧揚し、時に無雜純一なり矣、之れを日用清淨の人と謂ふなり。然り而して吾れは善知識と稱して、杖拂を擎げ、衆を集めて法を說き、人家の男女を㋲魔魅し、心に名利を好んで學者を室中に招き、玄旨を悟らしめんと道ふ。參せしむる者、相似模樣の閑言語、教へしむるもの、片箇の情なり。這般の輩は非人なり、寔に日用不淨の者なり。佛法を以て度世の謀と爲す、是れ世上㋝榮衒の徒なり。凡そ身あれば着ずと云ふこと無く、口あれば食はずといふなし。若し此の理を知らば、豈に世に衒はん哉、豈に官家に諛はん哉。是の如きの徒は、三生六十劫、餓鬼に入り、畜生に入りて、出期無かる可し。或は人間に生るゝも、癩病の苦を受け、佛法の名字を聞かず、懼る可し、懼るべし。(時々を一本に時今に作る。)

右靈山徹翁和尙、榮衒の徒に示すの法語、其の後に題すと云ふ

工夫是れ涅槃堂に非ずんば、㋜名利前に輝いて心念忙し、道ふことを信ず人間食籍の定、羊㋑糜一椀橘皮湯。

㋺元正

㋩現成の公案天眞に任す、鳳曆元を開く世界の春、今日山僧眼を換却す、

㋲欺瞞などに同じ。
㋝自ら世に衒ひ榮ゆるを求むるなり。
㋜萬法本閑なり、而して人自ら忙しきは名利、前に在るが爲なり。
㋑粥に同じ。
㋺鳳曆は一月元旦なり。

堂中の古佛面門新なり。

桃花浪

隨波逐浪幾紅塵ぞ、又値ふ桃花三月の春、恨を流す三生六十劫、㊁龍門歳々金鱗を曝す。（一本金鱗を腮鱗に作る。）

(ほ)端午

千古(へ)屈平情豈に休せんや、衆人此の日醉つて悠々たり、忠言耳に逆ふ誰か能く會せん、只だ湘江の順流を解する有り。

冬至示衆

獨り門關を閉ぢて方を省せず、這中誰か是れ法中の王、諸人若し冬來の句を問はゞ、(と)日は今朝より一線長し。

佛誕生

(ち)三世一身異號多し、何人か今日諸訛を定めん、娑婆來往八千度、(り)馬腹驢胎も亦釋迦。

佛成道

天上人間獨尊と稱す、今朝成道誰か恩を受く、分明なり衲子流星の眼、

㊇宇宙は所現の萬法其の儘が悟の現れであるといふこと。公案は師家が學人を提撕するに用ひる警策なり。山房夜話に曰く、「佛祖の機緣目づけて公案といふも又爾り、蓋し一人の臆見に非らず、乃ち靈源を會し妙旨に契ふ、生死を破り情量を超えて三世十方百千の開士と同稟の至理なり」と。公案の語の禪錄に現れたるは、黃檗希運禪師の「昨日公案老僧休去」を以て始めとす。又廣義には至理の所在、大道の歸結するところを謂ふ。

㊁傳說に「禹門三級の浪あり、三月に至る毎に、桃花の浪漲る、魚能く水に逆ひ躍つて浪を過ぎるものは龍と化し、風雷を起し、其の尾を燒いて天に登る」と。之れを譯出したるなり。

便ち是れ（ヌ）瞿曇的々の孫。

佛涅槃

滅度す西天の老釋迦、他生に出世して誰が家にか到る、二千三百年前の涙、猶ほ（ル）扶桑二月の花に洒ぐ。

（ヲ）達磨忌

毒藥數々加ふ賊後の弓、大千逼塞す佛心宗、西來意無し我れ意有り、（ワ）熊耳山中落木の風。

大燈國師百年忌　二首

曩に青銅を覓むるに半文無し、恩に酧ゆる一句豈に群を驚かさん、祖師の遷化巳に百載、空しく婆年を拜す婆子が裙。

兒孫多く踏む（カ）上頭の關、一箇の狂雲江海の間、大會齋還つて何の處にか在る、（ヨ）白雲飯を蒸す五臺山。

（ホ）五月五日をいふ、又端五とも書す、五節句の一なり。

（ヘ）楚人、戰國時代の人なり、懷王に事へ精忠無比なり、讒人令尹子蘭の爲に疎ぜられて、懷王の子襄王に至り、遂に之れを逐す、離騷の賦を爲り、沙を懷いて湘水に沈む。此の日五月五日即ち端午の日なり、楚人これを憐み此の日に至り、竹筒の中に米を入れて湘水に投じ、之れを祭るといふ。

（ト）冬至は最短の日、其の裡に最長を含み、一陽來復の時、既に之れを知るなり。

（チ）過去、現在、未來に於て、法、報、應の三身あるをいふ。

（リ）到る處法身の實現なるをいふなり。

（ヌ）瞿曇彌、喬答摩ともいふ、梵音ゴータマ（Gōtama or Gāutama）。地最勝と譯す、釋迦種の別姓なり、瞿曇氏を釋氏と云ふより、釋尊を稱して直ちに瞿曇と爲すことあり。

（ル）扶桑は日本をいふなり、東方朔十州三島記に、「扶桑は碧海の中に生じ、葉皆桑の如し、又椹子あり、樹長き者數千丈、徑三千圍、樹兩々根を同じうして偶生す」と。支那人の我が國を扶桑と云ふは之れに原づくと。日本にても矢張り二月拾五日には、涅槃忌に涙を洒いで當日を追想す。

（ヲ）梁の大通二戊申十月五日示寂す、故に其の日に、法會を勤修するをいふ。

（ワ）陝州の東にあり、達磨を葬る所なり。

（カ）大燈國師の三轉語に、「透關更に一重の關あり」と。

（ヨ）支那山西省代州五台縣、今の西安府の東北六百華里の地にあり、一に清凉山、單に台山

僧(タ)岩頭に問うて云く、「古帆未だ掛けざる時如何。」頭云く、「小魚大魚を呑む。」僧云く、「掛けて後如何。」頭云く、「(レ)後園の驢草を喫す。」

寒溫苦樂慚愧の時、耳朶元來(ソ)兩片皮、一二三分三二一、(ツ)南泉手に信せて猫兒を斬る。

(ネ)雲門、衆に示して云く、「古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「(ナ)南山に雲を起せば、北山に雨を下す。」

小姑底に緣つてか彭郎に嫁す、雲雨今宵夢一場、朝に(ラ)天台に在り暮に南岳、知らず何の處にか(ム)韶陽を見ん。（韶陽を一に昭陽に作る。）

苦中の樂

酒三盃を喫して未だ唇を濕さず、(ウ)曹山老漢孤貧を慰す、(ヰ)直に身を火宅の中に横へて看れば、一刹那間萬劫の辛。

樂中の苦

(ノ)此れは是れ瞿曇の曾て經し所、麻衣草座六年の情、(オ)一朝點檢し將ち來つて看れば、寂莫たり(ク)靈山身後の名。

(ヤ)百丈野狐

とも云ふ。六朝時代より支那に於ける佛教上の一大靈地とし、文殊菩薩の靈顯を感得せんが爲に來詣するもの頗る多し、無著、文喜、五台山にありて典座と作る、文殊粥鍋上に現す、無著遂に之を打して「直饒ひ釋迦老子來るも、我れ亦打せん」と。此の因緣によりて之れをいふのみ。

(タ)德山宣鑑禪師の法嗣なり。

(レ)當然のことを當然にする何の不思議のことはない。

(ソ)口のことをいふ。

(ツ)南泉普願禪師、座下の雲水に對する提示なり。美事なる腕前、之れに比すべし。

(ネ)雲門の古佛露柱の公案なり。

(ナ)南山に低氣壓を起せば、北山驟雨あり、南山北山共に知らずして、疾風驟雨同時なるが如し。

(ラ)支那浙江省台州府天台縣の北

千山萬水野僧の居、甲子今年五十餘、枕上終に老來の意無し、夢中猶ほ讀む小時の書。

　㋮聞聲悟道

㋘擊竹一朝所知を忘ず、㋫聞鐘五夜多疑を絶す、古人立地皆成佛、淵明が端的獨り眉を顰む。

　見色明心

㋙憶ひ得たり寒山月を見るの題、眼睛地に落ちて衆生迷ふ、洛陽三月貴遊の客、閃爍たる紅旗殘照の西。

　聞聲悟道、見色明心、雲門拈じて云く、㋓「觀世音菩薩錢を將ち來りて、胡餅を買ひ、手を放下して云く、元來是れ㋢饅頭と。」

㋐卽ち觀音に現ず奴婢の身、饅頭胡餅精神を谷ふ、舊時忘れ難し見聞の境、㋚滿目山陽笛裏の人。

にあり、天台宗の根本地にして、智者大師の開く所、南岳は支那湖北省荊州府の附近にある山の名、陳の大建二年慧思禪師、門人四十餘人と共に此處に居す、後六祖の法嗣懷讓禪師又此所に居る。

㋰雲門の別名なり、雲門は韶州の地にあるを以てなり。

㋒洞山良价禪師の法嗣にして、元證大師と諡す。

㋼經に曰く、「三界無安猶如火宅」と。

㋨釋尊樂中の苦を觀じ給ひて、遂に出家し給ふ。

㋔臘月八日未明、明星の輝くを見て忽然として大悟し給ふ。

㋗釋尊、迦葉尊者に傳法衣鉢の靈地なり。

㋳不落、不昧、又は百丈墮野狐身の公案ともいふ。自ら野狐禪に比す、因果一如當體脫落をいふなり。

㋮佛の說法の聲をきいて悟る人といふ意。

㋘香嚴知閑禪師、武當山に庵を卓して憩止す、一日庭前を掃淨する次、小石の竹を擊ちて戛然響をなすに遇ひて、忽然大悟し、潙山の印可を受く。

㋫清夜の鐘聲をきいて、夢中の聲を喚びさます。

㋙朗月の天にある、月光の地にある、是れ皆見性の種子なり、洛陽三月酒旗の店頭に飜るも又同斷。

㋓從容錄八十二則にあり。

㋢諸葛武侯、孟獲を征する時、羊豕の肉を交ぜて之れを包むに麪を以てす、人の頭に像りて、人の首に代へて神を祀りしことあり、これに基づく。

㋐三十三應身の所なり。

㋚丁度昔時の知親に逢ふ感がするとなり。

㋖大隨法眞禪師、長慶大安禪師

㋖大隨庵邊に一龜有り、僧問ふ、「一切衆生は皮骨を褁む、㋒這箇の衆生、甚としてか骨皮を褁む。」大隨草鞋を以て背上に蓋ふ。

衆生顚倒幾時か休せん、㋱前頭を打着して又後頭、手に信せて猫を救ふ趙州老、草鞋戴き去るも也た風流。(戴を一に載に作る。)

㋯黄檗、佛を禮す

麁行の沙門鬼眼開く、身長七尺甚だ奇なる哉、知らず何の處にか黄檗を見ん、法を立つる㋛商君法を破り來る。

臨濟机案㋓禪板を燒く

此の漢宗門第一の禪、奪人奪境體中玄、安身立命那の處にか在る、㋪劫火洞然大千を燒く。

㋲翠岩夏末に衆に示して云く、「一夏以來兄弟の爲に說話す、看よ翠岩が眉毛在り麽」

の法嗣。

㋒皮は身、骨は心、此の僧未だ心身不二を覺らず、故に心內に身あるや、身內に心あるやを一龜を借りて問ふ、心身滅して大眞現ずるを示すため、之れを覆ふ妙手なり。

㋱南泉、猫兒を斬る前話を擧して趙州に問ふ、州便ち草鞋を脫して頭上に於て戴いて出づ、南泉云く「若し子在りしならば、恰も猫兒を救ひ得てん」と。此れと風流好一對なり。

㋯黄檗希運禪、參學の頃、鹽官齊安國師の會下に在つて首座となる、時に宣宗皇帝未だ位に卽かざる以前、甥の武宗に逐はれ、香嚴に就いて沙彌となり、鹽官の會下にありて書記となり、黄檗と連單なりき。一日黄檗、佛殿に到りて禮佛す、書記卽ち問ふ「佛に著いて、求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、長老禮を用ひて何かせん。」檗曰く「佛に就いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、常に禮すること是の事のごとし」といひをはりて、書記を一掌す、書記曰く「大麁生。」黄檗曰く「這裏是れ什麽の所在ぞ、細と說き、麁と說く。」更に又一掌す。

㋛衞鞅商君、刑名の學に通じ、秦の孝公に仕へ、變法の令を定め、遂に自ら法の爲に惠王の爲に車裂の刑に遇ふ。商君は法に沒し、黄檗は法に浮ぶ。

㋓坐禪の時、勞を除かんがために衆僧の著ふる板にして、或は手を案じ、或は身を靠らす器なり。

㋪奪人奪境の所、正に劫火洞然、安心立命此の中にあり。

保福云く、「賊と作る人心虛る。」長慶云く、「生也。」雲門云く、「關。」

眉毛公案爛泥荊、保福雲門同道に行く、長慶身を藏して還つて影を露す、

小樓南畔月三更。

翠岩眉毛を示す圖

賓中主有り主中の賓、關字失錢生也親し、賊賊賊賊㋝拿不得、當頭姦黨是れ何人ぞ。

㋜梅子熟す

熟處年年猶ほ未だ忘れず、言中に味有り孰か能く甞めん、人斑初めて見る大梅老、疎雨淡烟靑已に黃。（年々を一に年來に作る。）

盲

㋑瞎驢は受けず靈山の記、四七二三須らく愧慚すべし、豈に光影邊の事に墮在せんや、銅睛鐵眼是れ同參。

聾

拂を掛けて呵せらる百錬の金、天生㋺懷海耳根深し、眞聞眞箇何の處にか在る、㋩爲に鼓す無絃一曲の琴。

㋲雪峰義存の法嗣、保福、從展、長慶、慧稜、雲門、何れも雪峰の神足なり。

㋝捕ふことを得ざるをいふ。

㋜大梅法常禪師、馬祖下の尊宿なり、曾て馬祖に參じて問ふ、「いかなるか是れ佛」と。馬祖曰く、「即心即佛」と。師言下に大悟し、それより大梅山に深居し、松實を食とし、荷葉を衣とし、只管打坐すること三十年なりき。一日馬祖故らに僧を使はして問はしむ、「和尙そのかみ馬祖に參見して何の道理を得てか此の山に住するや。」師曰く、「馬祖吾れに向つて即心即佛と言ふ、我これより此の山に住せり」と。僧曰く、「馬祖佛法近來別なり。」師曰く、「作麼生か別なる。」僧曰く、「馬祖曰く、非心非佛と。」師曰く、「道の老漢人を惑亂すること了期あるべか

陋。

一句披かんと欲す吾が鬱襟、舌頭齶を拄へて笑ひ吟々たり、㋥靈雲答へず長生の問、誰か識らず金言猶ほ心に在り。（長生を一に長慶に作る。）

㋭船子釣臺の圖　二首

金鱗得難し急流の前、坐斷す釣臺三十年、絲線一たび通ふ名利の路、㋬子陵は咲ふ可し㋣夾山の禪。

千尺の絲綸豈に收むるを得ん、一天の風月一江の舟、舟翻り人去つて名猶ほ在り、洙水何に因つてか逆流せざる。

賊

春風を惱亂して何の成る所ぞ、㋠遊絲百尺多情を惹く、知らずんば桃花に問取し去れ、㋷靈雲の雙眼睛を換却す。

清素首座を贊す

茘子食し罷んで吾が曾を記す、三十年來一箇の僧、㋦杜牧の平生丈夫の志、老いて氣力無うして㋸昭陵を望む。（子を一に支に作る。）

㋾兜率悅禪師を贊す

らず。さもあらばあれ非心非佛、我れは祇だ即心即佛と。」僧還りて馬祖に擧似す、馬祖曰く、「梅子熟せり」と。

㋑盲目の驢をいふ。

㋺百丈懷海禪師、馬祖道一禪師の法嗣なり。

㋩無弦の琴、無孔の鐵笛、鼓吹し得て之れを不聞裡に聽き來つて、始めて眞箇の消息を得るなり。

㋥潙山靈祐の法嗣、桃花を見て悟道す。

㋭藥山惟儼禪師の法嗣。

㋬嚴子陵、光武帝諫議に拜す、受けず、富春山に耕釣す、今釣臺あり。

㋣夾山は船子の法嗣、善會禪師なり。

㋠「かげらふ」又「いという」と云ふ。沈約の詩に「遊絲空に映じて轉ず」と。

㋷香嚴の擊竹、靈雲の桃花、天

素老は天生薄福の徒、佛魔公案的傳無し、鬱襟忽ち發す烈史の筆、永く辱づ㋻楊雄莽が大夫。（二三句一本「的禪の門弟一人無し、恩深うして報じ難し佛魔の語」に作る。又永辱を未辱、或は可惜に作る、可惜是なるに似たり。）

㋕圜悟大師の投機

沈吟す小艶一章の詩、乾坤を發動して大機を投ず、㋵擊竹見桃若し相問はば、須彌脚下の赤烏龜。（問を一に比、又は間に作る。赤烏を石烏に作る。）

㋟松源和尙の塔銘を覽る

治父住持功空しからず、貧を祓ひて富と作す甚の家風ぞ、看來り數を省すれば鏟猶ほ在り、識らず脚跟絲線の紅。（紅を一に功に作る。）

㋹魚籃觀音を賛す

丹臉靑鬢慈愛深し、自ら疑ふ雲雨夢中の心、㋞千眼の大悲看れども見えず、漁妻江海一生の吟。

經卷不淨を拭ふ　三首

經卷は元不淨を除くの牋、㋡龍宮海藏言詮を弄す、看よ看よ百則碧岩集、狼藉たり㋧乳峯風月の前。

籠關目見道の文、徒らに多情千金を逸し去ることを。

㋦唐の京兆萬年の人なり、豪放にして奇節あり、詩をよくし、杜甫に對し小杜と稱す、その卒せんとするに當り、平生作る處の文章をことごとく燒き、自ら墓誌銘を作るといふ。

㋸唐の太宗の陵なり。

㋾兜率從悅禪師、寶峰克文禪師の法嗣、無盡居士は其の門人なり。

㋻字子雲、蜀郡成都の人、辭賦を好み、成帝の時、相如に似たる者を薦むるあり、大夫と作る。王莽に仕ふ、王莽、後に反逆す、故にしかいふ。

㋕臨濟下九世、五祖法演の法嗣。

㋵香嚴、靈雲の因緣なり。

㋟崇岳松源、徑山に大慧杲に見え、後應庵に參じて大に得所

弓影客盃多く腸を斷つ、夜來新病(ヌ)膏肓に入る、慚慚す我れ禽獸に及ばざるを、狗は尿す栴檀の古佛堂。

手に信せ拈じ來つて不淨を除く、作家面目露堂々、(ラ)南山雲起り北山は雨、一夜落花流水香し。

(ム)大慧禪師碧巖集を焚く

(ウ)妙喜老人千歳の名、宗門の潤色(ヰ)太高生、(ノ)子胥曾て吳王の戮を受く、惜む可し髑髏の眼睛無きことを。

牛

異類行中是れ我が曹、能は境に依り也た境は能に依る、出生忘卻す來時の路、識らず(オ)當年誰が氏の僧ぞ。(「我が曹」を一に「我が曾」に作る。)

蛙

鯨鯢を釣るに慣れて笑一場、泥沙に步を(ク)碾りて太だ忙々、憐む可し井底に尊大と稱す、天下の衲僧皆子陽。

尺八

一枝の尺八恨任へ難し、吹いて(ヤ)胡笳塞上の吟に入る、十字街頭誰が氏

あり。

(レ)觀音の應以三十三身得度者旣皆現此而以說法の誓願に出づる一例を假說せるものとす。

(ソ)首楞嚴に云く、「一目三目四目九目是の如く、乃至、一百八目千目萬目八萬四千の淸淨寶目に因つて或は慈、或は威、或は定、或は惠、衆生を救護すること大自在を得たり」と。

(ツ)大海の中にある龍王の居所なり。瑜伽論記に、「大海の中、娑伽羅龍王宮殿有り、縱廣正等八萬由旬、又須彌山特雙山中間、海內後難陀霻婆難陀二龍王宮殿あり云々」と。

(ネ)雪竇山の別名、雪竇重顯禪師、此處に碧岩集を編む。

(ナ)左傳に、「晉公病む、醫を秦に求む、醫至る、病膏の下、肓の上にあり、爲むべからず」とあり、之れに基づ　不治

の曲ぞ、少林門下知音少なり。

(マ)傀儡

一棚頭上に全身を現す、或は王侯と化し或は庶民、目前眞の(ケ)木橛を忘卻して、痴人は喚んで本來の人と作す。

羅漢菊

茶褐黃花秋色深し、(フ)東籬の風露出塵の心、(コ)天台五百の神通力、(エ)未だ淵明が一片の吟に入らず。

菊　羅漢(テ)楊妃同瓶

楊妃爛醉す一籬の秋、茶褐相交りて(ア)好仇を爲す、神通を失卻して下界に居す、應身は(サ)天寶の辟陽公。

雪團

乾坤埋沒して門關沒し、收取して卽今雪山と爲す、狂客時に來つて百雜碎、大千起滅刹那の間。

嫌佛閣

德嶠韶陽門大いに開く、喚んで嫌佛の一樓臺と爲す、這般の知識邪法を說

の病をいふ。

(ラ)雲門云く、「古佛露柱と交はる、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて曰く「南山雲を起し、北山に雨を下す」と。

(ム)南嶽下第十五世の祖、圜悟克勤に嗣ぐ。

(ウ)大慧禪師をいふ。

(キ)高く止つて居る意、向上一色邊に止り居る者を評する語なり。

(ノ)楚人なり、名は員、吳王に仕ふ、吳王齊を伐たんとす、子胥之れを極諫す、王遂に之れに劍を給ふ、自ら刎れ死す、舍人に告げて曰く「我が眼を抉り、吳の東門の上に懸け、以て越寇の入りて吳を滅すを觀せしめよ」と。

(オ)潙山、一日衆に示して曰く、『老僧百年後、山下檀越の家に向つて、一頭の水牯牛となり、左脇下に於て、五字を書

く、問話の者は魔界より來る。(韶陽を一に昭陽に作る。)

鰥齋

古佛堂中露柱に交る、斬つて兩段と成して誵訛を定む、青山綠水一閑客、咲ふ可し岩頭の黑老婆。

㋖竹幽齋

香嚴多福主中の賓、密々參禪要津に到る、六々元來三十六、淸風動く處㋴佳人有り。

陋居

目前の境界吾が癯せたるに似たり、地老い天荒れて百草枯る、三月春風春意沒し、寒雲深く鎖す一茅廬。

如意庵㋱校割の末に題す

常住物を將つて庵中に置く、木杓笊籬壁東に掛く、我れに此の如きの閑家具無し、江海多年簑笠の風。

如意庵退院㋯養叟和尙に寄す

住庵十日意忙々、脚下の紅絲線甚だ長し、他日君來つて如し我れを問はゞ、

して曰く、「潙山僧某甲」と、この時若し喚んで潙山僧となさば、又是れ水牯牛、喚んで水牯牛となさば、又潙山僧某甲、且く道へ、喚んで甚麼となさば、卽ち得てん。仰山出でて禮拜して去る」と。此の因緣を詠出したるものか。

㋗礙る、きしる。

㋳胡人蘆葉を卷いて吹く、其の聲悲しと。

㋮人形廻しなり。

㋘木の「くひ」様のもの、人形をいふ。

㋫東のまがき、東籬の君は菊をいふ、陶淵明が東籬に菊を植ゑしよりいふ。

㋙天台山の石橋は、古來五百羅漢出現の靈場として大いに崇敬せらる。

㋓黃花淵明が詩に入ると雖も、茶禱の入らざるをいふ。

㋢楊妃、唐の玄宗の寵妃なり、

魚行酒肆又淫坊。（「如し」を一に「若し」に作る。）

南江の山居に寄す

天下の禪師人を㋛瞞過す、黑山鬼窟精神を弄す、平生杜牧は風流の士、吟斷す㋓二喬銅雀の春。

偶作

昨日は俗人今日は僧、生涯㋪胡亂是れ吾が能、黃衣の下名利多し、我れは要す兒孫の大燈を滅せんことを。

山路　讓羽

聲を吞んで透過す鬼門の關、豺虎蹤多し古路の間、吟情終に風月の興無し、黃泉の境は目前の山に在り。（透過を一に閑過に作り、吟情を一に吟杖に作る。）

山居　二首

婬坊十載興窮め難し、强ひて空山幽谷の中に住す、好境雲遮る三萬里、長松耳に逆ふ屋頭の風。

狂雲は眞に是れ大燈の孫、鬼窟黑山何ぞ尊と稱せん、㋲憶ふ昔簫歌雲雨の

紅花をいふ。

㋾好對といふに同じ。

㋚唐玄宗の年號なり。

㋖香嚴、擊竹の聲をきいて大悟す、故に之れを云ふ。

㋴此の佳人、是れ大悟底の因緣なり。

㋱寺の什物帳なり、新舊交代の時、什物と自己の所有物とを區分明記して、疑なからしむるものなり。

㋯釋宗頤、養叟と號す、大德寺に住す、後花園帝召して法を受く、宗慧大照禪師の號を賜ふ。

㋛たぶらかすを云ふ。

㋓杜牧之の赤壁の詩に曰く「折戟沙を沈めて恨未だ銷せず、自ら磨洗を將つて前朝を認めす、東風周郎の與に便ぜずんば、銅雀春深うして二喬を鎖さん」と。赤壁の戰に曹操、周瑜の爲に破れ、二喬をとら

夕、風流の年少金樽を倒せしことを。（雲雨を一に雲南に作る。）

山中㋝典座に示す

歸宗の一味日興の餘、典座山中功虚しからず、㋜淨名香積の飯を覓むるを休めよ、何の時か饍に美雙魚有らん。

山中南江の書を得

孤峯頂上草庵の居、㋑三要印消して功未だ虚しからず、意はざりき玄中に玄路有りとは、萬行涙を裹む一封の書。

山中より市中に歸る

狂雲誰か識らん狂風に屬するを、朝に山中に在り暮には市中、我れ若し機に當つて棒喝を行ぜば、德山臨濟面通紅。

昔一婆子有り、一庵主を供養して二十餘年を經、常に一の二八の女子をして飯を送り給侍せしむ。一日女子をして抱定せしめて云はしむ。「㋺正與麼の時如何。」庵主云く「枯木寒巖に倚る、三冬暖氣無し。」女子歸つて㋩舉似す、婆子云く「我れ二十年只だ箇の俗漢を供養し得たり。」追ひ出して庵を燒却す。

る。（二喬は二人の美女、喬公の兩女をいふ。）

㋪「うろん」、胡亂、曖昧、怪訝、あてにならぬ等の意あり。

㋲往時を追想するなり。

㋝六知事の一、衆僧の辨食を掌る役なり。

㋜淨名は維摩居士なり、維摩經に曰く「『化菩薩滿鉢の香飯を以て維摩詰に與ふ、舍利弗、諸の大聲聞に語げて曰く「仁者は如來甘露の美飯を食ふべし、大悲の所薫にして、意に限ることなし、之れ食し消せざらしむるなり、」異の聲聞あり、念すらく、此の飯少し」と、化菩薩曰く「聲聞の小德小智を以て、稱量すること勿れ、四海盡くることあるも、此の飯盡くることなし、一切の人をして食せしむ」と。』

㋑臨濟爲人の機關、第一要、第二要、第三要、又三玄あり、

老婆心賊の爲に梯を過す、清淨の沙門に女妻を與ふ、今夜美人若し我れに約せば、㋥枯楊春老いて更に稊を生ず。

畫虎

㋭覿面當機誰か一摋せん、寒毛卓竪㋬老岩頭、恠しい哉僞扶桑國に在り、凜々たる威風四百州。

宗訢㋣藏主、製墨以て業と爲す、偈以て之れを送る。（一本に「偈以て」の字なし。）

萬杵の霜花華頂の天、商量し來つて多錢に直らず、何ぞ須ひん知藏の經卷を書することを、小艷詩を題して少年を衒はん。

病僧紹珠首座に示す

業識忙々劫空よりす、平生の伎倆今に到つて窮る、㋠四百四病一時に發す、苦屈苦辛安樂の中。

宗春居士の㋷下火　行年三十七

彌勒釋迦也た馬牛、春風に惱亂して卒に何ぞ休せん、㋦六々元來三十七、一聲の念讃鐘樓より起る。

第一、二、三支これなり。

㋺「かくの如き時如何」なり。

㋩婆子に告げるなり。

㋥一休の活禪、蓋し茲に見るべし。

㋭覿面は「まのあたり」といふことなり。

㋬岩頭和尚、常に曰く、「死にあたつて正に一吼すべし」と。唐の光啓中、中原賊起り、師を責むるに、供の饋ることなきを以てし、遂に刄を傳ふるに、神色自若、大いに吼ゆること一聲し了つて寂す、其の意氣又比すべきか。

㋣知藏に同じ、經藏を掌る役、今の圖書館長の如きもの。

㋠地、水、火、風それ〴〵黃病、疾病、熱病、風病、各々百一を配し、合して四百四病となす。

㋷下炬に同じ、松火を以て火を點ずること、火葬式最後の作

病中人の(ル)曲椂を送るを還す

法座上の禪は名利の基、諸方竪拂と拈鎚と、圓悟金山大病に遭ふ、苦吟す小艷一章の詩。

文安丁卯の秋、大德精舍に一僧有り、故無くして自殺す。事を好むの輩、遂に之れを官に譖す。其の餘殃に繋りて、囚禁に居るもの七五輩、吾が門の大亂と爲すに足る。時の人喧傳す焉。予之れを聞いて、卽日迹を山中に晦ます、其の意蓋し忍びざるに出づるのみ。適々學者の京城より來り、本寺件々の事を說く、愈々慨嘆に堪へず。偈を作り懷を言ふ、時に(ヲ)重陽に値ふ。故に九篇を成すと云ふ。(「本寺件々の事を說く、愈々慨嘆に堪へず」を一本「本寺件々の故を說く、愈々慨嘆に勝へず」に作る。)

地老い天荒る龍寶の秋、夜來風雨惡うして收め難し、他に對して若し是非の話を作さば、(ワ)雲門關字の酬に彷彿たらん。

慚づ我れ聲名猶ほ未だ韜まず、參禪學道塵勞を長ず、靈山の正法地を掃つて滅す、意はざりき(カ)魔王の十丈高からんとは。

法にして、遺骸を荼燒する燃料に火を點ずるなり、今は引導師、偈文を唱へて擬炬を拈ち、點火の態を爲すのみ。

(ヌ)一聲の念、請合して卽ち六六三十七、形骸滅して却つて一を增す、卽ち不生不滅なり。

(ル)曲錄とも書く、四脇あり、兩脇を交叉して牀椅の如く、後に寄り掛りを設く、今の安樂椅子の背の斜ならざる樣のもの。說法又は葬式法要等に用ふ。

(ヲ)九月九日、菊の節句を謂ふ。

(ワ)雲門文偃禪師、機に對して往往一字の酬應を用ふ、故に之れを一字關といふ。例へば、「如何なるか是れ吹毛劍。」曰く、「體。」「如何なるか是れ祖師西來の意。」曰く、「師」といふが如し。

(カ)却つて魔王の爲、餘殃の圈中に入るとは。

囚に停る一月老盧堂、身上の㋵迍邅斷腸するを休めよ、苦樂寒濕箇の時節、黄花一朶重陽を識る。

清淨本然㋟大千を現ず、㋹現前の境界是れ黄泉、戰に慣ふ㋞作家赤心露はる、眉間に劍を掛けて血天に澆ぐ。

正傳傍出して妄に相爭ふ、曠劫の無明人我の情、人我擔ひ來つて擔子重し、空しく看る㋡蛺蝶一身の輕きを。

上古の道光今日明かなり、議論す臨濟正傳の名、屋前屋後樵歌の路、憶ふ昔山陽の笛一聲。

棒喝德山臨濟の禪、商量す三要と三玄と、漢王印を鑄て却つて印を消す、胡亂更に參ぜよ三千年。(消印を一に消市に作る。)

近代久參學得の僧、語言三昧喚んで能と爲す、無能味有り狂雲の屋、㋧折脚鐺中飯一升。

風外の松杉亂れて雲に入る、諸方は衆を動し又群を驚かす、㋤人境機關吾れ會せず、濁醪一盞醉つて醺々。

㋶靈昭女を贊す

㋵「たちもとほる。」行き難く進まざる貌。

㋟大千世界をいふ、長阿含經に出づ。日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、梵世天、之れを一世界といひ、之れを一千合したるものを小千世界、之れを一千合して中千世界、之れを一千合して大千世界といふなり。

㋹赤肉團泥土に化し、始めて妙境の現前を見るを云ふ。

㋞作家は斯道に老練なる師家をいふ。

㋡蛺蝶一身の輕きに比す、徒らに人我を擔ふ棒、思慮分別の爲に重さを增すをいふ。

㋧これ鍋の飯一升と云ふ程の意。

㋤主觀及び客觀をいふ、臨濟四料簡に、人境俱奪、人境俱不奪あり。

竿羅賣却して甚だ風流、㋰一句明々たり百草頭、相對して禪話を弄するに心無し、朝雲暮雨愁に堪へず。（堪を一に勝に作る。）

風鈴　二首

靜の時は響無く動の時は鳴る、鈴に聲あるか風に聲有るか、老僧が白晝の睡を驚起す、何ぞ須ひん日午に三更を打するを。

見聞の境界太だ端無し、好し是れ淸聲隱々寒し、㋒普化老漢の活手段、風に和して㋼搭在す玉欄干。

牛庵　齋名

某甲は㋨潙山僧一頭、長溪路上卽ち忘ずるや不や、閑中復た祖師の見無し、花は春風に屬し月は秋に屬す。（不を一に否に作る。）

半雲　齋名

膚寸無根碧空に點ず、安身立名其の中に在り、夢魂昨夜㋔巫山の雨、吟斷す朝來一片の蹤。

六祖を贊す

隨身の擔子㋗鈯斧、知らず何の處の山翁ぞ、㋳南方の佛法會すや否や、㋮

㋶龐蘊居士の女、常に隨つて、竹漉籬を製して以て朝夕に供す、居士將に入滅せんとす、女靈照をして、出でて日の早晩を視、午に及んで以て報ぜしむ、女遽かに報じて曰く、「日已に中す、而も蝕あり」と。居士戶を出でて見る次、靈照卽ち父の座に上りて合掌して坐亡す、居士笑つて曰く、「我が女鋒捷なり」と。七日の後、州牧于公、疾を問ふ次、居士謂つて曰く、「但だ願はくは諸の所有を空じて愼んで諸の所無を實とすること勿れ、好く世間に住せよ、皆影響の如し」と。言ひ訖つて公の膝を枕にして化す。

㋰龐蘊居士曰く、「明々たる百草頭、明々たる祖師の意」と。百草頭は一切萬象の意なり。

㋒鎭州普化、盤山寶積の法嗣、佯狂として言を出す度なし、

盧公老老盧公。

紹鷄藏主、地を規して居を卜す、家徒に四壁立つ、㋘扁して土庵と曰ふ、偈を作つて以て證と爲すと云ふ。

夏巢冬穴一身康し、帶水拖泥萬念忙し、稼穡艱難若し領略せば、梅檀の佛寺名利の場。(「梅檀の佛寺名利の場」を一本「梅檀の佛寺利名の場」に作る。)

大機居士小築を卜し、額して瞎驢と曰ふ、因つて㋫贊するに偈を以てすと云ふ。

大人の消息誰有つてか通せん、㋙靈山記莂の中に墮せず、臨濟の宗風地を拂つて滅す、紅塵紫陌鬧忽々たり。

簑笠　庵號

樵客漁人受用全し、何ぞ須ひん曲彔木牀の禪、芒鞋竹杖㋓三千界、水宿風飡二十年。

謹んで一休老和尚の座下に錄呈し奉る

狂風徧界曾て藏さず、吹き起す狂雲狂更に狂、誰か識らん雲收り風定

常に一鐸を振りて曰く「明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打」と。或は鐸を以て人の耳邊に付けて之れを振ふ、或は其の背を拊して到顧の者あらば、手を展べて曰く「我れに一錢を與へよ」、非時にも食に遇ふて喫す」と。

㋭打つ、たゝくなり。

㋨潙山、水牯牛によりてしか云ふなり。

㋔李白の楊貴妃の詩に曰く「雲雨巫山枉げて斷腸」と。巫山の神女が朝に雲となり、夕には雨となりて來りし故事によるなり。

㋨なた、斧の類なり。

㋳五祖に參じ、八月遂に黃梅の衣法を傳持して山を下る、五祖の指示により南方に遁れ、漁家にかくれ、後印宗法印の非風動、非幡動の旨を斷じ、遂に剃具すと。

る處、㋢海東の初日扶桑に上る。

幻住の孫眞建九拜

和韻

慚愧す聲名の覆藏せざるを、佯歌爛醉我れ風狂、吟懷夜々中峰の月、幻住の僧に三宿の桑無し。

華叟老師光を掩ふて、而して後、既に二十餘年に泊ぶ。壬申の秋、敕して大機弘宗禪師と諡す、仍つて禪詩を製して、大用養叟和尚に呈寄す。且つ㋐賀忱を陳ぶと云ふ。(年を一に稔に作る。)

嘗て塵寰を謝す五十年、芳聲美譽是れ何の禪ぞ、予背日暮れて倒行し去る、覿面屍を辱かしむ三百鞭。(「日暮れて」を一本「晩日」に作る。)

㋚懶瓚詔を辭す也た何ぞ似ん、㋖煨芋烟鎖す竹爐の裏、大用現前眞の衲僧、先師の頭面に惡水を潑ぐ。

端師子を賛す

師子を弄ずる處正に心を明む、回頭に托せず口㋴唔の若し、讀誦㋱蓮經風雪の燭、漁歌一曲五更の吟。(處を一に床に作る。)

㋮六祖をいふ。

㋘扁するは、即ち土庵と扁額するをいふ。

㋫贅するは、蛇足を添ふることなり。

㋙世尊、靈山に於て迦葉尊者に傳へ給ふ時の、「我に不立文字教外別傳、正法眼藏涅槃妙心あり、爾に授く」とて禪法の奥旨を許し給ふ。而して又かゝる言句の爲に捉へられぬを云ふ。

㋓三千世界の間といふが如し。

㋢一休の得意、又思ふべきなり。

㋐眞心からの賀詞なり。

㋚懶瓚和尚は唐の德宗時代の人、河南府衡山石室の中に隱棲す。唐の德宗其の名を聞き、使を遣して之れを召す、使者其の室に至りて宣言す、「天子詔あり、尊者常に起つて恩を謝すべし」と。瓚方に牛糞の火

大德寺火後、大燈國師の塔に題す

創草百二十八年、看來れば今日㋯體中玄、正邪境 法滅 卻して後、猶ほ是れ大燈大千に輝く。

㋛渡江の達磨

脚下苦なる哉平地の波、誰人か梁魏に聱訛を定む、西來道ふ莫れ大難の意、河廣傳へ聞く一葦過ぐと。

臨濟和尚を贊す

從來道業是れ㋽毘尼、㋪黄檗の棒頭に所知を忘ず、正傳的々克勤下、吟破す風流小艶の詩。

普化を贊す

㋲德山臨濟同行を奈せん、街市の風顚群衆驚く、㋝坐脫立亡敗闕多し、和鳴隱々寶鈴の聲。

黄檗の三頓棒

棒頭打着す㋜羯磨の僧、痛處の針錐伎能を絕す、

を發いて煨芋を尋れて食す、寒涕(水鼻)頤に垂る、未だ曾つて答へず、使者笑つて曰く「且く尊者に勸む、涕を拭へ。」瓚曰く「我れ豈に工夫して俗人の爲に涕を拭ふことあらんや」といつて遂に、立たず。

㋖やきいもなり。

㋴喑は啞に同じ「おし」なり、又なく、さけぶの意もあり、此所は啞を云ふ。

㋱法華經をいふ。

㋯古塔主の所立三玄の一なり、即ち體中の玄、句中の玄、玄中の玄を三玄といふ。古塔主は雲門を去ること一百年後、自ら稱して雲門に嗣法せりといふ、其の上堂の語に曰く、「雲門匡眞大師、如今現存す、諸人還つて見るや。」一休自ら之れと好一對を爲す。

㋛達磨渡江の狀態をいふなり、又は蘆葉の達磨とも云ふ。即ち達磨が一枝の蘆葉に乘りて、楊子江を渡るの畫なり、達磨梁の大通元年に支那に來り、初めて梁武帝に相見して、問答應對するに、機宜投合せず、依つて遂に江を渡りて北の方魏の國に向つて去れり。傳燈に曰く「蘆一枝を折つて楊子江を渡つて梁を去る」と。

㋽毘奈耶とも云ふ、何れも梵音(Vinaya)の音化なり、離行、調伏、滅等の譯あり、三藏中の律をいふ。

㋪臨濟、黄檗の三頓の棒を喫して、遂に辭して大愚の所に至る、因つて前話を擧して、有過無過を問ふ、大愚曰く「黄檗與麼に老婆なり、汝が爲に徹困なることを得たり、更に這裏に來つて有過か無過かと云ふ。」師言下に大悟す。

桃李春闈簾外の月、吟魂一夜十年の燈。(僧を一に曾に作る。)

㋑脚下紅絲線

持戒は驢と成り破戒は人、㋺河沙の異號精神を弄す、初生の孩子婚姻の線、開落す紅花幾度の春。(成を一に爲に作る。)

華叟和尙を賛す

靈山の孫言外の的傳、密漬の茘支四十年、兒孫に箇の瞎禿漢有り、願ひ得たり老婆新婦の禪。

自賛

華叟の子孫禪を知らす、狂雲面前誰か禪を說く、三十年來肩上重し、一人荷擔す ㋩松源の禪。

風狂の狂客狂風を起す、來往す淫坊酒肆の中、具眼の衲僧誰か一摑、南を畫し北を畫し西東を畫す。

大燈の佛法光輝沒し、㋥龍寶山中今誰か有る、東海の兒孫千載の後、吟魂猶ほ苦しむ ㋭許渾が詩。

百丈が餓死　三首

㋲德山の棒、臨濟の喝、普化の明頭打暗頭打、好三幅通也。

㋝普化禪師、臨濟を辭し、一日東門に遷化し、第二日南門に遷化し、第三日西門に、第四日自ら棺を擧げて北門外に出で、鐸を振つて棺に入つて逝す、郡人奔走して棺を揭げて看るに、已に見えず、只だ鐸聲の漸遠を聞くのみと。

㋜羯磨、梵語、譯して作法、又は業といふ、四法を具すべし、又三種ありと、得戒の師、證據の師の意なり。

㋑脚下の纏綿、卽ち修業の戒律等を云ふ、却つて戒律に苦めらるゝ樣にては、他生は驢馬と生るゝならん、戒によらず自ら戒にあたるは、蓋し人間界に生をうけんと。

㋺恒河沙の數程の數多の名目の戒、實に精魂を戲弄すること

爲人の苦行也た天然、大用分明即ち現前、一日作さゞれば必ず食はず、大人の手段作家の禪。

古人の(ヘ)受用幾か艱を嘗む、是れ尋常談笑の間にあらず、飽食痛飲飯袋子、叉衣翫水又遊山。（一本、艱を難に作り、咲を笑に作る。）

工夫長養大慈心、臨濟消し來る萬兩の金、昔日の艱難吐哺を聞く、簑衣(ト)箬笠钁頭の吟。

會裡の徒に示す　三首

樂中苦有り一休の門、箇々蛙爭ふ井底の尊、晝夜心に在く(チ)元字脚、是非人我一生喧し。

公案參じ來つて明歷々、胸襟勘破すれば暗昏々、怨憎し死に到るまで忘卻し難し、道伴の忠言耳根に逆ふ。

徒に祖師の言句を學得して、識情は刀山牙は劍樹、看よ看よ頻々他の非を擧するを、血を銜んで人に噴く其の口汚る。

入定僧に示す

塵緣塵境萬端稠し、此に到つて誰人か衆流を截らん、誓心決定すれば魔宮

である。

(ハ)崇拜松源の禪風をいふ。

(ニ)大德寺を云ふ。一休自ら任ずるものゝ如し。

(ホ)唐の許渾が詩に曰く、「琪樹西風枕簟の秋、楚雲湘水同游を憶ふ、高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日少年今白頭」と。老年を感じての作なり。

(ヘ)受持活用の義なり、物我一體の上の活機用なり。普勸坐禪儀に曰く、「寶藏自ら開けて受用如意ならん」と。

(ト)箬は竹の皮にて作れる笠。

(チ)文字文章のことをいふ。

(リ)李白が長信秋詞の詩に曰く、「眞成薄命久しく尋思す、夢に君王を見て覺めて後疑ふ、火は西宮を照して夜飲を知る、分明に複道恩を奉ずる時」と。夢に見る位では到底駄目である、現に之れをとらへなければならぬと云ふ意な

動く、㋷長信の西風珙樹の秋。

碧岩集の序を讀む

㋦夾山の言教價千金、一炬看來れば古今を救ふ、寒灰に向つて議論を成すを休めよ、宗乘滅卻す老婆心。

㋸黃龍の三關

佛と成り驢と成る手脚全し、河沙の異號生緣に任す、黃龍關外黑雲鎖す、積翠の春風楊柳の前。

㋾虎丘雪下三等の僧　二首

少林の積雪心頭に置く、公案圓成す上等の仇、僧舍に詩を吟ず剃頭の俗、飢腸食を說く也た風流。（舍を一に社に作る。）

禪者詩人皆痴鈍、雪下の三等議論多し、㋻妙喜是の若く大慈心、食を說く僧に香積飯を與ふ。（痴を一に癡、又は懶に作る。）

大德寺の修造を看て感有り

雲門の㋕卵塔一茅廬、大用の黃金殿上の居、傍出す正傳現前の境、㋵楊岐の屋壁古來疎なり。

り。

㋦青原下四世、船子德誠の法嗣なり。

㋸慧南禪師、學人接化に於ける常用の手段なり、是れに三關あり、曰く、生緣、曰く、佛子、曰く、驢脚と。會元十七慶閑章に曰く「龍問ふ「如何なるか是れ汝生緣のところ。」閑曰く「早晨白粥を喫す、如今又饑を覺ゆ。」問ふ「我が手何ぞ佛手に似たる。」閑曰く、「月下琵琶を弄す。」問ふ「我が脚何ぞ驢脚に似たる。」閑曰く「鷺鷥雪に立つ同色に非らず」と」あり、以て其の關を窺ふべし。其の關内に入れば積翠より吹き下ず春風が楊柳の前にそよいで居る樣なり。

㋾虎丘は支那江蘇省蘇州府元和縣にあり、武丘山、又は海涌山ともいふ。吳王闔閭を葬りし所なり、宋末に至り、圓悟

(タ)大應國師の尊像を新造す

活眼大いに開く眞面門、千秋の後尙ほ精魂を弄す、(レ)虛堂の的子老南浦、東海の狂雲は六世の孫。

(ソ)婬坊に題す

美人の(ツ)雲雨愛河深し、樓子老禪樓上の吟、我れに抱持(ネ)嚏吻の興有り、(ナ)竟に火聚捨身の心無し。

延壽堂の僧に示す

(ラ)無常の殺鬼現前の時、末後の牢關誰にか說向せん、百事休し難うして五欲閙し、(ム)六窓鎖さんと欲すれば八風吹く。

病中の作

德山の棒兮臨濟の喝、嘆ず我れ他の機境に奪はるゝことを、若し人(ウ)馬祖の不安を問はゞ、慚愧す一生(ヰ)相如が渴。(「嘆ず我れ他の機境に奪はるることを」を一に「嘆ず我れ他の機境を奪ふを破る」に作る。)

(ノ)榮衒の惡知識に示す　二首

參禪の婆子楊花の帳、入室の美人蘭蕙の茵、近代箇の邪師の過謬、馬牛の

門下紹隆、此の山に居して盛んに臨濟の禪風を擧揚せしを以て名あり。

(ワ)大慧宗杲禪師をいふ。

(カ)塔の一種、無縫塔とも云ふ、塔の形狀は鳥の卵に似たるを以て、卵塔と稱す。

(ヨ)南岳下十一世の祖、慈明楚圓禪師の法嗣なり、楊岐派の祖。

(タ)筑前興德寺の開山、南浦紹明禪師、圓通大應國師と謚す。

(レ)虛堂和尙に就いて法を受け、豁然大悟す、故にしか云ふ。一休は卽ち六世の法孫に當る。

(ソ)青樓を云ふなり。

(ツ)楚の襄王、夢に巫山に神女に會せし故事に由りて、男女の密會するに用ふ。劉廷芝の公子行に「雲と爲り雨と爲り楚の襄王」とあるも、李白の「雲雨巫山枉げて斷腸」とあるも

漢是れ人倫に非す。(非を一に不に作る。)
捧心自ら稱す法王身、世上弄嘲徒に怒嗔す、
一箇の㋔猢猻巴尾沒し、出頭す大用現前の人。
(捧を一に棒に作る。)

㋗關山和尚の塔を拜す

荒草鋤かず乃祖の玄、㋳涅槃正法妙心の禪、杜鵑叫落す關山の月、誰か花園躑躅の前に在る。
(一本三四句を「誰人か吟落す關山の月、五夜の漏聲曉箭の前」に作る。)

雨滴　齋名

蕭々門外是れ何の聲ぞ、會せずんば當機鏡淸に問へ、顚倒の衆生迷ふて物を逐ふ、窓前半夜一燈靑し。(窓前を一に吟魂に作る。)

松窓　齋名

茅廬竹閣興窮り難し、臨濟栽ゑ來つて功空しか

皆此の故事なり。

㋧ついばみ、くらふ、又は談笑等の意あり。

㋤捨錢の心ありて捨身の心なきなり。

㋶臨命終に到るの時なり。

㋰六窓は六根にして、八風は人の心を動かす風の如き、八種の法、曰く、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八を云ふ。

㋒馬大師、不安、院主問ふ「和尙近日尊候如何。」大師曰く、「日面佛、月面佛」と。卽ち馬祖の面目は日月寒暑晝夜春秋の如く、安不安によりて別狀あるなしとの意。若し一休がかくの如き問をうけたならば何と答ふべきと。

㋭司馬相如、一生消渴の病に苦めども、其の一代の文章に於ける實に見るべきものあり、正に之れに恥づべきものか。

㋨自ら驕り衒ふものを云ふ。

㋔猿の異名、又胡孫と書す。

㋗信州高梨氏の子、鎌倉の巨福山建長寺の廣嚴庵に到り、東傳師に就いて剃髮受具す、京都に大燈國師の活手段を聞いて參ず、一夕關の公案を透破して印可を蒙り、關山の號を與へらる。

㋳延元元年大燈國師病むや、花園上皇「國師滅後誰にか法を問はん」と。國師奏して「關山と云ふものあり、我が骨髓を得たり」と。花園の離宮を改めて梵刹となし關山を請じて開山となす、師、寺を正法山妙心禪寺と號す、勅召を奉じて妙心寺に開堂住持す、實に今の妙心寺派大本山の開祖たり。

㋮天地自然の法則に隨ふは卽ち任運なり、自然に安心を問ふ、卽ち達磨不答の所、自然なればなり。

らず、枕上愧慚す閑夢有るを、夜來驚起す屋頭の風。（「愧慚す」を一に「自ら漸づ」に作る。）

面壁達磨

誰人か(マ)任運に安心を問ふ、昔日神光少林に侍す、(ケ)面壁功成つて面目無し、知らず積雪滿庭に深きを。

苦行の釋迦

六年飢寒骨髓に徹す、苦行は是れ佛祖の玄旨、道ふことを信ず天然の釋迦無しと、天下の衲僧飯袋子。

(フ)言外和尚

端無く滅卻す大燈の家、鐵眼銅睛劍樹の牙、一句分明言外の語、親しく聞く華叟は(コ)曇華の若しと。

徹翁和尚

大燈の子大應の孫、正傳臨濟の宗門、儼然たり靈山の一會、何ぞ妨げん三界の獨尊。

(エ)趙州の三轉語

(ケ)面目なき所、卽ち眞面目なり、老子の「大辯咄の如し」の意なり。

(フ)釋宗忠、字言外、姓越智、豫州の人なり、白翁雲禪師に參じ、大いに得る所あり、永和二年秋、勅を奉じて大德に住し、大いに玄化を開く、密傳正印禪師と諡す。

(コ)優曇華を云ふなり、此の華三千年に一度開く花なり、此の華開けば、世に輪王出づといひ、又世に佛在す時に此の華開くといふ。靈瑞希有のことに引き用ふるなり。然れども此の所、妙最禪師の法嗣、隱庵曇華和尚をいふか。

(エ)會元第四趙州の章に「上堂に曰く、金佛爐を渡らず、木佛火を渡らず、泥佛水を渡らず、眞佛內裡に坐す、菩提涅槃眞如佛生、盡く是れ貼體の衣服亦は煩惱と名く、實際理

泥佛水を渡らず、木佛火を渡らず、金佛爐を渡らず。

詩成つて小艶愁情を述ぶ、一枕多年夜雨の聲、長笛暮樓誰が氏の曲ぞ、曲終へて江上數峯青し。(「青し」を一に「淸し」に作る。)

㋢龐居士竹漉籬を製する圖

㋐河裏捨て來る十萬錢、庫中終に半文錢沒し、眞箇簸箕門下の客、笊籬賣つて多錢に直らず。(「沒し」を一に「無し」に作る。)

大惠宏智揖讓の圖

眉毛相結んで眼睛同じ、兩箇の老禪機境融ず、力士の鐵槌子房が策、憤心は博浪沙中に在り。

㋚山庵雜錄に曰く、「㋖楚石、嘉興天寧に住す、有司の重ねて官宇を作るに、木石を闕くに値ふ。村落無僧の廢庵を取つて、需むる所に應ぜんと欲す、因つて諸寺の住持を集めて之れを議す。時に楚石力めて不可なる者を陳べて之れを沮む、有司聽かず、遂に退鼓を撾つて海鹽の天寧に歸る。二老皆義を行ふに勇み、師席の尊を棄つること、啻に弊屣を棄つるが如くなるのみならざるを視る。今荐に禍患

地是れ何の處にか着けん、一心生ぜざれば萬法咎無し云云」と。

㋢龐蘊居士は衡州衡陽縣の人なり、世々儒を以て業となす、少うして塵勞を厭ひ、石頭希運禪師に參じて旨を領じ、後又馬祖に參問す、大いに得る所あり、常に竹漉籬を製して朝夕の供に充つ。

㋐居士、馬祖に問うて曰く「萬法と侶たらざる者、是れ什麼人ぞ。」祖曰く「汝が一口に西江の水を吸盡するを待つて汝に向つて道はん。」居士言下に大悟すと、之れによりて言を爲すか。

㋚恕中無慍禪師の撰する所、叢林の先德世間の學者の勸善懲惡の資料たるべき嘉言善行を編錄せるものなり。

㋖南岳下二十世、徑山行端の法嗣、元叟に徑山に參じて所得

己に罹ると雖も、而も猶ほ濡忍戀々たり、亦獨り何ぞや。」予此れを讀んで感有り、因つて偈を作ると云ふ。又了庵の一事有り、之れを省く。〔一本、二老を二左に作り、「己に罹る」を「己に嬰るに」作り、了庵を子庵に作る。〕

奪人奪境事猶ほ稠し、幽谷閑林自由ならず、道ふ莫れ江山定主無しと、普天の下帝王の州。

龍門亭に偈を題して、(コ)天龍寺の再興を賀す

盡乾坤乃祖の門風、萬岳(メ)嵯峨たり烟雨の中、(ミ)三級浪高うして黒雲鎖す、潛鱗直に天龍と化するを得たり。

龍翔寺の廢を感ず

常住物誰か己身に用ふ、山門境致(シ)松筠を剪る、殿堂只だ花と與に零落し、(ヱ)廢址の秋風二月の春。

虛堂和尚十病　二首

病は自信不及の處に在り。　病は得失是非の處に在り。
病は我見偏執の處に在り。　病は眼量窠臼の處に在り。

あり、後海鹽の福臻に出世す。

(コ)臨濟天龍寺派の本山、靈龜山天龍資聖禪寺と號す。足利氏の開基、夢窓疎石の開山にして、京都五山の第一位にあり。

(メ)京都府葛野郡嵯峨村にあり。

(ミ)故事に、「禹門三級の波あり、桃花の節、鯉魚之れを越ゆれば龍と化す」と。

(シ)松筠は松及び竹にて、山門の風致を添へる松や竹など剪り拂ひ、見る影もなきを云ふ。

(ヱ)荒廢の跡、楊梅香る春も、錦紅散ずる秋も、共に寂々として昔の面影はなし。

(ヒ)鷄足山は猿足山、又は尊足ともいふ。印度摩迦陀國伽耶の東南七哩にあり、摩訶迦葉入寂の地なり、世尊の大法を鷲靈山の會に受けてより、鷄足室中生々世々の春は、此の時

に開かれたのである。

病は機境不脫の處に在り。　病は得少爲足の處に在り。
病は一師一友の處に在り。　病は旁宗別派の處に在り。
病は位貌拘束の處に在り。　病は自大了、一生小不得の處に在り。

是非は元勝負の修羅、傍出す正傳人我多し、近代の邪師管見に誇る、識情毒氣偏頗に任す。
議論未だ休せず正と邪と、無慚愧の漢是れ天魔、狂雲が臥病は相如が渇、一枕秋風我れを奈何せん。

拈花微笑

鷲峰會上現前の辰、(ヒ)鷄足室中來劫の春、毒に中る人は應に毒の用を知るべし、西天此土野狐の身。

慈恩窺基法師を賛す

窺基三昧獨り天眞、酒肉諸經又美人、座主の眼睛猶ほ此の如し、宗門唯だ箇の宗純有り。(「如し」を一に「若し」に作る。)

同門の老宿、余が淫犯肉食を誡む、會裡の僧、之れを嗔る。因つて此の偈を作り、衆僧に示すと云ふ。

爲人說法是れ虛名、俗漢僧形何似生、老宿の忠言若し耳に逆はゞ、昨非今是我が凡情。

病中の作

佛病祖病鬼眼を迸らしむ、臨濟几案禪板を燒く、金山大病の辛を會せず、時人空しく吟ず艶詩の簡。

(「迸る」を一に「逆ふ」に作る。)

隱溪　齋名

(モ)呂公子陵眞の面目、受用風飡又水宿、江湖今(セ)贋漁舟有り、我れに一竿湘楚の竹無し。

示衆

(ス)參玄衲子道成じ難し、但だ願はくは常不輕に歸依せんことを、一片の吟懷誰に向つてか解かん、(イ)楚雲湘水十年の情。

邪禪を破す

瞿曇四十九年の說、看よ看よ(ロ)毘耶と(ハ)摩竭と、邪師臆說に話頭を拈ず、閻王の前豈に拔舌を免れん。(一本、竭を喝に作り、舌を口に作る。)

新に佛寺を建立す

一生破屋廢庵の居、這裡榮華也た虛しからず、淸淨の佛寺利欲の地、楊岐の屋壁古來疎なり。

將に山中に入らんとして一偈を屋壁に書し、以て衆に示して去る

慚愧す禍の(ニ)蕭墻より起るを、我見人を折いで(ホ)劒鋩の如し、此れより空

(モ)太公望及び嚴子陵を云ふ、太公望は渭水の濱に釣し、子陵は又羊裘を被りて澤中に釣る、其の時に應じて淸貧に甘んずるは分の宜しきなり。

(セ)表面漁舟らしいが、中々さうでないものがある、卽ち隱者を裝ふて却つて現はるゝ者が多い。

(ス)玄々微妙の法を實參實究する人の意、佛道修行の人のことなり。

(イ)行脚多年、善知識に法を求むる情を云ふ。

(ロ)毗耶離、又は毘舍離とも書く、古代印度の國名、摩迦陀國の北方、佛、說法の地、維摩の生地、第二結集の行はれし地なり。

(ハ)摩竭地、又は摩揭陀、摩伽陀と書す、世尊成道及び最初傳道の地なり。根本の宗乘を度

山幽谷の路、誰人か來つて板橋の霜を踏まん。

㋬密庵和尚病起上堂の後に題す

江山の富貴是れ樵漁、風雨吟身一草廬、七顛八倒衆生の苦、耐へず小魚大魚を吞む。

大用庵養叟和尚、㋣宗慧大照禪師の號を賜ふを賀す

紫衣師號家の貧を奈せん、㋠綾紙青銅三百緡、大用現前贋長老、㋷看來れば眞箇普州の人。

大德寺の僧に寄す

人多く大德の門に入得す、這裡誰か師席の尊を捐つる、淡飯粗茶我れに客無し、醉歌獨り倒す濁醪の樽。（大德を一本、大燈に作る。）

㋦鳥窠和尚を贊す（一本、鳥窠を鳥巢に作る。）

巢は寒し樹上の老禪翁、寂莫清高名未だ空しからず、諸惡莫作善奉行、大機は須らく醉吟の中に在るべし。

養叟の大用庵に題す　二首

叢林零落して殿堂疎なり、臨濟の宗門破滅の初、大用は栴檀佛寺閣、㋸崢

外にして、徒らに歴史的考證に臆說紛々たるを破するなり。末後の一句却つて妙を得たり。

㊀君臣の會見する所に作りたるかきを云ふ。禍は近く門屏の内にあるの義にして、内變あるをいふ。

㋭劔鋩は劔先をいふ。

㋬密庵咸傑禪師、應庵曇華の法嗣なり。

㋣後花園帝、叟を召して禪要を問ふ、奏對旨に協ひ、特に宗慧大照禪師の號を賜ふ。

㋠綸紙及び賜物をいふ、緡は錢を通す絲なり。

㋷支那の普州は昔盜賊の集會する所として傳ふ、故に普州の人とは盜賊を意味するなり。にせ長老はえらい[illegible]ものをなした、丸で泥棒の樣なものであると、還つて大用庵の大用たる活眼の人自ら之れを知るの

嶸たり林下道人の居。(崢嶸を一に淨瀛に作る。)
山林は富貴五山は衰ふ、唯だ邪師のみ有りて正師無し、一竿を把つて漁客
と作らんと欲すれば、江湖近代逆風吹く。

㋾百丈絕食　(絕を一に施に作る。)

大智禪師難行道、末法爲人眞の落草、飽食痛飲熱鐵丸、初めて懼る泉下の
㋻閻羅王。(王を一に老に作る。)

示衆

割截禁へ難し ㋕忍辱仙、捨身は諸佛の舊因緣、千歲聲名斷碑の雨、髑髏識
盡く ㋵北邙の前。

病中　二首

錯り來つて衆を領ず十年餘、實悟知らず多く是れ虛、乃ち邪法の輩を破除
せんと欲す、夜來背に發す ㋟范增が疽。
㋹藥山は兩粥 ㋞懶殘は芋、昔年祖師修行の苦、棒喝機關作家の禪、是れ
牢關末後の句に非ず。(非を一に不に作る。)

衆に示す

みと、一休なかくのすれ者なり。

㋦鳥窠道林禪師、徑山國一禪師に謁して得法す、後秦望山長松の枝葉繁茂、盤屈して蓋の如き上に棲止す、此の名ある所以なり、又鵲巢禪師とも云ふ。唐の元和中白居易來つて宗要を問ふ、居易曰く「禪師の住所甚だ危險なり」と。窠曰く、「居士の危險尤も甚だし。」居士曰く「弟子の位、江山に鎭す、何の險なることか之れあらん」と。窠曰く「薪火相交つて識性停らず、險に非らざることを得んや。」居易問ふ「如何なるか是れ佛法の大意。」窠曰く「諸惡莫作、衆善奉行」と。居易曰く「三歲の孩兒も也た恁麼に道ふことを解す。」窠曰く「三歲の孩兒も道ひ得るも、八十の老翁も行ふことを得ず」と。居易遂

忍辱仙人常不輕、菩薩果滿ち已に圓成。(ツ)撥無因果孤陋に任す、一箇の盲人衆盲を引く。

(ネ)仰山を贊す　二首

小釋迦唐朝に出生す、夢中兜率太だ分明、耽源は體也潙山は用、體用の中唯だ眼睛を開く。

(ナ)枕子夜來推出する時、一宗(ラ)敗闕人の知ること少なり、法身說法(ム)座主の說、(ウ)黃葉一枝小兒を誑す。

松源和尙(ヰ)上堂に云く、「擧す、僧、(ノ)巴陵に問ふ、『祖意敎意是れ同か是れ別か。』巴陵云く、『鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る。』(オ)白雲師祖云く、『巴陵は只だ一半を道ひ得たり、白雲は則ち然らず、水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香、衣に滿つ』と。」師拈じて云く、

に禮をなして師事せり。

(ル)高くけはしきことの形容。

(ヲ)百丈禪師、凡そ作務の勞を執る、必ず衆に先だつ、衆ひそかに作具を收めて息はんことを請ふ、師曰く、「吾れ德無くして爭でか人を勞すべき。」既にして作具を求めて得ざれば亦食はず、故に云ふ、「一日爲さゞれば一日食はず」と。

(ワ)閻魔王、琰魔王、焰魔王、炎魔王、閻羅王、閻魔羅王、琰魔邏社、閻魔大王等の稱あり、冥界の王、惡罪に對して刑罰を司る冥界の覇者なり。

(カ)佛、昔仙と作つて山中に道を修す、歌利王妃と同じく獵に出づ、疲倦して寢ぬ、妃共に仙を禮す、王起つて問ふ、「仙四果を得るや否や」と。皆云ふ、「不得と」。王怒つて身體を截割す、天怒つて石を雨らす、王懼れて懺悔す、仙の曰く、「我れ本瞋るなし。」王曰く、「何の瞋なきことを知らん。」仙誓つて曰く、「我れ若し瞋なくんば、身即ち平復せん。」身果して平復すと。其の忍辱を見る。

(ヨ)邙山は洛陽の北にあり、故に北邙といふ、漢以來墳墓の地として名高し、東漢の諸陵及び唐宋名臣の墳多く此にあり。

(タ)范增、楚の項羽を助けて諸侯に覇たらしむ、漢王之れを患ふ、陳平の計を用ひて之れを間す、項羽乃ち之れが權を奪ふ、范增怒りて骸骨を乞ふ、行きて未だ彭城に至らざるに、疽、背に生じて死せり、好事魔の多きを云ふ。

(レ)藥山惟儼禪師は靑原下三世、石頭希遷禪師の法嗣なり。

(ソ)懶殘は懶瓚をいふか、懶瓚の事は前に見ゆ。

「白雲力を盡して道ふ、只だ㋗八成を道ひ得たり、㋳靈隱に問ふこと有らば、只だ他に向つて道はん、人我無明一串に穿つと。」

松源老老婆心切、人我無明已躬に屬す。
祖意敎意別と同と、商量今古未だ曾て窮らず、

㋮涅槃堂

眼光落地涅槃堂、自ら悔い自ら慚づ螃蟹の湯、
七手八脚萬劫の苦、無常の殺鬼火車忙し。（殺を一に刹に作る。）

㋘竹篦背觸

背觸は首山の閑話頭、㋫諸訛着々來由沒し、梨花院落黃昏の月、說いて愁人に向つて愁を解かず。

山居の僧、葉を擁す

㋷天地の眞理として動すべからざる因果の道理を、然ることなしとする邪見をいふ。

㋧南岳下四世、潙山の法嗣、初め耽源に謁し、玄旨を悟る、後に潙山に師事すること十五年、竟に印可を受く、後世潙山の宗風と併稱して潙仰宗といふ。

㋤枕子はまくらのこと。

㋶やぶれかくるをいふ、宗門の衰へたる人の知るなしと。

㋰一座の主、宗門にては敎家、講解の徒を指していふ語。

㋒涅槃經に曰く『彼の嬰兒啼哭の時、父母即ち楊樹の黃葉を以て、之れに語げて云ふ「啼く莫れ〳〵、我れ汝に金を與へん。」嬰兒見已つて、眞金の想を生じ、便ち止まつて啼かず、然れども此の楊葉實に金にあらず』と。

㋼粥飯の時、僧堂に上るを上堂といふ、又法堂に上りて演法するをいふ、普說のこと、陞座ともいふ、此の所下の意なとゐ。

㋨巴陵顥鑑禪師、雲門文偃の法嗣、雲門に參じて心要を得、辯舌俊利、頗く人を化す。

㋔楊岐方會の法嗣。

㋗十分に道ひ得たりの意なり、盡し宗門十成を諱む、故に八成といふのみ。

㋳圜悟克勤の法嗣、靈隱瞎道禪師、宋の孝宗、道を問うて曰く「如何にして悟を得ん。」對へて曰く「本有の性、歲月を以て之れを磨す、悟らざるもの無し」と。

㋮延壽堂のこと、無常院、無常堂、重病閣、省行堂、將息寮等の名あり、病僧を收容して加療せしむる堂宇なり。主に延壽堂の名を以て呼ぶ。

㋘首山省念禪師、竹篦を拈じて

孤峯頂上塵寰を謝す、三十年來山を出でず、因つて憶ふ ㋙ 南陽葉を揲する意、半身は暖氣半身は寒。

山居僧

人無き時は喜び客來れば嗔る、落葉飛花獨覺の身、正見の禪師若し令を行ぜば、三冬枯木百花の春。

拈華微笑

世尊拈出す一枝の花、一代の禪宗意氣奢る、㋓ 金色の頭陀獨り傳法、近代知識河沙の如し。（「如し」一に「若し」に作る。）

新法師に贈る

威音那畔法に師無し、自悟自然成道奇なり、偶々出家新戒の漢有り、劫空久遠今時に在り。（遠を一に遼に作る。）

會裡の衆に絶交する偈、且つ以て自ら警むと云ふ

徒を匡し衆を領じて魔宮を立す、汗馬從前蓋代の功、師弟の凡情共に姦黨、憐む可し ㋢ 韓信が良弓を嘆ぜしことを。

行脚

衆に示すの語、「汝等若し喚んで竹篦と作さば即ち觸る。喚んで竹篦と作さゞれば即ち背く、諸人宜しく喚んで甚麼とか作さん」と。即ち背せず觸せざる所に於て、日用光中とするなり、即ち他なし、竹篦は竹篦に非ず、即ち是れ竹篦なり、其の他何の向背かあらん。

㋾諸は殺の方正しとす、絲の錯雜紛糾して容易にとけざる混雜の樣子をいふ、又錯り傳ふる意、展轉殺訛などを以て實となす等の類なり。

㋙南陽慧忠禪師、唐の肅宗の上元貳年、勅を奉じて西禪寺に住す、後代宗、臨御するに當り、迎へられて光宅寺に止まる、南陽白崖山の黨子谷に居すること四十有餘年、曾て山門を下らずといふ。

㋓摩訶迦葉、靈山の會に於て正

(ア)咸陽の金玉幾樓臺、(サ)方寸の封疆歸去來、一箇天外に出頭して看れば、
須彌百億草鞋の埃。

達磨大師の半身を賛す

東土西天徒に神を弄す、半身の影像全身を現す、少林冷坐何事をか成す、
(キ)香至王宮蕙帳の茵。(影像を一に形像に作る。)

讓羽山に新に一寺を剏む、山を虚堂寺と名づけ、大燈と扁す、因つて一偈を述ぶ。

茅屋三間七堂を起す、狂雲風外我が封疆、夜深うして室内人の伴ふ無し、
(ユ)一盞の殘燈秋點長し。(茅を一に茆に作る。)

中川を擯出する賀頌

病身を救はず病身を勞す、蕭墻禍有り會中の賓、十年劒樹刀山の底、萬劫
消し難し阿鼻の辛。

中川を擯出する賀頌、勝瓊に呈す

(メ)本蛇影に非ず客盃の弓、元字心に在り劫空よりす、昨日の凡兮今日の聖、
無根雲起る變通の風。

法眼藏涅槃妙心を傳法す。頭陀は杜陀、杜多ともいふ。陶汰、斗藪、抖擻等の譯あり、煩惱の塵垢を拂ひ去りて、佛道を求むること修行と同義なり、これに十二行あり。

(テ)淮陰の人なり、漢の高祖之れを用ひて大將とし、遂によく天下を定む、股下の忍を以て、普く知らる。

(ア)秦の始皇の營みし阿房宮の莊嚴をいふ。

(サ)物質上の金玉樓臺は何のものかは、胸中の丹心、箇の莊嚴あれば須彌百臆も恰も脚下の塵の樣なものである、蓋し足の向ふ所、金玉殿樓、山川草木、統べて坦々の裏にあり。

(キ)達磨は南印度香至國王の第三子なり、蕙帳の裡に生れて、かくの如き難行苦行をなさるをいふ。

(ユ)此の句、大燈の扁額に擬す。

病

㊆馬祖不安の閑話頭、毘耶語を杜ぢて愁に勝へず、夜々苦吟す三十歳、月は滿つ　㊇茂陵桂樹の秋。

紅葉に偈を題して以て多欲の僧に呈す

滿庭の落葉僧の掃ふ無し、南陽擁し來る猶は落草、自ら悔ゆ欲界の衆生と成るを、君子財を愛す是れ何の道ぞ。

長祿庚辰八月晦日、大風洪水、衆人皆愁ふ。夜遊宴歌吹の客有り、之れを聞くに忍びず、偈を作り以て自ら慰すと云ふ。

大風洪水萬民の憂、歌舞管絃誰が夜遊ぞ、法に興衰有り劫に增減、任他あれ明月の西樓に下るを。

重ねて靈山和尚法衡の徒に示す法語の後に題す

㊈李下從來冠を整へず、世上に奔馳して豈に官に諛はん、江山の風月我が茶飯、自ら笑ふ一生吟味寒し。

白居易、鳥窠和尚に問ふ、「如何が是れ佛法の大意。」窠曰く、「諸惡莫作、衆善奉行。」白曰く、「三歲の孩兒も也た恁麼に道ふことを解す。」

㊅晉書の樂廣傳に、「樂廣河南の尹に遷る、嘗て親客あり、久闊又來らず、廣其の故を問ふ、答へて曰く、「前に坐にありて酒を賜ふことを蒙る、飲むに方りて忽ち盃中蛇あるを見て、意甚だ之れを惡む、既に飲みて而して疾む」と。時に河南の聽事の壁上に角弓あり、漆畫もて蛇を作る、廣、意ふ盃中の蛇は即ち角弓ならんと、復た前所に置酒し、客に謂ひて曰く、「盃中蛇ありや、否や。」答へて曰く、「見る所初めの如し」と。廣乃ち其の所以を告ぐ、客豁然として意とけ、沈痾頓に愈ゆ」と。

㊆馬祖不安の話頭、前に見ゆ。

㊇茂陵は司馬相如、病渴を發ふに家居せし處なり。

㊈文選の古詩に、「君子は未然を防ぐ、嫌疑の間に處らず、瓜田に履を納れず、李下に冠を

窠曰く、「三歳の孩兒も道ひ得ると雖も、八十の老人も行ふことを得ず」と。㋪靈山和尚、毎に曰く、「若し鳥窠の一語無くんば、我が徒盡く本來無一物、及び不思善不思惡、善惡不二、邪正一如等の語に泥んで、以て因果を撥無し、而して世多く日に不淨の邪師を用ひん。」故に余此の偈を作り、以て衆に示すと云ふ。

學者因果を撥無して沉まん、老禪の一句價千金、諸惡莫作善奉行、須らく㋲先生醉裡の吟に在るべし。

余、會裡の徒を誡めて曰く、「酒を喫せば、必ず須らく濁醪を用ふべし、肴は則ち其の糟のみ。」遂に之れを名けて乾一酒と曰ふ、仍つて偈を作り、以て自ら笑ふと云ふ。

㋝醉裡衆人酒腸を奈せん、醒むる時伎盡きて糟糠を啜る、㋜湘南の流水懷沙の怨、狂雲が笑一場を引き得たり。

余四十年前、秉拂の僧法堂上（一本法堂を法座に作る。）に在り、而して禪客の氏族を說くを聞く焉。商に工に行僕者の流に、各其の業とする所を許く。甚だしき者は、乃ち手を出し、以て模樣を作すに臻る。吁是れ何爲るものぞや、卽乃ち耳を掩ふて而して出づ矣。因つて二偈を述

整さず」と。

㋪宋杭州の人、仰山雪巖禪師に參じて、契悟する所あり、元應初年東渡し、高時に迎へられて建長に住す。

㋲白居易をいふなり。

㋝屈平が漁父の辭に曰く「世を擧げて皆濁り、我獨り清めり、衆人皆醉へり、我れ獨り醒む、是れを以て放たる」と。漁父の辭に曰く「衆人皆醉はば、何ぞ其の糟を餔ふて、其の醨を歠らざる」と。蓋し此の漁父の意に隨ふなり。

㋜屈平懷沙の賦を詠じて、遂に湘水に沒して死す。

す、意、弊を革むるに在り。凡そ四姓の我が門に入つて、皆釋氏と稱するは、其の食を乞うて而して命を資け、法を乞うて而して性を資くるを以てなり。（一本、「凡そ四姓の吾が門に入つて、皆釋氏と稱するは、其の食を乞うて而して姓を資け、法を乞うて而して姓を資くるを以てなり」に作る。）亦何の㋑貴冑望族の有らん哉。今の世山林叢林の人を論ずる、必ず氏族の尊卑を議す焉、是れをしも忍ぶ可くんば、孰か忍ぶ可からざらん乎。遂に前偈を寫して、以て四方に掲示す。誰か敢て㋺節を撃たん。其の偈に曰く、

説法説禪姓名を擧す、人を辱しむるの一句聽いて聲を呑む、問答若し起倒を識らずんば、修羅の勝負無明を長ぜん。

㋩犀牛の扇子誰人にか與へん、㋥行者盧公來つて賓と作る、姓名議論す法堂の上、恰も百官の紫宸に朝するに似たり。

佛眼遠禪師三自省に曰く、「報緣虛幻、彊ひて爲す可からず。浮世幾何ぞ、家の豐儉に隨ふ。苦樂逆順、道其の中に在り、動靜寒溫自ら媿ち自ら悔ゆ。」

自ら悔ゆ自ら慚づ溫と寒と、看よ看よ㋭三界本無安、愚迷は正に是れ衆生の樂、蜜を嘗めて猶は井底の難を忘る。（一本、「看よ看よ」を「着着」に作る。）

㋑貴族、又名望家の族等をいふ。

㋺意に適つて手、又は膝を打ちて、同意を表するをいふ。

㋩馬祖道一の法嗣鹽官齊安と侍者との問答商量に、『鹽官一日侍者を喚んで、「我がために扇子を過し來れ。」者曰く、「扇子破れぬ。」官曰く、「扇子既にやぶれなば、我れに犀牛兒を還し來れ。」者對ふる無し。資福、一圓相を畫きて中に於て一の牛字を書す。』此處空即是色色即是空の體用を現す、即ち資福如寶の致す底を與へん

偈を作り飯に博へて喫す

東山に來往す昨今の若し、飢時の一飯價千金、荔支素老佛魔の話、慚愧す詩情風月の吟。（昨を一に昔に作る。）

松源和尚を賛す

娘生の眼太虛空を照す、天澤の兒孫海東に在り、宗風を滅卻す（ヘ）三轉語、詞華心緒一天紅なり。（華を一に革に作る。）

運庵和尚を賛す

惡魔の境鬼眼睛開く、五逆元來應に雷を聞くべし、臨濟當時几案を焚く、道場覿面に衣を却し來る。（一本、鬼を界に作り、聞を聽に作る。）

大應國師を賛す

看よ看よ佛日乾坤を照す、天上人間唯獨尊、禪者如し（ト）東海を渡る無くんば、扶桑國裡暗昏々。

大燈國師を賛す

書き出す面門覆藏無し、須彌百億露堂々、德山臨濟若し室に入らば、螢火應に須らく太陽に遇ふべし。

虛堂和尚の三轉語

龍門萬仭碧波高し、天澤面前誰か牢を畫す、生鐵鑄成す三轉語、作家の爐鞴吹毛を煆ふ。

と。

（ニ）六祖大師、黃梅に舂舍の賓となる。

（ホ）經に曰く、「三界無安猶如火宅」と。

（ヘ）前に見ゆ。

（ト）南浦紹明禪師、正元中、海を航して宋に入り、楊岐下十世の孫なる徑山の虛堂和尚に參じて旨を領じ、歸朝の後文永七年の秋、筑前興德寺に出世し、門堂演法せり、故に爾か云ふ。

(チ)漁父

學道參禪は本心を失す、漁歌の一曲價千金、湘江の暮雨楚山の月、限り無き風流夜夜の吟。

靈山の塔に題し、正傳庵の僧に贈る

看來れば眞箇正傳庵、宗乘を說かす唯だ世談、凜凜たる威風人に逼つて冷じ、當機覿面誰有つてか參せん。

(リ)白樂天の像に題す

勳業名高し白樂天、自然流落して塵緣を絕す、叢林志を失す山林の輩、訝る莫れ雙林寺裡の禪。

舊(ヌ)齋を思ふ　二首

(ル)山陽の長笛(ヲ)子雲が吟、蜜荔支に漬す素老の心、熟處三生六十劫、一聲の望帝月西に沈む。

昔年の黃犬と蒼鷹と、苦樂悲觀地獄の能、(ワ)楊岐を欺き得たり吾が屋壁、乾坤一鉢一衣の僧。(悲觀を一に悲歡に作る。)

疎壁齋

楊岐は天下の老禪翁、此れより大いに興る臨濟の宗、紅塵紫陌我れ乍ち住

(チ)屈原が漁父の辭を飜出す。

(リ)唐の杭州の刺史、名は居易、樂天と號す、久しく佛光如滿に參じて心法を得、兼て大乘の金剛寶藏を受く、杭州に牧たりし時、烏窠道林禪師を訪うて問答す。又嘗て千濟禪師に書を致し、佛の無上大慧を以て敎理を演出す、安んぞ機の高下に循ひ、病の不同に應ずることあらん、平等一味の說と相反するを難じて問ふ。後龍門の香山寺を修し、自ら記を錄す、又酒に醉吟し、自ら醉吟先生と稱す、又香山居

ず、山舍半は吹く黃葉の風。（興を一に與に作る。）

滅燈齋

眞前の一盞太だ分明、乃祖の靈光㋸太淸を照す、德嶠の俗道我れ會せず、江湖夜雨十年の情。

斬猫僧に示す

是れ吾が會裡の㋵小南泉、手に信せて猫を斬る公案圓かなり、錯り來つて自ら悔ゆ斯の令を行じて、牡丹花下の眠を驚起することを。

僧に尊卑無し

㋟盧能馬箕姓名拙なり、敎外別傳佛說を越ゆ、杜撰の禪流井底の尊、憐む可し皮下に元血無し。

謹んで久參の人に白す　二首

圓頂方袍婬奸、威風鎭に人に逼つて寒し、古則參得の家業、愧づ可し妄に我慢を長することを。

言ふ莫れ㋹公案卽ち圓成、八角の磨盤心上に橫ふ、㋞邂逅知り難し自屎の臭きを　他人の敗闕鏡中に明かなり。

士と號す。

㋦朝の粥に對し、午時の食をいふ。僧侶に食事を供養することをいふ。又轉じて亡靈の爲に讀經することをも云ふ。

㋸晉書向秀傳に「秀、山陽の舊盧を經、隣人笛を吹くものあり、聲を發すること寥亮たり、秀、乃ち思舊賦を作る」と。

㋾揚雄、字は子雲、蜀郡成都の人、漢の成帝の時の人なり、太玄、法言を作る。

㋻楊岐の屋壁疎なるに比す。

㋕天をいふ。鶏冠子に「聖人の德は上太淸に及び、下太寧に及び、中萬靈に及ぶ」と。

㋵南泉普願禪師、座下の雲水に對する提示に類するをいふ。

㋟盧能は大鑑慧能禪師、馬箕は馬祖道一禪師、家簸箕を作るを業とす、それより轉じて言說を稱して馬祖の簸箕唇、即

前年大燈國師の(ツ)頂相を賜ふことを辱うす、予今衣を改めて淨土宗に入る、故に玆に稱雲老和尚に還し奉る。

禪門最上乘を離却して、衣を更ふ淨土一宗の僧、宴に如意靈山の衆と成つて、嘆息す多年大燈を晦ますことを。

狂雲は大德下の(ネ)波旬、會裡の(ナ)修羅勝負嗔る、古則話頭何の用處ぞ、幾多の辛苦他の珍を數ふ。

謹んで久參の人に白す　寛正二年六月十八日崇宗藏主交を絶つ

一善行せず諸惡と作る、他を憎み他を妬む(ラ)元字脚。口は堅勁にして見地は微弱、瞎禿の禪宗門零落、人は笑ふ是れ無繩自縛と。他の非を見て己が錯りを知らず、日用の工夫は禍の作略、暫時も得難し虚廓に住するを。直指爲人又機作、是の如きの禪話溝壑に墳まる。勢を好み名に耽るの卜度、此に到りて誰人か剋削を與へん、古則に參得して心獨り濁る、(ム)醍醐の上味毒藥と爲る。

靈山の行狀を看る

宗門の極則又(ウ)聱訛、乃祖の山前釋迦、策を探つて誰人か鬼窟に點ず、工

お馬鹿貫といふに喩へられ、其の名の起りなり。

(ヒ)宇宙所現の萬法、其のまゝが悟の現れである。

(ノ)不意にであふことをいふ。詩に曰く「美なる一人あり、清揚婉たり、邂逅相遇ひて、我が願に適ふ」と。

(ツ)頭部を畫ける肖像をいふ。

(ネ)魔王の名、常に惡意を抱き惡法を成就し、衛を壞し人の慧命をたつといふ

(ナ)阿修羅に同じ、六道の一なり。

(ラ)三說あり、凡字のこと、元字脚は凡字の脚の意にして、元字の脚は几部で凡字なりと。乙字のこと、元字脚は元字の脚は乙、乙は一に通ず、故に一字の意と。古來多く此の說なり。又學跡字畫の意にて、上は横の二畫、下は竪の二畫を示し、文字の總名となすと。

夫日用俗塵多し。

香嚴擊竹

潭水の北兮湘水の南、(ヰ)竹枝曲裡口(ノ)喃喃、樽前爛醉す豪家の客、知らず愁人夜雨の談。（知を一に識に作る。）

會裡の徒に示す法語

凡そ參禪學道は、須らく惡知惡覺を(オ)勦絕して、而して正知正見に至るべきなり。惡知惡覺なるもの、古則話頭、經論要文、學得參得、坐禪觀法、勞して而して功無き者なり。是の如きの輩、當代四百四病一時に發す、人の爲に辱めらる、是れ情識の血氣なり。(ク)閻老面前に對して、甚の伎倆か有らん乎。(ヤ)獅子尊者、頭を斷つて白乳顯露分明なり。正知正見なる者、日用涅槃堂に坐斷する底の工夫、全身火坑に墮在す。子細に之れを看れば、苦中に樂有り、若し能く見得せば、撥無因果の境に味ます。若し見不得なれば、永く成佛の漢ならず、懼る可し懼る可し。

(マ)汲井輪の略々停息無きが如し、今既に出家することを得て、僧相圓備、三衣一鉢下に在り。想ふに是れ過去幾生か修し來つて、此の如き

故に文字文章のことをいふ。此の所下說是なるに似たり。

(ム)五味の中の最上味、乳より酪を出し、酪より生酥、生酥より熟酥、熟酥より醍醐を出すと、最上の法味にたとへ、生囓りの人には却つて毒となるをいふ。

(ウ)樽大の訛傳をいふ。

(ヰ)竹枝は土地のはやり歌なり、俚歌鄙陋なるを以て、乃ち屈原が作る所の九歌によりて竹枝新詞を作り、里中の小兒をして之れを歌はしむ。もと巴蜀の歌なり。

(ノ)べちやくとしやべるをいふ。

(オ)絕ち切ることなり。

(ク)閻魔王をいふ。

(ヤ)西天付法藏の第二十四祖、鶴勒那尊者に嗣法す、師子比丘とも云ふ。姓は婆羅門、得法

ことを得るか。若し是れ再び㋘驢胎馬腹に入り去らば、知らず又幾生を經てか、歸り來つて此の錯りを改修せん。努力せよ、努力せよ。切に須らく今生に了達して、是の如きの殃過無かるべし。之れを念へ、之れを念へ。

右靈山和尙の法語、其の後に題すと云ふ

互に高低を操る汲井輪、㋫威音の彌勒一囘の春、三世の諸佛歷代の祖、泉聲淚滴る苦吟の身。

我が病、良藥の効驗に及ばず、經呪の靈驗に及ばず、日を逐ふて窮困す。我が情識有るとき儞等諸人、縱ひ刹那と雖も、縱ひ一念と雖も、眞正の工夫を成し、窮決未了の處、實處に到着せば、諸の魔障頓に除いて、老懷如意ならん耳。衆對無し。

右靈山和尙病に因つて衆に示す法語、其の後に題すと云ふ

經呪の心頭を亂すことを須ひず、佛界佼窮り魔界收まる、愁人に向つて愁意を說く莫れ、相如が雲雨渴望の秋。

大德寺住持勅請の頌を拜するの頌、呈す

の後遊方して罽賓國に至り、波利迦を化し、達磨を論服して正道に入らしむ。魏の齊王二十己卯年示寂。

㋮即ち釣瓶の輪をいふ。

㋘來生には畜生道に落ちるをいふ。

㋫過去、莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ。故に父母未生前、天地未開已前といふに同じ。

㋙大德寺の山號なり。

㋓文明六年春二月、勅を奉じて大德寺の住持となる、即ち之れを云ふなり。

㋢朝廷にて佛門に下賜せらるゝ最上の光榮ある色とす、支那にては唐の則天武后の朝に、僧法朗等九人に紫衣を賜ふに始まる、日本にては聖武天皇の時、玄昉僧正に賜ひしを以て嚆矢となす。支那にては袈裟なりしが、我が國にては紫

廣德堂上柔仲和尙

大德大燈㋙龍寶山、靈光天上又人間、香を燒き恩に酬ゆ曇華叟、金色の頭陀曾て破顏す。

㋓文明甲午の春、大德禪寺住持　勅請を拜す、門客交々賀す。吁、五十年蓑笠淡如たり。勅黃捧照して、懷に愧づる無からん乎。因つて詩を作り、之れを泄す。

大燈の門庭殘燈を滅す、解け難し吟懷一夜の氷、五十年來蓑笠の客、愧慚す今日㋢紫衣の僧。(庭を一に第に作る。)

再び㋐妙勝寺に住する次、虛堂和尙の法衣を披く。因に合山の清衆一偈を需む、書して以て其の請を塞ぐ。

先祖は衣を還し、順老は衣を留む、斬つて兩段と作す、是れ松源の衣。

龍寶山大德禪寺入寺法語

山門

一跳直入、龍寶の㋚三門、門々路有り、㋖乾坤に逼塞す。

佛殿

色の法衣なり。

㋐京都府綴喜郡田邊村にあり、大應國師の開創に係る。

㋚三解脫門の略、空門、無相門、無作門といひ、或は我空、法空、俱空の三空門ともいふ、ともに大涅槃に至る處入の道とす、寺院に入る正面の門を稱する語。

㋖道の廣さ無邊、天地に充塞すと。

㋴雲門、示衆に曰く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて曰く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す」と。即ち釋迦も達磨も彌勒も露柱も皆同じなり。同一眞理何も別はない、南山も北山も自ら相異ならずして雲雨の相應ずるの自然、具眼者須らく自得すべし。

㋱土地神及び護法神を奉祀する堂なり。

古佛堂中、露柱雲雨。手を以て分くる勢を作して云く、「分破して後如何。
㋻雲門霧露。」

㋕土地堂

上天は是れ梵天㋵帝釋、下天は是れ㋟多聞持國護法神、何の處に向つてか新長老を見ん、新長老、㋹聻、六六三十六。

祖師堂

祖師何人ぞ、我れ何人ぞ。咄、誰か㋞境を奪ひ人を奪ふ。

㋡拈衣

小艶平生心絲を亂す、慈恩先祖手中の絲、順老明眼の衲僧。袈裟を擲つて云く、「是れ甚の脚下の紅絲ぞ。」

室

㋧明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、四方八面來旋風打、虛空來連架打、新長老、聻。乾坤一箇の驀直僧。喝一喝して云く、「人の來つて相如が渴を問ふこと無し、敲破す梅花一夜の氷。」打。

退院

㋵須彌山の頂上、忉利天の天主にして、善見城に居り、四天王及び三十二天を領して、佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征する天王なりといふ。
㋟東西南北、四天王の內、東方持國天王、西方廣目天王、南方增長天王、北方多聞天王これなり、須彌山の半腹、欲界六天の四方に住し、正法を護し、又世を守る故に、護世の天王とも云ふ。此の所二を擧して四を兼ぬるなり。
㋹聻は者を指す時の語なり、故に新長老よと呼びかける也。
㋞臨濟爲人四料簡の內、前に見ゆ。
㋡衣は嗣法の信として師之れを弟子に授く、弟子衣を拈じ法語を擧して披す。
㋧鎭州普化禪師、爲人接化の機、前に見ゆ。
㋤輕濂浮華をいふ。

平生㋜藞苴小艶の吟、酒婬色婬詩も亦婬。拄杖を擲つて云く、「七尺の拄杖常住に還す。」尺八を吹いて云く、「一枝の尺八知音少なり。」

帖

頂戴即ち是、放下即ち是、溥天の下是れ王土。頂戴して云く、「是々。」

國譯狂雲集上卷終

國譯狂雲集下卷

大燈國師の三轉語に曰く、「朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何似生、云々。」何似生、古尊宿と雖も受用の者有ること罕なり、唯だ(イ)慈明下の清素首座、能く之れを用ふ。然りと雖も晩年(ロ)兜率の悅公に遇つて、茘支を食ふの次、遂に敗を納ること一場、惜しい哉始有りて而して終無きことを。(「惜しい哉」を一に「情乎」に作る。)感懷の餘、五偈を作り之れを記す。偈に曰く、

這箇詭訛受用の徒、古今の衲子一人も無し、素老は慈明的傳の子、茘支の核子嚼むこと何ぞ麁なる。(素老を一に叙老に作る。)

(ハ)慈明の狹路楊岐を得、覿面の機痛處の錐、天澤愁吟す風月の客、繡簾吹き動す軟風の扉。

工夫日用門車を閉づ、五十年來烏有の歌、素老の茘支眞の敗闕、德山臨濟竟に如何。(烏有を一に鳥有に作る。)

暮天は細雨片雲は朝、(ニ)名は成都の萬里橋に屬す、百年東海獨り休歇、艶簡の吟魂永日消す。

(イ)汾陽善昭の法嗣、慈明楚圓禪師なり。

(ロ)兜率從悅禪師、南嶽下十二世、寶峰克文の法嗣、初め道吾に首として數衲を領ず、雲蓋智和尚に謁して入室を求む、又眞淨に見え、鹿苑に出世す、諡して眞寂禪師と號す。

(ハ)楊岐は慈明の法嗣、故に云ふ。

工夫棹を弄ず蓑公の舟、貪宿鞋を繊る蒲葉の秋、野老藏し難し簑笠の譽、誰人か江海の一風流。（弄を一に勞に作る。）

大燈忌宿忌以前美人に對す

宿忌の開山諷經、經咒耳に逆ふ、衆僧の聲、雲雨風流事終つて後、夢閨の私語慈明を笑ふ。

大用庵の破却を止む　二首　寛正五年

邪を破し正に歸す識情、勝負人我無明、出塵の羅漢を羨む可し、青天月白く風淸し。

定盤を認む（ホ）擔板漢の禪、衲僧の作略豈に絃に膠せんや、殺活縱橫惡手段、正印を鑄消す漢王の前。

大德寺の動亂に題す

禪者は禪を爭ひ詩客は詩、（ヘ）蝸牛角上安危を現す、殺人刀矣活人劍、長く信ず佳人獨り自知することを。

伏虎將軍是れ我が徒、英雄は失せず惡魔の途、（ト）吹毛三尺掌握の內、佛法南方一點無し。

（ニ）劉禹錫の竹枝詞の詩に曰く、「日出でて三竿春霧消す、江頭蜀客蘭橈を駐く、狂夫に書一封を寄せんとす、家は住す成都萬里橋。」

（ホ）一面のみを見て、全面を知らざる痴漢をいふ。

（ヘ）莊子に「蝸牛の左角に蠻氏、右角に觸氏あり、相戰つて死者數萬」と、小事に齷齪するにたとふ。

（ト）鋭利毛を吹くべき銘劍をいふ、機鋒鋭きに譬ふ。

（チ）大德寺沙門宗熙、養叟和尙に大德に參じて、雲門一字關によりて豁然大悟す、宗風大いに盛なり、後土御門天皇、其の德望を聞こしめし、特に正續大宗禪師の號を賜ふ。

（リ）南宋の度宗の年號。

（ヌ）唐の武帝の年號、此の時三武一宗の法難あり、佛祖統記四十三卷に曰く「唐の武宗仙を

養叟の的子㋠濂長老の癩病を訪ふ（訪を一に問に作る。）
毒蛇の窟宅洛陽の東、癩病深く懼る亨徹翁、紹濂は養叟正傳の子、學び得たり天衣佛日の風。（風を一に禪に作る。）

病輕く脈重きは㋷咸淳の禪、病重く脈輕きは㋦會昌の禪、中に就いて腐爛す養叟の輩、病脈並に損す今日の禪。

濂長老が鷲尾の新造の寺を賀す、以て癩病を訪ふ

癩病の脚跟毒氣生ず、殿堂新に造つて勢崢嶸、钁頭耕破す鷲峰の頂、荒草山前一莖無し。（一本、脚跟を脚痕に作り、耕破を畔破に作る。）

栴檀の佛寺利名の禪、公案腰に纏ふ十萬錢、滿目青山法眼の境、鷲峯の樵客㋸通玄を踏む。

鷲峯建立す大伽藍 普請して山を崩し又岩を碎く、五臟敗壞して膿血を成す、黄衣の癩肉臭汗衫。

妄に佛祖に參ず舊因緣、天道豈に㋾膻に逢着することを饒さんや、食淡く志潔し吾が自業、志姦く食美なる汝が家傳。

猢猻尾無くして人前に出づ、乃祖嘲を弄して天下偏し、棒を拈じ喝を下して送一送、始めて看る勾欄歌舞の禪。

好み、僧尼二十六萬五百人を沙汰して、會昌五年八月下旬勒して俗に歸らしむ」と。

㋸本朝高僧傳に曰く、「源の滿詮、妙雲院を洛東に建て、其の女通玄寺長老尼竺英、鈞旨を承け、額を養德と革む、以て考妣の香を奉ず。熙を請ふて之に主たらしむ、熙後之れを城北に移す」とある、蓋し之れを謂へるものか。

㋾臭し、生ぐさし。

大燈門下(ワ)單于の境、姦賊此の時法筵を開く、厚面無慚唯だ畜類、古今此の如くなる邪師無し。(邪を一に禪に作る。)

風流室に入る(ノ)苾蒭尼、因つて憶ふ慈明狹路の時、腸は斷つ纖々呈露の手、暗に小艷一章の詩を吟ず。

頤熙が禪話太だ新鮮、呈露して拳を開き又拳を出す、龍寶山中の惡知識、言詮の古則盡く虛傳。

果を得機に投じて多く人に敎ふ、青銅定價兩三緡、歌ふを休めよ亡國伊州の曲、榮衒の乾坤天寶の春。

伴を引き徒を集む幾瀬兒ぞ、面門眼上總べて眉無し、法中の姦黨白丁の漢、傳授師無うして話私有り。

頤來的々兒孫に付すに題す

(ヨ)頤卦名を題して食を貪り來る、會中の(タ)膾炙寵梅の如し、金を攫む手段機輪轉す、君子果然多く財を愛す。

人の鹽醬を贈るを謝す

胡亂天然三十年、狂雲が作略這般の禪、百味の飲食一(レ)楪の裏、淡飯粗茶正傳に屬す。(粗を一に麤に

(ワ)支那匈奴の君長の稱、廣大の義。
(ノ)比丘尼に同じ、佛四衆の一なり。
(ヨ)頤卦は六十四卦の內、山雷頤の卦、艮上震下、名字を打するなり。
(タ)膾はなます、炙は燒き肉、その旨きが如く、人の口に稱讃するをいふ。虛堂錄に「千古人口に膾炙す」と。
(レ)楪は簀(すのこ)をいふ。

作る。）

病中　二首

破戒の沙門八十年、自ら慚づ因果撥無の禪、病は過去因果の果を被る、今何を行じてか劫空の緣を謝せん。

美膳誰か具す一雙の魚、小艶に工夫日用虛し、婬色吟身頭上の雪、目前の荒草未だ曾て鋤かす。（目を一に山に作る。）

斷頭罪人に代る　二首

㋞六條河畔斷頭場、逼面に人を殺す三尺の鉾、伎窮り情盡きて魔途失す、空しく斷ゆ春閨夢裡の腸。

或人は眼を瞠り或は頭を低る、各是れ波旬の道流、多年の風月卽今の劍、大地山河滿目の愁。

羅漢婬坊に遊ぶ圖　二首

羅漢の出塵識情無し、婬坊の遊戲也た多情、那邊非か奚那邊是か、衲子の工夫魔佛の情。

出塵の羅漢佛地に遠かる、一たび婬坊に入つて大智を發す、深く笑ふ㋡文殊楞嚴を唱ふるを、失卻す少年風流の事。

㋤涅槃像　二首

㋞京都六條河原にて、古の刑場のありしところなり。
㋡曼殊尸利とも書く、略して文殊と書く、華嚴三聖の一、普賢と相對して釋尊の左側にあり、智慧門を司る。
㋤釋尊、跋提河畔沙羅雙樹の間

作佛披毛主賓無し、春愁二月涅槃の辰、有情異類五十二、混雜す紫磨金色の身。

頭上は北州脚下は南、㊉前三々と後三々と、乾坤に逼塞す釋迦の像、看來れば惠日の一伽藍。

熊野權現を嘲る

跡を三山に垂る榎本の頭、百由旬の瀑直に飛流し、室郡道ふことを休めよ馬進まずと、㋙徐福が精神物外に遊ぶ。

閑工夫、榮衒が徒を辱しむ

金襴の長老一生の望、衆を集めて參禪又上堂、樓子慈明何の作略ぞ、風流愛す可し美人の粧。

正工夫、久參の徒に示す

機輪轉ずる處實に能く幽なり、臨濟の正傳名利の謀、一枕の春風雞足の曉、三生の夜雨㋰馬嵬の秋。

洛下に昔紅欄。古洞の兩處有り、地獄と曰ひ、加世と曰ふ。又安聚坊の口、西の洞院有り、(聚を一に衆に作る。)諺に所謂小路なり。歌酒の

にて、涅槃に入り給ふさまを書きたる像、中央に釋尊、北面右脇して臥したまひ、諸大弟子五十二類の輩、皆其の周圍に集りて哀泣し、天上より摩耶夫人來りて、藥を投じ、沙羅樹は白く變じて鶴の如くなる樣子を、細密に圖表したるものとす。涅槃會を營む際に、是の畫幅をかけて供養するを例とす。

㊉前後彼此、共に無數量の意に須ふる語。

㋙秦の始皇、死を恐る、方士徐福をして東蓬萊に不老の藥を採るに遣はす、途に滄溟に浮び、其の行く所を知らず。

㋰唐玄宗の妃、楊貴妃、天寶の大亂に逢ひ、殺されたる馬嵬驛なり。

㋗關睢は詩の周南の篇名。「關々たる睢鳩は河の洲にあり、窈窕たる淑女は君子の好逑」云

客、此の處を過ぐるもの皆風流の淸事を爲すなり。今街坊の間、十家に四五は娼樓なり、淫風の盛、亡國に幾し。吁、㋒關雎の詩想ふ可き乎哉、嗟嘆するに足らず。故に二偈一詩を述べ、以て之れを詠歌すと云ふ。

頌に曰く

同居す牛馬犬と雞と、白晝の婚姻十字街、人は道ふ悉く是れ畜生道と、月は落つ㋼長安半夜の西。

佛露柱に交つて一に途を同じうす、邪法此の時扶くること得難し、榮衒の徒作家の漢に似たり、佛法胸襟に一點も無し。

詩に曰く

婬風家國喪亡の愁、君看よ雎鳩彼の洲に在り、例に隨つて宮娥主恩の夕、玉盃夜々幾春秋ぞ。

俗人婬坊門前に詩を詠じて歸る

樓子無心彼れ有心、詩に婬す詩客色何ぞ婬す、宿雨西に晴る小歌の暮、多情愛す可し門に倚つて吟ず。

云。」后妃、文王の德を悅樂して和諧せざるなく、又其の色に淫せず、愼固幽深にして恰も雎鳩の程よき別あるが如きに譬へたるものなり。

㋼李白の子夜吳歌に曰く「長安一片の月、萬戶衣を擣つの聲、秋風吹き盡さず、總べて是れ玉關の情、何れの日か胡虜を平げて、良人遠征を罷めん。」長安萬戶の壯丁が征戎の中にありて、空房を守れる婦人は、月下に衣を擣ちて寒衣を製することにいそしめり。子夜は東晉の女子の名なり、此の詩又關雎の意を得たり、世の放蕩の兒は、實に夢寐にも之れを思ふべきなり。

㋨相國寺は京都上京區今出川にあり、萬年山相國承天禪寺と號す。

㋔禮記の樂記に曰く、「鄭衞の

相國寺沙喝騷動

（ル）元來長久萬年山、葉は戰ぐ松杉風外の間、濟北の蔭涼宗風滅す、白拈手段活機關。（間を一に聞に作る。）

童謠　二首

童謠耳に逆ふ野村の謳、唱起す家々（オ）亡國の愁、十年春雨扶桑の涙、稼穡艱難廢址の秋。

皇城山野野皇城、雅を變じ風を變じて人平かならず、（ク）骼皮秋痩せて山骨露る、狂雲一片十年の情。（骼を一に體に作る。）

（ヤ）杜詩を看る　二首

古今の詩格舊精魂、江海飄零す亦主恩、仰いで虞舜と叫ぶ一生の涙、涙痕灑洒して乾坤を裹む。

涙愁ふ春雨又秋風、食頃も忘れ難し天子の宮、詩客名高し天寶の事、寒儒の忠義也た英雄。

婬色の人に示す

巫山雲雨夢中の神、君子猶ほ迷ふ況んや小人をや、（マ）風流の聖主馬嵬の涙、

音は亂世の音なり、慢に比し、桑間濮上の音は亡國の音なり。其の政は散じ、其の民は流す、上を誣ひ、私を行ひ、而して止むべからず」と。即ち其の鄙野の音を聞いて愁ふるなり。

（ク）骨及び皮をいふ、木葉脫落するをいふ。

（ヤ）杜甫の詩を看るなり、杜甫字は子美、少陵と號す、玄宗の朝に賦を奏す、帝之れを奇とし、集賢院に待詔せしむ、肅宗立ちて右拾遺に拜す、大曆五年耒陽に客として卒す、性放曠にして好んで天下の大事を論ず、忠君憂國の情詩賦にあらはる。唐人元稹云ふ、「詩人ありて以來未だ子美の如き者あらず」と。玄宗天寶年中安祿山叛し、后楊貴妃誅に逢ふ頃、亂をさけて江頭にあり、哀江頭を吟す、左に抄

懸鑑明々今日新なり。
濮上桑間昧音を唱ふ、風流年少寵尤も深し、世界三家村裡の客、重華識らず二妃の吟。
所愛の肉身飡食の忠、心肝生鐵一天の功、男兒の死處色何ぞ屈せん、惱亂す楊花甲帳の風。

會裡の僧に武具を與ふ

說禪學道本無能、亂世の英雄一錫の僧、覿面當機若し令を行せば、鐵團百億棒頭に崩れん。
道人の行脚又山居、江海の風流簑笠の漁、逆行の沙門三尺の劒、禪錄を看ずして軍書を讀む。

亂に因つて　二首　詩

請ふ看よ凶徒大いに籌を運すことを、近臣左右妄に優遊、㋘蕙帳畫屏歌吹底、衆人日夜醉ふて悠々たり。
忠臣の愁思功勳に在り、世上の汗淋君を識らず、儒雅十年情寂々、貴遊一夜醉ふて㋙醺々たり。

す。「少陵の野老聲を呑んで哭し、春日潛行す曲江の曲、江頭の宮殿千門を鎖す、細柳新蒲誰が爲に綠なる、憶ふ昔霓旌南苑に下りしとき、苑中の萬物顏色を生ず、昭陽殿裡第一の人、輦を同じうし君に隨ひ君側に侍す、輦前の才人弓箭を帶び、白馬嚼齧す黃金の勒、身を飜し天に向つて仰いで雲を射る、一箭正に墜ち雙飛翼、明眸皓齒今何んか在る、血汚の遊魂歸ることを得ず、清渭東流して劍閣深し、去住彼此消息なし、人生情あり淚臆を沾す、江水江花豈に終に極まらんや、黃昏胡騎塵城に滿つ、城南に往かんと欲すれば城北を忘る。」
㋮玄宗此の所に貴妃を失ふ、白樂天長恨歌に曰く「馬嵬坡下泥土の中、玉顏空しく死する所を見ず、君臣相顧みて盡く

會裡の俗徒に示す　㋙警策　詩

前車覆る處後車驚く、警策怠る時禍必ず生ず、半醉半醒夜遊の客、烏啼き月落ちて夜三更。(烏を一に鳥に作る。)

詩歌吟詠全功を失す、㋓天上人間軍陣の中、意舞醉歌して日を度るを休めよ、飛揚跋扈君が爲に雄。

亂に因りて坊城少納言に寄す　詩

當代の菅儒少納言、詩文の家業乾坤を動かす、英雄亂世に風月を好む、長劍大弓主恩に酬ゆ。

拔舌の罪を懺悔す

言鋒殺戮す幾多の人、偈を述べ詩を題して筆人を罵る、八裂七花舌頭の罪、黃泉免れ難し火車の人。

亂裡　二首

國危うして家必ず餘殃有り、佛界身を退く魔界の場、時に臨む殺活衲僧の令、君看よ忠臣松柏の霜。

獨坐頻に忙し㋢臘晦の心、誰人か忠義此の時深き、曉天一睡枕頭の恨、㋐

衣を沾す、東の方都門を望み馬に信せて歸る、歸來池苑皆舊による。」又曰く「夜半人なく私語の時、天に在りては比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と爲らん」と。一天萬乘の君にして、女色に耽つたがため、遂に破滅の悲運にあふ、況んや平人に於てをや、當に鑑すべきなり。

㋘錦帳などと同じ。

㋫醉ひ心地よきことなり。

㋙警覺策勵すること、坐禪の時睡魔の襲ふを警策し、修業精進を策勵するなり。

㋓天上に生ずるも人間に生ずるも、恰も軍陣中に居るやうなもので、油斷するととんだことが出來る。

㋢十二月三十一日の心、即ち怱怱なる心持ちをいふ。

㋐日出でて竿三本ほどの高さに

朝日三竿夢裡の身。（身を一に吟に作る。）

關東御上洛

虜軍萬騎已に東より來る、京洛の凱歌一曲催す、相坂の關門征駒の路、胡兒の性命馬蹄の埃。

婬坊の頌、以て得法の知識を辱しむ

話頭古則欺謾を長ず、日用腰を折つて空しく官に對す、榮衒世上の善知識、婬坊の兒女金襴を着く。

日用

日用の正工夫、弓を挽いて東胡を射る、佛を殺し祖を殺す令、波旬途を失却す。（一本、挽を引に作り、三四句を「佛魔混雜底、邪法竟に扶け難し」に作る。）

㋚祝聖

海内太平卽ち現前、清風明月碧雲の天、萬年七百高僧の行、看よ看よ天龍正覺の禪。（一本、卽を使に、僧を祖に、禪を前に作る。）

德政

上りたる時刻の意にして、卽ち午前八時頃日稍々上りてよりのこと。詩に曰く「日出でて三竿春霧消す」と。

㋚年分行事の一、月分行事の一。今上天皇陛下の聖壽無窮を祝禱する法要の稱なり、禪院にては毎月の朔望、又元旦、聖節の早晨などに、合山の大衆出頭して之れを嚴修す、香華、湯燭を今上の牌前に虔備し、同音に大悲呪、消災呪を諷誦し、維那、祝聖回向文を稱へて式を終ふ。

賊は元來家の貧しきを打せず、孤獨の財萬國の珍に非ず、道ふことを信ず禍は元福の復する所、青銅十萬靈神を失す。（「復する所」を一本「伏する所」に作る。）

亂裡工夫

毎朝高く叫んで甚だ忙々、敵を受けて機先八方に當る、觀法坐禪日を度ることを休めよ、但だ須らく勤めて跋扈飛揚すべし。（「甚だ」を一に「太だ」に作る。）

泉涌寺雲龍院、後小松の院廟前の菊

㊀袞龍錦袖碧雲の天、㊁叡信す宗門列祖の禪、生鐵鑄成す黃菊の意、秋香未だ老いず玉堦の前。（香を一に光に作る。）

日課

如法如說衲僧の眼、經誦讀誦百千返、三百六十日課の前、風雨雪月艶簡を吟ず。（「經誦」を一本「經咒」に作る。）

太平正工夫

天然胡亂の正工夫、昨日の聰明今日の愚、宇宙の陰晴變化に任す、一回斫額して天衢を望む。

亂世正工夫

丈夫須らく正見を具すべし、諸の妄想境に隨つて現ず、馬は問ふ良馬なりや無麼やと、人は答ふ此の刀

㊀秋の景と離れて雲上のことをいふ。

㊁後小松の院の臨濟の宗旨を御信仰遊ばされたるをいふ。

利劍と。

少欲知足　二首

千口も多からず富貴の愁、家貧しうして甚だ苦む一身も稠しと、涓水の鯉魚斗水の望、明朝臘扇廢河の流。（涓を一に漏に作る。）

果滿の羅漢も三毒有り、純一に少欲知足を願ふ、無衣の貧病相治むることを得たり、山堂一夜㋦促織を聞く。

惡行衆生の賛

惡を行ずる衆生惡と與に亡ぶ、善人の壽命は自然に長じ、十八七八箇は滅却す、長く祝す當今千歳昌なるを。（「長く祝す當今」を一に「今上帝皇」に作る。）

習心

一晝夜八億四千、念々不斷自ら現前、閻王は許さず詩の風味、夜々の吟魂雪月の天。

自戒

罪過彌天㋵純藏主、世に許す宗門賓中の主と、禪を說いて人に逼る詩格の工、無量劫來惡道の主。

愛念盟　二首

㋦こほろぎ、又ははたおりといふ。秋蟲。謝朓の句に「秋夜促織鳴く。」古諺に「促織鳴いて嬾婦驚く」と。

㋵一休自らいふなり。

婆子慈明老師に侍す、婚姻脚下紅絲を結ぶ、㊄驪山の春色三生の睡、千歲海棠の花一枝。
恩愛の紅塵誰人か掃はん、娘生の赤肉父子の道、㊅羅睺羅箇の歡喜丸、携へ來つて直に釋迦老に授く。

地獄　二首

十方世界蠢乾坤、水火寒溫人の命根、看よ看よ米穀閑田地、是れ衆生の地獄門。(田を一に用に作る。)

黃泉の境界幾多か勞す、劍は是れ樹頭山は是れ刀、㊆朝打三千暮八百、月前は獄卒眼前は牢。

冬夜螢火、和州紀州兩國の際、山野に充滿す、因つて禪詩二章、以て之れを祝すと云ふ。

螢火陽を爭ふ智と愚と、衆生の定業佛も扶け難し、一天の星斗皆北に朝す、帝業南方一點も無し。

滿山の螢火諸人看る、兇事南方也た太だ難、憐む可し貴賤共に自ら滅するを、廢北の秋風冬夜寒し。(「太だ難」を一に「大難」に作る。)

寒夜雪山の鳥を嘆ず

朝來の公案晚來吟ず、食を求め巢を忘じて前業深し、晝夜人々雪山の鳥、無間の苦痛月沈々。

㊄京兆府昭應縣、本新豐といふ、宮あり、驪山の下にあり、貞觀八年に置く、咸亨二年始めて溫泉宮と名づく、天寶六載溫泉宮を改めて華淸宮といふ、唐玄宗貴妃と共に幸する所。

㊅釋尊の實子、佛十大弟子の一、密行第一と稱す。

㊆朝打三千暮打八百、朝から晚まで打ち續くること、三千、八百、大數を現すのみ。

孤獨老人の多欲を嘆ず

千古多きこと無し富貴の時、青銅十萬阿誰にか讓る、必定後生は三惡道、老人何事ぞ前知せざる。

相對

二月涅槃寂滅の辰、一刀兩斷也た心身、不生不滅佛も得難し、㊅花約有無相對の春。（斷を一に段に作る。）

亂中の㊆大嘗會

當今聖代百王の蹤、玉體金剛平穩の容、風吹けども動せず五雲の月、雪壓せども摧け難し萬歲の松。

各見不動（一本「各見同じからざる偈、道心者と無道心者とに示す」に作る。）

水は流る㊇四念不同の心、佛界魔宮古今に亘る、寒窓の風雪梅花の月、酒客は盃を弄し詩客は吟ず。（「風雪梅花の月」を一に「雪月五更の燭」に作る。）

敬つて天子の堦下に上る　二首

財寶米錢朝敵の基、風流兒女相思ふこと莫れ、扶桑國裡安危の苦、傍に忠臣有りて心緒を亂す。

乾坤海內烟塵起る、昨夜東風四隣に逼る、禍は復す美人身上の事、榮華悔

㊅花咲き花落つるをいふ。

㊆天皇御即位の後、はじめて行はせらるゝ新嘗の祭、祭場を大嘗宮といひ、左右に悠紀、主基の兩殿を設け、豫め指定したる國郡より奉れる新穀を捧げ、天地神祇を祭られせ玉ふ。

㊇四念所、又は四念住ともいひ、三賢位のうち念處の位に於いて修する觀法。身念住、受

ゆ可し馬嵬の春。

善惡未だ曾て混ぜず、世に善を爲す者は、皆舜を朋とし、而して惡を爲す者は皆桀に黨するなり。雉は必ず鷹の爲に擊たれ、鼠は必ず猫の爲に咬まる、是れ皆天賦前定する所なり。一切衆生の佛に歸して、善にして而して生死の淪沒を免るる者も亦猶ほ玆の如し。因つて偈を作つて以て衆に示すと云ふ。(「如し」を一に「若し」に作る。)

鷹雉鼠猫元自然、威音劫來舊因緣、照し看る㋑華清殘月の曉、明皇の龜鑑馬嵬の前。

過現未誰人か了達す、惡人は沈淪し善者は脫す、風流愛す可し公案圓かなり、德山の棒兮臨濟の喝。

風流の脂粉又紅粧、等妙の如來斷腸を奈せん、知んぬ是れ馬嵬泉下の魄、離魂の倩女扶桑に謫せらる。

身心定まらず假と眞と、欲界の衆生苦辛に沈む、愁夢三生六十劫、劫空無色馬嵬の神。

君子の財

念住、心念住、法念住。吾人が淨、樂、我、常の四顚倒の妄見を起す對象は、身、受、心、法の四法なり、今此の妄見を破せんがために、能觀の知を以て身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと觀ず、別相念住位にては別別に之れを觀じ、總相念住位に於ては、すべて同一時に之れを觀ず。

㋑華清は驪山にある宮の名、唐の崔魯の華清宮の詩に曰く、「草は回磴を遮つて鳴鸞を絕す、雲樹深々として碧殿寒し、明月自ら來つて還た自ら去る、更に人の玉欄干に倚るなし」と。卽ち玄宗が貴妃の愛に溺れ、自ら天下を亂したる報の早きをいひて歎ぜし詩なり、明皇は玄宗皇帝をいふなり。

㋺斗は酒を酌む七杓の類なり、

詩人の財寶は是れ文章、儒雅の乾坤日月長し、窓外の梅花吟興の樂、腸は寒し雪月曉天の霜。

　貴人の財

龐老錢を棄つ誰か擧揚す、曾て㋺玉斗を擣くも亦何ぞ妨げん、庭に梅花有り窓に月有り、㋩鐵檠紙帳五更の霜。

　日旗地に落つるを嘆す

錦旗日照して龍蛇を動す、聖運春長うして國家を救ふ、雷と化して五逆の輩を㋥踢殺し、誓つて朝廷の爲に惡魔と作らん。

　亂に因つて

韓信昔年雲夢の殃、人心眞僞自然に彰る、安危定まらす倘の時節、人畜分ち難し荊棘の墻。

　美色㋭傾城

㋬幽王の上古今時に見る、一笑花顏烽火の姿、八熱八寒鬼窟裡、馬嵬辱井劫空の悲。

　山名㋣金吾は鞍馬毘沙門の化身

それた玉を以て作れるものをいふ。史記の項羽本紀に「玉斗一雙亞父に與へんと欲す」と。

㋩燈火の臺架をいふ。又食器にもいふ。地理に「朝鮮の民飲食するに籩豆を以てす。」師古の註に「竹を以てするを籩と曰ひ、木を以てするを豆と曰ふ、今の檠也」と。

㋥蹴殺すことをいふ。

㋭妖美なる女をいふ。詩の大雅に「哲夫は城を成し、哲婦は城を傾く」と。

㋬周の幽王、褒姒を愛す。褒姒は天下第一の美人なり、されど褒姒常に笑はず。當時天下、兵亂起る時は、所々に烽火を擧げ太鼓を打ちて兵を召す、褒姒之れを見て、始めて笑へり、幽王是れを喜び、事なきに數々烽火を擧ぐ、諸侯來るも寇なし、或時犬戎起り

鞍馬の多門赤面顏、利生接物人間に現ず、方便門を開く眞實の相、業は修羅に屬し名は山に屬す。

婦人多欲

美人寵を得美人の珍、珠玉青鞋脚下の塵、秋は滿つ驪山宮樹の月、榮華悔ゆ可し馬嵬の春。

㋠東坡　㋷山谷　㋦同隥

海內の文章汝が面前、誰か知る鍛煉獨り天然、說法上堂法堂の上、㋸如來禪と　㋾祖師禪と。

大應國師の贊　妙勝寺

大唐國裡禪師沒し、傳授明々たり東海の兒、一天の法窟妙勝寺、天澤の宗風更に誰か有る。

乙石御用人、妙勝寺の眞前に向ひ、髮置の賀頌（乙を一に弟に作り、用を一に料に作る。）

三歲の生年小女兒、終に吾が門の老比丘尼、壽算婆裙綿延の錦、孾孩髮を垂れて絲よりも白し。

て幽王の都を攻めけるに、烽火を揭ぐれども、例の烽火の習として援兵來らず、遂に都傾きて幽王亡びたり。

㋣金吾は支那武官を稱するの語なり、金吾は禦なり、金革を執りて以て非常を禦ぐなりと、故に「業は、修羅に屬し、名は山に屬す」るなり。

㋠蘇老泉の子なり、宋の中世の文學者、東林常總禪師に參じて心要を得、曾て玉泉皓禪師の機鋒觸るべからざるを聞き、之れを抑せんと擬し、卽ち微服して見えんことを求む、泉、尊官の名を問ふ、公曰く、「秤」と、乃ち「天下の長老を秤する底の秤」と、泉喝して曰く、「且く道へ、這の一喝重きこと多少ぞ。」公對ふるなし、此に於て師禮拜す、後金山を過ぐ、公の照容を寫すものあり、公戲れに題して曰

乙石御用人、知客の寺に歸るを待つ（乙を一に弟に作り、用を一に料に作る。）

知客の他行乙石の愁、歸來日數心頭に在り、斫額して天衢晴雨を望む、愛し看る昔日の摘星樓。

山徒に贈る

㋻顯密天台妙樂の途、分明に ㋕傳敎大師の徒、山猿叫落す西樓の月、七社の靈神帝都を鎭す。

不殺生戒

㋵李廣將軍一片の心、多年の ㋟石虎識情深し、人を殺す端的眼を眨せず、敢て忍ばんや燈前夜雨の吟。

不偸盜戒

鵝鳥珠を吞んで刑罰辛し、分別曲直僞と眞と、㋹翠巖老漢眉毛の話、保福豈に家裡の人に非ざらんや。（分別を一に分明に作る。）

く、「心は死灰の木に似たり、身は不繫の舟の如し、汝が平生の功業を云ふ、黃州惠州瓊州」と。後貶せられ、常州に卒す。

㋷黃山谷、儒家にして法を晦堂祖心に受く、一日晦堂に參す、堂曰く「公の誦する所の書中に兩句あり、仲尼の曰く『吾れを以て二三子に隱せりとなすか、吾汝に隱すこと無し』と。甚だ宗門のことゝ恰好なり、公之れを知るや、」谷曰く、「知らず。」時に晦堂、山谷と山行の次、天香、山に滿つ、堂問うて曰く「木犀の香を聞くや。」谷曰く「聞く。」堂曰く「吾汝に隱すことなし。」黃山谷言下に大悟すと。

㋦一幀の內に東坡、山谷兩氏の書若しくは畫を收むるをいふなり。

㋸圭峰宗密禪師の所判なる五種禪中の最上なるもの、具には如來淸淨禪と稱す、卽ち達磨正傳の禪に對する語にして、又は一行三昧と名づく、又眞如三昧ともいふ、是れ一切三昧の根本にして、よく念々修習せば、自修に漸く百千の三昧を得、達磨門下の輾々相傳するもの是れ此の禪なり。蓋し圭峰禪師の淸淨禪なるもの、未だ理に落ちて達磨正傳の禪を把捉するものに非ずとし、如來禪の語に對し、祖師禪の語を生ずるに至れり。傳燈仰山の章に、「汝只だ如來禪を得て、祖師禪を得ず」と。以て其の消息を知るべし。

㋾達磨大師正傳の禪、然れども只だこれ閑名目のみ、其の實如來祖師の別あるに非ざるは勿論なり。

㋻顯密は顯敎及び密敎をいふ、顯敎は其の言顯然として、能

不邪婬戒

婬坊の年少也た風流、㋞唼吻抱持狂客愁ふ、妄に㋡樗蒲を闘はしむ㋧李群玉、名は高し虞舜の㋤辟陽侯。

不妄語戒

一字不説道ふことを信ぜずや、大藏經卷已に落草、㋶漚和元來截流の機、怪しい哉父少にして而して子老ゆ。（少を一に小に作る。）

不飲酒戒

痛飲三盃未だ唇を濕さず、醉吟只だ慰す樂天が身、稜道者念氣の處に任す、宣明酒伴也た誰人ぞ。

㋰南園殘菊

晩菊東籬衰色の秋、南山且つ對して意悠々、三要三玄都べて識らず、淵明が吟興我が風流。

く衆生の機に應じて説きたる教法なり、密教は眞言宗の如き悠遠の教理を説く教をいふ。

㋕空海の高野を開くと相前後して、天台宗を比叡山延曆寺に開く。

㋵李廣は漢の武帝の時、右北平の太守に拜す、匈奴號して飛將軍といひ、之れを避く、景帝の時、驍騎將軍となる、後匈奴を擊ち道に迷ひて、長吏の責に遇ふ、廣遂に自殺す、老壯ために皆涙を流すと。

㋟漢書に李廣人と爲り、猨臂長く、其の善く射る亦天性なり、廣、出獵して艸中の石を見、以て虎と爲し、而して之れを射る、石に中り、矢を沒す、之れを見れば石なり、他日之れを射、終に入る能はずと。又楚の雄渠子、出でて寢石を見る、以て伏虎となし、將に去らんとして之れを射る、矢其の銜に沒す。或曰く、養由基寢石を見、以て兕となし、之れを射れば矢、羽を飲むとあるに類す。心に依りて境の變ずるをいふ。

㋹翠巖、夏末衆に示して曰く、「一夏以來兄弟の爲に説話す、看よ翠巖が眉毛在りや」と。後に保福曰く、「賊となる人、心虛る。」長慶曰く、「生ぜり。」雲門云く、「關」と。翠巖夏中過つて横説竪説す、法罰立ろに至り、眉毛脫落し了る、果して見得する者なし、心偸りて已に然り、況んや身行に於てをや。

㋞接吻、又はかまびすし等の意に用ふ。

㋡博奕なり、ばくちなり。晉書陶侃傳に、「樗蒲は牧猪奴の戲のみ」と、又一解に雙陸ともいふ。

㋒高野大師入定

生身大日覺王孫、出入神通活路門、迦葉惠持す長夜の魄、秋風春雨月黄昏。

三毒

貪嗔の根本自ら痴愚、人我無明名利の徒、一箇無心の閑道者、近年林下一人無し。

不殺生戒

全體作用鬼眼を迸らしむ、勝負の修羅英雄の念、㋼望帝一聲月三更、殺人刀と活人劍と。

不邪婬戒　三首

痛飲誰が家の樓上の謳ぞ、少年の一曲心頭を亂る、阿難逆行婬坊の曉、妙解の方便殘月の秋。

逆行の慈明婆子が身、紅絲脚下婚姻を結ぶ、一曲樓頭線珠の笛、憐む可し昔日趙王の輪。（結を一に絆に作る。）

沙門何事ぞ邪婬を行ず、血氣識情人我深し、淫犯若し能く情識を折らば、

㋧字は文山、潯陽の人、詩をよくす、大中間、弘文閣校書郎を授く、李群玉集あり。

㋤晉の陽陵國侯、水に溺れ死し、大海の神となる、常に風波を起して舟を覆すと。淮南子に「武王紂を伐つ、孟津を渡る、陽侯の波、流に逆ふて撃つ」とあり。其の溺るゝ恐るべきをいふか。

㋶泡沫に同じ。

㋰陶淵明の詩に「菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る」と。

㋒空海弘法大師なり、讃州多度郡の人、延暦二十三年遣唐使と共に唐に入る、惠果阿闍梨によつて眞言の密法を傳へて歸る、承和二年春三月、金剛峰寺に於て、彌勒寶號を稱へて二十一日結跏趺坐し、毘盧印を結び、泊然として氣絕す。

乾坤忽ち變じて黄金と作らん。(若を一に者に作る。)

自讃毀他戒　三首

魔王の眷屬沒商量、得失是非幾斷腸、(ノ)前他後我如來の願、前後の工夫三會長し。

五逆聞雷臨濟の訣、大慈大悲太だ親切、活人劍兮殺人刀、人を汚さんと欲して滿口に血を含む。

誰と共にか正に歸し邪を破ることを修めん、若し情識に非ずんば又何の過ぞ、這般の作略子細に看れば、座主の見知還つて作家。(一本、「坐主の見知還つて作處」に作る。)

誹謗(オ)三寶戒

杜撰の飯袋惡禪和、(ク)壑に塞り溝に滿ちて國家を亡ぼす、歸依佛法僧の檀越、閑に看る世間殘照の斜なるを。

人境懷古

境は無心なり(ヤ)燈籠露柱、人は辨別す珠玉塊土、一夜五十年前の吟、青塚の殘月巫山の雨。

(マ)兩片皮復た一具骨、烏蟲馬牛更に魔佛、混沌未分暗昏々、雲月は知んぬ誰が爲の風物ぞ。

倭國譬喩を以て實と作す

(ホ)望帝は蜀魂のこと、杜鵑をいふなり。

(ノ)自己渡らんとすれば、先づ人を渡せよの意なり。

(オ)佛法僧の三寶をいふ。

(ク)惡禪師の多きことをいふ。

(ヤ)古佛露柱に交はるといふに同じ。

(マ)兩片皮は口をいふなり。

勘辨邪に入つて毒氣深し、元君子に非ず小人の心、暗に譬喩を認めて實會を作す、苔衣雲帶樂天が吟。

今時日用誰人か道ふ、佛祖を超越す是れ野老、這般の輩法中の畜生、胸襟愚にして荒草を鋤かず。

異類中行

異類馬牛中行の途、㋘洞曹潙仰正工夫、愚昧の學者錯つて領解す、看來れば正に是れ畜生の徒。

井

高下互に看る氷輪を打するを、衲僧轆々機輪を轉ず、安禪出定清華の曉、汲み盡す天邊月一輪。（氷を一に水に作る。）

㋗西江を汲み盡して公案圓かなり、工夫管せず深泉に溺るゝことを、寸繩を借らず千尺の底　西來の祖意爲人の禪。

山居

孤峯頂上出身の途、十字街頭向背の衢、空しく聞く夜々天涯の雁、㋖鄉信の封書一字も無し。

榮衒の徒に示す

人家の男女魔魅の禪、室内に徒を招いで玄を悟らしむ、近代癲人の㋓頤養

㋘洞曹は曹洞をいふ、詩の平仄により字を代へたるのみ。

㋗龐蘊居士、馬祖に云ふて曰く「萬法と侶たらざる者、これ什麼人ぞ。」祖曰く「汝が口に西江の水を吸盡するを待つて、汝に向つて道はん」と。居士言下に大悟す、此の意をとるたり。

㋖昔漢の蘇武、雁の足に書をつけて故國に放つ、時の昭皇帝

叟、彌天の罪過獨り天然。
譬を認めて實と作す（譬を一に喩に作る。）

野老劫來日用今、私車の公案晴陰を誤る、昨夜窓を打つ零落の葉、蕭々として聽いて雨聲の吟を作す。

山中に藥圃を開く

錢を要め藥を賣つて琴を修めず、度世の工夫貪欲深し、山堂の夜雨風流の榻、自ら絶つ松風閑道の吟。

邪婬僧に示す

銀燭畫屏殘月の曉、錦茵甲帳落花の春、生身若し火坑に墮在せば、花顏玉貌也た何人ぞ。

少年の道心老來失す

（テ）十年前大道心、來生未だ隔てず已に今を忘ず、朝に得て夕に死す立地佛、一旦心を廻らせば百煉の金。（廻を一に依に作る。）悟徹を失卻して總べて閑事、去劫來劫又此の如し、金鍮正邪佛も分ち難し、聞說らく佛魔一紙を隔つ。

の上林苑に幸ありし時、雁の足に文の付きたる、帝の傍に下り來ふ、之を取つて見、蘇武の書の細々しき誠忠の程、伺はさせられて、やがて歸國叶ひ、元の官に復しけりと。故に音信を一に雁書ともいひ、そのむかしを偲ぶなり。

㊁宗顧養叟禪師をいふ、一休自ら榮衒を標し、其の罪を謝するなり。

㋢黃檗禪師參學の頃、鹽官齊安國師の會下に在つて首座となる、時に宣宗皇帝未だ位に即かず、甥の武宗に逐はれ、香嚴に就き沙彌となり、鹽官の會下に在りて書記となり、黃檗と連單なりき。一日黃檗佛殿にありて禮拜す、書記卽ち問ふ、「佛に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、長老禮を用ひて何か求めせん」と。黃檗乃ち書記に答

㋢黄檗佛を禮するに題して、榮衒の徒に示す　二首

佛を禮す家風眞の作家、作家汝榮衒の諸訛、食を奪ひ牛を驅つて伎倆を成す、米錢の名利他を賺過す。

閻老面前尤も苦なる哉、飯錢今日急に還し來る、話頭は古則商量の價、棒喝は邪師度世の財。

臨濟曹洞座主各末後の句　二首

大死底の人心塊土、元來是れ燈籠露柱、變易分段只だ任他あれ、新月黄昏五更の雨。（變易を一に編譯に作る。）

平生の信施涅槃堂、暮に天台に往き南岳は朝、世間に公道たるは只だ病苦、貴人身上も曾て饒さず。（一本、涅槃堂を涅槃消に作り、只だを唯だに作る。）

慧日憎愛有り

一段多情栗棘の愁、㋐回光返照心頭を晦す、工夫長養怠ることを得ず、動靜起居春又秋。

㋚法然上人を賛す

法然傳へ聞く活如來、安坐す蓮華上品臺、智者をして尼入道の如くならし

ふ「佛に著いて求めず、法に著いて求めず、常に禮すること是の事の如し」といひをはりて、書記を一掌す、書記曰く「大麤生」と。檗曰く「這裏是れ什麼の所在ぞ、細と解き麤と說く。」更に亦一掌す、求めずして自然に至るの道なり。

㋐自己の光明を回らし、返つて自己の脚下を照著ならしむる意、自己反省。照顧脚下に同じ。道元禪師の普觀坐禪儀に曰く「須らく言を尋ね、語を逐ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退步を學すべし。」

㋚源空、圓光大師と諡す、年十五、功德院皇圓阿闍梨について法を修む、建曆二年正月二十五日、念佛稱名裡に睡るが如くに寂す。

㋖伎倆と口吻と並行せざるをい

む、一枚の起請最も奇なる哉。

作家　二首

臨濟德山作家に非ず、棒頭喝下師の誇るに任す、笑ふに堪へたり(キ)伎倆と鼻孔と、照し看る高低日影の斜なるを。(低を一に昇に作る。)

忍辱仙人常に不輕、道心は須らく是れ凡情を盡すべし、恁麼白淨眞の衲子、勤む可し觀法又看經。

(ユ)傀儡

抽牽は即ち主人公、地水合成して火風に隨ふ、一曲の勾欄曲終つて後、本然大地忽ち空と爲る。

洛陽火後

寒灰充塞す(メ)洛陽城、二月花に和して春草生ず、黄金の宮殿依然として在り、勅下つて千秋萬國淸し。

文章を嘲る

人は具ふ畜生牛馬の愚、詩人は元地獄の工夫、我慢邪慢情識の苦、嘆ずべし波旬親しく途を得ることを。

ふ、日影斜なれば低きも高き影に似たり、中天に沖する時、正に作家の襟度を見るべきなり、僞物は御免で御座るといふ意。

(ユ)人形使なり、古人謂ふ「人世は本一傀儡なり、操舒自在一絲亂れず、根蒂手にあり、其の場中に於て翻出す」と、然して一曲終つて老幼男女一時に空となる、又人生一夢の如し。

(メ)唐の都する所、後唐の滅ぶると共に、其の池塘竹樹は兵車に蹂躙せられ、高亭大樹は烟火の爲に焚燎し、化して灰燼となる。

傑作の詩文金玉の聲、言々句々諸人驚く、㊁閻王豈に雅頌の妙を許さんや、鐵棒恐る可し鬼眼睛。（一本「諸人」を「詩人」に作り、「恐る可し」を「應に惶るべし」に作る。）

　元本無明（一本、本を來に作る。）

法塵習着想思を奈せん、㊂李杜蘇黃が音律の詩、弓影客盃元字脚、生身地獄に入る矢の如し。

　譬喩を破して病僧に示す

㊃弓影膏肓酒中に在り、毒蛇影落つ客盃の弓、楓林の黃葉蜀江の錦、染め得たり心頭滿目の紅。

　利欲名を忘る

利欲の農夫商女の情、交を絶つ美譽と芳聲と、梅花雪月我が事に非ず、米錢を貪着して名を忘卻す。（「我が事に非ず」を一に「昔年の事」に作る。）

賣弄深く藏す貪欲の心、心中密々に黃金を要む、詩情禪味風流の譽、秋思春愁雲雨の吟。

　色に耽つて德を喪す

酒作詩僧久しく交を絶つ、獨吟月影松梢に滿つ、㊄楚臺の愁夢是れ我が業、杜牧味淸し婬色の嘲。（一

㊁雅頌の妙を以て、閻王の苦を免れんや。

㊂李白、杜甫、蘇東坡、黃山谷をいふか。

㊃病膏肓に入れば治せずと。盃中の弓影、毒蛇と觀ずる、已に迷妄の裡にあり、楓林の紅葉も見樣にて蜀江の錦に同じ、病は心からである、之れを無形に治せば、効有形に現はる。

㊄漢書に、楚は章華の臺を起して黎民散ずと、即ち其の女色に耽るをいふなり。

本、愁を秋に作り、味を昧に作る。）

偶作

患は是れ衆生良藥の訣、祖病機に當る臨濟の喝、琴臺の暮雲茂陵の吟、五十年來相如が渴。
我れ唯だ一息出入有り、㊅日面月面左右を忘ず、釋迦老師大覺尊、祖病の治得牛乳を用ふ。
室内の閑吟一盞の燈、自然に道無し箇の一僧、愁人春興猶は寒夜、袖裡の花牋梅蕚の氷。

頌

暫時此の地に精魂を弄す、臨濟の後身祖門を興す、美譽芳聲世間の外、㊆五雲天上月林の孫。

元日官軍の凶徒を破るを賀す

元正先づ豪を破る、處々凱歌高し、百萬朝廷の卒、一毛を損する能はず。

偶作

慧命微々として一絲を懸く、分明なり臨濟正傳の師、識情名利山林の客、夜々の秋風枕上に吹く。（客を一に害に作る。）
睡裡の海棠春夢の秋、明皇の離思獨り悠々、三千の宮女情慰し難し、更に馬嵬泉下の遊を逐ふ。（逐ふを一本に遂ぐに作る。）

㊅馬祖、病中のこと前に見ゆ。
㊆五雲は五色の雲、青黄赤白黑の雲をいふ。

懷古

愛念愛思胸次を苦む、詩文忘卻して一字無し、唯だ悟道ありて道心無し、今日猶ほ愁ふ生死に沈まんことを。

十年愛に溺れて文章を失す、是れ行に非ず天然卽ち忘ず、㋑翰墨再び論ず近年の事、輪廻斷じ盡す隔生の腸。（非を一に不に作る。）

警策

苦なる哉色愛太だ深き時、忽ち忘卻す文章と詩と、前知せず是れ自然の福、猶ほ喜ぶ風音の所思を慰するを。

夢は熟す巫山夜々の心、蘇黃李杜好詩の吟、若し淫欲を將つて風雅に換へば、價は是れ無量萬兩の金。

㋺迷悟

無始無終我が一心、不成佛の性本來の心、本來成佛佛の妄悟、衆生本來迷道の心。

點頭石に題して㋩虎丘祖師を訝る

道ふことを信せず石點頭すと、若し點頭せば石の流に非ず、石靈有らば是れ妖怪、吾が祖師の老虎丘。

㋑筆蹟に同じ、宋史に「特に翰墨に妙に、沈著飛翥、王獻の筆意を得たり」とあり。
㋺迷悟、凡聖、佛衆生不二を說くなり。
㋩南嶽十五世の孫、圓悟克勤の法嗣、大慧宗杲の法眷なり、克勤下の駿足なり。

成佛を行せず

天然の釋迦彌勒、六々元來三十六、達磨九年佛六年、成佛作祖精力を盡す。

書籍を燒く僧に示す

㋩始皇自然に邪正を辨ず、波旬の餘殃掌を看るが如し、看よ看よ㋥劫火洞然の時、書籍金剛不壞の性。

樹下石上の茅廬、詩文疏鈔同居す、囊中の遺藁を焚かんと欲せば、先づ須らく腹中の書を忘るべし。（遺を一に道に作る。）

名に耽る僧に示す

腹中に地獄成る、無量劫の識情、野火燒けども盡きず、春風草又生ず。

南北東西量る可からず、扶桑粟散國の封疆、名に耽る愚鈍畜生道、望帝一聲聽いて斷腸。

㋭金烏玉兎籠中を照す、百億の須彌碧空に逼る、香水無邊四大海、畜生無始又無終。

弄業文筆の僧に示す

苦樂愛憎影と身と、寒溫喜怒境と人と、㋬平生の吟興黄泉の路、地獄の

㋩秦の始皇、丞相李斯の言を用ひて、醫藥卜筮種樹に關する書の外、皆之れを集めて焚き、然して天下の民を愚にして、上の政を議するなからしめたり、然れども遂に波旬の餘殃掌を返すが如く、萬々代と豫想したりし帝業も、項羽が一火の爲に東籬の春雪の如く消え失せぬ。

㋥僧、大隨法眞禪師に問ふ、「劫火洞然として大千俱に壞す、這箇壞か不壞か。」隨曰く、「壞」と。此の世界の滅する時、大火ありて、壞する時をいふ、これを又臨命終の時に

門前桃李の春。

戰死兵を弔す

赤面の修羅血氣繁し、㊤惡聲震動して乾坤を破る、鬪爭負くる時頭腦裂く、
無量億劫の舊精魂。（爭を一に諍に作る。）

偶作

我れ本來迷道の衆生、愚迷深き故に迷ふことを知らず、縱ひ悟る無しと雖も若し道有らば、佛果天然立地に成らん。

心は萬境に隨つて轉ず

今日佛心猶ほ未だ生せず、衆生界地獄先づ成る、萬機萬境皆情識、轉處能く幽なり劍戟城。

佛魔一紙

聖凡萬里鄉關を隔つ、淸淨の沙門塵事の間、殘雪殘梅窓外の月、吟中猶ほ劍樹刀山のごとし。

婬欲を以て詩文に換ふ

衆寮及第す大雄尊、著述の佳名我が命根、愁夢未だ修せず雲雨の約、君恩猶ほ喜ぶ吟魂を費すことな

頌

比す、眞の書籍は火位では燒けぬ。
㊄金烏は日、玉兎は月の異名。
㊅平生の吟興は黃泉に行く道の樣で、地獄の門前迄は桃李の春である樣で[illegible]、定所に行けば地獄の本然が現じて、牛頭馬頭の苦に逢ふこと必然なりと。
㊤大聲叱呼、乾坤を裂く、よし一頁血に塗るとも其の精魂永劫滅せず、照々として護國の鬼となる。

萬端を忘卻して詩未だ忘せず、半生半死涅槃堂、黃泉路上此の吟興、閻老宮前後悔の腸。

妙莊嚴王品を看る

妙莊嚴昔日の因緣、瞎禿の道光我が前に輝く、閻老は吟ぜず玉階の月、黃泉は後悔碧雲の天。

常不輕菩薩を禮す

記得す昔年の常不輕、惶るべし血氣衆生の情、看よ看よ火宅脚跟下、滿目無間獄の大城。(跟を一に痕に作る。)

忍辱仙人

須らく成ずべし㋠忍辱波羅密、是れ如來の甚深秘密、心火燒盡す菩提の根、阿修羅王佛日を滅す。

圜悟大病

涅槃堂の裡言詮を絶す、棒喝機關法座の禪、睡裡の花顏猶ほ醉眼のごとし、春風腸を斷つ海棠の前。

巫山夜々夢驚き難し、艶簡詩を題して鐵檠に對す、只だ檀郞が爲に小玉を呼ぶ、風流愛すべし美人の情。

狹路の慈明色欲の婬、㋷庭前の柏樹祖師の心、惡魔臨濟正傳の境、雲暗う

㋠金剛經に曰く、「須菩提、忍辱波羅密は如來忍辱波羅密に非らずと說く、何を以ての故に須菩提、我れ昔歌利王の爲に身體を割截せらるゝが如き、我れ其の時に於て、我相も無く、人相もなく、衆生相もなく、壽者相もなし」と。畢竟空、我、人なし、誰か加へ誰か忍ばん、故に又非忍辱波羅密といふ。

㋷僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來の意。」州曰く、「庭前の柏樹子」と。

㋦月の異名。淮南子に、「羿、不

して㋦姮娥玉簪を落す。
孃生佛果已に圓成、大病苦中識情無し、小艶詩情人會せず、雞聲茅店月三更。

宗祐老僧を弔す

宗祐僧牛誰が面門ぞ、本來の心乾坤に逼塞す、獨り眞前に向つて謹んで命を乞ふ、要須す祐老が幽魂を弔せんことを。

宗祐老僧を弔する頌の韻を和す

或は僧形と成り或は馬牛、曹溪の滴水百川の流、南山の吟興東籬の菊、花は綻ぶ三玄三要の秋。

江口の美人勾欄の曲に題す

見色聞聲吟興長し、明心悟道沒商量、愁人は識らず㋸普賢の境、樽前に歌吹して總べて斷腸。（一本、三四句を「愁人識らず普賢の處、洞山の三頓德山の禪」に作る。）

㋾泉涌寺の僧棒を行す

八稜八尺長天に倚る、拈起して秋山が面前に向ふ、衲子機に當つて手を拱く處、洞山の三頓德山の棒。

死の藥を西王母に請ふ、姮娥竊みて以て月に奔る」と。姮娥は羿の妻なり、奔りて月の精となると。

㋸釋迦の右の脇士にして、慈悲を司り、身は月色のごとく、右手に金剛杵を持し、左手に金剛鈴を執り、五佛の寶冠を頂き、六牙の白象に乘る、利他大慈悲の行を願とし給ふ故、大行普賢菩薩ともいふ。

㋾一本此の一首なくして、別に「南都律僧の殺人刀」と題して「吹毛匣を出づれば機輪を轉す、坐斷す祖門三要津、持戒律僧の活手段、太平の天下波旬沒し」とあり。

偶作

餓鬼苦多し也た畜生、人家魔魅凡情を長ず、飢渇病苦㋻五噎の患、邪師の知識野狐精。

鳩鹿狐懺悔

㋕麋鹿の生涯獝狘の愁、鳩は婬欲に因つて心頭を苦む、四時愕き難し此の愁夢、一枕の清風夜々の秋。
(清を一に西に作る。)

㋵除夜

金吾除夜に山名を殺す、此れより黄泉幾路程、太平の天子東西穩、九五青雲客星無し。(殺を一に死に作る。)

圓相

誰か參ず㋟潙仰一宗の禪、圓頂の沙門心豈に圓ならん、剃頭の外道情識を長ず、定めて魔王と惡縁を結ばん。
生死輪廻恰も環に似たり、人々這の末後の牢關、寸歩移さず脚跟下、生身二鐵圍山に墮す。(脚跟下を一に脚痕不に作る。)
圓成公案風流を愛す、逆行の機關潙仰の籌、愁殺す樽前夜遊の客、美人一曲玉樓の謳。

佛祖を禮し、福力を禱る僧に示す

㋻噎は咽喉ふさがる、又はむせぶをいふ。
㋕麋は鹿の大なるものなり、「なれしか」ともいふ。
㋵十二月三十一日、舊きとしを送り、新しき年を迎ふるなり、故に除夜といふ。
㋟五家七宗の一、潙山靈祐及び其の法嗣仰山慧寂によりて鼓吹せられたる禪風なり。

㋹羇客恨多し天地人、愚なる哉鬼窟の舊精神、元來諸法緣に因つて起る、風月沈吟一箇の貧。(因を一に從に作る。)

食籍

飯緣食籍聊か茶湯、竹は菊籬を縛し梅墻を補ふ、人間の世諦盡く餓死、地獄遠離して安樂長し。

近侍の美妾に寄す

淫亂天然少年を愛す、風流の淸宴花前に對す、肥えたることは玉環に似たり瘦せたるは飛燕、交を絕つ臨濟正傳の禪。

僧の行脚を送る

參禪學道玄を扣く人、世界の蒲鞋脚下の塵、㋞象骨の老師三九の旨、常に飯頭と成つて心身を苦む。

桃花を見る圖

見處風流悟道の心、㋡桃花の一朶價千金、瑤池の㋧王母春風の面、我れは約す愁人雲雨の吟。

陣を開く㋤玄沙の法戰場、宗門の議論老禪の場、衲僧遊戲諸三昧、拄杖腰包桃李の場。

㋹旅客、羇旅の客に同じ、卽ち羇絆せられて旅にある客をいふ。

㋞雪峰義存禪師、三度、投子に到り、九度洞山に上りて、參學甚だ逼むるも、緣遂に德山に契ひ、其の法を嗣承す。善知識を求むるに汲々たるをいふ。

㋡靈雲桃花を見て悟道するに因りてしかいふ。

㋧西王母、漢の元封元年、武帝殿に降り、蟠桃七枚を帝に進めて、自ら其の二を喰ふ、帝其の核を留めんとす、母云く「此の桃世間有る所にあらず、三千年一實のみ」と。

㋤玄沙師備禪師なり。

香嚴擊竹

晝に對して忽然情識を盡す、道人の鬼鑑太だ分明、娘生佛南陽の境を見る、腸を斷つ黄陵夜雨の聲。
苔幕を携へ來つて風塵を動す、看よ看よ聞聲悟道新なり、半夜千竿脩竹の雨、南陽塔下精神を弄す。
久しく響く香巖一擊の聲、憐むべし悟道佳名を發するを、蕭々として耳に逆ふ竹扉の雨、滴盡す南陽塔下の情。

(ラ)普明國師、百丈大智禪師の法を破る

夏を破す文殊宗旨の勳、衲僧の三昧(ム)商君に似たり、祖師大用現前の境、南嶽巫山一片の雲。

靈山徹翁和尚百年忌

僧は運んで恩に酬ゆ妙勝の薪、靈山昔日涅槃の辰、二千四百年前の境、梅雨紅を流す五月の春。
癩兒伴を牽いて人前に出づ、人家を魔魅して常に禪を説く、龍寶の封疆幸に滅却す、靈山の記莂瞎驢邊。

(ノ)陳蒲鞋　八首

老禪本鐵眼銅睛、是れ(オ)北堂慈愛の情にあらず、天下の衲僧脚跟下、宗門の潤色綠蒲青し。(跟を一に痕に作る。)

(ラ)妙葩、字は春屋、夢窓國師の法嗣、萬年山相國寺の開山なり。

(ム)衛鞅、刑名の學を以て秦の孝公に仕ふ。

(ノ)蒲鞋は便所の草履をいふ、蒲の葉、又は藁にて製したるものなり。黄檗希運禪師の法嗣なる睦州道蹤禪師、嘗て自ら草履を製し、道路に棄て以て行人に便ぜしといふ、俗姓

唯だ宗門零落の愁有り、錯り來る末法幾禪流、春風桃李吟に酒無し、尊宿の榮華蒲葉の秋。

黄衣の尊宿事如何、是れ當機手に信せて拏ふにあらず、三家村裏野老の業、棒喝の商量豈に作家ならん。（一本、二三四句を「作略猶は手に信せて拏ふるが如し、天下の衲僧師を識るや否や、岩頭船子風簑を着く」に作る。）

陳氏なる故に、時人呼んで陳蒲鞋といふ。
㊟母の居る所、故に母の別稱とす。

元來黄檗下の尊、臨濟師兄論を用ひず、佛法南方今地に落つ、北堂寂寞として吟魂を苦む。

眞正の工夫變通に任す、達磨建立す佛心宗、雲南山に起れば北山は雨、夜來吹き過ぐ樹頭の風。

笑ふに堪へたり米山米錢無し、誰か參ず尊宿織蒲の禪、衆生五欲八風起る、看よ看よ正邪今現前。

道を說き禪を談じて利名を長ず、工夫は亂裡に愁城を築く、門閭空しく折る㊟韶陽の脚、折り得たり江湖門弟の情。

米無うして米山名の下空し、宗門の玄要老禪翁、七寶莊嚴の富貴、平生氷雪又寒風。

歇林紹休侍者、攸を相し居を搆へ、扁して傳正と曰ふ、因つて偈を作り、以て證と爲すと云ふ

宗門滅卻す法筵開く、狹路の慈明顚倒し來る、墻外は自然樵客の迹、風流愛す可し斷崖の梅。

再來隔生卽忘

講經の大士喚んで誰とか爲す、彌勒當來の導師、爐鞴鈍鐵生鐵を出す、利劍鈍刀鐵知らず。

自然外道

大道廢る時人道立つ、智慧を離出して義深く入る、管絃歌吹人倫の能、風雨は世間之音律。
聰明の外道本無知、精進道心幾時をか期せん、天然釋迦彌勒無し、萬卷の書經一首の詩。

地獄

三界無安、猶ほ火宅の如し、㋔箇の主人公、瑞岩應諾す。

岩頭和尚

名は風流面は蠻胡、胡鬚は黑く也た赤鬚、舌頭は文殊に絶勝し、脚下は㋗道儒を踏斷す、天下の衲僧痴愚、邪法而今扶け難し、象骨老師の小巫、臨濟渡子同途、着々樣を作し模を作す、頭々細に入り粗に入る、棹を横へて江湖を一撥す、江湖議論區々たり。

確頌に曰く

世間種々〳〵㋳豁公の圖、道伴知音一箇も無し、夜雨蓬窓江海の燭、宗門の零落工夫を盡す。

學林宗參庵主水葬

參禪學道閑忽々、六十年來變通に任す、流水千江機輪轉ず、㋮閻浮樹下月弓の如し。

㋑雲門文偃禪師なり。
㋔瑞岩師彥禪師、磐石に坐して終日愚の如し、毎に自ら主人公と喚ぶ、復た應諾して乃ち曰く、「惺々著」と、「他後、人の謾を受くること勿れ」と、此の奇行を以て一則の公案となすなり。
㋗老子の說ける虛無恬淡の學及び儒教をいふ。
㋳岩頭全豁禪師をいふ。
㋮印度の所在にある喬木にして、四五月頃花開き、深紫色の果を結ぶ。閻浮提州の北方に産す。

圜悟大師投機の頌の後に題す

新に題す小艶一章の詩、詩句の工夫誰に說向せん、殘生白髮猶ほ色に婬す、鬼眼閻魔是非を決せん。

四睡の圖

凡聖同居何似生、披毛作佛又た分明、今宵極睡淸風の枕、空劫以來松に聲無し。

運庵松源の衣を還して頂相を留む。

這の三轉痛處の針錐、看よ看よ宗門何裡の機、爭奈せん石溪肩上の土、脫㋕屣を拾ひ來つて傳衣と號す。

弟子癖

臨濟大人の禪に參じてより、元字脚頭心念の前、即今若し我が門の客と作らば、野老の風流美少年。

自贊

分明に畫き出す㋷許渾が圖、吟じて徑山天澤の鬚を撚る、譽を嗜み名を求めて利を愛せず、風流寂莫たり一寒儒。

臨濟曹洞の善知識貪欲熾盛(貪を一に貧に作る。)

米錢膝下露堂々、辛苦沈淪す萬劫の腸、賊の智妨げず君子に過ぎたり、德山臨濟沒商量。

㋕屣はわらぐつ、草履の類なり。

㋷唐の許渾が詩に曰く、「高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日の少年今白頭」と。蓋し此の意によるか。

癖

臨濟德山棒喝の禪、睦州の蒲葉蓋公の船、左傳蠟屐一時に忘じて、是れ和嶠にあらず我れは錢を愛す。
（忘を一に志に作る。）

㊀東坡像

竺土の釋迦文殊師、即今蘇軾更に看よ誰ぞ、黃龍の禪味舌頭の上、萬象森羅文と詩と。（殊を一に老に作る。）

偶作

臨濟の門派誰か正傳　風流愛すべし少年の前、濁醪一盞詩千首、自ら笑ふ禪僧禪を識らず。

抹香を嫌ふ

作家の手段誰か商量、道を說き禪を談じて舌更に長し、純老天然殊勝を惡む、暗に鼻孔を顰む佛前の香。

病僧に㊁五辛を與ふ

病僧の大苦傷風を發す、死脈頻々として命終らんと欲す、如來の新病牛乳を用ふ、忌む莫れ凡身藥草の葱。

㊀蘇老泉の子なり、字は子瞻、名は軾、東林常總禪師に參じて心要を得。

㊁大蒜、茖葱、蘭葱、興渠といひ、又は蒜薤・韮、葱、興渠なりといふ。楞伽經に「一切葱、薤、韮蒜、臭穢不淨、能く聖道を障へ、亦世間淨處を障ふ、何に況んや佛の淨土をや」と。

久參の徒に示す

看經看教無間の業、應庵但だ許す白淨業、參禪學道閑話頭、懼るべし身口意の三業。

薄氷

但だ江海薄氷の池を看て、人々身上の危を管せず、憐むべし極苦目前に急なり、迷道の衆生終に知らず。(身を一に心に作る。)

金春座者の歌

唱へ得たり雲門王老の禪、朝には東土に遊び暮には西天、震旦の徑山上堂の後、(一)建仁に鼓を撃つ法堂の前。(東土を一に東上に作る。)

岐岳和尙龍寶山住院の時、御前喝食を請ひ、看雲亭に於て夜々酒宴す。因に一休和尙相看す、岐岳、一休和尙に問うて曰く、「汝、老僧が境界に於て知る耶知らずや。」答へて曰く、「知る。」問うて曰く、「試に擧せよ看ん。」答へて曰く、「茂陵多病の後、猶ほ(二)卓文君を愛するがごとし。」岳、大笑絶倒して、後に隨つて打つて曰く、「請ふ老僧が爲に無住牓を題せよ。」(牓を一に榜に作る。)休便ち題して曰く、

龍寶の禪翁活眼睛、孤明歷々舊苴の名、黄金の詞賦文君が恨、師は笑ふ茂陵空薄の情。

高亭腸斷す夜參の僧、花前に歌舞して酒(三)澠の如し、長老雲門堵下の逆、眞前の雲雨五更の燈。

(一)千光榮西禪師の開山なり。
(二)蜀郡臨卭の富人、卓王孫の女なり、新に寡にして音を好む、司馬相如、琴心を以て之れを挑み、遂に當らしめて之れを入る。
(三)水の名なり、酒量多きをいふ。

盡梅（一本畫梅に作る。）

目前の春樹孤山に屬す、上苑の一枝客の擧づる無し、七寶の靑黃蘤紅白、淡烟疎雨祖師の關。

自贊

大機大用總べて㋖絃膠、如法の作家清宴の餚、文君が絞酒相如が琴、終に薄情無賴の嘲を奈せん。（一本、絞を紋に作り、又琴を瑟に作る。）

文章禪話眞を知らず、未だ道流主賓を分つことを得ず、慚愧す永劫拔苦の業、筆頭一天の人を罵詈す。（苦を一に群に作る。）

傍若無人閑逸の心、床下法塵の深きを奈何せん、夢閨の銀燭繡簾の月、白日靑天笑つて朗吟す。

純老が佳名海東に發す、天源の派脈流を截つて通ず、德山臨濟何の處にか在る、歌吹す夢閨殘曉の鐘。（鐘を一に鏡に作る。）

鱗を脫する鯉魚、庖中にして活するを得たり

活潑々の時池水淸し、怪しい哉端的死中の生、天池に飛潛す衲僧が眼、雲は暗し龍門點額の情。

㋴應無所住而生其心

㋖東方朔の十洲記に、「鳳麟洲、鳳喙麟を以て膠を作る、續絃膠と名く、能く斷絃を續ぐ」と、故に再び妻を娶るについて續絃といふ、司馬相如、卓文君を娶り、後、還つて將に茂陵の人の女を聘して妾となさんとす、卓文君、白頭吟を作つて以て自ら絕つ、相如乃ち止むと。多情をいふなり。

㋴金剛經莊嚴淨土分第十に曰く「是の如く淸淨の心を生ずべし、色に住しても心を生ずべからず、聲香味觸法に住しても應に心を生ずべからず、所住なくして而も其の心を生ずべし」と。即ち行じて無行の所をいふなり。

祖師禪是れ如來にあらず、接物利生尤も苦なる哉、明歷々金剛の正體、百花春到つて誰がために開く。

念の起所を警む

公案の工夫暮と朝と、山堂夜々雨蕭々たり、地獄の猛火百萬劫、滿腹の詩情幾日か消せん。

念の起所を嫌はず

平生贏ち得たり蘿荳の名、口に信せて言詮して群衆驚く、自贊毀他情識を長ず、乾坤江海我が詩情。

脚下の紅絲妻子の盟、驪山の私語三生を約す、良宵共に愛す夢閨の月、照し看る一聲望帝の情。

心念起所

三十年來江海の情、空しく吟す野水釣船の橫はるを、偶然我れ㊅子陵が業に負く、興は詩に在りて㊁勦絕の名にあらず。

末後涅槃堂の懺悔

風韻氣象頌と詩と、興に乘ずる邪慢吟じて髭を撚る、惡魔內外吾が筆に託す、猛火獄中出期無し。

（韻を一に音に作る。）

艷簡艷詩三十年、虛名なり天澤正傳の禪、吟身半夜燈と與に瘦す、雲月風流白髮の前。

㊂童子南詢の圖

㊅漢の光武の故人、前に見ゆ。
㊁たべきれることなり。
㊂善財童子、南方五十三の善知識を尋ね廻らるゝなり。

知識㋴華嚴五十三、美人焦熱抱持の談、南方の佛法吾が事に非ず、腸斷す風流童子の參。(焦を一に勝に作る。)

紹固喝食

四歲の女兒歌舞の前、約深うして警めがたし舊因緣、恩を棄てゝ無爲の手段に入る、座主作家誰か是れ禪。

㋪欽山禪師を賛す

佳名勳絕利貪稠し、茶店の美人誰か好仇、爭か識らん洞山下の尊宿、慈明の狹路好風流。

上堂の茶話作家の禪、點檢し將ち來れば新婦の禪、錦帳香嚢風起つて臭し、洞山の佛法是れ何の禪ぞ。

㋲濟家の純老機生鐵、一條の活路途と轍と、雪峯岩頭眼睛無し、千歲達磨宗の敗闕。

尿床の鬼子大難の心、定老當機恩力深し、夜雨燈前都て卽忘、風流の茶店舊時の吟。(都を一に渾に作る。)

辭世

今宵淚を拭ふ涅槃堂、伎倆盡くる時前後忘ず、誰か奏す㋝還鄕眞の一曲、綠珠恨を吹いて笛聲

㋴華嚴經入法界品に出づ、故にいふ。

㋪欽山文邃禪師、洞山良价の法嗣、一鏃破三關の公案、叢林に喧傳す。

㋲濟家の純老は、臨濟宗家の一休といふが如し。

㋝還鄕は塵世の旅店より、涅槃の故鄕に還るをいふ。

長し。

龍翔門派の零落を嘆ず

扶桑國裡禪師沒し、東海の兒孫更に誰か有る、今日窮途限り無き涙、他時吾が道竟に何にか之かん。

東海の兒孫誰か正師、正師、正邪辨ぜず盡く偏に知る、狂雲が身上自屎臭し、艶簡封書小艶の詩。

或は儒者或は敎家の僧、人天大衆の憎を管せず、飛び來る蝙蝠暮堂の裡、怪しいかな無明を長じ法燈を滅す。

渡江の達磨

去々來々意に隨つて行く、乾坤萬里俗塵生ず、西天此土姓名重し、脚底脚頭蘆葉輕し。

㊁三界

來往す生靈六道の街、修羅の鬪諍生涯沒し、人間未だ諸天の樂を得ず、闕減の婆婆事々乖く。

餓鬼畜生菩提無し、劫空の法習吾が臍に徹す、無色の衆生涙雨の如し、月は沈む望帝一聲の西。

威音那畔本去劫、彌勒當來又來劫、依草附木の舊精魂、憐む可し三生六十劫。(去劫を一に空劫に作る。)

須らく參ずべし最上乘の禪、等妙の如來豈に自然ならん、三界無安猶ほ火宅のごとし、三車門前に在るを識らず。

㊁三界、又は三有といひ、衆生の生死輪廻する世界を分ちて三種となす、これを三界といふ。

●南坊に示す　偵

男色興盡きて妻に對して淫す、狹路の慈明逆行の心、容易に禪を說く能く口を忌む、任他あれ雲雨楚臺の吟。

制戒

貪り看る少年の風流、風流は是れ我が好仇、悔らくは錯つて爲人の口を開くことを、今より後誓つて舌頭を縮めん。(「貪り看る」を一に「貪着」に作る。)

㋑泉堺の衆、交を絶つ

利に耽り名を好む天澤の孫、靈光失卻す大燈の門、㋺梨冠瓜履人の疑念、伎倆機に當つて佛恩を報ず。

參學の徒道心無し、紅紫朱色鍮に似たる金、忠言逆ふ可し人々の耳、㋩牛馬面前空しく琴を鼓す。(紫を一に絲に作る。)

松源和尙

松源は㋥靈隱老師の禪、法を破り條を攀づ省數錢、囊中に我れ半文の蓄沒し、狂客江山三十年。(蓄を一に畜に作る。)

巡堂合掌又燒香、豎拂拈鎚木床に坐す、臨濟の正傳也た何の處ぞ、一休東海に愁腸を斷つ。

㋑泉堺は泉州堺をいふ。
㋺文選に「瓜田履を納れず、李下冠を整さず」と。人の疑を避くるなり、梨蓋し李を誤用するのみ。
㋩所謂馬耳東風なり。
㋥靈隱松源は靈隱に住す。

馬糞を拾ふて斑竹を修す

煨芋は㋭懶殘の舊話頭、名利を求めず太だ風流、想思隙無し此君の雨、涙を拭ふて獨り吟ず湘水の秋。
（殘を一に山に作る。）

臨濟の畫像に對す

看よ看よ我が養ふ鳳凰の心、燕雀鳩鴉は山野の禽、臨濟は松を栽ゑ一休は竹、三門の境致後人の吟。
臨濟の宗門誰か正傳、三玄三要瞎驢邊、夢閨の老衲閨中の月、夜々の風流爛醉の前。

閻浮樹

㋬閻浮樹乾坤に逼塞す、葉々枝々我が脚跟、太極梅開く紙窓の外、暗香疎影月黃昏。

妙勝寺の竹木を剪る

官に在つて忘却す針を容れざることを、妙勝の封疆樹林を剪る、立ちどころに商君胡亂の法を破る、去來跡沒し一身の吟。

酬恩庵を退く

雲水江山我が脚跟、殿堂宰に一乾坤有り、常住物即ち私の車馬、㋣酬恩の塔主恩を知らず。（即

㋭懶殘は懶瓚和尚なるべし。
㋬閻浮提州の北に高さ百由旬の大樹ありといふ、故に言をなす。
㋣酧は酬に同じ、菴名によつて言を立つるなり。

を一に便に作る。）

禪門寶訓に云く、「圓悟、妙喜に謂つて曰く、『大凡そ擧措當に始終を謹むべし、終を謹むこと始めの如くなるときは、則ち敗事無し、故に曰く、初め有らずと云ふこと無し、克く終有ること鮮し。』昔晦堂老叔曰く、『黄檗の勝和尙、亦奇衲子なり、但だ晩年謬る耳、其の始めに得るを觀て、之れを賢と謂はず、云々』と。」因つて偈を作り後に題すと云ふ。

鐘樓の讃兮猛虎の途、衲子の金言臨濟の徒、㊀擡搦與奪邪正を辨ず、諸祖の當機一模に非ず。

晦堂老痛處の針錐、隱し去れば彌々彰る惟勝の機、明眼の非は元來即ち是、一休が是は正に本來非なり。

但だ積翠庵の禪に歸依して、慚愧す狂雲名利の前、一夕一朝日月の蝕、終には分明なり白日青天。

㊀もたげからめるをいふ。

杜牧を賛す

杜書記獨朗天然、參得す正傳臨濟の禪、儒雅の家風一點無し、詩情淫色紫雲の前。（一本、參得を參禪に作り、儒雅を儒邪に作り、紫雲を柴雲に作る。）

參玄僧の名利を戒む

迷道の衆生劫外の愚、人々涙窮途を識らず、官に諂つて只だ願ふ佳名の發するを、眞の菩提心一

點も無し。

參玄僧の智愚を戒む

大智元來迷道の愚、未だ聞かず小智菩提の扶なることを、一千の公案(リ)繫驢橛、學者は江湖飯袋の徒。

曹洞の惡見を毀破す

曹洞今時無分別、臨濟の受用と遙かに別なり、野老百姓眞の家風、曹洞臨濟受用別なり。

畫　三首

(ヌ)參禪九たび到り又三たび登る、明白洞然愛憎無し、橋上名利の路に通ぜず、羨み見る一錫一閑の僧。(見を一に看に作る。)

老漢知んぬ何の處より來る、高山の境と塔の(ル)崔嵬と、水草心頭瘦牛の體、應身行脚天台を出づ。

(ヲ)潙山來也目前の牛、戴角披毛僧一頭、異類甘んずるが如く一身靜かなり、三家村裡也た風流。(甘を一に耳に作る。)

四睡圖

老禪の饒舌笑中の愁、虎尾搦し來つて虎頭に跨る、月は元識らず(ワ)寒山の意、夢は愕く清光萬里の秋。

(リ)驢を繫ぐ杭、杙の類をいひ、却つて羈絆となるをいふ。

(ヌ)雪峰、師を求むること前に見ゆ。

(ル)石山の土を戴くをいふ。詩經の周南に「彼の崔嵬に陟れば、我が馬虺隤」とあり、また高大の貌、班固西都賦に「增盤崔嵬」と。

(ヲ)喚んで水牯牛となさば、また潙山僧某甲。前に見ゆ。

(ワ)唐の貞觀中、台州に住す、容貌枯悴、布襦零落、樺皮を以

聞聲悟道、見色明心、雲門拈じて云く、「觀世音菩薩、錢を持ち來つて胡餅を買うて、手を放下して曰く、元來是れ饅頭と。」

垂示韶陽三句の禪、聞聲見色話頭圓かなり、胡餅饅頭誰か買ひ得たる、觀音三十二文錢。（一本、三十三文錢に作る。）

雲門は拈ず見色聞聲、衲子の機鋒識情を折る、口に信せて道着する底の食籍、念頭起る處太だ分明。

臨濟和尚を賛す

喝々々々、機に當つて殺活を得、惡魔鬼眼睛、明々として日月の如し。

杜牧

誰か記す慈明老漢の婆、無能の懶性甕蛇を呑む、工夫雪月吟魂冷し、閑に唱ふ桑間濮上の歌。（桑間を一に桑門に作る。）

宗門の活句㋕阿房宮、六國の興亡六國の風、筆海詞林何の似たる所ぞ、青天萬里月正に中す。

洞山三頓の棒

這の棒頭宗門の大功、慈明の子是れ黃龍、明皇は識らず風流の道、今夜馬

て冠となし、大なる木履を穿つ、時に國清寺に來り、衆僧の殘飯餘菜を得て食し、或は廊下に徐行し、或は叫喚し、空を望んで慢罵す、言を出すこと狂人の如くにして而も決して凡人の如くならず、閭丘公入つて禮拜し、文殊の再來なりといふに及んで、拾得と相携へて松門を出で去つて復た歸らず、其の葉上に遺記せる辭頌、壁間の詩偈集めて三百餘首を存す、世之れを寒山詩集といふ。

㋕秦の始皇の營む所なり、杜牧之の阿房宮賦に曰く「六王畢つて四海一なり、蜀山兀として阿房出づ」と。又曰く「六國を滅すものは六國なり、秦に非ざるなり、秦を族するものは秦なり、天下にあらざるなり」と。其の鑑とすべき所、正に青天萬里月の中するが如

嵬千歲の風。

人に遭つて罵辱して嗔情を長ず、是れ卽ち其の迷道の衆生、無始無終黑山の下、無明の濁酒幾時か醒めん。

㋵東福寺の荒廢を扶起す、蓋し美少年の舊交に因る、甲子十二（二を一本三に作る。）

看よ看よ慈楊禪の正傳、誰か來る純老面門の前、宗門の潤色風流の道、舊約忘れ難し五十年。

大慈は聖一是れ開山、魔宮を建立して五山を救ふ、東福派を分つ南禪寺、千歲猶ほ輝く慧日山。

慈楊塔

是れ平生好境の痕にあらず、任他あれ鷄足月黃昏、誰が氏ぞ風流我が盟約、馬嵬の靑塚舊精魂。（一本此の一首なし。）

㋟大慧武庫に曰く、「俗士有り、演に投じて出家し、自ら捨緣と曰ふ。演曰く、『何をか捨緣と謂ふ。』士曰く、『妻子有り之を捨つ、之を捨緣と謂ふ。』㋹演曰く、『我れも亦箇の老婆有り、還つて信ずるや否や。』士默然たり、演乃ち頌して曰く、「我れに箇の老婆有り、

くである、千載の下人をして節を打つて嘆ぜしむるなり。

㋵慧日山東福寺、臨濟東福寺派の本山、京都五山の一、聖一國師の開山、藤原道家の創立による。

㋟大慧禪師が爲人度生の際に於ける機緣の語要中より、特に機鋒峭峻なるものゝみを蒐集したるもの、參學比丘道謙の編したるものなり。その李泳の序に曰く「大慧の機辯を武事に譬ふれば、韓白が儔なり、城を魔き邑を搴るに、嬰る者は破れ、摧くものは靡く、魔類百萬風を望み、戈を倒にして人徒に其の堂々たる陣鼓に服す」とあり、以て武庫の名の所由を推知すべし。

㋹五祖法演禪師なり。

出世して人の見る無し、晝夜共に一處、自然に方便有り』云々。」余も亦頌を作り之れを記す。

孫を愛し子を愛し妻に對して歌ふ、魔宮を滅却して猶ほ魔に入る、風流年少の境に貪着して、自然に一點の溫和無し。

僧に有りては眼白く妻に有つては靑し、客に對して唯だ言ふ我れ薄情と、花前に酌み盡す一樽の酒、半醉夜深けて猶ほ半醒。（一本、二つの有を在に作る。）

醉鄕藁屋我が家山、燭影三更玉顏に對す、夜雨愁無し歌吹海、姮娥は須らく是れ人間に墮すべし。

觀法看經眞の作家、黃衣棒喝木床斜なり、羅苴元是れ我が家の業、女色多情男色を加ふ。

◐僧慧洪の編、本書を隨筆文にして、東坡の詩、嗣法の様子、羅漢の失隊、西崑の體等を錄す。

◐冷齋夜話を讀む、褒禪山石崖僧の一件の事あり、感じて而して之れに題す

佛印重く荷ふ一百夫、佳名道價江湖に滿つ、石崖一箇野僧の意、佛法南方一點も無し。

玉帶笑ひ欺く土泥の如し、路頭喧し吠犬と雞と、天下の老禪慚愧を奈せん、獄中天澤世皆乖く。

百丈食を絶つて人の學ぶ無し、藥山兩粥黃栄の麥、但だ門外に居す弊衣の徒、金襴の道光法席を開く。（黃栄を一に黃桑に作る。）

德禪塔主自贊

平生爛醉金樽を倒す、老後の住持人事繁し、恃む莫れ榮華は竟に苦と成る、江山水府又風餐。（一本、人事を塵事に作り、風餐を風喰に作る。）

惡知識の爲に警策す

因つて憶ふ㋷玄都千樹の桃、劉郎醉語許多の豪、利名の知識極めて功に驕る、堯帝の土堦三尺高し。

美人の婬水を吸ふ

蜜に啓し自ら慚づ㋦私語の盟、風流吟罷んで三生を約す、生身墮在す畜生道、㋸溈山戴角の情を超越す。（一本、蜜を密に作り、超越を絕勝に作る。）

杜牧蕎苴是れ我が徒、狂雲が邪法甚だ助け難し、人の爲に輕賤せられて罪業を滅す、外道波旬幾か途を失す。

臨濟兒孫禪を識らず、正傳眞箇瞎驢邊、雲雨三生六十劫、秋風一夜百千年。

盲女森侍者、情愛甚だ厚し、將に食を絕つて命を殞さんとす、愁苦の餘、偈を作り之れを言ふ。

百丈鋤頭信施消す、飯錢閻老曾て饒さず、盲女が艷歌樓子を笑ふ、黃泉の涙雨滴蕭々たり。

㋷武陵の桃源を云ふ、晉の大元中、武陵の人、魚を捕るに緣つて行けば、桃花兩岸を挾み、落英繽紛たり、其の林を窮めんと欲すれば水源盡く、便ち一山あり、小口を入れば土地平曠良田美地あり、男女皆外人の如し、秦の亂を避けて妻子を率ゐて來ると、漁人歸つて太守に說く、人をして更に行かしむれば、迷ふて道を得ず、南陽の劉子驥高尙の士なり、これを聞いて行かんとしていまだ果さず、尋で病んで終ふ、後遂に之れを問ふものなしと。劉郎醉語云々は又晉書に「劉伶嘗つて醉ひ、俗人と相忤ふ、其の人袂を攘

看よ看よ涅槃堂裡の禪、昔年百丈の钁頭邊、夜遊爛醉す畫屏の底、閻老面前飯錢を奈せん。

森公輿に乘る

鸞輿の盲女屢春遊す、欝々たる胸襟好し愁を慰するに、遮莫あれ衆生の輕賤することを、愛し見る森也が美風流。(見を一に看に作る。)

淫水

夢に上苑美人の森に迷ふて、枕上の梅花花信の心、滿口の淸香淸淺の水、黄昏の月色新吟を奈せん。

美人の陰、水仙花の香有り

楚臺應に望むべし更に應に攀づべし、半夜玉床愁夢の間、花は綻ぶ一莖梅樹の下、凌波の仙子腰間を遶る。(遶を一に遶に作る。)

我が手を喚んで森手と作す

我が手森の手に何似ぞ、自ら信ず公は風流の主、發病玉莖の萌を治す、且つ喜ぶ我が會裡の衆。

鴉を聞いて省有り

豪機嗔恚識情の心、二十年前即今に在り、鴉は笑ふ出塵の㋶羅漢果、日影玉顏の吟を奈何せん。

ひ拳を奪ひて行く、倫徐に曰く、「鷄肋以て尊拳を安んずるに足らず」と。其の人笑ひて止む」と。

㊈唐明皇貴妃の故事。「夜半人無き私語の時、天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りて願はくは連理の枝と爲らん」と。白樂天長恨歌に見ゆ。

㊉潙山、水牯牛の事をいふ。

㋶一須陀洹果、二斯陀含果、三阿那含果、四阿羅漢果の四果の中、上位の果なり。

九月朔、森侍者、紙衣を村僧に借りて寒を禦ぐ、瀟洒愛す可し、偈を作つて之れを言ふ

良宵の風月心頭を亂る、何奈せん想思身上の秋、秋夢朝雲獨り瀟洒たり、野僧が紙袖也た風流。

森美人の午睡を看る

一代風流の美人、艶歌清宴曲尤も新なり、口吟腸斷す花顏の靨、㋰天寶の海棠森樹の春。

文明二年仲冬十四日、㋒藥師堂に遊んで盲女の艶歌を聽く、因つて偈を作つて之れを記す

優遊且つ喜ぶ藥師堂、毒氣便々是れ我が腸、慚愧管せず雪霜の鬢、吟じ盡す嚴寒秋點の長きを。(鬢を一に髮に作る。)

余新園の小舍に寓する年有り、森侍者、余が風彩を聞いて旣に嚮慕の志有り、余も亦焉れを知る、然れども因循として今に至る。辛卯の春墨江に邂逅して、問ふに素志を以てす、則ち諾して而して應ず。因つて小詩を作つて往日何闊の懷に間ふることを述ぶ、且つ今日來不束の喜を記すと云ふ。

憶ふ昔薪園去住の時、王孫の美譽聽いて相思ふ、多年舊約卽ち忘じて後、猶は愛す玉堦新月の姿。

彌勒下生を約す

盲森夜々吟身に伴ふ、被底の鴛鴦私語新なり、新に約す慈尊三會の曉、本居古佛萬般の春。

木凋み葉落ちて更に春を回す、綠を長じ花を生じて舊約新なり、森也が深恩若し忘却せば、無量億劫

㋰楊貴妃に比するなり、此の侍者余程美人と見え、一休頻りに賞讃す。

㋒住吉の藥師堂なり。

畜生の身。

天澤七世東海狂雲老衲純一休

國譯狂雲集下卷終

狂雲集上卷

賛虚堂和尚

育王住院世皆乖、放下法衣如破鞋、臨濟正傳無一點、一天風月滿吟懷。（放下一本作拋下。）

題大燈國師行狀末

挑起大燈輝一天、鸞輿競譽法堂前、風餐水宿無人記、第五橋邊二十年。

如何是臨濟下事、　五祖演曰、五逆聞雷

機先一喝鐵圍崩、五逆元來在衲僧、桃李春風淸宴夕、半醒半醉酒如繩。（繩一本作澠）

如何是雲門宗、　演曰、紅旗閃爍

華旗風暖動春臺、八十餘員師席開、一字關兮三句體、幾人腦裏着紅埃。

如何是潙仰宗、　演曰、斷碑橫古路

慧寂釋迦靈祐牛、披毛作佛也風流、古碑路斷長溪客、萬世姓名黃葉秋。

如何是法眼宗、　演曰、巡人犯夜

一滴曹源一滴深、巡人鬧鬧夜沈沈、青山滿目是何法、家醜猶如學捧心。

臨濟四料簡

奪人不奪境

百丈潙山名未休、野狐身與水牯牛、前朝古寺無僧住、黃葉秋風共一樓。

奪境不奪人

臨濟兒孫誰的傳、宗風滅却瞎驢邊、芒鞋竹杖風流友、曲椂木床名利禪。

人境俱奪

雉翳飆焦身迹遷、幷汾絕信話頭圓、夜來滅却詩人興、桂折秋風白露前。

人境俱不奪

莫道再來錢半文、婬坊酒肆有功勳、祇緣人話相如渴、腸斷琴臺日暮雲。（緣一作因）

陳蒲鞋

賣弄諸人瞞諸方、德山臨濟沒商量、拈槌豎拂非吾事、只要聲名屬北堂。

岩頭船居圖　二首

會昌以後毀僧形、一段風流何似生、舞棹未懷爲人手、杜鵑叫月夜三更。

蒲葉半凋江漢秋、生涯受用在扁舟、乾坤一箇閑家具、年代撈波情未休。

贊二祖

大唐今古沒禪師、斷臂虛傳人不知、只許南山道宣筆、恰如痛所下針錐。

贊栽松道者

周家當處出生來、爲法喪身徒苦哉、宿昔植何時德本、栽松老漢也黃梅。

松源和尚三轉語

大力量人、因甚擡脚不起

商量鬼窟黑山禪、神力金剛現目前、普天之下是王土、擡脚句中公案圓。

開口因甚不在舌頭上

三寸舌頭開禍門、河沙諸佛轉多言、夜來百勞五更月、不奈聲聲祟夢魂。(月一作目又日祟作崇。)

明眼衲僧、因甚脚跟下紅絲線不斷

二三四七諸禪師、領衆匡徒心亂絲、因錢有癖是和嶠、娘生脚下血淋漓。

虛堂和尙三轉語

已眼未明底、因甚將虛空作布袴着

畫餅冷腸飢未盈、娘生已眼見如盲、寒堂一夜思衣意、羅綺千重暗現成。

劃地爲牢底、因甚透者箇不過

何事春遊興未窮、人心尤是客盃弓、天堂成就地獄滅、日永落花飛絮中。

入海算沙底、因甚針鋒頭上翹足

撒土算沙深立功、針鋒翹足現神通、山僧者裡無能漢、東海兒孫天澤風。(足一作脚。)

大燈國師三轉語

朝結眉夕交肩、我何似生

透關更有一重關、隨例依條不可攀、奇菓荔子天上味、名從天寶落人間。(子一作支。)

露柱盡日往來、我因甚不動

草鞋脚瘦沒知音、露柱同行伴我吟、錢有靈神十萬貫、杜鵑啼血託春心。

若透得箇兩轉語、一生參學事畢

二十餘年曾苦辛、乾坤誰是我般人、參來直徹幽玄底、欲去獨登要路津。

學靈山徹翁和尚末後之垂示、以示徒、其垂示云、正法眼藏無付人、自荷擔至彌勒下生、噫。

古佛靈山名不虛、當來彌勒是同居、兒孫一箇狂雲子、邪法大興殃有餘（虛一作空。）
牢關一句費工夫、百鍊精金再入爐、話到當來來劫曉、只愁枕上夢魂無。

凡參禪學道之輩、須日用清淨、不可日用不淨、所謂日用清淨者、究明一則因緣、到無理會田地、晝夜工夫不怠、時時截斷根源、佛魔難窺處、分明坐斷、往往埋名藏迹、山林樹下、舉揚一則因緣、時無雜純一矣、謂之日用清淨人也、然而吾稱善知識、擎杖拂、集衆說法、魔魅人家男女、心好名利、招學者於室中、道悟玄旨、使參者、相似模樣、閑言語、使敎者、片箇情也、這輩罹非人也、寔日用不淨者也、以佛法爲度世之謀、是世上榮衒之徒也、凡有身無不着、有口無不食、若知此理、豈衒於世哉、豈諛於官家哉、如是之徒、三生六十劫、入餓鬼入畜生、可無出期、或生人間、受癩病苦、不聞佛法名字、可懼可懼。（時時一本作時今。）

右靈山徹翁和尚、示榮衒徒法語、題其後云

工夫不是涅槃堂、名利輝前心念忙、信道人間食籍定、羊糜一椀橘皮湯。

元正

現成公案任天眞、鳳曆開元世界春、今日山僧換卻眼、堂中古佛面門新。

桃花浪

隨波逐浪幾紅塵、又値桃花三月春、流恨三生六十劫、龍門歲歲曝金鱗。（一本金鱗作腮鱗。）

端午

千古屈平情豈休、衆人此日醉悠悠、忠言逆耳誰能會、只有湘江解順流。

冬至示衆

獨閉門關不省方、這中誰是法中王、諸人若問冬來句、日自今朝一線長。

佛誕生

三世一身異號多、何人今日定諸訛、婆婆來往八千度、馬腹驢胎亦釋迦。

佛成道

天上人間稱獨尊、今朝成道受誰恩、分明衲子流星眼、便是瞿曇的的孫。

佛涅槃

滅度西天老釋迦、他生出世到誰家、二千三百年前涙、猶洒扶桑二月花。

達磨忌

毒藥數加賊後弓、大千逼塞佛心宗、西來無意我有意、熊耳山中落木風。

大燈國師百年忌　二首

囊覓青銅無半文、酧恩一句豈驚群、祖師遷化已百載、空拜婆年婆子裙。

兒孫多踏上頭關、一箇狂雲江海間、大會齋還在何處、白雲蒸飯五臺山。

僧問岩頭云、古帆未掛時如何、頭云、小魚呑大魚、僧云、掛後如何、頭云、後園驢喫草。

寒温苦樂愧慚時、耳朶元來兩片皮、一二三分三二一、南泉信手斬猫兒。

雲門示衆云、古佛與露柱相交、是第幾機、自代云、南山起雲、北山下雨。

小姑緣底嫁彭郎、雲雨今宵夢一場、朝在天台暮南岳、不知何處見韶陽。

苦中樂

酒喫三盃未濕唇、曹山老漢慰孤貧、直横身火宅中看、一剎那間萬劫辛

樂中苦

此是瞿曇曾所經、麻衣草座六年情、一朝點檢將來看、寂莫靈山身後名。

百丈野狐

千山萬水野僧居、甲子今年五十餘、枕上終無老來意、夢中猶讀小時書。

聞聲悟道

擊竹一朝忘所知、聞鐘五夜絕多疑、古人立地皆成佛、淵明端的獨攢眉。

見色明心

憶得寒山見月題、眼睛落地衆生迷、洛陽三月貴遊客、閃爍紅旗殘照西。

聞聲悟道、見色明心、雲門拈云、觀世音菩薩將錢來買胡餅、放下手云、元來是饅頭

即現觀音奴婢身、饅頭胡餅谷精神、舊時難忘見聞境、滿目山陽笛裏人

大隨庵邊有一龜、僧問、一切衆生皮裏骨、這箇衆生爲甚骨裏皮、大隨以草鞋蓋於背上

衆生顛倒幾時休、打着前頭又後頭、信手救猫趙州老、草鞋戴去也風流。(戴一作載。)

黃檗禮佛

麤行沙門鬼眼開、身長七尺甚奇哉、不知何處見黃檗、立法商君破法來

臨濟燒机案禪板

此漢宗門第一禪、奪人奪境體中玄、安身立命在那處、劫火洞然燒大千。

翠岩夏末示衆云、一夏以來爲兄弟說話、看翠岩眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關。

眉毛公案爛泥荊、保福雲門同道行、長慶藏身還露影、小樓南畔月三更。

翠岩示眉毛圖

賓中有主主中賓、關字失錢生也親、賊賊賊賊拏不得、當頭姦黨是何人。

梅子熟

熟處年年猶未忘、言中有味孰能嘗、人斑初見大梅老、踈雨淡煙青已黃。(年年一作年來。)

盲

瞎驢不受靈山記、四七二三須愧慙、豈墮在光影邊事、銅睛鐵眼是同參

聾

掛拂遭呵百鍊金、天生懷海耳根深、眞聞眞箇在何處、爲鼓無絃一曲琴。

啞

一句欲披吾鬱襟、舌頭拄齶笑吟吟、靈雲不答長生問、誰識金言猶在心。(長生一作長慶。)

船子釣臺圖　二首

金鱗難得急流前、坐斷釣臺三十年、絲線一通名利路、子陵可咲夾山禪。

千尺絲綸豈得收、一天風月一江舟、舟翻人去名猶在、洙水何因不逆流。

賊

惱亂春風何所成、遊絲百尺惹多情、不知問取桃花去、換却靈雲雙眼睛。

賛清素首座

茘子食罷記吾曾、三十年來一箇僧、杜牧平生丈夫志、老無氣力望昭陵。(子一作支。)

賛兜率悅禪師

素老天生薄福徒、佛魔公案的傳無、鬱襟忽發烈吏筆、永辱楊雄莽大夫。(二三四句、一本作的傳門弟一人無、恩深難報佛魔語、可惜楊雄莽大夫。

圓悟大師投機

沈吟小艶一章詩、發動乾坤投大機、擊竹見桃若相問、須彌脚下赤烏飛。(問一作比又作間、亦

鳥作石鳥。)

覽松源和尚塔銘

治父住持功不空、祓貧作富甚家風、看來省數錢猶在、不識脚跟絲線紅。(紅一作功。)

贊魚籃觀音

丹臉青鬟慈愛深、自疑雲雨夢中心、千眼大悲看不見、漁妻江海一生吟

經卷拭不淨　三首

經卷元除不淨牋、龍宮海藏弄言詮、看看百則碧巖集、狼藉乳峰風月前。

弓影客盃多斷腸、夜來新病入膏肓、慚愧我不及畜獸、狗尿栴檀古佛堂。

信手拈來除不淨、作家面目露堂堂、南山雲起北山雨、一夜落花流水香。

大慧禪師焚碧巖集

妙喜老人千歲名、宗門潤色太高生、子胥曾受吳王戮、可惜髑髏無眼睛。

牛

異類行中是我曹、能依境也境依能、出生忘卻來時路、不識當年誰氏僧。(我曹一作我僧。)

蛙

慣釣鯨鯢笑一場、泥沙碾步太忙忙、可憐井底稱尊大、天下衲僧皆子陽。

尺八

一枝尺八恨難任、吹入胡笳塞上吟、十字街頭誰氏曲、少林門下少知音。

傀儡

一棚頭上現全身、或化王侯或庶民、忘却目前眞本據、癡人喚作本來人。

羅漢菊

茶褐黃花秋色深、東籬風露出塵心、天台五百神通力、未入淵明一片吟。

菊　羅漢楊妃同瓶

楊妃爛醉一籬秋、茶褐相交爲好仇、失却神通居下界、應身天寶辟陽侯。

雪関

乾坤埋却沒門關、收取卽今爲雪山、狂客時來百雜碎、大千起滅刹那間。

嫌佛閣

德嶠韶陽門大開、喚爲嫌佛一樓臺、這般知識說邪法、問話者從魔界來。（韶陽一作昭陽）

緜齋

古佛堂中交露柱、斬成兩段定誵訛、青山綠水一閑客、可咲岩頭黑老婆。

竹幽齋

香嚴多福主中賓、密密參禪到要津、六六元來三十六、淸風動處有佳人。

陋居

目前境界似吾癰、地老天荒百草枯、三月春風沒春意、寒雲深鎖一茅廬。

題如意庵校割末

將常住物置庵中、木杓笊籬掛壁東、我無如此閑家具、江海多年簑笠風。

如意庵退院寄養叟和尙

住庵十日意忙忙、脚下紅絲線甚長、他日君來如問我、魚行酒肆又淫坊。（如一作若。）

寄南江山居

天下禪師賺過人、黑山鬼窟弄精神、平生杜牧風流士、吟斷二喬銅雀春。

偶作

昨日俗人今日僧、生涯胡亂是吾能、黃衣之下多名利、我要兒孫滅大燈。

山路　讓羽

吞聲透過鬼門關、豺虎蹤多古路間、吟情終無風月興、黃泉境在目前山。（透過一作閑過、吟情一作吟杖。）

山居　二首

婬坊十載興難窮、強住空山幽谷中、好境雲遮三萬里、長松逆耳屋頭風、

狂雲眞是大燈孫、鬼窟黑山何稱尊、憶昔簫歌雲雨夕、風流年少倒金樽。（雲雨一作雲南。）

山中示典座

歸宗一味日興餘、典座山中功不虛、休覓淨名香積飯、何時饍有美雙魚。

山中得南江書

孤峯頂上草庵居、三要印消功未虛、不意玄中有玄路、萬行裏涙一封書。

自山中歸市中

狂雲誰識屬狂風、朝在山中暮市中、我若當機行棒喝、德山臨濟面通紅、

昔有一婆子、供養一庵主經二十年、常令一二八女送飯給侍、一日令女子抱定云、正恁麽時如何、庵主云、枯木倚寒巖、三冬無暖氣、女子歸擧似、婆子云、我二十年只供得養箇俗漢、追出燒却庵。

老婆心爲賊適梯、清淨沙門與女妻、今夜美人若約我、枯楊春老更生稊。

畫虎

覿面當機誰一撥、寒毛卓豎老岩頭、恠哉爾在扶桑國、凜凜威風四百州。

宗訢藏主製墨以爲業、偈以送之（一本無偈以字）

萬杵霜花華頂天、商量來不直多錢、何須知藏書經卷、小艷題詩衒少年。

示病僧紹珠首座

業識忙忙從劫空、平生伎倆到今窮、四百四病一時發、苦屈苦辛安樂中。

宗春居士下火　行年三十七

彌勒釋迦也馬牛、春風惱亂卒何休、六六元來三十七、一聲念讚起鐘樓。

病中還人送曲椽

法座上禪名利基、諸方竪拂與拈鎚、圓悟金山遭大病、苦吟小艷一章詩。

文安丁卯秋、大德精舍有一僧、無故而自殺矣、好事之徒、遂譖之官、繫其徐殃而居

四禁者七五輩、足為吾門之大亂、時人喧傳焉、予聞之、卽日晦迹山中、其意蓋出於不忍耳、適學者自京城來、說本寺件件之事、愈弗堪慨嘆、作偈言懷時値重陽、故成九篇云。(說本寺件件之事、愈弗堪慨嘆、一本作說本寺件件之故、愈弗勝慨嘆)

地老天荒龍寶秋、夜來風雨惡難收、對他若作是非話、劈箒雲門關字酬。

慚我聲名猶未韜、參禪學道長塵勞、靈山正法掃地滅、不意魔王十丈高。

停四一月老虛堂、身上迍邅休斷腸、苦樂寒温箇時節、黃花一朶識重陽。

淸淨本然現大千、現前境界是黃泉、慣戰作家赤心露、眉間掛劍血澆天。

正傳傍出妄相爭、曠劫無明人我情、人我擔來擔子重、空看蛺蝶一身輕。

上古道光今日明、議論臨濟正傳名、屋前屋後樵歌路、憶昔山陽笛一聲。

棒喝德山臨濟禪、商量三要與三玄、漢王鑄印却消印、胡亂更參三千年。(消印一本作消市。)

近代久參學得僧、語言三昧喚為能、無能有味狂雲屋、折腳鐺中飯一升。

風外松杉亂入雲、諸方動衆又驚群、人境機關吾不會、濁醪一盞醉醺醺。

賛靈昭女

笊籬賣劫甚風流、一句明明百草頭、相對無心弄禪話、朝雲暮雨不堪愁。(堪一本作勝。)

風鈴　二首

靜時無響動時鳴、鈴有聲耶風有聲、驚起老僧白晝睡、何須日午打三更。

見聞境界太無端、好是淸聲隱隱寒、普化老漢活手段、和風搭在玉欄干。

牛庵　齋名

某甲潙山僧一頭、長溪路上卽忘不、閑中無復祖師見、花屬春風月屬秋。

半雲　齋名

膚寸無根點碧空、安身立命在其中、夢魂昨夜巫山雨、吟斷朝來一片蹤。

贊六祖

隨身擔子鋤斧、不知何處山翁、南方佛法會否、盧公老老盧公。

紹鷃藏主規地卜居、家徒四壁立、扁曰土庵、作偈以爲證云

夏巢冬穴一身康、帶水拖泥萬念忙、稼穡艱難若領略、栴檀佛寺名利場。（栴檀佛寺名利場、一本作梅檀佛寺利名場）

大機居士卜小築、額曰瞎驢、因贅以偈云

大人消息有誰通、不墮靈山記莂中、臨濟宗風掃地滅、紅塵紫陌鬧忽忽。

簑笠　庵號

樵客漁人受用全、何須曲彔木牀禪、芒鞋竹杖三千界、水宿風飡二十年。

謹奉錄呈一休老和尙座下

狂風徧界不曾藏、吹起狂雲狂更狂。
誰識雲收風定處、海東初日上扶桑。

幻住孫眞建九拜

和韻

慚愧菁名不蓄藏、佯歌爛醉我風狂、吟懷夜夜中峯月、幻住僧無三宿桑、

華叟老師掩光而後、既洎二十餘年也、壬申秋敕謚大機弘宗禪師、仍製禪詩呈寄

大用養叟和尚、且陳賀忱云（年一作稔。）

作謝塵寰五十年、芳聲美譽是何禪、子胥日暮倒行去、覿面辱屍三百鞭。（日暮一本作晚日。）

懶瓚辭詔也何似、煨芋烟鎖竹爐裏、大用現前眞衲僧、先師頭面潑惡水。

贊端師子

弄師子處正明心、不托回頭口若喑、讀誦蓮經風雪燭、漁歌一曲五更吟。（處一作床。）

大德寺火後題大燈國師塔

創草百二十八年、看來今日體中玄、正邪境法滅卻後、猶是大燈輝大千。

渡江達磨

腳下苦哉平地波、誰人梁魏定誓訛、西來莫道大難意、河廣傳聞一葦過。

贊臨濟和尚

從來道業是毗尼、黃檗棒頭忘所知、正傳的的克勤下、吟破風流小艷詩。

贊普化

德山臨濟奈同行、街市風顛群衆驚、坐脫立亡多敗闕、和鳴隱隱寶鈴聲。

黃檗三頓棒

棒頭打着羯磨僧、痛處針錐絕伎能、桃李春閨簾外月、吟魂一夜十年燈。(僧一作曾。)

脚下紅絲線

持戒成驢破戒人、河沙異號弄精神、初生孩子婚姻線、開落紅花幾度春。(成一作爲。)

贊華叟和尚

靈山孫言外的傳、密漬茘支四十年、兒孫有箇瞎禿漢、願得老婆新婦禪。

自贊

華叟子孫不知禪、狂雲面前誰說禪、三十年來肩上重、一人荷擔松源禪。

風狂狂客起狂風、來往淫坊酒肆中、具眼衲僧誰一拶、畫南畫北畫西東。

大燈佛法沒光輝、龍寶山中今有誰、東海兒孫千載後、吟魂猶苦許渾詩。

百丈餓死　三首

爲人苦行也天然、大用分明卽現前、一日不作必不食、大人手段作家禪。

古人受用幾營艱、不是尋常談笑閒、飽食痛飲飯袋子、叉衣翫水又遊山。(一本艱作難、笑作咲。)

工夫長養大慈心、臨濟消來萬兩金、昔日艱難聞吐哺、簑衣箬笠钁頭吟。

示會裡徒　三首

樂中有苦一休門、箇箇蛙爭井底尊、晝夜在心元字脚、是非人我一生喧。

公案參來明歷歷、胸襟撥破暗昏昏、怨憎到死難忘却、道伴忠言逆耳根。

徒學得祖師言句、識情刀山牙劍樹、看看頻頻擧他非、銜血噴人其口汚。

示入定僧

塵緣塵境萬端稠、到此誰人截衆流、誓心決定魔宮動、長信西風琪樹秋。

讀碧巖集序

夾山言敎價千金、一炬看來救古今、休向寒灰成議論、宗乘滅卻老婆心。

黃龍三關

成佛成驢手脚全、河沙異號任生緣、黃龍關外黑雲鎖、積翠春風楊柳前。

虎丘雪下三等僧　二首

少林積雪置心頭、公案圓成上等仇、僧舍吟詩剃頭俗、飢腸說食也風流。（舍一作社）

禪者詩人皆癡鈍、雪下三等多議論、妙喜若是大慈心、說食僧與香積飯。（癡一作癩又惛）

看大德寺修造有感

雲門卵塔一茅廬、大用黃金殿上居、傍出正傳現前境、楊岐屋壁古來疎。

新造大應國師尊像

活眼大開眞面門、千秋後尙弄精魂、虛堂的子老南浦、東海狂雲六世孫。

題婬坊

美人雲雨愛河深、樓子老禪樓上吟、我有抱持啑吻興、竟無火聚捨身心。

示延壽堂僧

無常殺鬼現前時、末後牢關說向誰、百事難休五欲關、六窓欲鎖八風吹。

病中作

德山棒兮臨濟喝、嘆我被他機境奪、若人問馬祖不安、慚愧一生相如渇。(被一作彼。)

示榮衒惡知識　二首

參禪婆子楊花帳、入室美人蘭蕙茵、近代箇邪師過謬、馬牛漢非是人倫。(非一作不。)

捧心自稱法王身、世上弄嘲徒怒嗔、一箇猢猻沒巴尾、出頭大用現前人。(捧一作棒。)

拜關山和尚塔

荒草不鋤乃祖玄、涅槃正法妙心禪、杜鵑叫落關山月、誰在花園躑躅前。(一本三四句、作誰人吟落關山月、五夜漏聲曉箭前。)

雨滴　齋名

蕭蕭門外是何聲、不會當機問鏡清、顛倒衆生迷逐物、窓前半夜一燈青。(窓前一作吟魂。)

松窓　齋名

茅廬竹閣興難窮、臨濟栽來功不空、枕上愧慚有閑夢、夜來驚起屋頭風。(愧慚一作自慚。)

面壁達磨

誰人任運問安心、昔日神光侍少林、面壁功成無面目、不知積雪滿庭深。

苦行釋迦

六年飢寒徹骨髓、苦行是佛祖玄旨、信道無天然釋迦、天下衲僧飯袋子。

言外和尚

無端滅卻大燈家、鐵眼銅睛猢猻牙、一句分明言外語、親開華嚴若曇華。

徹翁和尚

大燈子大應孫、正傳臨濟宗門、儼然靈山一會、何妨三界獨尊。

趙州三轉語

泥佛不渡水、　木佛不渡火、　金佛不渡爐。

詩成小艷逃愁情、一枕多年夜雨聲、長笛暮樓誰氏曲、曲終江上數峰青。（青一作清。）

龐居士製竹漉籬圖

河裏捨來十萬錢、庫中終沒半文錢、眞箇簸箕門下客、笊籬賣不直多錢。（沒一作無。）

大惠宏智揖讓圖

眉毛相結眼睛同、兩箇老禪機境融、力士鐵槌子房策、憤心在博浪沙中。

山庵雜錄曰、楚石住嘉興天寧、值有司重作官宇闕木石、欲取村落無僧廢庵應所需、因集諸寺住持議之、時楚石力陳不可者沮之、有司不聽、遂擯退鼓歸海鹽天寧、二老皆勇於行義、視棄師席之尊、不啻如棄弊屣、今雖荐禍患罹己、而猶濡忍戀戀、亦獨何哉、予讀此有感、因作偈云、又有了庵一事省之、（一本二老作二左、罹己作嬰已、了庵作子庵。）

奪人奪境事猶稠、幽谷閑林不自由、莫道江山無定主、普天之下帝王州。

龍門亭題偈賀天龍寺再興

盡乾坤乃祖門風、萬嶽嵯峨烟雨中、三級浪高黑雲鎖、潛鱗直得化天龍。

感龍翔寺廢

常住物誰用己身、山門境致剪松筠、殿堂只與花零落、廢址秋風二月春。

虛堂和尚十病　二首

病在自信不及處、病在得失是非處、
病在我見偏執處、病在眼量窠臼處、
病在機境不脫處、病在得少爲足處、
病在一師一友處、病在旁宗別派處、
病在位貌拘束處、病在自大了一生小得處。

是非元勝負修羅、傍出正傳人我多、近代邪師誇管見、識情毒氣任偏頗。

議論未休正與邪、無慚愧漢是天魔、狂雲臥病相如渴、一枕秋風奈我何。

拈華微笑

鷲峰會上現前辰、鷄足室中來劫春、中毒人應知毒用、西天此土野狐身。

贊慈恩窺基法師

窺基三昧獨天眞、酒肉諸經又美人、座主眼睛猶如此、宗門唯有箇宗純。（如一作若。）

同門老宿誡余婬犯肉食、會裏僧嗔之、因作此偈示衆僧云

爲人說法是虛名、俗漢僧形何似生、老宿忠言若逆耳、昨非今是我凡情

病中作

佛病祖病迸鬼眼、臨濟焚几案禪板、不會金山大病辛、時人空吟艶詩簡。（迸一作逆。）

隱溪　齋名

呂公子陵眞面目、受用風飡又水宿、江湖今有贋漁舟、我無一竿湘楚竹。

示衆

參玄衲子道難成、但願歸依常不輕、一片吟懷向誰解、楚雲湘水十年情。

破邪禪

瞿曇四十九年說、看看毘耶與摩竭、邪師臆說拈話頭、閻王前豈免拔舌。（一本竭作謁、舌作口。）

新建立佛寺

一生破屋廢庵居、這裏榮華也不虛、淸淨佛寺利欲地、楊岐屋壁古來疎。

將入山中、一偈書屋壁以示衆去

愧慚禍起自蕭墻、我見折人如劒鋩、從此空山幽谷路、誰人來踏板橋霜。

題密庵和尚病起上堂後

江山富貴是樵漁、風雨吟身一草廬、七顚八倒衆生苦、不耐小魚呑大魚。

賀大用庵養叟和尚賜宗慧大照禪師號

紫衣師號奈家貧、綾紙青銅三百緡、大用現前贋長老、看來眞箇普州人。

寄大德寺僧

人多入得大德門、這裏誰捐師席尊、淡飯麁茶我無客、醉歌獨倒罵陽狩。（大德一作大燈。）

贊鳥窠和尚（一本鳥窠作鳥巢。）

巢寒樹上老禪翁、寂莫淸高名未空、諸惡莫作善奉行、大機須在醉吟中。

題養叟大用庵　二首

叢林零落殿堂疎、臨濟宗門破滅初、大用梅檀佛寺閣、崢嶸林下道人居（崢嶸一作淨潔。）

山林富貴五山衰、唯有邪師無正師、欲把一竿作漁客、江湖近代逆風吹。

百丈絕會（絕一作施。）

大智禪師難行道、末法爲人眞落草、飽食痛飲熱鐵丸、初懼泉下閻羅王（王一作老。）

示衆

割截難禁忍辱仙、捨身諸佛舊因緣、千歲聲名斷碑雨、髑髏識盡北邙前。

病中　二首

錯來領衆十年餘、實悟不知多是虛、乃欲破除邪法囊、夜來背發范增疽。

藥山兩粥懶殘芋、昔年祖師修行苦、棒喝機關作家禪、非是牢關末後句（非一作不。）

示衆

忍辱仙人常不輕、菩提果滿已圓成、撥無因果任孤陋、一箇盲人引衆盲。

贊仰山　二首

小釋迦唐朝出生、夢中兜率太分明、耽源體也潙山用、體用中唯開眼睛。

枕子夜來推出時、一宗敗闕少人知、法身說法座主說、黃葉一枝誑小兒。

松源和尚上堂云、擧、僧問巴陵、祖意教意、是同是別、巴陵云、鷄寒上樹、鴨寒下水、白雲師祖云、巴陵只道得一半、白雲則不然、掬水月在手、弄花香滿衣、師拈云、白雲盡力道、只道得八成、有問靈隱、只向他道、人我無明一串穿。

祖意教意別與同、商量今古未曾窮、松源老老婆心切、人我無明屬己躬。

涅槃堂

眼光落地涅槃堂、自悔自慚螃蟹湯、七手八脚萬劫苦、無常殺鬼火車忙。(殺一作刹。)

竹篦背觸

背觸首山閑話頭、誵訛着着沒來由、梨花院落黃昏月、說向愁人不解愁。

山居僧擁葉

孤峰頂上謝塵寰、三十年來不出山、因憶南陽擁葉意、半身暖氣半身寒。

山居僧

無人時喜客來嗔、落葉飛花獨覺身、正見禪師若行令、三冬枯木百花春。

拈華微咲

世尊拈出一枝花、一代禪宗意氣奢、金色頭陀獨傳法、近年知識如河沙。(如一作若。)

贈新法師

威音那畔法無師、自悟自然成道奇、偶有出家新戒漢、劫空久遠在今時。(遠一作遼。)

絶交會裡衆偈、且以自警云

匡徒領衆立魔宮、汗馬從前蓋代功、師弟凡情共姦黨、可憐韓信嘆良弓。

行脚

咸陽金玉幾樓臺、方寸封疆歸去來、一箇出頭天外看、須彌百億草鞋埃。

贊達磨大師半身

東土西天徒弄神、半身影像現全身、少林冷坐成何事、香至王宮蕙帳茵。（影像一作形像。）

讓羽山新搆一寺、山名虛堂寺扁大燈、因述一偈

茅屋三間起七堂、狂雲風外我封疆、夜深室內無人伴、一盞殘燈秋點長。（茅一作茆。）

擯出中川賀頌

不救病身勞病身、蕭墻有禍會中賓、十年劍樹刀山底、萬劫難消阿鼻辛。

擯出中川賀頌、呈勝瓊

本非蛇影客盃弓、元字在心從劫空、昨日凡兮今日聖、無根雲起變通風。

病

馬祖不安閑話頭、毘耶杜語不勝愁、夜夜苦吟三十歲、月滿茂陵桂樹秋。

紅葉題偈以呈多欲之僧

滿庭落葉無僧掃、南陽擁來猶落草、自悔成欲界衆生、君子愛財是何道。

長祿庚辰八月晦日、大風洪水、衆人皆憂、夜有遊宴歌吹之客、不忍聞之、作偈以自

慰云。

大風洪水萬民憂、歌舞管絃誰夜遊、法有興衰劫增減、任他明月下西樓。

重題靈山和尚示榮衒徒法語後

李下從來不整冠、奔馳世上豈談官、江山風月我茶飯、自笑一生吟味寒。

白居易問鳥窠和尚、如何是佛法大意、窠曰、諸惡莫作、衆善奉行、白曰、三歲孩兒也解恁麼道、窠曰、三歲孩兒雖道得、八十老人行不得、靈山和尚每曰、若無鳥窠一語、我徒盡泥乎本來無一物、及不思善不思惡、善惡不二、邪正一如等語、以撥無因果、而世多日用不淨之邪師也、故余作此偈、以示衆云、

學者撥無因果沈、老禪一句價千金、諸惡莫作善奉行、須在先生醉裏吟。

余誡會裏徒曰、喫酒必須用濁醪、肴則其糟而已、遂名之曰乾一酒、仍作偈、以自笑云、

醉裏衆人奈酒腸、醒時伎盡啜糟糠、湘南流水懷沙怨、引得狂雲笑一場。

余四十年前、聞秉拂僧在法堂上(一本法堂作法座。)而說禪客之氏族焉、于商于工于行僕者流各評其所業、甚者乃臻出手以爲模樣、吁是何爲也、卽乃掩耳而出矣、因述二偈、意在革弊、凡四姓之入我門、皆稱釋氏、以其乞食而資命乞法而資性也、(一本作凡四姓之入吾門、皆稱釋氏、以其乞食而資姓、乞法而資姓也。)亦何貴胄望族之有哉、今世山林叢林之論人、必議氏族之尊卑焉、是可忍孰不可忍乎、遂寫前

偈以揭示四方、誰敢擊節、其偈曰、

說法說禪舉姓名、辱人一句聽吞聲、問答若不識起倒、修羅勝負長無明。

犀牛扇子與誰人、行者盧公來作賓、姓名議論法堂上、恰似百官朝紫宸。

佛眼遠禪師三自省曰、報緣虛幻、不可彊爲、浮世幾何、隨家豐儉、苦樂逆順、道在其中、動靜寒溫、自媿自悔

自悔自慚溫與寒、看看三界本無安、愚迷正是衆生樂、嘗蜜猶忘井底難。(一本看看作着着)

作偈博飯喫

來往東山昨若今、飢時一飯價千金、荔支素老佛魔話、慚愧詩情風月吟。(昨一作昔)

贊松源和尚

娘生眼照太虛空、天澤兒孫在海東、滅卻宗風三轉語、詞華心緒一天紅。(華一作革)

贊運庵和尚

惡魔境鬼眼睛開、五逆元來應聞雷、臨濟當時焚几案、道場覿面却衣來。(一本鬼作界、聞作聽)

贊大應國師

看看佛日照乾坤、天上人間唯獨尊、禪老如無渡東海、扶桑國裏暗昏昏。

贊大燈國師

畫出面門無覆藏、須彌百億露堂堂、德山臨濟若入室、螢火應須遇大陽。

虛堂和尚三轉語

龍門萬仭碧波高、天澤面前誰畫牢、生鐵鑄成三轉語、作家爐鞴煆吹毛。

漁父

學道參禪失本心、漁歌一曲價千金、湘江暮雨楚雲月、無限風流夜夜吟。

題靈山塔贈正傳庵僧

看來眞箇正傳庵、不說宗乘唯世談、凜凜威風逼人冷、當機覿面有誰參。

題白樂天像

勳業名高白樂天、自然流落絕塵緣、叢林失志山林乏、莫訝雙林寺裏禪。

思舊齋　二首

山陽長笛子雲吟、蜜漬荔支素老心、熟處三生六十劫、一聲望帝月西沈。

昔年黃犬與蒼鷹、苦樂悲觀地獄能、欺得楊岐吾屋壁、乾坤一鉢一衣僧。

踈壁齋

楊岐天下老禪翁、從此大興臨濟宗、紅塵紫陌我乍住、山舍半吹黃葉風。（與一作興）

滅燈齋

眞前一盞太分明、乃祖靈光照太清、德嶠悟道我不會、江湖夜雨十年情。

示斬猫僧

是吾會裏小南泉、信手斬猫公案圓、錯來自悔行斯令、驚起牡丹花下眠。

僧無尊卑

盧能馬箕姓名拙、教外別傳越佛說、杜撰禪流井底尊、可憐皮下元無血。

謹白久參人　二首

圓頂方袍婬奸、威風鎮逼人寒、古則參得家業、可愧妄長我慢。

莫言公案即圓成、八角磨盤心上横、邂逅難知自屎臭、他人敗闕鏡中明。

前年辱賜大燈國師頂相、予今更衣入淨土宗、故茲奉還栖雲老和尚

離却禪門最上乘、更衣淨土一宗僧、妄成如意靈山衆、嘆息多年晦大燈。

狂雲大德下波旬、會裏修羅勝負嗔、古則話頭何用處、幾多辛苦數他珍。

謹白久參人　寬正二年六月十八日崇宗藏主絕交

一善不行作諸惡、憎他妬他元字脚、口堅勁見地微弱、瞎禿禪宗門零落、人笑是無繩自縛、見他非不知己錯、日用工夫禍作略、暫時難得住虛廓、直指爲人又機作、如是禪話塡溝壑、好勢耽名之卜度、到此誰人與刻削、參得古則心彌濁、醍醐上味爲毒藥。

看靈山行狀

宗門極則又聱訛、乃祖靈山前釋迦、採筆誰人點鬼簿、工夫日用俗塵多。

香嚴擊竹

潭水北兮湘水南、竹枝曲裏口喃喃、樽前爛醉豪家客、不知愁人夜雨談。(知一作識。)

示會裡徒法語

凡參禪學道、須勤絕惡知惡覺、而至正知正見也、惡知惡覺者、古則話頭、經論要文、學得參得、

坐禪觀法、勞而無功者也、如是輩、當代四百四病一時發、爲人所辱、是情識之血氣也、對閻老面前、有甚伎倆乎、獅子尊者、斷頭白乳顯露分明也、正知正見者、日用坐斷涅槃堂底工夫、全身墮在火坑、子細看之、苦中有樂、若能見得、不昧撥無因果之境、若見不得、永不成佛漢、可懼可懼。

如汲井輪略無停息、今既得出家、僧相圓備、在三衣一鉢下、想是過去幾生修來得如此乎、若是再入驢胎馬腹去、不知又經幾生、歸來改修此錯、努力努力、切須今生了達、無如是殃過、念之念之。

右靈山和尚法語、題其後云

互換高低汲井輪、威音彌勒一囘春、三世諸佛歷代祖、泉聲滴涙苦吟身

我病不及良藥効驗、不及經呪靈驗、逐日窮困、有我情識、爾等諸人、縱雖刹那、縱雖一念、成眞正工夫、窮決未了處、到着實處、諸魔障頓除、老懷如意耳、衆無對。

右靈山和尚因病示衆法語、題其後云

不須經呪亂心頭、佛界伎窮魔界收、莫向愁人說愁意、相如雲雨渴望秋。

拜大德寺住持勅請之頌、呈廣德堂上柔仲和尚

大德大燈龍寶山、靈光天上又人間、燒香酧恩曇華叟、金色頭陀曾破顏。

文明甲午春、拜大德禪寺住持勅請、門客交賀、吁、五十年簑笠淡如、勅黃捧照、無愧于懷乎、因作詩泄之。

大燈門庭滅二殘燈一、難レ解吟懷一夜氷、五十年來簑笠客、愧慚今日紫衣僧。（庭一作レ第）

再住二妙勝寺一之次、披二虛堂和尚法衣一因合山淸衆需二一偈一、書以塞二其請一。

先祖還レ衣、順老留レ衣、斬作二兩段一、是松源衣。

龍寶山大德禪寺入寺法語

山門

一跳直入、龍寶三門、門門有レ路、逼二塞乾坤一。

佛殿

古佛堂中露柱雲雨、作二以レ手分勢一云、分破後如何、雲門霧露。

土地堂

上天是梵天帝釋、下天是多聞持國、護法神向二何處一見二新長老一、新長老、聻、六六三十六。

祖師堂

祖師何人、我何人、咄、誰奪レ境奪レ人

拈衣

小艷平生心亂レ絲、慈恩先祖手中絲、順老明眼衲僧、擲二袈裟一云、是甚脚下紅絲。

室

明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、四方八面來旋風打、虛空來連架打、新長老、聻、乾坤一箇蘿葍
僧、喝一喝云、無レ人來問二相如渴一、敲破梅花一夜冰、打。

退院

平生藞苴小艶吟、酒婬色婬詩亦婬、擲拄杖云、七尺拄杖還常住、吹尺八云、一枝尺八少知音、

帖

頂戴卽是、放下卽是、溥天之下是王土。頂戴云、是是。

狂雲集上卷終

狂雲集下卷

大燈國師三轉語曰、朝結眉夕交肩、我何以生云云、何似生雖古尊宿罕有受用之者、唯慈明下淸素首座能用之、雖然晩年遇兜率悅公、食荔支之次、遂納敗一塲、惜哉、有始而無終、(惜哉一作情乎。)感懷之餘、作五偈記之、偈曰、

這箇譊訛受用徒、古今衲子一人無、素老慈明的傳子、荔支核子嚼何麁。(素老一作級老。)

慈明狹路得楊岐、覿面之機痛處錐、天澤愁吟風月客、繡簾吹動軟風屛。

工夫日用閉門車、五十年來烏有歌、素老荔支眞敗闕、德山臨濟竟如何。(烏有一作烏有。)

暮天細雨片雲朝、名屬成都萬里橋、百年東海獨休歇、艶簡吟魂永日消。

工夫弄棹蓑公舟、尊宿織鞋蒲葉秋、野老難藏簑笠譽、誰人江海一風流。(弄一作勞。)

大燈忌宿忌以前對美人

宿忌之開山諷經、經咒逆耳衆僧聲、雲雨風流事終後、夢閨私語笑慈明。

止大用庵破却　二首　寛正五年

破邪歸正識情、勝負人我無明、可美出塵羅漢、靑天月白風淸。

認定盤擔板漢禪、衲僧作略豈膠絃、殺活縱橫惡手段、鑄消正印漢王前。

題大德寺動亂

禪者爭禪詩客詩、蝸牛角上現安危、殺人刀笑活人劍、長信佳人獨自知。
伏虎將軍是我徒、英雄不失惡魔途、吹毛三尺掌握內、佛法南方一點無。

訪養叟的子熈長老癩病（訪一作問。）

毒蛇窟宅洛陽東、癩病深懼亨徹翁、紹熈養叟正傳子、學得天衣佛日風。（風一作禪。）
病輕脈重咸淳禪、病重脈輕會昌禪、就中腐爛養叟輩、病脈並發今日禪。

賀熈長老鷲尾新造寺、以訪癩病

癩病腳跟毒氣生、殿堂新造勢崢嶸、鋤頭耕破鷲峰頂、荒草山前無一莖。（一本、腳跟作腳瘡、耕破作畔破。）
栴檀佛寺利名禪、公案纏腰十萬錢、滿目青山法眼境、鷲峰樵客踏通玄。
鷲峯建立大伽藍、普請崩山又碎岩、五臟敗壞成膿血、黃衣癩肉臭汗衫。
妄參佛祖舊因緣、天道豈饒逢着膻、食淡志潔吾自業、志姦食美汝家傳。
猢猻無尾出人前、乃祖弄嘲天下偏、拈棒下喝送一送、始看勾欄歌舞禪。
大燈門下單于境、姦賊此時開法筵、厚面無慚唯畜類、古今無若此邪師。（邪一作禪。）
風流入室蕊蒭尼、因憶慈明狹路時、腸斷纖纖呈露手、暗吟小艷一章詩。
顯熈禪話太新鮮、呈露開拳又出拳、龍峯山中惡知識、言詮古則盡虛傳。
得果投機多教人、青銅定價兩三緡、休歌亡國伊州曲、榮衒乾坤天寶春。
引作集徒幾癩兒、面門眼上總無眉、法中姦黨自了漢、傳授無師話有私。

題顧來的的付兒孫

顧卦題名貪食來、會中膾炙寵如梅、攫金手段機輪轉、君子果然多愛財

謝人贈鹽醬

胡亂天然三十年、狂雲作略這般禪、百味飲食一楪裏、淡飯粗茶屬正傳、(粗一作麤)

病中　二首

破戒沙門八十年、自慚因果撥無禪、病被過去因果果、今行何謝劫空緣、

美膳誰具一雙魚、小艷工夫日用處、婬色吟身頭上雪、目前荒草未曾鋤(日一作山)

代斷頭罪人　二首

六條河畔斷頭場、逼面殺人三尺鋩、伎窮情盡魔途失、空斷春閨夢裏腸、

或人瞠眼或低頭、各是波旬之道流、多年風月卽今劍、大地山河滿目愁、

羅漢遊婬坊圖　二首

羅漢出塵無識情、婬坊遊戲也多情、那邊非矣那邊是、衲子工夫魔佛情、

出塵羅漢遠佛地、一入婬坊發大智、深笑文殊唱楞嚴、失却少年風流事、

涅槃像　二首

作佛披毛無主賓、春愁二月涅槃辰、有情異類五十二、混雜紫磨金色身

頭上北州脚下南、前三三與後三三、逼塞乾坤釋迦像、看來惠日一伽藍、(與一作也)

嘲熊野權現

垂跡三山榎本頭、百由旬瀑直飛流、室郡休道馬不進、徐福精神物外遊。

閑工夫、辱榮衒徒

金襴長老一生望、集衆參禪又上堂、樓子慈明何作略、風流可愛美人粧。

正工夫、示久參徒

機輪轉處實能幽、臨濟正傳名利謀、一枕春風雞足曉、三生夜雨馬嵬秋。

洛下昔有紅欄古洞兩處、曰地獄、曰加世、又安聚坊之口、有西洞院、（聚一作衆。）諺所謂小路也、歌酒之客、過此處者、皆爲風流之清事也、今街坊之間、十家四五娼樓也、淫風之盛、幾乎亡國、吁關雎之詩可想乎哉、不足嗟嘆、故述二偈一詩、以詠歌之云。

（一本、作述二偈一詩歌之云。）

偈曰

同居馬牛犬兼雞、白晝婚姻十字街、人道悉是畜生道、月落長安半夜西。

佛交露柱一同途、邪法此時難得扶、榮衒徒似作家漢、佛法胸襟一點無。

詩曰

婬風家國喪亡愁、君看雎鳩在彼洲、隨例宮娥主恩夕、玉盃夜夜幾春秋。

俗人婬坊門前吟詩歸

樓子無心彼有心、婬詩詩客色何婬、宿雨西晴小歌暮、多情可愛倚門吟、

相國寺沙喝騷動

元來長久萬年山、葉戰松杉風外間、濟北陰凉宗風滅、白拈手段活機關。(間一作聞。)

童謠　二首

童謠逆耳野村謳、唱起家家亡國愁、十年春雨扶桑涙、稼穡艱難廢址秋。

皇城山野野皇城、變雅變風人不平、骼皮秋瘦山骨露、狂雲一片十年情。(骼一作體。)

看杜詩　二首

古今詩格舊精魂、江海飄零亦主恩、仰叫虞舜一生涙、涙痕灑洒裏乾坤。

涙愁春雨又秋風、食頃難忘天子宮、詩客名高天寶事、寒儒忠義也英雄。

示婬色人

巫山雲雨夢中神、君子猶迷況小人、風流聖主馬嵬涙、龜鑑明明今日新。

濮上桑間唱哇音、風流年少寵尤深、世界三家村裏客、重華不識二妃吟。

所愛肉身飡食忠、心肝生鐵一天功、男兒死處色何屈、惱亂楊花甲帳風。

會裏僧與武具

說禪學道本無能、亂世英雄一錫僧、靦面當機君行令、鐵團百億棒頭崩。

道人行脚又山居、江海風流簑笠漁、逆行沙門三尺劍、不看禪錄讀軍書。

因亂　二首　詩

請看凶徒大運籌、近臣左右妄優遊、薫帳畫屏歌吹底、衆人日夜醉悠悠。

忠臣愁思在功勳、世上汗淋不識君、儒雅十年情寂寂、貴遊一夜醉醺醺。

示會裏俗徒警策　詩

前車覆處後車驚、警策怠時禍必生、半醉半醒夜遊客、烏啼月落夜三更。（烏一作鳥。）

詩歌吟詠失全功、天上人間軍陣中、意舞醉歌休度日、飛揚跋扈爲君雄。

因亂寄坊城少納言　詩

當代營儒少納言、詩文家業動乾坤、英雄亂世好風月、長劍大弓酬主恩。

懺悔拔舌罪

言鋒殺戮幾多人、逃偈題詩筆罵人、八裂七花舌頭罪、黃泉難免火車人。

亂裡　二首

國危家必有餘殃、佛界退身魔界場、臨時殺活衲僧令、君看忠臣松柏霜。

獨坐頻忙臘晦心、誰人忠義此時深、曉天一睡枕頭恨、朝日三竿夢裡身。（身一作吟。）

關東御上洛

虜軍萬騎已東來、京洛凱歌一曲催、相坂關門征駒路、胡兒性命馬蹄埃。

婬坊頌以辱得法知識

舌頭古則長欺謾、日用折腰空對官、榮衒世上善知識、婬坊兒女着金襴。

日用

日用正工夫、挽弓東射胡、殺佛殺祖令、波旬失却途。（一本、挽作引、三四句、作佛魔混雜底、邪法覓難扶。）

祝聖

海內太平卽現前、淸風明月碧雲天、萬年七百高僧行、看看天龍正覺前。（一本卽作便、僧作祖、正覺前作正覺禪。）

德政

賊元來不打家貧、孤獨財非萬國珍、信道禍元福所復、靑銅十萬失靈神。（復一作伏。）

亂裡工夫

每朝高叫甚忙忙、受敵機先當八方、觀法坐禪休度日、但須勤跋扈飛揚。（甚一作太。）

泉涌寺雲龍院、後小松院廟前菊

袞龍錦袖碧雲天、叡信宗門列祖禪、生鐵鑄成黃菊意、秋香未老玉堦前。（香一作[illegible]。）

日課

如法如說衲僧眼、經咒讀誦百千返、三百六十日課前、風雨雪月吟艷簡。

太平正工夫

天然胡亂正工夫、昨日聰明今日愚、宇宙陰晴任變化、一回所額望天衢。

亂世正工夫

丈夫須具正見、諸妄想隨境現、馬閒良馬麼無、人答此刀利劍

少欲知足　二首

千口不多富貴愁、家貧甚苦一身稠、涓水鯉魚斗水望、明朝朧扇廣河流。（涓一作漏。）

果滿羅漢有三毒、純一願小欲知足、無衣貧病得相治、山堂一夜聞促織。

惡行衆生賛

行惡衆生與惡亡、善人壽命自然長、十人七八箇滅卻、長祝當今千歲昌。(長祝當今、一作今上帝皇。)

習心

一晝夜八億四千、念念不斷自現前、閻王不許詩風味、夜夜吟魂雪月天。

自戒

罪過彌天純藏主、世許宗門賓中主、說禪逼人詩格工、無量劫來惡道主。

愛念盟　二首

婆子侍慈明老師、婚姻腳下結紅絲、驪山春色三生睡、千歲海棠花一枝。

恩愛紅塵誰人掃、娘生赤肉父子道、羅睺羅箇歡喜丸、携來直授釋迦老。

地獄　二首

十方世界盡乾坤、水火寒温人命根、看看米穀閑田地、是衆生之地獄門。(田一作用。)

黃泉境界幾多勞、劍是樹頭山是刀、朝打三千暮八百、目前獄卒眼前牢。

冬夜螢火、和州紀州兩國際山野充滿、因禪詩二章以祝之云

螢火爭陽智與愚、衆生定業佛難扶、一天星斗皆朝北、帝業南方一點無。

滿山螢火諸人看、凶事南方也太難、可憐貴賤共自滅、廢址秋風冬夜寒。(太難一作大難。)

寒夜嘆雪山鳥

朝來公案晩來吟、求食忘巣前業深、晝夜人人雪山鳥、無間苦痛月沈沈。

嘆孤獨老人多欲

千口無多富貴時、青銅十萬讓阿誰、必定後生三惡道、老人何事不前知。

相對

二月涅槃寂滅辰、一刀兩斷也心身、不生不滅佛難得、花約有無相對春。(斷一作段。)

亂中大嘗會

當今聖代百王蹤、玉體金剛平穩容、風吹不動五雲月、雪壓難摧萬歲松。

各見不動(一本作不同偈、示道心者與無道心者。)

水流四念不同心、佛界魔宮亘古今、寒窓風雪梅花月、酒客弄盃詩客吟。(風雪梅花月、一作雪月五更燭。)

敬上天子階下　二首

財寶米錢朝敵基、風流兒女莫相思、扶桑國裡安危苦、傍有忠臣心亂絲。

乾坤海內起烟塵、昨夜東風逼四隣、禍復美人身上事、榮華可悔馬嵬春。

善惡未嘗混、世爲善者皆朋舜、而爲惡者皆黨桀也、雖必爲鷹所擊、鼠必爲猫所咬、是皆天賦所前定也、一切衆生之歸佛、善而免生死之淪沒者、亦猶如茲、因作偈以示衆云。(如一作若。)

鷹雉鼠猫元自然、威音劫來舊因緣、照看華清殘月曉、明皇鑑馬嵬前。
過現未誰人了達、惡人沈淪善者脫、風流可愛公案圓、德山棒兮臨濟喝。
風流脂粉又紅粧、箏妙如來奈斷腸、知是馬嵬泉下魄、離魂倩女謫扶桑。
身心不定假兼眞、欲界衆生沈苦辛、愁夢三生六十劫、劫空無色馬嵬神。

君子財

詩人財寶是文章、儒雅乾坤日月長、窓外梅花吟興樂、腸寒雪月曉天霜。

貴人財

龐老棄錢誰舉揚、曾插玉斗亦何妨、庭有梅花窓有月、鐵檠紙帳五更霜。

嘆日旗落地

錦旗日照動龍蛇、聖運春長救國家、化雷踢殺五逆輩、誓爲朝廷作惡魔。

因亂

韓信昔年雲夢殃、人心眞僞自然彰、安危不定徧時節、人畜難分荊棘墻。

美色傾城

幽王上古見今時、一笑花顏烽火妻、八熱八寒鬼窟裏、馬嵬辱井劫空悲。

山名金吾、鞍馬毘沙門化身

鞍馬多聞赤面顏、利生接物現人間、開方便門眞實相、業屬修羅名屬山。(聞一作門。)

婦人多欲

美人得レ寵美人珍、珠玉靑鞋脚下塵、秋滿驪山宮樹月、榮華可レ悔馬嵬春、

東坡山谷同轍

海內文章汝面前、誰知鍛煉獨天然、說法上堂法堂上、如來禪與二祖師禪一。

大應國師贊　妙勝寺

大唐國裏沒二禪師一、傳受明明東海兒、一天法窟妙勝寺、天澤宗風更有レ誰。

乙石御用人、向二妙勝寺眞前一髮置賀頌（乙一作レ弟、用一作レ料。）

三歲生年小女兒、緣吾門老比丘尼、壽算婆裙綿延錦、孾孩垂レ髮白如レ絲、

乙石御用人、待二知客歸一寺（乙一作レ弟、用一作レ料。）

知客他行乙石愁、歸來日數在二心頭一、斫額天衢望二晴雨一、愛看昔日摘星樓。

贈二山徒一

顯密天台妙樂途、分明傳敎大師徒、山猿叫落西樓月、七社靈神鎭二帝都一。

不殺生戒

李廣將軍一片心、多年石虎識情深、殺レ人端的不レ貶レ眼、敢忍燈前夜雨吟。

不偸盜戒

鵝鳥呑珠刑罰辛、分別曲直僞兼レ眞、翠岩老漢眉毛話、保福豈非二家裏人一。（分別一作二分明一）

不邪婬戒

婬坊年少也風流、婕吻抱持狂客愁、妄鬪二樗蒲一李群玉、名高虞舜辟陽侯。

不妄語戒

一字不說不信道、大藏經卷已落草、漚和元來截流機、怪哉父少而子老。（少一作小。）

不飲酒戒

痛飲三盃未濕唇、醉吟只慰樂天身、稜道者任念氣處、宣明酒伴也誰人。（氣一作起。）

南園殘菊

晚菊東籬衰色秋、南山且對意悠悠、三要三玄都不識、淵明吟興我風流。

高野大師入定

生身大日覺王孫、出入神話活路門、迦葉惠持長夜魄、秋風春雨月黃昏。

三毒

貪嗔根本自痴愚、人我無明名利徒、一箇無心閑道者、近年林下一人無。

不殺生戒

全體作用迸鬼眼、勝負修羅英雄念、望帝一聲月三更、殺人刀與活人劍。

不邪婬戒　三首

痛飲誰家樓上謳、少年一曲亂心頭、阿難逆行婬坊曉、妙解方便殘月秋。

逆行慈明婆子身、紅絲脚下結婚姻、一曲樓頭綠珠笛、可憐昔日趙王輪。（結一作絆。）

沙門河事行邪婬、血氣識情人我深、淫犯若能折情識、乾坤忽變作黃金。（若一作者。）

自讚毀他戒　三首

魔王眷屬沒商量、得失是非幾斷腸、前他後我如來願、前後工夫三會長、
五逆聞雷臨濟訣、大慈大悲太親切、活人劍兮殺人刀、欲汚人滿口含血、
誰共修歸正破邪、若非情識又何過、這般作略子細看、座主見知還作家。（一本作坐主見知還作處。）

誹謗三寶戒

杜撰飯袋惡禪和、塞壑滿溝亡國家、歸依佛法僧檀越、閑看世間殘照斜。

人境懷古

境無心燈籠露柱、人辨別珠玉塊土、一夜五十年前吟、青塚殘月巫山雨。
兩片皮復一具骨、鳥蟲馬牛更魔佛、混沌未分暗昏昏、雲月知爲誰風物。

倭國以譬喩作實

勸辨入邪毒氣深、元非君子小人心、暗認譬喩作實會、苔衣雲帶樂天吟。
今時日用誰人道、超越佛祖是野老、這般叢法中畜生、胸襟愚不鋤荒草。

異類中行

異類馬牛中行途、洞曹潙仰正工夫、愚昧學者誤領解、看來正是畜生徒。

非

高下互看打氷輪、衲僧輥轆轉機輪、安禪出定清華曉、汲盡天邊月一輪、（氷一作水）
吸盡西江公案圓、工夫不管溺深泉、不借寸繩千尺底、西來祖意爲人禪、

山居

孤峯頂上出身途、十字街頭向背衢、空聞夜夜天涯雁、鄕信封書一字無。

示榮衒徒

人家男女魔魅禪、室內招徒使悟玄、近代癡人願養叟、彌天罪過獨天然。

認譬作實（譬一作喩。）

野老劫來日用今、私車公案誤晴陰、昨夜打窓零落葉、蕭蕭聽作雨聲吟。

山中開藥園

要錢賣藥不修琴、度世工夫貪欲深、山堂夜雨風流榻、自絕松風閑道吟。

示邪婬僧

銀燭畫屛殘月曉、錦茵甲帳落花春、生身苦墮在火坑、花顏玉貌也何人。

少年道心老來失

五十年來大道心、來生未隔已忘今、朝得夕死立地佛、一旦廻心百煉金（廻一作依。）

失卻悟徹總閑事、去劫來劫又如此、金鍮正邪佛難分、聞說佛魔隔一紙。

題黃檗禮佛示榮衒徒　二首

禮佛家風眞作家、作家汝榮衒誵訛、奪食驅牛成伎倆、米錢名利賺過他。

閻老面前尤苦哉、飯錢今日急還來、話頭古則商量價、棒喝邪師度世財。

臨濟曹洞座主各末後句　二首

大死底人心塊土、元來是燈籠露柱、變易分段只任他、新月黃昏五更雨。(變易一作編譯)

平生信施涅槃堂、暮往天台南岳朝、公道世間只病苦、貴人身上不曾饒。(一本、涅槃堂作涅槃消、只作唯。)

慧日有憎愛

一段多情栗棘愁、回光反照晦心頭、工夫長養不得怠、動靜起居春又秋。(反一作返)

賛法然上人

法然傳聞活如來、安坐蓮花上品臺、教智者如尼入道、一枚起請最奇哉。

作家　二首

臨濟德山非作家、棒頭喝下任師誇、堪笑伎倆與鼻孔、照看高低日影斜。(低一作昇)

忍辱仙人常不輕、道心須是盡凡情、恁麼白淨眞衲子、可勸觀法又看經。

傀儡

抽牽者即主人公、地水合成隨火風、一曲勾欄曲終後、本然大地忽爲空。

洛陽火後

寒灰充塞洛陽城、二月和花春草生、黃金宮殿依然在、勅下千秋萬國淸。

嘲文章

人具畜生牛馬愚、詩文元地獄工夫、我慢邪慢情識苦、可嘆波旬親得途。

傑作詩文金玉聲、言言句句諸人驚、閻王豈許雅頌妙、鐵棒可恐鬼眼睛。(一本、諸人作詩人、可

恐作應惶）

元本無明一本、本作來）

法塵習着奈相思、李杜蘇黃音律詩、弓影客盃元字脚、生身入地獄如矢。

破讐喩示病僧

弓影膏肓在酒中、毒蛇影落害盃弓、楓林黃葉蜀江錦、染得心頭滿目紅。

利欲忘名

利欲農夫商女情、絕交美譽與芳聲、梅花雪月非我事、貪着米錢忘却名（非我事、一作昔年事）

賣弄深藏貪欲心、心中密密要黃金、詩情禪味風流譽、秋思春愁雲雨吟。

耽色喪德

酒伴詩僧久絕交、獨吟月影滿松梢、楚臺愁夢是吾業、杜牧味淸婬色嘲（一本、愁作秋、味作昧

偶作

患是衆生良藥訣、祖病當機臨濟喝、琴臺暮雲茂陵吟、五十年來祖如渴

我唯有一息出入、日面月面忘左右、釋迦老師大覺尊、祖病治得用牛乳。

頌

室內閑吟一盞燈、自然無道箇詩僧、愁人春興猶寒夜、袖裡花牋梅蕚氷。

元日賀官軍敗凶徒

暫時此地弄精魂、臨濟後身興祖門、美譽芳聲世間外、五雲天上月林孫。

元正先破豪、處處凱歌高、百萬朝廷卒、不能損一毛。

偶作

慧命微微懸一絲、分明臨濟正傳師、識情名利山林客、夜夜秋風枕上吹。客一作害

睡裏海棠春夢秋、明皇離思獨悠悠、三千宮女情難慰、更逐馬嵬泉下遊。逐一作遂

懷古

愛念愛思苦胸次、詩文忘卻無一字、唯有悟道無道心、今日猶愁沈生死。

十年溺愛失文章、非是行天然卽忘、翰墨再論近年事、輪廻斷盡隔什腸。非一作不

警策

苦哉色愛太深時、忽忘卻文章與詩、不前知是自然福、猶喜風音慰所思。

夢熟巫山夜夜心、蘇黃李杜好詩吟、若將淫欲換風雅、價是無量萬兩金。

迷悟

無始無終我一心、不成佛性本來心、本來成佛佛妄語、衆生本來迷道心。

題點頭石訝虎丘祖師

不信道石點頭、若點頭非有流、有有盡是妖怪、吾祖師老虎丘。

不行成佛

天然之釋迦彌勒、六六元來三十六、達磨九年佛六年、成佛作祖盡精力。

小燒書籍僧燒一作焚

始皇自然辨邪正、波旬條殃如看掌、看看劫火洞然時、書籍金剛不壞性。

樹下石上茅廬、詩文疏鈔同居、欲焚囊中遺藁、先須忘腹中書。(遺一作道)

示耽名僧

腹中地獄成、無量劫識情、野火燒不盡、春風草又生。

南北東西不可量、扶桑粟散國封疆、耽名愚鈍畜生道、望帝一聲聽斷腸。

金烏玉兎照籠中、百億須彌逼碧空、香水無邊四大海、畜生無始又無終。

示弄業文筆僧

苦樂愛憎影與身、寒温喜怒境兼人、平生吟興黄泉路、地獄門前桃李春。

弔戰死兵

赤面修羅血氣繁、惡聲震動破乾坤、鬪爭負時頭腦裂、無量億劫舊精魂。(爭一作靜)

偶作

我本來迷道衆生、愚迷深故不知迷、縱雖無悟若有道、佛果天然立地成。

心隨萬境轉

今日佛心猶未生、衆生界地獄先成、萬機萬境皆情識、轉處能幽劍戟城。

佛魔一紙

聖凡萬里隔郷關、清淨沙門塵事間、殘雪殘梅窓外月、吟中猶劍樹刀山。

以婬欲換詩文

衆寮及第大雄尊、著述佳名我命根、愁夢未修雲雨約、君恩猶喜費吟魂。

頌

忘却萬端詩未忘、半生半死涅槃堂、黃泉路上此吟興、閻老宮前後悔腸。

看妙莊嚴王品

妙莊嚴昔日因緣、瞎禿道光輝我前、閻老不吟玉堦月、黃泉後悔碧雲天。

禮常不輕菩薩

記得昔年常不輕、可惶血氣衆生情、看看火宅脚跟下、滿目無間獄大城。（跟一作痕）

忍辱仙人

須成忍辱波羅蜜、是如來甚深秘密、心火燒盡菩提根、阿修羅王滅佛日。

圓悟大病

涅槃堂裡絕言詮、棒喝機關法座禪、睡裏花顏猶醉眼、春風斷腸海棠前。
巫山夜夜夢難驚、艶簡題詩對鐵檠、只爲檀郎呼小玉、風流可愛美人情。
狹路慈明色欲婬、庭前柏樹祖師心、惡魔臨濟正傳境、雲暗姮娥落玉簪。
娘生佛果已圓成、大病苦中無識情、小艶詩情人不會、雞聲茅店月三更。

弔宗祐老僧

宗祐僧牛誰面門、本來心逼塞乾坤、獨向眞前謹乞命、要須弔祐老幽魂。

和弔宗祐老僧頌韵

或作僧形或馬牛、曹溪滴水百川流。南山吟興東籬菊、花綻三玄三要秋。

題江口美人勾欄曲

見色聞聲吟興長、明心悟道沒商量、愁人不識普賢境、歌吹樽前總斷腸(一本三四句、作愁人不識普賢處、洞山三頓德山禪)

行涌泉寺僧棒

八稜八尺倚長天、拈起向秋山面前、衲子當機拱手處、洞山三頓德山棒。

偶作

餓鬼苦多也畜生、人家魔魅長凡情、飢渴病苦五噎患、邪師知識野狐精。

鳩鹿狐懺悔

麋鹿生涯獝狘愁、鳩因婬欲苦心頭、四時難愕此愁夢、一枕淸風夜夜秋(淸一作西)

除夜

金吾除夜殺山名、從此黃泉幾路程、太平天子東西穩、九五靑雲無客星(殺一作死)

圓相

誰參潙仰一宗禪、圓頂沙門心豈圓、剃頭外道長情識、定與魔王結惡緣。

生死輪回恰似環、人人這末後牢關、寸步不移脚跟下、生身墮二鐵圍山(脚跟下、一作脚頭下)

圓成公案愛風流、逆行機關潙仰籌、愁殺樽前夜遊客、美人一曲玉樓謳。

示禮佛祖禱福力僧

羈客恨多天地人、愚哉鬼窟舊精神、元來諸法因緣起、風月沈吟一箇貧。因一作從。

食籍

飯緣食籍聊茶湯、竹縛菊籬梅補牆、人間世諦盡餓死、地獄遠離安樂土。

寄近侍美妾

淫亂天然愛少年、風流淸宴對花前、肥似玉環瘦飛燕、絕交臨濟正傳禪。

送僧行脚

參禪學道扣玄人、世界蒲鞋脚下塵、象骨老師三九旨、常成飯頭苦心身。

見桃花圖

見處風流悟道心、桃花一朶價千金、瑤池王母春風面、我約愁人雲雨吟。

開陣玄妙法戰場、宗門義論老禪場、納僧遊戲語三昧、拄杖腰包桃李場。

香嚴擊竹

對畫忽然盡識情、道人偏鑑太分明、娘生佛見南陽境、斷腸黃陵夜雨聲。

攜來苕帚動風塵、看看聞聲悟道新、半夜千竿脩竹雨、南陽塔下弄精神。

久響香嚴一擊聲、可憐悟道發佳名、蕭蕭通耳竹簾雨、滴盡南陽塔下情。

普明國師破百丈大智禪師法

破夏文殊宗旨勳、衲僧三昧價商君、祖師大用現前境、南嶽巫山一片雲。

靈山徹翁和尚百年忌

借述醐恩妙勝薪、靈山昔日涅槃辰、二千四百年前境、梅雨流紅五月春、
癡兒牽作出人前魔魅人家常說禪、龍寶封疆幸滅卻、靈山記莂瞎驢邊、

陳蒲鞋　八首

老禪本鐵眼銅睛、不是北堂慈愛情、天下衲僧脚跟下、宗門潤色綠蒲青、跟一作竅、
唯有宗門零落愁、錯來末法幾禪流、春風桃李吟無酒、尊宿榮華蒲葉秋、
黃衣尊宿事如何、不是當機信手箏、三家村裡野老業、棒喝商量豈作家、一本、二三四句、作作
路猶如信手箏、天下衲僧識師否、岩頭船子若風顛、
亢來黃檗下之尊、臨濟師兄不用論、佛法南方今落地、北堂寂寞苦吟魂。
眞正工夫任變通、達磨建立佛心宗、雲起南山北山雨、夜來吹過樹頭風。
堪笑米山無米錢、誰參尊宿織蒲禪、衆生五欲八風起、看看正邪今現前、
說道談禪長利名、工夫亂裏築愁城、門關容折韶陽脚、折得江湖門弟情、
無米米山名下空、宗門玄要老禪翁、七寶莊嚴之富貴、平生氷雪又寒風。

欲林紹休侍者相攸搆居、扁曰傳正、因作偈以爲證云

宗門滅卻法筵開、狹路慈明顚倒來、墻外自然樵客迹、風流可愛斷岸梅、

再來隔生即忘

講經大士喚爲誰、彌勒當來之導師、爐韛鈍鐵出生鐵、利劍鈍刀鐵不知、

自然外道

大道廢時人道立、離出智慧義深入、管絃歌吹人倫能、風雨世間之音律。
聰明外道本無知、精進道心期幾時、天然無釋迦彌勒、萬卷書經一首詩。

地獄

三界無安、猶如火宅、箇主人公瑞岩應諾。

岩頭和尚

名風流面蠻胡、胡鬚黑也赤鬚、舌頭絕勝文殊、脚下踏斷道儒、天下衲僧癡愚、邪法而今難扶、象骨老師小巫、臨濟渡子同途、着着作樣作模、頭頭入細入粗、橫棹一撥江湖、江湖議論區區
(粗一作麤)

確頌曰

世間種種蠢公圖、道伴知音一箇無、夜雨蓬窓江海獨、宗門零落盡工夫。

學林宗參庵主水葬

參禪學道閙怱怱、六十年來任變通、流水千江機輪轉、閻浮樹下月如弓。

題圓悟大師投機頌後

新題小艷一章詩、詩句工夫說向誰、殘生白髮猶婬色、鬼眼閻魔決是非。

四睡圖

凡聖同居何似生、披毛作佛又分明、今宵極睡清風枕、空劫以來松有聲。(又一作也)

運庵還松源衣留頂相

這三轉痛處針錐、看看宗門句裏機、爭奈石溪肩上土、拾來脫屣號傳衣。

弟子辯

從參臨濟大人禪、元字脚頭心念前、即今若作我門客、野老風流美少年。

自贊

分明畫出許渾圖、吟撚徑山天澤鬚、嗜譽求名不愛利、風流寂寞一寒儒。

臨濟曹洞善知識貪欲熾盛（貪一作貧）

米錢膝下露堂堂、辛苦沈淪萬劫腸、賊智不妨過君子、德山臨濟沒商量。

辯

臨濟德山棒喝禪、睦州蒲葉甕公船、左傳蠟屐一時忘、不是和嶠我愛錢。（忘一作志。）

東坡像

竺土釋迦文殊師、即今蘇軾更看誰、黃龍福味舌頭上、萬象森羅文與詩（殊一作老）

偶作

臨濟門派誰正傳、風流可愛少年前、濁醪一盞詩千首、自笑禪僧不識禪。

嫌抹香

作家手段誰商量、說道談禪舌更長、純老天然惡殊勝、瞎鑿鼻孔佛前香。

病僧與五辛

病僧大苦發傷風、死脈頻頻命欲終、如來新病用牛乳、莫忌凡身藥草葱。

示久參徒

看經看教無間業、懸庵但許白淨業、參禪學道閑話頭、可罷身口意三業。

薄氷

但看江海薄氷池、不管人人身上危、可憐極苦目前急、迷道衆生終不知。（身一作心）

金春座者歌

唱得雲門王老禪、朝遊東土暮西天。震旦徑山上堂後、建仁擊鼓法堂前。（東土一作東上）

岐岳和尚龍寶出住院時、請御所喝食、於石雲亭夜夜酒宴、因一休和尚相看、岐岳問一休和尚曰、汝於老僧境界知耶不知、答曰、知、問曰、試擧看、答曰、茂陵多病後、猶愛卓文君、岳大笑絕倒、隨後打曰、請爲老僧題無住牓、（牓一作榜）休便題曰、

龍寶禪翁活眼睛、孤房歷歷蓋盲名、黃金詞賦文君恨、師笑茂陵容薄情。

高亭腸斷夜參僧、歌舞花前酒若澠、長老雲門塔下遁、眞前雲雨五更燈。

畫梅（一本作書梅）

目前春樹屬孤山、上苑一枝無客攀、七寶靑黃鵞紅白、淡烟疎雨祖師關。

自贊

大機大用總絞膠、如法作家淸宴餚、文君絞酒相如琴、終奈薄情無賴嘲。（一本、絞作紋、又琴作瑟）

文章禪話不知眞、未得道流分主賓、慚愧永劫拔苦業、筆頭罵詈一天人。（苦一作群）

傍若無人閑逸心、奈何床下法塵深、夢閨銀燭繡簾月、白日青天笑朗吟。

純老佳名發海東、天源派脈截流通、德山臨濟在何處、歌吹夢閨殘曉鐘。(鐘一作鏡)

脫鱗鯉魚庭中得活

活潑潑時池水清、怪哉端的死中生、飛潛天池衲僧眼、雲暗龍門點額情。

應無所住而生其心

祖師禪不是如來、接物利生尤苦哉、明歷歷金剛正體、百花春到爲誰開。

警念起所

公案工夫暮與朝、山堂夜夜雨蕭蕭、地獄猛火百萬劫、滿腹詩情幾日消。

不嫌念起所

平生贏得虛茸名、信口言詮群衆驚、自讃毀他長情識、乾坤江海我詩情。(讃一作贊)

心念所作

腳下紅絲妻子盟、驪山私語約三生、良宵共愛夢閨月、照看一聲望帝情。

三十年來江海情、空吟野水釣船橫、偶然我負子陵業、與作詩非勒絕名。

末後涅槃堂懺悔

風韻氣象頌兼詩、乘興邪慢吟撚髭、惡魔內外吒吾筆、猛火獄中無出期。(韻一作音)

艶簡艶詩三十年、虛名天澤正傳禪、吟身半夜與燈瘦、雲月風流白髮前。

童子南詢圖

知識華嚴五十三、美人焦熱抱持談、南方佛法非吾事、腸斷風流童子參。(焦一作勝。)

紹固喝食

四歲女兒歌舞前、約深難警舊因緣、棄恩入無爲手段、座主作家誰是禪。

賛欽山禪師

佳名勦絶利貪稠、茶店美人誰好仇、爭識洞山下尊宿、慈明狹路好風流

上堂茶話作家禪、點檢將來新婦禪、錦帳香嚢風起臭、洞山佛法是何禪。

濟家純老機生鐵、一條活路途與轍、雪峰岩頭無眼睛、千歲達磨宗敗闕

尿床鬼子大難心、定老當機恩力深、夜雨燈前都即忘、風流茶店舊時吟。(都一作渾。)

辭世

今宵拭涙涅槃堂、伎倆盡時前後忘、誰奏還鄉眞一曲、綠珠吹恨笛聲長。

嘆龍翔門派零落

扶桑國裏沒禪師、東海兒孫更有誰、今日窮途無限涙、他時吾道竟何之。

東海兒孫誰正師、正邪不辨盡偏知、狂雲身上白屎臭、艶簡封書小艶詩。

或儒者或敎家僧、不管人天大衆憎、飛來蝙蝠暮堂裏、怪長無明滅法燈。

渡江達磨

去去來來隨意行、乾坤萬里俗塵生、西天此土姓名重、脚底脚頭蘆葉輕。

三界

來往生靈六道街、修羅鬪諍沒生涯、人間未得諸天樂、闢滅娑婆事事乖。
餓鬼畜生無菩提、劫空法習徹吾臍、無色衆生涙如雨、月沈望帝一聲西。
威音那畔本去劫、彌勒當來又來劫、依草附木舊精魂、可憐三生六十劫。(去劫一作空劫。)
須參最上乘之禪、等妙如來豈自然、三界無安猶火宅、三車不識在門前。

示南坊　禎禎一作偵。)

男色興盡對妻淫、狹路慈明逆行心、容易說禪能忌口、任他雲雨楚臺吟。

制戒

貪看少年風流、風流是我好仇、悔錯開爲人口、今後誓縮舌頭。(貪看一作貪着。)

泉堺衆絕交

耽利好名天澤孫、靈光失卻大燈門、梨冠瓜履人疑念、伎倆當機報佛恩。
參學之徒無道心、紅紫朱色似鍮金、忠言可逆人人耳、牛馬面前空鼓琴。(紫一作絲。)

松源和尙

松源靈隱老師禪、破法攀條省數錢、囊中我沒半文蓄、狂客江山三十年。(蓄一作畜。)
巡堂合掌又燒香、豎拂拈鎚坐木床、臨濟正傳也何處、一休東海斷愁腸。

拾馬糞修斑竹

煨芋懶殘舊話頭、不求名利太風流、相思無際此君雨、拭涙獨吟湘水秋。(殘一作山。)
看看我養鳳凰心、燕雀鳩鴉山野禽、臨濟栽松一休竹、三門境致後人吟。

對臨濟畫像

臨濟宗門誰正傳、三玄三要瞎驢邊、夢閨老衲閨中月、夜夜風流爛醉前。

閻浮樹

閻浮樹遍塞乾坤、葉葉枝枝我脚跟、太極梅開紙窓外、暗香疎影月黃昏。

剪妙勝寺竹木

在官忘却不容針、妙勝封疆剪樹林、立破商君胡亂法、去來沒跡一身吟。

退酬恩庵

雲水江山我脚跟、殿堂幸有一乾坤、常住物即私車馬、酬恩塔主不知恩。（即一作便）

禪門寶訓云、圓悟謂妙喜曰、大凡舉措當謹始終、謹終如始、則無敗事、故曰、無不有初、鮮克有終、無一作靡、昔晦堂老叔曰、黃檗勝和尚亦奇衲子、但晚年謬耳、觀其始得、不謂之賢云云、因作偈題後云、

鐘樓讚兮猛虎逐、衲子念言臨濟徒、擡搦與奪辨邪正、諸祖當機非一模。

晦堂老痛處針錐、隱去彌彰惟勝機、明眼非元來即是、一休是正本來非。

但歸依積翠庵禪、慚愧狂雲名利前、一夕一朝日月蝕、終分明白日青天。

賛杜牧

杜書記獨朗天然、參得正傳臨濟禪、儒雅家風無一點、詩情婬色紫雲前。（一本、參得作參禪、儒雅作儒邪、紫雲作柴雲。）

戒參玄僧名利

世道衆生劫外愚、人人淚不識窮途、諛官只願佳名發、眞菩提心一點無。

戒參玄僧智慧

大智元來迷道愚、未聞小智菩提扶、一千公案繫驢橛、學者江湖飯袋徒。

毀破曹洞惡見

曹洞今時無分別、與臨濟受用遙別、野老百姓眞家風、曹洞臨濟受用別。

畫 三首

參禪九到又三登、明月洞然無愛憎、橋上不通名利路、羨見一錫一閑僧。（見一作看。）

老漢知從何處來、高山境與塔崔嵬、水草心頭痩牛體、應身行脚出天台。

潙山來也目前牛、戴角披毛僧一頭、異類如廿一身靜、三家村裏也風流。（廿一作耳。）

四睡圖

老禪饒舌笑中愁、虎尾搦來跨虎頭、月元不識寒山意、夢愕清光萬里秋。

聞聲悟道、見色明心、雲門拈云、觀世音菩薩將錢來買胡餅、放下手曰、元來是饅頭

垂示韶陽三句禪、聞聲見色話頭圓、胡餅饅頭誰買得、觀音三十二文錢。（一本作三十三文錢。）

雲門拈見色聞聲、赤子機鋒折識情、信口道着底食話、念頭起處太分明。

贊臨濟和尙

喝喝喝喝喝、當機得殺活、惡魔鬼眼睛、明明如日月。

杜牧

誰記慈明老漢婆、無能慚性甕吞蛇、工夫雪月吟魂冷、閑唱桑間濮上歌。（桑間一作桑門。）
宗門活句阿房宮、六國興亡六國風、筆海詞林何所似、青天萬里月方中。

洞山三頓棒

這棒頭宗門大功、慈明之子是黃龍、明皇不識風流道、今夜馬嵬千歲風。
遭人罵辱長嗔情、是即眞迷道衆生、無始無終黑山下、無明濁酒幾時醒。

扶起東福寺荒廢、蓋因美少年之舊交。　甲子十二（二一本作三）

看看慈楊禪正傳、誰來純老面門前、宗門潤色風流道、舊約難忘五十年。
大慈聖一是開山、建立魔宮救五山、東福分派南禪寺、千歲猶輝慧日山。

慈楊塔

是不平生好境瘨、任他鷄足月黃昏、誰氏風流我盟約、馬嵬青塚舊精魂。（一本此一首無。）

大慧武庫曰、有俗士、投演出家、自曰捨緣、演曰、何謂捨緣、士曰、有妻子捨之、謂之捨緣、演曰、我也有箇老婆、還信否、士默然、演乃頌曰、我有箇老婆、出世無人見、晝夜共一處、自然有方便云云、余亦作頌記之。

愛孫愛子對妻歌、滅却魔宮猶入魔、貪看風流年少境、自然無一點溫和。
有僧眼自有妻青、對客唯言我薄情、花前酌盡一樽酒、半醉夜深猶半醒。（一本二有作在。）
醉鄉葉屋我家山、燭影三更對玉顏、夜雨無愁歌吹海、姮娥須是墮人間。

觀法看經眞作家、黄衣棒喝木床斜、藞苴元是我家業、女色多情加男色。(一本男色作勇巴)

讀冷齋夜話、有褒禪山石崖僧之一件事、感而題之

佛印重荷一百夫、佳名道價滿江湖、石崖一箇野僧意、佛法南方一點無。

玉帶笑欺如土泥、路頭喧吠犬兼雞、天下老禪奈慚愧、獄中天澤世皆乖。

百丈絶食無人學、藥山兩粥黄檗麥、但居門外弊衣徒、金襴道光開法席。(黄檗一作黄粱)

德禪塔主自贊

平生爛醉倒金樽、老後住持人事繁、莫恃榮華竟成苦、江山水宿又風餐。(一本人事作塵事、風餐作風飡)

爲惡知識警策

因憶玄都千樹桃、劉郎醉語許多豪、利名知識極驕功、堯帝土堦三尺高。(一本驕功作驕巧、土堦作玉堦)

吸美人婬水

蜜啓自慚私語盟、風流吟罷約三生、生身墮在畜生道、超越溈山戴角情。(一本蜜作密、超越作絶勝)

杜牧藞苴是我徒、狂雲邪法甚難扶、爲人輕賤滅罪業、外道波旬幾失途。

臨濟兒孫不識禪、正傳眞箇瞎驢邊、雲雨三生六十劫、秋風一夜百千年。

盲女森侍者、情愛甚厚、將絶食殞命、愁苦之餘、作偈言之

百丈鋤頭信施消、飯錢閻老不曾饒、盲女艶歌笑樓子、黃泉淚雨滴蕭蕭。
看看涅槃堂裡禪、昔年百丈钁頭邊、夜遊爛醉畫屏底、閻老面前奈飯錢。

森公乘輿

鸞輿盲女屢春遊、鬱鬱胸襟好慰愁、遮莫衆生之輕賤、愛見森也美風流。（見一作看。）

淫水

夢迷上苑美人森、枕上梅花花信心、滿口清香清淺水、黃昏月色奈新吟。

美人陰有水仙花香

楚臺應望更應攀、半夜玉床愁夢間、花綻一莖梅樹下、凌波仙子遶腰間。（遶一作遶。）

喚我手作森手

我手何似森手、自信公風流主、發病治玉莖萠、且喜我會裡衆。

聞鴉有省

豪機嗔恚識情心、二十年前在即今、鴉笑出塵羅漢果、奈何日影玉顔吟。

九月朔森侍者、借紙衣於村僧禦寒、瀟洒可愛、作偈言之

良宵風月亂心頭、何奈相思身上秋、秋霧朝雲獨瀟洒、野僧紙袖也風流。

看森美人午睡

一代風流之美人、艶歌清宴曲尤新、新吟腸斷花顔靨、天寶海棠森樹春。

文明二年仲冬十四日、遊藥師堂聽盲女艶歌、因作偈記之

優遊且喜藥師堂、毒氣便便是我腸、慚愧不管雪霜鬢、吟盡嚴寒秋點長（鬢一作髮。）

余寓新園小舍有年、森侍者聞余風彩、既有嚮慕之志、余亦知焉、然因循至今、辛卯之春邂逅于墨江、問以素志、則諾而應、因作小詩述往日間闊之懷、且記今日來不東之喜云（一本、既作已、亦作又、墨江作墨吉、記作述。）

憶昔新園去住時、王孫美譽聽相思、多年舊約即忘後、猶愛玉堦新月姿（一本、去住作居住、猶作更。）

約彌勒下生

盲森夜夜伴吟身、被底鴛鴦私語新、新約慈尊三會曉、本居古佛萬般春。

木凋葉落更回春、長綠生花舊約新、森也深恩若忘却、無量億劫畜生身。

天澤七世東海狂雲老衲純一休

狂雲集下卷終

國譯禪學大成奥付

昭和五年八月十五日印刷
昭和五年八月二十日發行

編者 國譯禪學大成編輯所
代表者 宮裡祖泰

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 宮下軍平

印刷者 東京市神田區表猿樂町二丁目五番地 藤本茂人

印刷所 東京市神田區表猿樂町二丁目五番地 藤本印刷所

發行所 東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番
二松堂書店